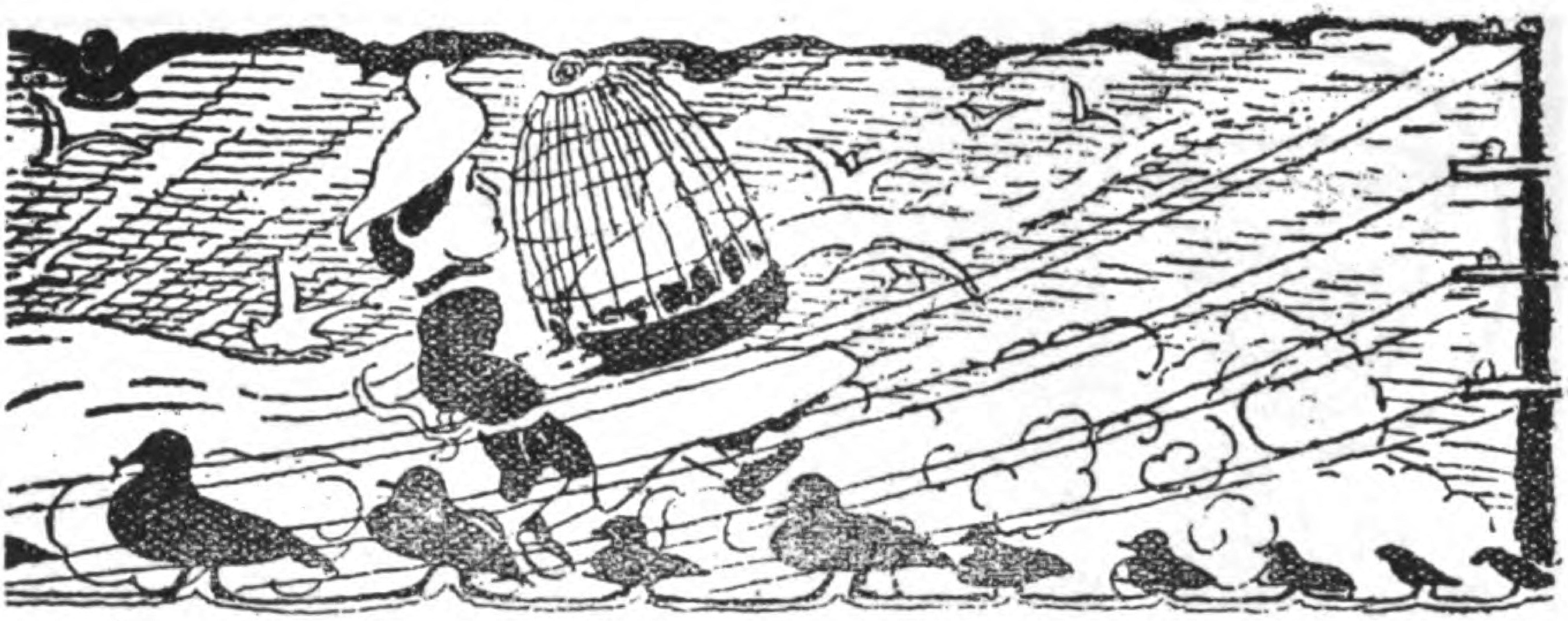
大正十一年九月十三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
大正十三年三月五日印刷納本　大正十三年四月一日發行

女性改造



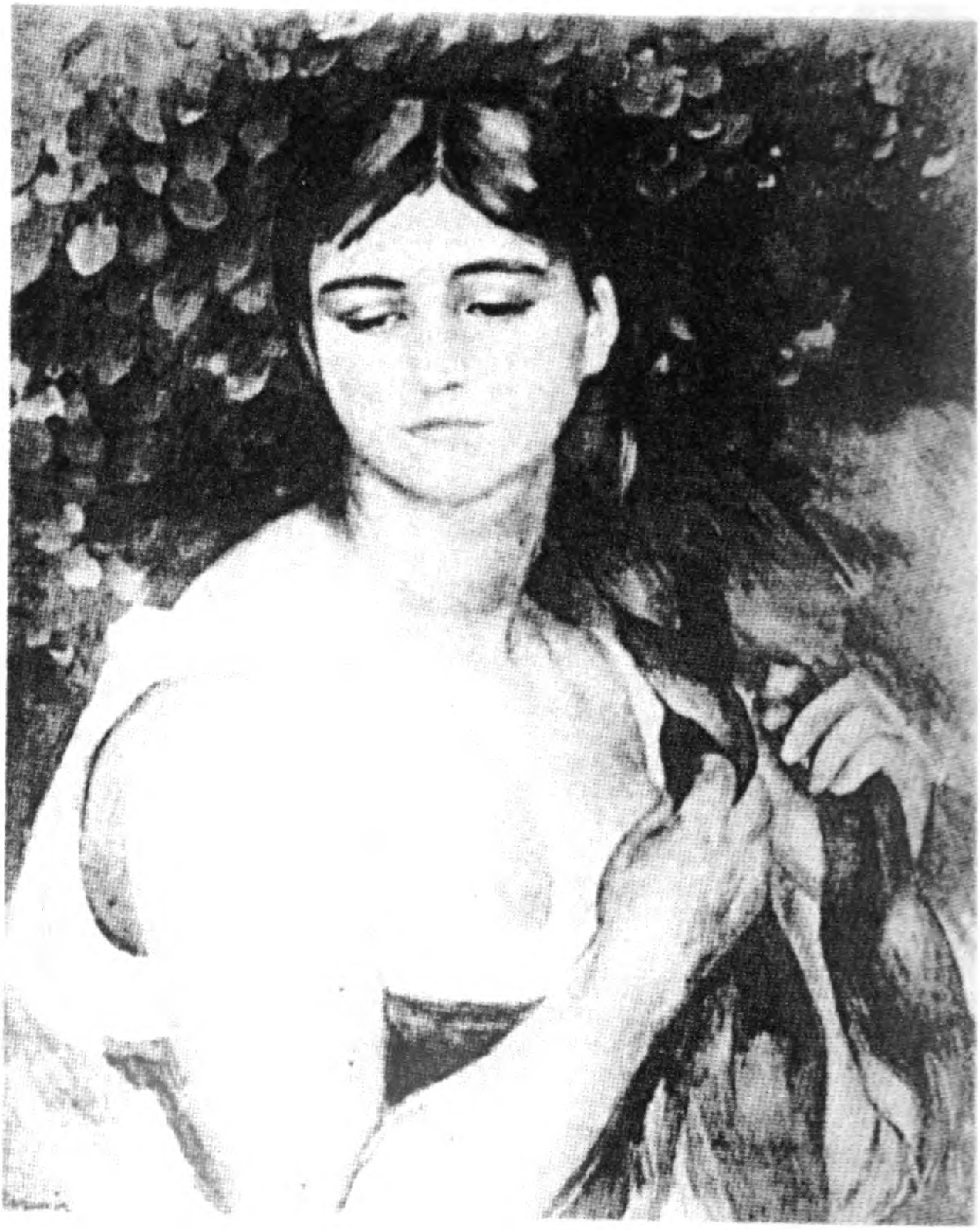
四月號


到る處の
藥店
小間物店
にあり
ビクトリヤ
月經帶
一号品（純ゴム製、丸罐入）金五十五錢
二号品（保温ネル附、角罐入）金七十錢
◎特長
柔軟ゴム製　伸縮自在
洗濯自由　耐久力有
使用簡便　攜帶便
VICTORIA BAND
ビクトリヤ



女性改造四月號目次


イージーおしめ
到る處の藥店にあり
決して衣服や蒲團を汚さず
外出にも絶對御安全!!
特長
●伸縮自在の純ゴム製おしめカバーにして體裁頗る上品●大小便は決して漏れず、赤ちやんの衣類は常に清潔●着脱に手数がからず、洗濯はたゞ水をかける計りで奇麗になりますカサ張らず旅行携帶に便利
イージーおしめ定價
(別製)小形(一才二才)七〇錢 八〇錢
大形(三才四才)八〇錢 九〇錢
純ゴム特製 一圓十錢 一圓卅錢
◎振替口座東京一三〇〇二番
直接發賣元へ御注文の節は送料十二錢添へ前金に御願ひ致します。代金引換は送料二十四錢切手御前送下さい。
發賣元
東京向島寺島町曳船驛前
大和ゴム製作所
電話墨田(長)四二一、一〇三三・一〇三四番



あみさげ　　ルノアール



蟲のいい「人類」その他

生田長江

近代的な、近代歐羅巴的な、當世風な總ての物が、いよいよ益々私の心から遠くなつて行く。私に面白くないもの、氣に入らないもの、我慢のしにくいものになつて行く。

備忘錄のやうにして書きとめられた、これらの斷片的な表白の中にも、所謂新しい思想や新しい感情と云はれるやうなのは一もあるまい。私は私自身の考へ方感じ方を、寧ろ餘りにも新しすぎるのだと思はぬことはない。しかし、世間からして、餘りにもふる過ぎるのだと言はれることを、それほど氣にしてもゐないのである。

『民族の爲め』が一切の事物の價値を決定するのだとは、流石にもう大多數の一般群衆も信じなくなつてゐる。

しかし乍ら、いい、より新しき標準としての、理想としての『人類の爲め』が、これまでの『民族の爲め』なぞに比して、ただ僅かに一歩を進めたものに過ぎないことは、今日果してどれだけの人々から氣附かれてゐるだらうか？

私は決して厭人主義者ではない。のみならず、大體に於ては何物にもまして人類愛をしても居り、又愛しなければならぬと思つても居る。

それにもかかはらず、人類の悉くを皆、一樣に愛することが出來ない。そして出來ないのを不自然だと思はない。なぜと云つて、その或るものに對しては、非常に自分に近く、自分の同類であると感ずるけれど、他のものに對しては、それほど自分に近く、自分の同類であると感ずることが出來ないからである。

更に又、私達が人類の中の或るものより、ずつと好きな、ずつと愛すべき生き物を、人類以外に見出すといふのは、實際に於てあまりめづらしくないところの私達の經驗である。

例へば一方には、僞善者のほかなる何物でもないやうな宗教家、教育家など、及び僞善者たることの必要からさへ解放されて來てゐる、鐵面皮を第一の武器にしてゐる、或は政治家と稱する、或は實業家と稱する紳士的無頼漢、無頼漢的紳士などを――

他方には、私達の掌の上から穀物を食べる足の紅い鳩、尾を振り乍ら私達のあとについて來る小狗、青々と浪打つてゐる麥の上を、ほがらかに歌ひ乍ら舞ひあがる雲雀、いな、青々と浪打つてゐる麥その物、その隣に一面の菜の花、蝶々、それよりも可愛い、勤勉な勞働者の蜜蜂、蟻なぞを――

これらの二種類のものを對照して見る時、どちらが私達の心にまでより近く、より親しいものであるか？ どちらがより多く『異邦人』として感じられ、どちらがより多く『同類』として、同じ血の、同じ神經の通つてゐる生きものとして、同じ悲しみをかなしみ、同じ悦びをよろこぶ友達同志として意識されるか？

人類の中にも、あれほど厭はしき生き物があり、人類のほかにもあれほど愛すべき生き物があるとしたら、人類といふ同種屬感情、同類意識はもはや、それほど重要視さるべきものではない。

人類なるが故に、人類ならざるが故に、一方がつねに他方を犧牲にしていいと云ふのは、さうした意味をまでこめての『人類の爲め』は、もはや私達の感情と理性とのいづれからも承認されないところのものである。

餘りに重すぎる荷車につながれて、夏の日盛りなぞに、嶮しい坂道の中程に立ちすくんでゐる駄馬を見たまへ。彼は私達と同じ汗を流し、同じ太息をつき、また時としては全く同じやうに泣いてゐるではないか？

私はあの馬方をも愛すべき漢であると思ふ。しかし、彼より以上に苦しんでゐる故に、駄馬は一層賢く、一層人間らしくさへ見えるではないか？ 否、一層賢く、一層人間らしくさへ見える故に、私達は折々ある馬方を幾分憎むべき男のやうにさへ思ふではないか？

諸君は、諸君の一寸した好奇心から、或は全くの偶然なる機會から、その手の中に小鳥を握つて見たことはないか？

その時、可憐なる彼女は、その小さな體全體が心臓ででもあつたかの如く、本當に命懸けな動悸を打たせながら、諸君及び諸君の姉妹等の有つてゐるのと丁度同じぬくもりを諸君の掌に感じさせなかつたか？

そして諸君はまた、次ぎのやうに口の中で言ひながら、再び彼女を自由にしてやらなかつたか？――

『何も心配することはありませんよ、お孃さん！貴女のやうな可愛い人に對して、誰が害を加へるでせう！』

神が人類を幸福に生きさせる爲めに、人類以外の總ての生き物を造つたといふ、蟲のいい傳說を信じてゐる歐羅巴人等も、動物愛護を言はないではない。しかし彼等のそれを言ふ理由はかうである――

特に子供等が動物を虐待したり、動物の虐待されるのを見たりすることは、彼等の心情を荒々しく、むごたらしいものにする。そして其結果は、互に愛し合つて行かねばならぬ人間の道徳的向上に障害とならざるを得ないといふのである。

依然として、これは『人類の爲め』ではないか？ 人類だけを目的とし、人類以外のすべての生き物を手段とする、人

類中心の考へではないか?

神が人類を幸福に生きさせる爲めに、總ての生き物を造つたといふ傳說に、數十世紀の間を養はれて來た歐羅巴人と、幸にして今尚ほ輪廻觀念の全くなくならないでゐる私達東洋人とを、此場合同一に考へることは許されない。

私は佛教に說くところの如く(或はそれ以上に耆那教に說くところの如く)、輪廻をその儘に信じてもいゝやうな心持にさへなつてゐるのだが、それは此場合の問題にすることを控へよう。

ともあれ、總ての生き物は生き物として、平等にその生命を愛惜されなければならぬ。なぜと云つて、それらの生命は悉く皆、一の大きな生命につながつてゐるのだから。その一の大きな生命の部分々々に過ぎないのだから。本當の生命はただ一つしかないのだから。否、生命は一つとも一つ以上とも、數へることの出來ないもの、單に『生命』といふよりほかに言いやうのないものだから。

無數の、より小さな生命から構成されてゐるといふ意味に於て、その内にある一切の物が生きてゐるといふ意味に於て、最後に全體として、最も大なる、恐らくは永久的なる生き物であるといふ意味に於て、この宇宙は明白に生命である。生命の生命である。

生命としての宇宙は、殆んど死の如く、無限に深い眠りの底から、次第次第に淺い眠りの方へ浮び上り、ともかくも現在の處までやつて來た。夢うつつの間にあるとも、半ば目ざめてゐるとも、云へば云へるであらう。そしてこれからも愈々はつきりした覺醒の方へ浮んで行き、つひには神の如き、無限に明るい意識情感にまで到達することであらう。

宇宙は『生命』その物は、全體としての生物は、斷間なく、限りなく進化して行く。そこには單なる小部分としての退化だけがある。より多く進化せんが爲めの、より少き退化があるに過ぎない。

しかし乍ら、無限から無限への生命の大きな流に、特に或る區域をかぎつて見るならば、その經過はつねに必ずしも進化的であるとも限らないであらう。

例へば今、所謂原始動物（私共は、原始といふ言葉をあんな場合に用ひたくないやうにも思ふのだが）アメエバから人類までの經過が、大體に於て進化の歴史であるといふことは承認してもよい。

しかし乍ら、人類が一たび人類になり得てから今日までの經過は、大體に於てすらも、果して進化があつたか？　それとも退化であつたか？

少くとも、有史以來に範圍を限つて云へば、人類が單により複雜な、より手の込んだ生き方をするやうになつたといふだけでなく、道徳的にも藝術的にも、本當により立派なものの方へ、だんだんと進化して來たのであるか、それとも反對であるかは問題である。さうだ、如何に控えめに云つても問題である。

あとからあとから發掘され、發見される古代の諸事物を見る度毎に、古代人がその中から少數の巨人的天才（後代に至つてはそれに似通つたものをさへ見られないやうな）を産出したばかりでなく、彼等全體としてまた實にすばらしい生活と仕事とをしてゐるのに、つくづく私達は驚歎し敬服する。

進化か退化かの問題を具體化する爲めには人類が上前をはねること、利子を取ることを覺え、器械といふものを發明したことを考へて見るのは必要な事だ。

特に、人類自身がその手足の延長のつもりで作り出した器械といふ怪物——あの怪物がさかしまに、その手足の延長として人類を便役してゐる近代人の憫笑すべき『文明』生活の有難味を、解剖分析して見るのは必要なことだ。

幾十倍幾百倍の生產力を加へながら、人類の大多數は住むに家がなく、まとふに衣服がなく、食ふにパンすらもない。しかもその不可思議なる生產力の正體をつきとめて見ようともせず、その正體が如何なる吸血鬼であるかを突きとめても、假にそれをどうすることも出來ないやうな、愚鈍な、懦弱な、これでも人類の子孫かと慨かれるやうな現代の人類を考へて見るがよい。

そして、人類は決して進化をやめてゐないし、退化し、頹敗し、破滅への道を急いではゐないと、嗚呼、果して誰が言ひ得るか？

いつその事、一息に破滅してしまへと、私の口は極度の興奮にふるへながら、反語的にはげしく絶叫するかも分らない。

しかし、私自身人類の一人として、心の底の奥底に、どうして人類の絶滅を痛快がることがあらうぞ！

それにしても明白に下り坂に向つてゐる人類が、再びその勢を盛りかへして來ることが出來るや否や、今ひとたび進化的の經過を取るやうになり得るや否や、それはただ神だけが知つてゐる。否、『人類の爲め』に人類以外の總ての生き物を造つたエホバ神よりほかなる、何等かの新しき神だけが知つてゐる。

ともあれ、人類の絶滅は、全體としての生物の運命にとつて、生命その物の大きな流にとつて、それほどの問題ではないかも知れない。寧ろ、全く何でもないほどの小事件かも知れない。そして人類よりも一層人類らしき、より高級な、す

ばらしく立派な種屬が、直に、または適當な時期に於て、補充的に造り出されるかも知れない。

人類の絶滅が恰かも宇宙の解體ででもあるかのやうに、或は宇宙の存在を無意義にするものででもあるかのやうに考へ、またそれ故に、さう易々とそんな事があつてはたまらないと云ふ風に考へるのは、全く救ふべからざる人類の蟲のよさ加減である！

だが、ある見地からすれば、人類が現在向つてゐるやうな絶滅には憂うべく恐るべき物であるけれど、絶滅の性質次第では、必ずしも氣にするに及ばないのである。

國體も種族も、その托せられたる使命を十分に果したあとでならば、死んで行くのに何の悲しむべきことがあらうぞ！

また彼等が、その托せられたる使命を十分に果し得ることの爲めに死ぬのであれば、彼等はその死によつてこそ最も善く生きたのではないか！永遠の生命を生きたのではないか！

近代人と稱する愚者等の賢げに言つてゐるところを聞けば、生きてゐる者は、單に生きることの爲めにのみ生きてゐるやうである。

だから彼等にとつては、少しでも餘計に生きてゐれば、それだけ幸福で、そして有意義のやうである。

彼等の大なる迷信の第一信條――『種族の保存』の如何に笑ふべきものであるかを見よ。

古來、仕事らしい仕事をした人間は、いづれも皆、その仕事の爲めに生き、その仕事の爲めに死んでゐると云つていい。

生き甲斐のあるやうな生き方をした人間は、その事の爲めに死期を早めてゐるのみならず、多くの場合、あとに子孫を殘してゐない。殘さうとさへしてゐない。そして、それでいいのだ。

天才者とか大偉人とか云はれる人達には、まれに子孫があつても、それは大抵格別の人物でない。寧ろ平々凡々以下であるのをつねとする。そして、それはまた仕方のない事ではなかつたか？なぜと云つて、その天才者や大偉人達は、子孫達が手傳つたり補足したりする餘地のないほどに、その一代の間に一通りの事業を完成してしまつたのだから。かなり生き甲斐のある生き方を、思ひ切り生きてしまつたのだから。

レオ・トルストイも言つてゐる如く人が子供を造らねばならないのは、自分の仕殘した仕事を子供にやらせる爲めにほかならない。

氣長に、或はいい加減な熱情で、理想の實現を志してゐる『近代的』な理想家達よ、君達は何をおいても、君達のあとに、子供を殘して置くことを忘れるな！そして其子供達が殊に君達ほどぶせうものでないやうにと祈願して置くことを忘れるな！

これまでも度々言つた事だが、一切の愛は性的愛から、性欲から、陰陽の對立和合から生れる（ここいらが矢張、私の考へ方感じ方の當世風でない點である）。

これを逆に云へば、性欲や性的愛から骨肉近親への愛も生れ、隣人への愛も生れ、最高のものとしての、一切衆生への、即ち神への愛も生れて來る。

性欲や性的愛が根原である故に無視しがたいと云ひ、無視してはならぬと云ふのは正しい。それ故に最も尊いものであるといふやうな『近代的』謬見に墮してはならぬ。

一切衆生への愛、即ち神への、絶對者への愛は、最終の派生物であつて、同時に私達の生活の最高標的であることを知

らなければならぬ。

差別の愛は出發であつて、無差別の愛は歸着である。

差別の愛に對してすら資格のないものが、どうして無差別の愛を知ることが、體驗することが出來やうぞ！

『一切』を愛し、『神』を愛するに至つた者も、妻子等を愛しなくなつたのではない。さまざまな小さな愛を、大きな一の愛の中へ融かし込んでしまつたのだ。百川の水が大海におさめられてしまつて跡なきが如く。

夫と妻との間に於てさへも、性的愛が低下するのでなくして、寧ろ反對に向上し向上して行つた末、單なる性的愛以上の愛が、最もよき兄と妹との間に、最も理解し合つた友人と友人との間に、最も堅く誓ひ合つた戰友と戰友との間に見る如き愛が生じて來るにつれて、彼等はだんだんと相互の性的交渉を超越して行くやうになる。

彼等の中のいづれかが、又はいづれもが『一切』を愛し、『神』を愛する力へ、めざましく成長して來る時、彼等は自らして、必然に貞潔の生活へはいつて行かねばならぬであらう。

馬太傳第十九章には、『近代的』クリスティアンがその心の目を閉ぢ耳を塞ぎながら、讀みすぎるところの文句がある。曰く——

『この言葉は人みな受け容ること能はじ。ただ天職ある者のみこれを爲し得べし。それ母の胎よりして生れつきたる寺人あり。また人にせられたる寺人あり。これを受け容ることを得る者は受け容るべし』と。

使徒パウロも哥林多前書第七章に於て言つてゐる――

『我は總て人々が我が如くせむことを願ふ。されど人各々神より己の賜物を受けたり。これはこれの如く、かれはかれの如し。我未だ婚姻せざる者及びやもめに云はむ、若し我如くしてあらば彼等に善きなり。若し自ら整ふる能はずば、婚姻するもよし。そは婚姻するは胸の燃ゆるよりもまさればなり』と。

彼は又言つてゐる――

『汝等我に書き送りし事については、男の女にふれざるを善しとす。されど淫行を免るる爲に人各々其妻を有ち、女も其夫を有つべし』と。

性、結婚、超結婚等についてのトルストイの意見は、彼自らの公言してゐる如く、耶蘇によつて暗示され、パウロによつて細說された。あの正しい意見をその儘のものである。

私もまた敢て公言する――私の性、結婚、超結婚等についての意見は、大體に於てトルストイ等の意見と同一のものであるといふことを（ここいらは、特に『近代的』ならぬ印象を與へることであらう。）

イエスや、保羅や、フランシスのやうな貞潔な生活を送る人達が、だんだんと數多くなつて行くならば、それだけ人類といふ種屬は、『種屬の保存』を危うくされるであらう。そして、人類の悉くが皆貞潔の生活を送るやうになつた曉を想像すれば、それは餘りにも明白な人類の絕滅である。

だが、人類にして若し、それほどの完成にまで到達してしまつたのであれば、それは人類にとつて何といふ悅び、何といふすばらしい光榮であらうしそれこそ人類が人類全體として、永遠不朽の生命にはいつたものといふべきではないか。――

貞潔の生活は『近代的』な思想家達が言ふ如く、不自然なものであるとばかりは云はれない。それは、ある人間にとつて十分不自然であり得る。同時に他の人間にとつて聊かも不自然であり得ない。同一の人間にあつても、ある時期までは不自然であつた貞潔の生活が、他の時期に入つてからは極めて自然なものになることもあるだらう。

植物がその莖や幹に於て、遺憾なくその植物らしいところを發揮し得た時、葉はもうどんな葉であつても構はないやうに見えるではないか？ 花は咲いても咲かなくとも、少しも心殘りがないやうに見えるではないか？ 咲き過ぎる位に、差し過ぎる位に、思ひ切り美しい花を咲かせきつた草や木が、どんなに小さな實を結ばうとも、それすら結ばなからうとも、私達は決して異しまないではないか？ 敢へて咎めようとしないではないか？

フリイドリツヒ・ニイチエは言ふ、『結婚した哲學者といふものを想像するのは、一のユウモアである』と。この場合の哲學者といふのは如何なる物の謂ひであるか？

パウロからして『命ずるにあらず、許すなり』と刻印を打たれた結婚に、今一つ痛快な但し書のついてゐることを見逃してはならぬ。曰く、『暫く祈りの爲めに別るゝは善し』と。屢々祈りをなさむとする者は、屢々その妻から、その夫から別れねばならないではないか？ 長く祈りに居らうとする者は、長く別れて居らねばならぬではないか？

そして一生をつねに祈りにさゝげようとする者が、どうしてその妻と、或はその夫と共にあることが出來やうぞ！

妻の夫に、夫の妻に對する愛、親の子に、子の親に對する愛、それが愛である限りに於て尊く美しい。

だが、それよりも遙かにまさつて尊く美しいのは、『一切の衆生』に對する、『神』に對する愛である。

のみならず、夫婦の愛、親子の愛などが尊く美しいのは、最高愛の方へ少しづゝでも引き上げて行くやうな要素を、その内に包有してゐるからである。

さうした崇高な要素を缺いてゐさうな男女間の愛、骨肉間の愛が、尊く美しいものであるよりも、寧ろ卑しく醜いものであることを諸君は理解してくれるだらうか？それとも理解してくれないだらうか？

釋迦牟尼等はその妻子を捨てゝその家を出て道を求めた。

彼等がかくしてまでも道を求めないではゐられなかつた所以を想見よ。或はその妻子を愛する心に於てすらも、常人の思ひ及ばざるほどの深いものを有つてゐた故に、常人のやすらかにしてゐるところに、その如くやすらかにしてゐることが出來なかつたのであらうと！斯う見るのは、甚だしく不自然な、無理な、出鱈目な想像であらうか？

彼等が最高の平等愛に到達した後の、その妻子等に對する愛を想見よ。或は、出家の前にもつてゐたより一層純粹な、一層清高な愛を以てすらも、その妻子等及び妻子等の面影に對してゐなかつたらうか？

私は近頃、釋迦牟尼とその子ラゴラとの關係を、不確實な樣々な傳說の中に手さぐりしながら、しみじみと右の如き事を思つたのである。

宗教も特に佛教にあつては、出家求道が宗教生活—それの豫備的なものは別として—に於ける第一條件でなければならぬ。

けれども、その事の故に宗教も特に佛教が、苦行をすゝめたり、強いたりするものであると理解すべきでない。

釋迦牟尼の如きは、その言説と實行とのいづれに置いても、明白に放逸を斥け、同じく明白に苦行を斥けてゐる。

苦行にもあらず、放逸にもあらざる、所謂中道の生活は、生命をつなぐに辛うじて足りるほどの生活である。精しくは、心靜かに四諦を觀ずるに適當して、學素なる、けれども肉體を苦腦するところなき生活の謂ひである。甚だしく足らざるところなき、されど聊かも過ぐるところなき生活の謂ひである。

かくの如き生活を志して、苦行にも墮ちず、放逸にも流れざるは、決して容易の事でない。

のみならず、かくの如き生活を生き、且つ生きさせたいが故に、釋迦牟尼の如きは屢々安逸をむさぼる輩の一人として、別方向あつたところの當時の求道者達からして非難されたと云ふ。

ナザレのイエスも亦、苦行者のそれと異れる生活をしてゐた故に、しばしば世上の樂みに耽る者としての誹りを受けたやうに見える。

釋迦牟尼やイエスの生活は、甚だしく足らざるところなき、けれども又聊かの過ぐるところなき生活を理想としたものとして、所謂エピクウル派の所謂享樂生活の最も純粹なものから、餘り遠くなかつたではなからうか？同時に又、ストイク派の所謂克己生活の最も程よき物と、殆んど撰ぶところがなかつたではなからうか？

そして今、又してもしみじみと考へさせられるではないか？——本當に正しい生活は、享樂でもあり克己でもあるやうな、もしくは享樂でもなく克己でもないやうな、所謂中道の生活であるといふことを！

——一九二四年二月——

家族制度と婚姻

京大教授 宮本英雄

（一） 家族制度の二義

『家族制度は日本古來の美俗である』と謂ふことはよく耳にすることである。私は昨年九州の某地敎育會の依賴によつて、『家族制度の將來』と題して講演したことがあつたが、其ときにも此演題の下に私がどう謂ふ講演をするかと云ふ心配から會の主催者は私に向つて豫じめ講演の趣旨をきかせてくれと云ふて來たのであつた。私は世の所謂敎育家諸君が『家族制度は我國古來の淳風美俗である』と謂つた樣なことを屢々口にするのを知つて居る。眞面目に信じてか乃至は職務上仕方なしにてかそれは姑らく問はぬが、兎も角も敎育家が家族制度を攻擊でもしようものならば縣知事などは忽ち眼を丸くする、またそれを恐れて何でもいいから家族制度鼓吹の看板を揭げて置かうと謂ふ甚だ賴りない敎育家もないではない、こうした事情は充分に知りつゝも私は家族制度は滅ぶべき運命にあり、又之は是非共亡ぼさねばならぬ制度でもあることを說かうとして其地に臨んだのであるから、主催者の問に對する私の答は極めて簡單に『家族制度反對の趣旨で講演する』と謂ふの外はなかつたのであるが、之を聽いた主催者は非常に驚いて、吾々は平素家族制度でなければならぬと謂ふことを敎員達に說いて居るのだから、家族制度反對論などを遣つて頂いては實は甚だ困る』と謂つて大分倒惑したらしかつた、そこで私は『一體あなた方の謂ふ家族制度……つまり家族制度でなければならぬと謂ふ其家族制度なるものはどんなものを指して謂ふのですか』と問ふて見た、すると主催者はこう答へた『どんなものと謂つて家族制度つて謂へば分つてゐる樣に思ひますが、……つまり私共の謂ふのは西洋の樣に息子が嫁を持つたからと謂つて親と別居したり、子でありなが

ら親を輕蔑して頭から親達の言ふことには耳を傾けないと謂つた樣なことはよろしくないと謂ふ意味で家族制度でなければならぬと謂ふのです。』こうした問答をきつかけに私共はいろ〳〵な話をして見た結果主催者の謂つて居る家族制度と私の謂ふ家族制度とは意味の違つたものであることが主催者にも了解されて、私は豫定通りに講演を濟ましたのであるが、一體家族制度を云々する人々の多くは團體生活としての家族制度と戸主制度としての家族制度とを混同してゐる傾向がある。言ひ換ると事實上の家族制度と法律上の家族制度とを區別せずに唯一口に家族制度と謂つて、意味のちがつた二つのものを混淆してしまつて居る人々が尠くないようである。

最も私が玆に謂ふ『團體生活としての家族制度』だの或は『事實上の家族制度』などは我日本の現在社會にはないものであるかも知れない、若し果してないものとすれば私は是非共そう謂つたような家族制度の實行されることを切望する者である、然らばそれはどんなものか、それを謂ふには先づ順序として法律上の家族制度即ち戸主制度なるものを見なければなるまい、今日我國法の上で認められて居る家族制度では先づ(1)家と謂ふ觀念が認められる、所謂家なるものは全く無形の觀念であつて決して具體的な人間の團體生活を指すのではない。又有形的な住家を指して謂ふのでもない。家系だとか家名だとか或は家督だとか謂ふ者で表彰されて居る無形的な觀念である。そして(2)此家なるものの存在する所に戸主權と謂ふ權利を認める。しかしながら法律上一つの權利を認めるにはどうしても其處にその權利の持主即ち主體を發見せなければならぬから此處に戸主なる者を持ち出して戸主權の主體として居る。普通に『戸主權を基礎とする思想上の統一體が家なる觀念を成すものであると説明されて居るが、之れ全く戸主權と家とは常に相伴ふからであつて、戸主權なき家なく、反對に家なくして戸主權あることは想像されないからである。それでは此戸主權と謂ふ權利はどんな内容を持つて居るかと謂ふに(3)家族を監督保護する權利であるとせられて居る、家族が婚姻するには必らずや戸主の同意を得なければならぬのも家族が分家するには戸主の同意が必要なのも或は家族は戸主の指定した居所に住はねばならぬと謂ふのも之れ皆な戸主權の作用が家族に及ぶからである。か樣に家には戸主があつて戸主權によつて家族を監督保護して行くのであるが、戸主が死亡するとどうなるか、家なるものの存續と謂ふことが大切でないならば戸主死亡と共に其家は消滅してしまうものとして少しも差支ないのであるが、民法では家の繼續と謂ふことを

非常に重要視して、戸主が死亡すると(+)家督相續と謂つて原則として其長男に戸主權を相續させて其家の滅亡を防ぎ之と相關連して家の消滅を防がんが爲め色々な規則が設けられて居る。之が今日我國の法律上に認められて居る家族制度の骨組であるが、かかる制度は尠くとも日本古來の制度ではなく、全く武家時代の必要からして認められた傳來制度なのである。此ことは既に識者の縷說した所であつて今更事新しく考證する必要もない、又かかる制度の爲めに著しく男尊女卑の思想を助長したと謂ふことも爭なき事實であつて之れ亦敢て贅言するにも及ばぬことである。殊に戸主を置いて家族に指揮命令するの權利を持たして居るなどは現代主義の理想と一致せないものであつて到底將來永續すべき可能性をもつた制度でないことは分り切つたことなのである。そこで私はかかる家族制度に對しては識者と共に其消滅若しくは廢止を希望するのであるがそれと同時に事實の家族制度即ち團體生活としての家族制度を助長させたいと思ふ。戸主權を否認し從つて家を認めないし又家督相續を認めないのであるが、か樣な形式を採り去つてしまつて殘る所の實質的な家族の團體生活をば飽迄も助長さすべきであると謂ふのが私の主張である。私は既に外の所で詳しく述べた通り吾々個人が眞の自由を得て然も社會全體として健全な發達を遂げるには、個人の自我意識のみに基く所の行動を是認する譯には行かぬ、各個人に對し常に他人の利益他人の人格をも考慮に入れるときに出て來る所の社會意識に基いた行動を要求するのである。かかる社會を形成しようと思へば自ら個人の社會的訓練と謂ふ者を必要とするのであるが、それには其自身一つの小社會たるべき家庭に於ける團體生活を助長するが最も適當なとなのである、それだから私の謂ふ事實上の家族制度なるものは決して家族の單なる集團を指すのではない。そこに一種の統制ある小社會を指すのであつて然も其統制なるものが何人の指揮命令に因るのでもなく家族各員の社會的意識に基いて生れるような家族の團體生活を謂ふのである。社會の各員が互に他の命令を受けるのでないと同樣に家族の各員も亦互に他方の命令を受くべきものではない、然も社會は各個人を基礎として出來上らねばならぬように家庭も亦家族各員を以て健全に築き上げられねばならぬのである、大小の差こそあれ、そこに各自の社會的意識を要求するのは全く同じことである。こう云ふ見地からして私は若夫婦の別居などゝ云ふことに反對する。親兄弟と同棲して家庭的團體生活すらも完全に營み得ないような者は軈て社會を害する者なのである。之は若い者に就て

ばかり云ふのではない、老人だとて全く同じである、若い人達と共同生活の出來ない樣な老人は明かに社會意識を缺く者であつて何れの社會に行つた所で容れらるべき人間ではないのである、老人と若い者とは思想が違ふから到底折合がつかぬと云ふのはそれは各自の自我意識から見てのそである、各自が社會意識を持つならば必ずや其處に折合がついて社會が出來るのである、現代は實に各自の自我を貫徹し樣と考へて居る人間が多いと同時に一面にはかゝる事實を見て一概に危險だとか過激だとか思つて居る人があるのであるが、それが總ての問題の根原である。私は頑固な舊派の人々の言ふことに賛同せないと同時に最も新しいと謂はれる人々の言動にも亦反對する。此立場からして婚姻が現在の家族制度即ち戸主制度の爲めにどんな影響を受けて居るか、又若しそれが惡いとしたならばどう改められねばならぬものであるかと謂ふことを些しばかり考へて見たい。

（二）婚姻に對する戸主の同意

現在の戸主制度にあつては戸主は戸主權によつて家族を監督保護することが許される。そこで家族たる者が婚姻する場合には家族は戸主に對する義務として其同意を得なければならぬ、然し戸主の同意がなくても婚姻は有效に成立する、唯戸主の同意を得ずに婚姻した家族に對しては戸主は義務違反に對する制裁として若し其家族が婚姻によつて他家に行つた場合には後日離婚することがあつても元々通り戸主の家に復籍することを拒むことが出來、又若し家族が戸主の家に居つて他家から妻を迎へた樣な場合には離籍することができる。之が民法第七五〇條に定められた規則であつて、一見する所尤もらしく見ゆるのであるが仔細に考へて見ると甚だ不都合な規則である。先づ考へられることは、此規則は全く家と謂ふものを標準にして家族の婚姻の當否を判斷させることを目的として居る點である、婚姻に就ては戸主の同意の外に尚ほ父母の同意をも必要とするものであるが、此父母の同意なるものを要求する理由は全く婚姻する子女の利益保護に在るのであるから、男が滿三十年女が滿二十五年に達した後即ち自分自身で利害得失の判斷ができる年配になれば最早や父母の同意がなくても婚姻を有效に成立せしめ得ることにして居る。然るに戸主の同意なるものは之とちがつて苟くも家族と謂ふ身分の者である限りは假令三十にならうと四十にならうと戸主の同意を得なければならぬのであこ、之れ明かに婚姻する當人達の福利保護のための同意でなくして全く家のため

に認められた婚姻要件である。此要件が認められて居るがために婚姻を制限して居ることは決して稀ではない、士族の家の息子が平民の娘を妻に迎へようとしても戸主が之を許さぬと云ふ樣なことは今日此頃では餘り耳にせないが、相手の家が貧乏だから到底息子の妻にすることはできぬなどと云ふことは田舍などではまだ〳〵普通のことのようである。然し貧乏人と金持と婚姻したからとて金持の名譽に關することではない、之を社會的に見ると斯う云ふ婚姻こそ誠に社會政策と一致するものであつて大に奬勵すべきものである。それが偶〻家と云ふ觀念のために妨げられて居る。婚姻當事者の幸福を犧牲とし社會の利益を無視してまでも家なるものを立てて行く必要が果して何れにあるであらうか、家族制度を認むることが社會の發達に必要であつてこそ制度は意味があるのである、社會の利益と一致しない反社會的な制度は一瞬間たりとも存立すべき根據を持たない。しかし戸主なる人が眞に家のためと云ふ立場から家族の婚姻に同意しないと云ふならば、まだ恕すべき點もあるが、それが單に戸主其人の利害からして不同意を唱ふるに至つては到底之を許すことができない、家族の婚姻せんとする相手方が偶〻戸主其人と不和な間柄の人の子女であるとか或は戸主と婚姻しようとする家族其人と平素不和であるとか謂つたようなことで戸主が其婚姻に同意しないと云ふことも珍らしくないのであるが、こうなると最早や戸主權の正常なる行使とは謂へないのであつて疑ひもなく戸主權の濫用である、同意權は家の利益のために與へられて居るのに之を戸主其人の利益即ち家の利益に關係なく行使すると謂ふことは實は權利のない所に權利を働かそうとするものであつて外形は權利が作用して居るように見えても實質的には不法な行動をして居るものである、例へば猶ほ自分の所有地に不潔極まる物を持ち込んで隣地に居住する人を苦しめ之によつて隣人を立退かせようと試むるが如きものであつて、形式は權利の行使と見えても實質的には不法行爲なのである。婚姻に就いて父母が同意權をもつて居る場合にもやはり權利の濫用と云ふことが考へられる、父母の同意權は子の利益保護のために與へられて居るのであるから、親が自分の利害を標準として子の婚姻に同意しない場合はやはり同意權の濫用である。

同じく婚姻に就ての同意權でありながら父母の同意權を婚姻する子女の利益保護のために與へられるのであるから婚姻を理由なく制限するものと謂ふことはできないないが、戸主の持つて居る同意權は家のために謂ふ理由で與へられるのだ

から不用に婚姻を制限することになる、なぜならば婚姻はどこまでも當人達の福利と云ふことを眼目として行はるべきものであるからである。無論婚姻が社會の利益と背反する場合には其點に於て制限を受けねばならぬのであるが、社會的に何等の意味も利益も伴はない家のために婚姻を制限すると云ふとは不當なことと謂はねばならぬ。況んやそれが權利濫用である場合が今日の實際に於て尠からざるに至つては之が爲めに制限せられた婚姻は實は不法に制限されたと云ふことになるのである。これだけ考へて見ても戸主の有する婚姻の同意權は無用有害なものと云ふとが分るのであるが、更に之を父母の有する同意權と對立させて居る點から見て一層其無用なる所以を知り得るのである。今日の實狀に於ては昔日の如く大家族制は最早行はれて居ない、普通の家では父たる人が同時に戸主である、從つて父が子の婚姻に對する同意權を持つて居れば重ねて戸主としての同意權を持つ必要はない、其必要があると思ふのは『家のための婚姻』や『家のためにする婚姻の制度』を必要と考へるからである、然るに家を標準として婚姻を制限することが不當であるならば其必要は全然なくなる譯である。殊に父即ち戸主なる場合に子即ち家族なる人の婚姻に就て父としての同意權と戸主としての同意權とを使分けするような實益があるであらうか、或人は謂つてゐる、息子が藝妓を妻にしようと云ふような場合に父即ち戸主たる人は父としては之に同意し戸主としては家名のために同意しないと云ふ使分けの實益があるではないかと。然らば私は問ふ、父として子が藝妓を妻とすることが子の幸福になると考へて同意して婚姻をさせた以上、戸主として不同意を唱へた所で果して家名を傷けないことを得るや否や、なる程父は後日戸主として、婚姻した子を離籍することが出來る、けれども離籍は單に形式的に戸籍上の除斥に過ぎない、こんな形式的なことをしたとしても其家の家族が藝妓と婚姻したと云ふ事實は依然として存在するではないか、家の名譽とは世間が其家に附する所の尊敬に外ならないのであるか、世間の附する尊敬は實は現に其家の戸主たり家族たる現實な人々の行動如何に依つて異り得るのであつて見れば、實質的に此種の婚姻が行はれた上唯に形式的離籍に因つて家名が維持されると見ることはできない。假りに一歩を讓つて此使分けによつて家名が維持できるとしても、實際に於て同意權の使分けをする程物の分つた父たり戸主たる人は少くとも過去に在つて尠かつた。多くは戸主としての同意權と父としての同意權とを全然混淆して、本人の志望する婚姻を拒み家のための婚姻

へと強制した傾がある。法律は一面に於て共諾主義を認めて、婚姻の意志なくしてなしたる婚姻は無效としつゝ然も反面に於ては贈賄婚や賣買婚と殆んど同一の結果を齎すことを必要ー若しくは尠くとも之を是認するはまことに解し難い矛盾である。それ故若し眞の共諾婚主義を貫かうとするならば戸主の同意は無用とせられなければならぬ、之を必要とする現在制度の下にあつては戸主たる者は須く此點に省みなければなるまい。かく云へばとて私は如何なる意味に於ても家名なるものを重んずる必要がないとまで斷言するのではない、尠くとも家名のために婚姻を制限するとか反對に之を強制することは不當であると謂ふのである。殊に戸主の反對を冒してまで婚姻することを避け之がため内縁の夫婦として事實上共同生活を始めるような者も出て來ることを考へるときは益々此制度の存在價値を疑はざるを得なくなる。

(三)　戸主又は相續人の婚姻

現在の家族制度に在つては家の繼續と謂ふことが重んぜられて居る結果として、現に一家の戸主たる身分を有つて居る者は適法に廢家するか若くは隱居をした後でなければ婚姻によつて他家に入ることが出來ないことになつて居る、又同じ必要からして、現在の戸主の長男の如く戸主が死んだならば家督相續をすべき地位にある者即ち法定推定家督相續人も亦他家に入ることを禁止せられて居る。然るに一方に於て廢家とか隱居とかには種々なる條件があつて容易にできるものでない。廢家又は隱居の條件もやはり家の繼續を重んずるために認められるのであつて、廢家は新たに家を立てる戸主のみに許される、つまり或家の家族が分家して戸主となつたとか或は私生子であつて母たる人がある場合に其戸主たる人が入籍に同意せなかつたために母の家に入籍することが出來ずして已むなく一家を創立して戸主となつたとか又は棄子であつて父も母もまだ不明のため一家を創立して戸主になつたとか云ふ樣な場合でなければ廢家はできない、從つて家督によつて現に戸主たる者は婚姻して他家の人とならうとしても廢家して婚姻すると謂ふ譯には行かぬ、此處に家族制度のための婚姻の制度がある、隱居に就ても原則としては種々なる要件があるが今は唯戸主が婚姻せんが爲めに隱居する場合に就て見るに、此場合にも家督相續人があることゝ及び裁判所の許可を得るとの二要件が必要である。そこで廢家の出來ない戸主は右二要件を充し隱居をした後に婚姻するの外はないことになるが、相續人を得ることが實際上なかゝゝ困難なのである。

唯此場合には幸にも特別の規則があつて、戸主が隱居をなさずして婚姻によつて他家に入らんとする場合には市町村長が婚姻屆を受理したるときは婚姻は有效に成立するものとして居る、此場合には戸主は婚姻によつて隱居したものと看做される。しかしながら若し市町村長が婚姻屆を受理せないとなると婚姻は有效に成立しない。物のよく分つた市町村長ならば兎も角、さうでない限りは恐らく法律を楯にして婚姻屆を受理してはくれないであらう。かうなると戸主は廢家も出來ず又隱居も出來ないから婚姻して他家に入ることが出來ない、勢ひ止むを得ずして內緣の夫婦として事實上夫婦の關係を結ぶようなことにもなるのである。法定推定家督相續人に至つては戸主よりも一層嚴格に他家に入ることを禁ぜられて居つて、他家に入り得る例外の場合すらも認められて居ない。一人息子と一人息女とが婚姻しようとしても絕對に出來ないのである。私は從來此場合にも市町村長が婚姻屆を受理したならば婚姻は有效に成立するものと看做すべきものであると解釋して居る、なぜならば戸主が隱居をなさずして他家に入るべき婚姻としてこの場合に市町村長が婚姻屆を受理するならば婚姻を有效に成立したものとする法律の精神は畢竟家よりも婚姻を重しとするものであるから此精神を貫けば相續人の場合にも全く同樣に解釋せなければならぬからである。しかし此解釋は不幸にして我裁判所の採らざる所である。一般の解釋では民法はどこまでも家を重んじ婚姻を輕しと見て居るものであるとし、戸主が隱居せずして婚姻した場合をば例外と解し、例外はどこまでも嚴格に其適用の範圍を限定すべきものであつて之を類推擴張してはならぬとしてゐる。しかし私から見れば例外規定と雖も此中に含まるべき性質の事柄は廣く之を含めて差支ないと謂ふ新しい法律解釋の方が正しいように思ふ。若し此新しい見方を許さないならば相續人同志の婚姻は絕對に出來ないから此處にも亦家族制度の爲めの婚姻制限が認められることになる、此結果はやはり內緣の夫婦と云ふような關係を生ぜしむることになるのである。

家の繼續と謂ふことを重んずるの結果、戸主や相續人の婚姻がかくまで制限されると謂ふことは毫も社會的に見て意味のないことである、武家時代に於てこそ將軍家から見れば大名の家の存續と云ふことが必要であり大名から見れば家來の家の存續と云ふことが意味があつたであらうけれども現代に於ては甲の家が十代續いたからとて乙の家が五代三代で滅びたからとてそれは何等社會的の意義を有たないのである。社會的に意義のない家の繼續と云ふことのために個人の幸福を

犧牲にし延て內緣の夫婦と云ふような關係を生せて社會的に後に述べるような弊害を流すと云ふことは到底是認し難いことである。今日の所では是を救濟するには私が前に述べた樣な法律解釋をすると同時に婚姻屆を受理する市町村長が十分此點に注意するの外はないのである。

斯ふ謂ふと一流の人々は私を見て法律に違反することを正しいと主張する者だと謂ふかも知れないが、そう見る人は法律の何たるやに就て十分に考へない人である此ことは私が既に外の處でも詳しく述べたのであるが、法律の內容は常に吾々の社會意識から生れる規範なのである。それ故法律は道德と實質に於て變りのないものである、唯法律には規範を表彰して居る形式がある、條文即ち之れである、しかし形式は其內容と相俟つて意味があるのであつて形式自體に特別の意味があるべきものではない、內容たる規範の變るときは形式に附つけられる意味も變らねばならぬ。家族制度が社會的に意味あつた時代と然らざる時代とによつて法律內容たる規範は著しく異なるものがある、例外が原則になつたり或は原則が例外になつたりするのはある全く之がためである。法律の解釋と云ふものは形式の下にどんな規範が認められたか又それはどんなに變つたか、變つたとしたならば其形式にはどう云ふ意味を持たせねばならぬか、言ひ換ふれば法を如何に活用すべきかと云ふことを研究するに在るのである。此點を了解するならば私の態度は自ら了解できるであらうと思ふ。

（四）　內緣の夫婦

私は前段に於て戶主制度に基因する內緣の夫婦があることは指摘した、一體我國には內緣の夫婦と謂ふものが非常に多い、其原因には一般の人々が法律常識に缺けて居ると云ふことも無論あるであらうし又婚姻の手續が單に屆出一本で濟むと云ふ極めて簡單容易なために却つて粗漏に流れると云ふこともあるであらうが、中島博士が京都市に於て調査された報告を見ると戶主制度のために屆出の出來ないために止むなく內緣で居る夫婦の數は他の原因に因るものより多いのである。昔は事實婚と謂つて事實上夫婦としての共同生活を營んで居ればそれで以て夫婦と認められたものであるが、斯くては婚姻の成立時期が明確に定まらないために、其間に生れた子を私生子とするか嫡出子とするかとか或は女が他の男子と通じた場合に果してそれが姦通となるか如何かと謂つた樣な問題を明確に定むるとができない、そこで形式婚と云ふて宗敎上或る儀式を踏むとか又は法律の定める手續を踏むことを

以て婚姻成立の要件とする樣になつたのであるが、我民法では市町村長に屆出でると謂ふことを以て婚姻成立の要件として居る。それ故に屆出をせなければ誰が見ても夫婦と思へる場合でも法律上は夫たり妻たる資格がないのである。假令婚禮の儀式を執行して同棲を始めたとしても苟くも市町村長へ屆出ない限りは婚姻は成立しないのである。從つて其間に生れた子は私生子とならざるを得ないし、假令女が他の男子と通じたとしても姦通罪に問はれることはない。同樣に內緣の夫が如何に不行跡をしようとも內緣の妻たる女は何等の救濟をも求むることができない。內緣關係は當人等の意志から見れば私通關係ではないが其法律上の取扱に於ては私通關係と變る所はない。尤も大審院は內緣の妻なる地位を保護せんが爲め、大正四年に面白い判例を作つた。それは慣習上の儀式を擧げて夫婦としての共同生活を始めた事實あるときは此事實を以て『婚姻豫約』あるものと認めて正當の理由なくして入籍を拒む內緣の夫に對して妻は居ると不履行に因る損害を賠償すべき旨を命じたのであつて爾來『婚姻豫約不履行貞操蹂躪』の訴が至る所の裁判所に提起せられたのである。是丈の救濟は與へられたけれども其以外に於ては全然私通關係と同視せられるのである。私通關係は風紀を紊亂するものとして隨分識者の憂慮する所であるに拘らず是と五十步百步の間にある內緣關係をば、なぜに世人は憂慮せないのだらうか、生れた子供が私生子となるだけでも社會的に大きな問題ではあるまいか、なぜ社會的な問題であるか、それは內緣關係の當事者以外の第三者たる子の身分に關する問題からである。單に當人達の利害にのみ關する問題ならば左まで重要ではないが、それが第三者の利害幸福に影響する者であるならば之を等閑に附して置く譯には行かぬ內緣夫婦の一方が他の男又は女と相通じた場合に起る問題も亦社會的である。然るに斯る社會的な問題の起る原因が反社會的なる戶主制度に在りとするならば誰か戶主制度を咒はない者があらうぞ。問題は多數の男女や其間に生れた子供を一生日陰者にして置いて、甲の家は五代續いたとか乙の家は十代續いたとか謂つて喜んで咽豫約が果して社會的に是認せらるべきとか如何かと謂ふに在る。誤解を避くるために繰返して謂ふが、私は敢て家の繼續と云ふ其自體を正しくないなどと謂ふのではない、それは固より慶賀すべきことであるけれども、そのために大きな社會的犧牲を拂ふは餘りに愚であると考へるのである。

（五）家族制度と妻の地位

內縁の夫婦と謂ふ關係は婦人の地位を著しく低下せしむる原因であるが、其ことは姑く別論とするも、戸主制度に在つては男子戸主を原則とすることからして自然に妻の地位なるものを低下するものであることは看過してはならぬ。此邊の事情は最近にも戸田教授が東京日々及び大阪毎日兩新聞紙上で輕妙に說明せられたことであるから詳しく述べる必要もないが、元來武家時代即ち軍國主義の時代の產物たる戸主制度に於て婦人を重んじないと云ふことは餘りに當然過ぎる程なことであつて、女は唯子を產む道具として取扱はれたのである。之れは獨り日本に於ける事實たるに止まらず羅馬、斯波などに於ても婚姻の目的は男子を得るに在りと考へられ、男子を擧ぐるときは之によつて婚姻が解消すと考へた位である。時代は推移しても制度其ものに潜在する思想は制度と共に傳へられて、男尊女卑の思想は我現行民法中至る所に散見せられるのであるが、今茲に婚姻に關係する點だけをあらまし擧げて見ても、夫婦財產制に於て夫に優等の地位を與へ、家庭の平和を維持すてふ目的の下に獨り妻のみを無能力者として取扱ひ、夫婦同居の義務に就ても亦所謂夫唱婦隨の原則を認めて居る點など容易に數へることが出來る。試みに最後の點に就て見るに夫婦同居の義務は婚姻より生ずる効果としては最も重要なるものの一つであるが、民法では『妻は夫と同居するの義務を有す』夫は妻をして同居なさしむることを要す』と定められて居る。之れ即ち夫唱婦隨の原則に依ると解せらるる所であつて、夫は夫婦の居所を單獨にて定めることが出來るけれども妻は常に夫に隨つて夫と同居する義務がある、夫は唯妻の同居を拒むことが出來ないと云ふ消極的義務があるに止まると說明せられて居る。民法制定當時に於ける立法者の意志は無論右の如き意味の同居義務を定めるつもりであつたであろう、從つて一應は民法の規定を通說の如くに解することも許されるかも知れないが、斯る解釋を容れて居つては眞の夫婦共同生活は法律的に實行されるものではない。支配命令によつて行はれる共同生活は單に形式的共同生活に過ぎない、夫婦双方の社會的意識に基いての共同生活でなければ眞の共同生活とは云へないのである、私は前にも述べたやうに支配命令の分子を除いた共同生活を助長させたいと思ふのであるが、かかる見地から見るときは法律の條文を見て其內容の意味を定めようとする通說には反對して、夫婦は全く同一の立場に於て又同等に同居の義務を負ふものであると說明したい。そして私は斯る說明をする理由としては前に一言した通りやはり法律は常に規範を內容として成立する

からして其內容たる規範に從つて形式に意味を與へることが眞の法律解釋であると謂はうと思ふ。支配命令に因る共同は形式的であり且つ社會的でないから、實質的且つ社會的な共同生活をば夫婦間に要求するのが現代社會の規範であるとするならば其規範と一致するように條文を意味づけることが眞に死法を活用する所以であると思ふ。

同居の義務に關聯して今一つ世人の注意を促さねばならぬことは夫婦は互に貞實の義務を有するや否の問題である。今日吾々の認むる道德から見れば恐らく何人と雖も夫婦は互に貞實の義務を持つて居ることを否定せないであらう。然るに從來我民法を解する人は何と謂つて居るか、妻に對しては姦通を禁止して居るから妻は夫に對して貞實の義務を有するけれども夫は妻に對して貞實の義務をもつて居ないなぜならば夫の姦通を制する規定はないし又同居の義務を認むる規定は單に『同居』を要求するに止まつて貞實を要求せないからだと說明して居る。斯る說をなす人々は道德と法律とを全然別種のものと見て居るのみならず、義務なるものは刑罰を以て強制せられる場合にのみ存在すると解するとが正しい場合にのみ此說を容れ得るのである。然るに法律の內容は道德と一致すべきであるとする見地からは既に道德上夫婦は互に貞實の義務ありと認めらるるならば法律上も亦其義務ありと解するのが至當であるのみならず、義務ありと謂ふには必ずしも其義務が刑罰を以て強制されることを必要としないのであるから私は此點に於ても亦一般の說には賛成しない。通說では民法は夫婦『同居』の義務を認めたに過ぎないと云ふけれども其同居の義務は何がために認められたかと謂ふことを全く度外視して居る樣である、夫婦が同居の義務を負はされるのは全く夫婦としての共同生活を完全に行はしめんがためなのである、然るに夫婦は互に貞實の義務を負はずとしてどうして完全な共同生活が營まれるであらう、それ故同居の義務があることからして當然に貞實の義務があると謂へるのである。唯貞實の義務に就ては刑法が特別の理由からして妻にのみ之を強制すると云ふだけであつて、夫と雖も民法上は貞實の義務を有するのであるから之に違反した場合には刑罰こそ受けないが民法上はやはり義務違反の責に任じなければならぬのである。私が曾て姦通罪の廢止を唱へたのは決して貞實の義務を否認すべしと謂ふ意味ではなくて唯刑法上妻に就てのみ姦通罪を認むる點を不當なりとしたまでのことである。そして姦通罪廢止を主張するのは畢竟夫婦の共同生活をして夫婦各自の社會意識に基く、社會的なものたしめたいからであ

る。

戸主制度を基礎とする夫婦生活には右に述ぶる樣な不合理な點があるけれども、私は之に一種の解釋を降すことによつて之を合理的ならしめることができると信ずるものである。實際に於ても夫婦が借家をする場合に決して夫一人の考で決定するものではない、之が最早や現代の實狀であるならば通說の如く戸主制度に基因する不合理な點を飽迄不合理なままに說明して逝かうとする態度は既に業に世の實際と相距る遠きものであると謂つてもよいであらう。

（六）家族制度と離婚

家族制度に在つては家系の存續を重大視するがために世嗣を得ることがまた大切なこととされる、其結果として『子無きは家を去る』などと云ふことが正しいことの樣に思はれ子なきを以て離婚の原因としたのであるが、婚姻の目的は啻に生殖にのみ存するものではないのであるから目的主義の離婚觀から見ても之れは正しいことではない。幸にして民法には此樣な不合理な離婚原因を認めなかつた。然し民法には戸主制度に基く離婚原因が一つも認めてないとは謂へない。『配偶者の直系尊屬より虐待又は重大なる侮辱を受けたるとき』或は『配偶者が自己の直系尊屬に對して虐待を爲し又は之に重大なる侮辱を加へたるとき』は離婚の原因となるのであるが之れは戸主制度に基く離婚原因と見ることが出來るであらう。規定の上では配偶者と直系尊屬とが必しも家を同ふする場合であるとか或は同居する場合たることが要求されては居ないけれども直系尊屬と配偶者との間に虐待や侮辱が行はれるのは事實上同居する場合が多いのであり又我國の實際に於ても民法制定當時は息子が婚姻しても父母祖父母等と家を同ふし且つ同居して居るのが通例であつた所から見て是等の離婚原因は戸主制度に基因すると見ても大なる誤ではあるまい。所で今日一派の人々は若夫婦が老人夫婦と同居するなどは到底忍ぶ能はざる所であるとして、始めから前に揭げたような離婚原因を醸す事情が同居に伴ふことを必然的であり避くべからざるものと考へ、別居を主張する樣である。然し私の見る所に依れば斯る主張の反社會的にして到底是認し難いことは極端に戸主制度を主張するのと同一範であると思ふ。夫婦間に完全な社會的共同生活を營むと同時に更に夫婦が一體として直系尊屬乃至は兄弟姉妹と圓滿に共同生活を營むようにと心懸くることが大きな社會に於て共存共榮の理想に基く健全なる社會生活を營むことに就て必要なる社會意識

を涵養することになるのである。家庭に於ける社會的訓練を念頭に置かず意見の合はぬ者とは始めから折合をつけようとも試みることなく單に一方的に自我のみを主張することを許すならばこれほど反社會的なことはない。其結果斯る人々は遂に大きな社會に於てもやはり自我の主張をのみ念頭に置いて『他人』と云ふことに頓着せない利己主義の權化として現れることになるのであつて、斯る人々の集合よりなる社會は其實は烏合の集團に過ぎずして全然『社會』なるものを否定してしまうであらう。それ故に私は若夫婦の別居と云ふ樣な我儘な振舞を否認する從つて事實上の家族的團體生活の實現を希望するのであるから、本來ならば右の如き離婚原因は認めぬ方がよいと思ふが、破綻の極に達した場合の安全瓣として此の原因を存置しても大きな妨げはあるまい、唯私は此原因の解釋に就ても、之を目的主義に從つて意味づけ度いと思ふ。元來離婚原因を定むるには二つの主義があつて一を有責主義と云ひ他を目的主義と云ふのであるが、私は離婚は到底婚姻の目的を達することが出來ない事情がある場合に於てのみ之を許すとする目的主義によつて離婚原因を定むるのが正しいと思ふ、そこで配偶者の直系尊屬から或は配偶者が自己の直系尊屬に對して侮辱又は虐待を加へた場合にもそれがため延て夫婦の共同生活が圓滿に營まれないと云ふ事情になつた場合に於て始めて離婚の原因となるものと解することが正しいと思ふのである。

絶對的男女平等？

市川房枝

參政權獲得後の米國に於ける婦人運動

こゝ一二年間に於ける米國婦人界は、絶對的男女平等是非の問題を中心として大な渦を卷いてゐる。

婦人參政權運動といふものは、婦人が政治上に於て解放されてゐなかつた當時の運動で、愈々これを獲得してしまつたら、もうこの存在の必要がない。從つてそれがための團體は解散するか、若しくは方向轉換をするか、何れかその一つを選ばなければならない事になる。

米國婦人參政權協會の名の下に、穩健な手段で參政權を獲得しやうと努力してゐた一群は、一九二〇年の勝利後、新に獲得した選擧權を有效に行使する方向に進むべき途を見出し、婦人有權者聯盟と名をかへ、組織をしなほした。これに對し婦人參政權運動の左翼を代表してゐた婦人黨は、政治上に於ける婦人の解放を以て婦人解放の第一歩に過ぎないとし、同じ名の下に組織をしなほし、更に進んで法律上、習慣上等總ての方面に於ける男女の不平等を除去する事を標榜して立つた。

參政權獲得時代に於ける兩者の差違は、前者が常に穩健な手段をとつたのに對し、後者は英國のミリタントな婦人參政權論者の流をくみ、目的のために手段を選ばなかつたのにある。尚前者が先各州の憲法を改正して順次に米國憲法の改正に及ばうとしたのに對し、後者は直接に米國憲法の改正運動を近途として選んだのにあつた。然しながら參政權獲得後の今日に於ては前者が婦人としての性的意識をうすくし、人間としての意識にめざめて、婦人子供の安寧幸福をはかるは勿論、社會一般から國家世界の問題に及んでゐるに反し、後者は益々尚婦人の性的意識を濃厚にし、先婦人が男子と絶對的

平等になるにあらずんばと一時一事主義でその事だけに全勢力を集めてゐる。

或人達は前者のこの行き方を以て婦人運動の正しい方向にあるものとし、後者を婦人運動の外道異端といひ、或人達は後者こそ婦人運動の當然の發達で、前者は最早その埒外に出たものといつてゐる。

何れが婦人運動の正流であるや否や、又その何れがとるべき運動であるや否やは、しばらく措き、この兩者の行方はただにこの二團體だけにとゞまらず、參政權獲得後に於ける米國婦人運動一般の方向及その分野を示してゐるものといつていいと思ふ。

この二種の運動は或點に於ては相一致するけれども、一方また絶對に相容れない點を持つてゐる。卽ち婦人黨が絶對男女平等の主張からしてゐる婦人の保護法反對等はそれで、これから大な爭論が生じてゐる。

尤も前者――卽ち絶對的男女平等を不可とし、婦人の保護法の必要を唱ふるものは、婦人有權者聯盟の外に婦人クラブ總同盟、キリスト敎女子青年會、婦人矯風會、兩親と敎師の會、消費組合、カトリック婦人會、ユダヤ人婦人會、職業婦人會、婦人勞働組合等の婦人團體並に勞働組合、社會事業團體があるに對し、後者は――卽ち絶對男女平等なるを主張するものは殆ど婦人黨一つで（外に二三の團體がある）あるけれども、婦人黨の勢力伸び侮りがたく、その主張を著々と實行に移し効果をあげて行くので、こゝに「婦人間の戰」ともいふべき爭が起りつゝある。

婦人大憲章

千九百二十二年婦人黨はその大會に於て、會の綱領二十八ケ條を發表した。これ卽ち同黨の絶對男女平等權要求の宣言書で、當時婦人大憲章（The Feminist Magna Charta）として宣傳せられたものである。

今左にその全文を掲げてみる。

現今婦人は選擧權を附與されて居るけれども尚法律上、職業上、宗敎上、產業上、家庭上及び敎育上の機會均等に於て、男子に對しすべて從屬的の地位にあるが故に、我等は婦人服從のすべての形式及事實を廢除せんとする運動の一部として、急速に左の目的を達せんことを期す。

一、今後婦人は男子に對し劣等者として見らるゝ事なく、婦人自身に於ても亦劣等者と見る事なく、性の平等を承認す

べき事、

二、今後婦人は社會被治者の半數でなく、人生の各方面に於て男子と共に平等に手を携へて從事すべき事、

三、今後婦人は教育上の機會均等を否定さるる事なく 公金によつて支持さるるすべての學校及大學に於ては 教育上の機會を男女兩性に同等に與へらるべき事、

四、今後婦人は如何なる職業よりも排斥さるる事なく、男子に開放されたる職業は婦人にも開放さるべきものとす。勞働の時間、條件、及び所得は男女兩性に同一に適用さるべき事、

五、今後婦人は法律的、醫學的、教育的な職業及其他の職業に於て、男子と區別さるる事なく、如上の職業に對する教育及び此等の職業に從事する上に於て、同樣の機會を男女に與へ性によつて區別すべからざる事、

六、今後婦人は官途に雇傭さるる上に於て區別さるる事なく、行政部、立法部及司法部に於ける權限、任命、進級及び俸給に關しては男子と同等の權利を有すべき事、

七、今後婦人は外國貿易、領事官及外交官の任免に關し區別さるる事なく、婦人も男子と同樣に外國に我國を代表すべき事、

八、今後婦人は同一の仕事に對し男子より寡少の所得を受くる事なく、公私とも同樣の仕事に對しては同樣の所得を受くべき事

九、今後婦人は牧師、聖職及教會に於ての其他の地位より排斥さるる事なく、教會に於ける官職は男子と平等に關與すべき事、

一〇、今後二重の道德律の存在を否定す、男女兩性に對し一律を獲得すべき事、

一一、今後婦人の性の利用を否定す、婦人自身の身體の支配權は男子の有する支配權と同樣たるべき事、

一二、今後婦人的疾病の取扱ひ及び性に關する不道德の刑罰に對し、差別さるる事なく、男女兩性は性的疾病及び性に關する不道德に對し同樣に取扱はるべき事、

一三、今後婦人は陪審官による裁判の權利を奪はるる事なく、陪審官たるべき權利は男女同樣に開放さるべき事、

一四、今後婦人は遺產法に於て差別さるる事なく、男女兩性は遺產を受くべき同一の權利を有すべき事、

一五、今後妻の人格（Identity）は夫の人格（Identity）に吸合さるる事なく、妻は結婚後も別個の人格（Iden ity）を保有し、結婚關係に關し夫と契約し得べき事、

六一、今後婦人は結婚するも法律若くは習慣により夫の姓名を採用する必要なく、男子が結婚するも其の姓名を保有する如く、婦人も亦結婚後其の姓名を保有する同一の權利を有すべき事、

一七、今後妻は夫により扶養さるべきものと見らるる事なく、家庭の維持に對しては夫妻相互の出資を承認すべき事、

一八、今後家長たる事は夫のみに與へらるる事なく、夫妻同一に與へらるべき事、

一九、今後夫は妻の勤勞（Service）を所有する事なく、妻の勤勞（S.rvice）は、自由人が各自に保持する如く、妻自身のみに屬すべき事、

二〇、今後夫は妻の得たる所得を所得する事なく、その所得は妻のみに屬すべき事、

二一、今後夫は妻の財產を所有し若くは支配する事なく、此財產は妻に屬し、妻のみによりて支配さるべき事、

二二、今後夫は夫と妻との共同財產を支配する事なく、夫と妻はこの共同財產を支配するに平等の權利を有すべき事、

二三、今後夫は妻より容易に離婚を得る事なく、妻は夫と同一の理由により離婚すべき權利を有すべき事、

二四、今後夫は妻よりも契約に關しより大なる權利を有する事なく、妻は契約をなすにつき夫と同一の權利を有すべき事、

二五、今後結婚したる婦人は市民權（Citizenship）を選擇すべき權利を拒否さるゝ事なく、夫が有すると同一なる獨立選擇權を有すべき事、

二六、今後婦人は結婚したるがために經濟社會に於て差別さる事なく男子が結婚後經濟社會に於て有すると同一の取扱ひを受くべき事、

二七、今後父はその子供の世話、監視及び支配に關し、又その敎育及宗敎を決定するに關し、又その資產の後見をなすに關し、又其の勤勞及び所得を支配するに關し最上の權利を有する事なく、これ等の權利は子供が嫡出兒であると私生兒であるとに拘らず、總ての場合に於て兩親は同一たるべき事、

二八、普通法若くは民法上に於ける婦人の無能力は今後存在を許さず、婦人は法律上男子と同等たるべき事、

これを要するに婦人は今後法律上に於ても習慣上に於ても、男子に對し如何なる形式によるも服從の地位にあるを許

さず、婦人は過去に於て責任と義務を盡し將來に於ても亦この責任と義務を繼續するが故に、總ての點に於て權利は男子と同一の立場にあるべきなり。

男女平等權獲得運動

婦人黨が要求する所は前に掲げた大憲章が示す如く、極めて廣汎なるものである。從つてこれを一時に獲得する事は勿論不可能であるので、婦人黨はその一つである法律上に於ける男女の平等權の獲得を第一の目的として選んだ。さうして一九二一年同黨が組織しなほさるゝや直ちに合衆國全洲に亘つての法律の調査を開始した。

米國の法律は各州によつて異り、その歴史的な事情によつて或州は佛のナポリアン法により、或州は英のコンモン法によつてゐる。從つて今日迄に可成の程度まで改正されては來たものゝ、尚婦人に對して差別的な個條を少なからず含んでゐる。婦人黨の調査はその差別的な個所をことごとく見出し、これをその運動の基礎にしやうといふのであつた。

この調査は特にこの目的のために法律學校に入りエル・エル・ビーをとつた同黨の首領を初め會員である婦人辯護士等の指揮のもとに約一ケ年を費してなされたが、その結果は表面にあらはれた女尊男卑の習慣とは反對で、かなり世人をも驚駭させた。今その數例をあげてみるなら、米國では殆ど大多數の例が母親に父親と同等な子供に對しての權利を與へてゐない。婦人の家庭内及家庭外に於て得た收入は夫に屬する事になつてゐる例が少なからずある。離婚の條件も男の方が女よりも有利な地位にあるのが多い。妻には住居を選ぶ權利があたへられてゐないのが普通だ。日本婦人と同樣妻は無能力者として自由に契約が出來ない州もある。陪審官になり得る權利が與へられてゐない州が伴つてある。州立の大學へ婦人を男子と同樣に入學させない所さへある。

婦人黨は爾來此の結果をひつさげて、直接各州議會にせまり、その改正案の通過に努力し來つた。その熱心な運動は著くにあらはれ、一九二一年から二三年迄の間に二十二州に亘つて六十八の法律を改正した。その或るものは今迄差別されてゐた、法律を男子と同樣にし、或るものは新しく婦人の權利に關する事を制定したものである。

デラウエヤー州では婦人が一般の公務に就く事が出來るやうに州憲法が改正された。又母親は父親と同等に子供の後見人となる事が出來るやうになつた。殆んど子供の遺産相續について母親は父親と同等の權利を與へられた。男が死んだ妻

の遺産に對する權利と、女の死んだ夫の遺産に對する權利とが同樣になつた。

ニューヨーク州では兩親が別居してゐる際に於ての子供の後見人としての權利が父、母同等になつた。女兒と男兒は遺言を發し得る年齡が同一になつた。……

尚こゝに特筆すべき事は、ウイスコンシン州では總ての法律上に於て男女の同等を認むる同州憲法修正案が、一九二一年の七月に通過してゐる事である。これは現在米國に於て法律上男子同等權を獲た最初のさうして唯一の州である。但しこの憲法は次にかゝぐる如く所謂婦人黨の主張してゐる絶對的男女平等ではなく婦人の特權は特權として存在してゐる。

『婦人は參政權の行使、契約の自由、投票の目的のための住居の選擇、陪審官として、行政官として、財産の所有及譲渡、子供の後見及其他總ての事に於て、男子と同樣な法律上の權利と特權とを持つであらう。各裁判官及行政官等は今迄男性だけを含んでゐた法律にはすべて女性をも含めて解釋するものとする。但しこの解釋は現在婦人がうけつゝある特別及保護、特權を否定しない範圍に限る……』

然しながらこうして各州にて小さな一つ一つの法律を改正して行く事は、非常な時間と精力とを要することであり、且つその時の州議會の狀態によつて何度でも變改される惧がある。そこで婦人黨は往年參政權獲得時代にとつた手段と同樣にむしろ直接英國憲法の改正に全力を盡すことの得策なるを悟り、昨年（一九二三年）夏ニューヨーク州セネカホールスで同黨主催の下に開かれた米國婦人運動の七十五年紀念祭の席上でこれを決議し、發表した。その案文は

『男子と女子とは米國合衆國及その領土内に於ては同等の權利を持つであらう』

といふのである。これを同黨では第二十條修正案或は米國婦人運動の母といはれるルクレシア・モット夫人にちなんでルクレシア・モット修正案と呼んでゐる。

婦人黨の目下の運動はこの議案を中心としたもので、パンフレットに講演に、或は各議員や大統領の訪問等に全力を盡してゐる。昨冬十二月十日には遂にカーティス氏の紹介で上院にこの案が提出され、越えて十二月十三日には下院にアンソニイ氏の紹介で提出される所までこぎつけた。

論爭の焦點

所で婦人黨が現在主張し運動してゐるのは、前に述べた如く絶對に男女平等權の要求である　男に特權を許さない如く、

女の特權をも否定してゐる。從つて今日米國に存在してゐる、夫の妻に對しての扶養の義務とか、離婚後も前の夫からアリモネーを受けるとか、官公吏の妻が夫の死後年金を受けるといつたことは勿論・婦人運動者のためのみに制定されてゐる時間及賃金の制限法にも、正面から反對の立場をとり、これが制定を妨げつゝある。

婦人が現在法律上差別的待遇を受けてゐる事は何人も認める所であり、したがつてこれが或程度迄の改正は、いやしくも婦人である以上これに反對する人はないといつてもいゝ。然しながら婦人黨がすべてに於て男子と同等を要求しすべての婦人に對しての保護法に反對しつゝあるといふその態度に對しては、從來の家庭制度を全く破壊するものであり、婦人の生理的な差異を認めないものだとの批難が、保守的な婦人團體や進歩的といはれる婦人團體から起りつゝある。殊に勞働婦人に對しての婦人黨の態度は、それが直接多數の婦人に影響するものであり、又大方の婦人團體及婦人勞動聯合がこれをプログラムに入れて來た關係上猛烈な反對が起り新聞に雜誌講演に是非の議論が盛にたゝかはされた。絕對的男女平等權を中心として起つた渦卷は換言すれば、產業上に於ける男女平等可否論ともいひ得る程、それ程この問題には焦點が集められてゐる。

こうした所へたま〳〵昨年の春米國大審院はディストリクトオブコロンビヤから訴へた婦人のみの最低賃銀法に對し、個人の契約の自由に反したものとして憲法違反の判決を下した。婦人黨の運動が直接これに影響してゐるとは考へられないが、然しながらその判決は婦人黨の主張に凱歌をした事になつたので、婦人勞動者に對しての保護法の問題は一層油をそそぐ事になつた。更にルクレシアモット修正案が議會に提出さるゝにいたるや若しこれが通過せんか、婦人に對しての保護法は特に勞動婦人に對しての保護法は全部抹殺さるゝに至るといふので婦人黨と並んでこの修正案が否決さるべく同じやうに議員を訪問したり大統領を訪問したりして運動してゐる。

婦人黨が婦人勞働者保護法案に對しての態度はこう云ふのである。

婦人黨は婦人團體で勞働團體ではない。したがつて婦人黨のプログラムは婦人としてのプログラムで產業上のではない。我々には只產業上に於て男女平等でない法律が存在した時、又さうした法律が要求されるときのみ關係するだけだ。我々は決して八時間勞働法にも最低賃銀法にも亦夜業禁止にも

反對するものではない。勞働狀態の改善される事は我々も望む所である。但しそれが法律によつた方がいゝか若しくは社會運動によつた方がいゝか、若しくは現在の社會制度を改造する事からかゝらねばならぬかは我々の關係外に屬する。只我々は若し法律を以て勞働時間等を制限するなれば、それは英國やオーストラリヤ等のやうに男女に共通して適用される事を要求するのである。我々は勞働時間及條件の男女間に於ける不平等は重大な不公平だと信ずる。なぜならばそのために婦人が職を失つた例が多々にあり、且それは婦人を一層低い經濟上の程度に陷れる原因にもなるから、さうして一方婦人が男子と同等に働かなかつたら決して同等の賃金は要求出來ないから。ニューヨーク州に婦人に對してのみの夜業禁止の法律が施かれた時、多數の洗濯所に雇はれてゐる女、印刷所に働いてゐる女、料理屋に働いてゐる女達が解雇され、男子がその後を襲つたのは著名な事實である。其他ワシントンに於てもオハイオ州に於ても八時間制が施かれた時多數の婦人が解雇され男子がこれにかはつたことは使用者達自身が發表してゐる。所謂婦人保護法といふものは實は婦人の保護にあらずして男子の保護なのである。我々は我々自身の經濟的獨立をはかるために、さういつた偽りの保護法のかはりに公平な競爭の機會を與へてほしい。保護するなら性の區別によらず、よろしく弱者を保護したらいゝ。工場が不衞生であるならよろしく工場設備を完全にするやうにしたらいゝ。我々の立場は第一回及第二回の勞働婦人國際會議が宣言したと同じ立場にあるのであり、英國の勞働婦人界の權威者であるウエッブ夫人が大戰當時少數意見として議會に報告したと同樣な意見を持つものである。……

　これに對し反對黨はいふ。

婦人黨がいふ勞働法の平等とは、平等にあらずして數年間若しくは十數年かゝつてから得た法律の進歩を破棄するもので、勞働婦人の狀態を低下するものである。婦人勞働者は種々な事情から殆ど組織されてゐないので、今日まで長い間安い賃銀で長時間働かされて來てゐる。從つてこれを保護するためには法の力をかり、八時間法とか最低賃銀法とかを制定する必要がある。尚婦人は生理上到底男子と同等の勞働に堪へ得ないし又子供の母として、或は將來の母として特別にこれを保護する必要がある。男子勞働者にもこれを適用することはいゝ事には違ひない。がそれは言葉の上だけで今の議會でそれは通過しさうもない。よし議會が可決しても裁判所が憲法違反の判決を下すかも知れない。尚組合を組織してゐる

男子勞働者はさうした法律上の制限を望まないかも知れない、こうした場合に婦人は矢張それについて行かなければならぬだらうか。婦人黨の人達は中流階級及上流階級の婦人達の集りで勞働婦人の内部に嘴を入れるは僭越である。彼等は暗に飽くことなき資本家と欵を通じてゐるであらう。…………

かうして論爭は可成相手の團體の或は個人の名譽に關するやうな事までも言ひ合つてゐる。婦人黨からウエッブ夫人の級告を引用するとすぐ反對黨は直接夫人に手紙を出したり、婦人黨が勞働婦人萬國大會の宣言を引照してゐるのに對し、昨年夏の第三回大會では米國婦人勞働組合から、提議し「若しその國の事情によりその國の婦人勞働組合が、望むならば、婦人のみに對しての勞働法の制定も結構だ」といふ決議をさせて持つて歸り、これを婦人黨の方に示したりしてゐた。

尚この二派が實際議會に於てどういふ風に働いてゐるかを一寸附加へておかう。これは昨年の春ニューヨーク州議會でのことである。ニューヨーク州では知事初め婦人勞働者に對しての保護法制度に贊成してゐるものがあり、昨年あたりは時間勞働法が或は通過するかも知れないといはれてゐた。米國では委員會がそれについて採決する前、その案に對して贊成派及反對派の意見をきく事が例になつてゐる。この八時間法の時もそれが開かれ多數の婦人達がこれにのぞんだ。この時の所謂原案に反對者は婦人黨の會員を初め少數であつたが、婦人黨の反對演說は頗る巧妙なもので、先づ最初に殆ど原案に贊成の意をのべ最後に女の字を人と入れかへてほしいと說いた。然して一寸その修正案を反對派の議員をして提出せしめたといふ。それかあらぬか、此時はとう／＼此の案は通過しなかつた。

絶對的男女同等？　何れが是か非か、こゝでは唯問題を提供して識者の批判に俟つ事にする。（三月二日）

外債の使途と我國民の覺悟

河津暹

一　外債募集

政府は震災善後策の遂行と、第一回並に第二回の四分半利附英貨公債の借換に充當するが爲に、倫敦市と紐育市とで外債を募集した。其のことは二月十三日官報號外で勅令を以て公にした。之に由ると英國で募集したものは二千五百萬磅で、その利子は六分で、元金は大正四十八年七月十日限り額面全額で償還するが、大正二十八年二月一日以後は政府の都合により、九十日の豫告を以て抽籤により償還するものであり、同公債の發行價格は額面百磅につき八十七磅十七志である。紐育で募集したのは一億五千萬弗であつて、利子は六分半である。償還期限は英國より短く、大正四十三年二月一日を限り額面全額を以て償還するが、英國と同じく大正二十八年二月一日以後は政府の都合で九十日の豫告で抽籤により償還するを得るものであり、同公債の發行價格は百弗について九十二弗五十仙である。

この外債成立について注意せなければならぬことが甚だ多くあるが、需めに應じて極めて通俗に重なる事項を説明しよう。

二　外債の是非

國債は内國債にしろ、外國債にしろ、國家の借財であるから決して望ましいことではないが、國家が必要な政務を遂行するに當り其の財源がなかつたならば勢ひ國債を募集して其財源に充て徐ろに之を償還するより外に道がないのであるから絶對に排斥すべきものではない。然し、性質上望ましいものでないとは改めていふまでもない。所で同じく國債を募集するにも内國市場でなしたならば之れに應募するものは國民であ

るから問題はないが、外國で募集すると畢竟外國に借財することになるから內國債と區別して之を論難するものがある。今日では一般論として外債排斥論は少なくなつたが決して消滅してはゐないやうである。往年我國で初めて外債を募集した時などは、一般論として之を攻擊したものであつた。外債を募集すると、外國の勢力が增加して、我國は爲に外國から壓迫を受けなければならぬようになる。埃及や土耳古等が外國の勢力の下に屈しなければならなかつたのは、詮ずる所外債の爲であるといふのが其の主なる論旨であつた。然し一般論としては外債を排斥するのは正しい見解ではない。どうせ借財であるから、しないに勝るものはないが、之を起すとなれば決して內外の別を立てる必要はない。我國の財政が紊亂して之を償還することが出來ないとなれば債權國から如何なる難題をいひ來るかも知れないが、然らざる限り債權國とても我國を脅すことの出來るものではない。內債にしろ外債にしろ國債を起すに當り當局者の注意しなければならぬことは、一は國債募集の目的であり、一は其條件である。其國債が生產的のものであれば之れが爲に其國の經濟を振興せしむることを得るから、元利耳を揃へて償還することも出來るし、否、之を償還するを得るに止まらない、寧ろ利益があるから毫も差支がないが、其の募集の目的が不生產的であるならば、之を償還するに財政を緊縮し、又は增稅等により財源を得なければならないから餘程注意して行はないと禍を後年に貽すことにならざるを得ない。募集の條件も亦然りで、利子が低く其他の條件が寬大であるものなれば之を償還することが容易であるから差支はないが、利子が高く其他の條件が不良であると之を償還することが容易でないから却つて害を後年に貽すことになるののである。故に一般論として外債を排斥するなどはこゝに詳論するまでもなく採るに足らぬものであるが、外債の目的と募債の條件は具體論として之を吟味する必要があると思ふ。

三　外債の目的

今回募集せられた外債は上に陳べた目的論から見て稱贊すべきものでありや否や。この外債は二樣の目的を有する者である。一は復興の一部の資金を得る爲である、一は明年二月償還せらるべき第一回四分半利附英貨公債と同じく同十四年七月償還せらるべき第二回同公債の借換の資金として三億圓を得る必要があるからである。所でこの目的につきても世上相當議論があるようである。第一復興資金を外債に求めるのは正しくないといふ見解である。この見解は畢竟帝都復興は經濟

上からいへば生産的ではなく、不生産的であるから外債に求めるのは危險である。よし危險でなくも不適當であるといふのである。この見解は兎角政府の施設に反對せんとするものの議論許りでなく前内閣時代には大藏大臣まで之に類似の議論をなされたようである。復興資金は內國債に待つべきものであつて外國債に待つべきものではないといふのである。帝都復興の爲に資金を用ふるのは經濟上不生産的であらうか、私はこの說に同意するを得ない。帝都を急速に復興しなければ東京を中心として眞實の經濟活動が起りようがない。政府其資金を直ちに或生産事業に用ふるとは同視することを得ないかも知れないが、決して不生産的ではない。强いて名を命すれば間接に生産的である。其のことは評論する必要はないと信ずるが復興は不生産的であるといふ前提の下に復興問題を論ずるが如きは根本に於て誤謬である。聰明比なき井上前藏相が眞實にかゝる意見を抱かれたか、否やは私共は疑なき能はずであるが、假りに其意見を抱かれたとすれば寧ろ當時極めて大規模の帝都復興の計畫が行はれ、而も其の財源の如き之を顧みずして徒らに理想的計畫を立てるものがあつたから其論の歸決は必ず外債によりて資源を得んとすることになるであらうから、其は我國の財政の現狀に照して決して得策でないと信ぜられたから、表面理想的復興計畫に反對することを避けて　外債排斥論によりて財政の現狀に適順する復興計畫に引き直さしめんとする意ではなかつたかと想像するのである。其は兎角帝都復興は不生産的であるといふ論には斷じて服することを得ない、而も帝都復興の資金を內國債に仰ぐが如きは到底實現することを得ないのである。世上では利子さへ高ければ內國債でも募集する事を得るといつてゐるものがあるけれども、我國經濟界は不況の極度に達してゐる際巨額の內國債を募集し得べしとは想像することを得ない。して見れば復興の資金を外債に仰ぐことは賢明なる政策であると信ずる。私は復興資金は外債に仰がねばならぬと信ずるのであるから、政府が復興の爲に外債を募集せられたとは大に感謝しなければならぬ立場にゐるものである。

然し私は無條件で今回の外債募集に贊成する者ではない、復興資金の爲に募集したのは寧ろ副であつて、主なる目的は明年償還せらるべき英貨公債の借換にあるからである。而も其募集の條件については尚論議すべき餘地があるからである。

第二英貨公債借換の爲に外債を募集したのは不適當であるといふ見解を有するものも少くない。私はこの論に大體に贊成するが絕對に贊成するものではない。償還期の迫つた國債

の借換の爲に國債を募集することは珍しくないことだが、今回の募集は聊か珍とせざるを得ない何者英貨公債の償還期は來年である而も第二回の英貨公債の償還期は來年七月である。それを一年若くは一年半前に借換資金を募集するのは手廻しの早いことといはねばならない。こゝに二個の考察すべき問題がある。其一は今回は復興資金丈の外債を募集して置いて來年の初なり本年の暮なりに英貨公債の借換の爲に公債を募集するのは、今回の如く一時に兩公債を募集するに比して不利であるかといふ問題である。勿論不利であるとすれば手廻しよく募集して置かねばならぬことであるが、私の見る所では二度に募集する方が得策である。公債募集の技術からいふと、二度も三度もそれからそれと引續いて國債を募集するのは不利益であるものではあるが、其の一般原則で凡ての場合を律することを得るものとは思へない。諸國は我國の震災に對し多大の同情を有してゐるから應募するものがある譯ではあるが、其と結び付けなければ借換の公債を募集することを得ないとは受取れない。借換といふのは讀んで字の如く借換であつて若し之をしなかつたならば前の債權者は困らざるを得ないのであるから、之を切り離しても募集し得ないといふ理はない、引續き募集するのは技術上不利益であるといふのは畢竟募集の條件が不利となるといふことである。所で今回募集した條件は最負目に見た所は決して有利であるとは思へないから、英貨公債借換の爲めの外債を結び付けねばならぬといふ理由は薄弱であるといはざるを得ない。この觀察點から技術上の辯護論に承服することを得ない、即ち借換の爲め急速に外債を募集したのは不適當であるといひたい。第二の問題は今回急に外債を募集したのは政府の聲明する以外に之を募集しなければならぬ事情が伏在してはゐないかといふことである。私はこの事情が伏在してゐるから政府は英貨公債借換を少々無理ではあるが復興の爲めの外債と結び付けたものではあるまいかと想像するのである。其の想像が當らずと雖も遠からずとすれば、借換の爲に外債を募集したことに反對する論者に理論としては贊成するが、此事情あるが故に當局者のなしたことを諒とせざるを得ない。之を諒とせざるを得ないのは我國の爲に實に悲しまざるを得ないのである。其の伏在せる事情といふのは、我國の外國貿易が益々逆勢であつて昨年も輸入超過が五億圓を超え、本年も之に超ゆるとも少くはあるまいと豫測せらるゝ情勢にあるのであるから我國の在外正貨は或は枯渇しなければならぬことになり、我國としては頗る困らねばならぬ位置に立つ危險があることである。我國は輸入超過の爲に

苦しむこと既に數年である、私共は之れを重視して根本的に改むる道を講じなければならぬ、之を改むるには政府も國民も共に多大の犧牲を忍ばねばならぬことを絶叫し來つたのであるが、當局者の中政友會內閣の如きは之を實行しようともせず、加藤內閣の如きは之を實行する意思はあつても其の力がなかつた爲に輸入超過の勢は毫も改まることがなかつた。それに昨年の大震災を以てしたのであるから輸入超過の勢は益々甚だしからざるを得なかつたのである。故に正貨準備、在外正貨を擁護し併せて我國の信用を維持するが爲には外債を募集する必要はあるといへる。私はこの問題に大なる金輸出解禁問題を論ぜんとするものではないが、早く之を解禁したならば正貨減少といふことはもつと早く顯はれたに相違ないが、經濟の運行を今日よりも遙かに自然的になすことを得て、或は貿易狀態を今回よりは多少は良くさせることを、得たのではあるまいかと想像するのだが、如何せん、我國の外國貿易狀態は上に陳る如く我國在外正貨の狀態又上に陳る如くであるから、外債によつて之を補塡する必要があるといはざるを得ない。我國の經濟財政の實情がかくの如きものとすれば、外債を募集するに至つた根本に遡れば、實に浩嘆慨歎せざるを得ないのである。當局者が無理と知りつゝ今回の如き外債募集をなすに至つたことを寧ろ諒察せざるを得ないのである。國民は單に當局を攻擊することをなさずして、我國の眞價が日々に下落しつゝあることについて猛省しなければならない。

四　募集の條件

我國の信用の程度上に陳べたる如しとすれば、外債募集の條件が我國にとりて不利益であることは寧ろ當然である、四分半利付の公債を借換するのに、六分なり六分半の利子付でしなければならないといふこと丈でも之を證明することを得るではないか。今上に陳べた利子と發行價格から計算すると、英國で募集した分は七分二厘强の利廻となり、米國で募集した分は同じく七分二厘强の利廻となるのである。多くの觀察者のいふが如く成程高い利子である。我國にとりて不利益であることは疑ないのであるが、其の不利益なる根本原因は我國の信用が下落したことにあることは明白である。外債募集の事情等が然らしめたことが第二の原因である。これ等の原因あるに拘らず政府當局の手腕が多少有利なる條件で募集し得なかつたや否やが問題となる丈であると信ずる。世上では前年の外債募集の條件と比較して今回の條件が不利であると論ずるものがあるが前年とは世界の經濟事情は全く異つてゐることを知ら

なければならない。歐洲戰爭前には諸國では利子步合が次第に低くなりて三分前後にゐたから、四分五厘で募集することが出來たのであるが戰後は利子步合が非常に高くなつたのであるから我國が戰前の如き利子步合で募集し得ざるは明白である。私はこの點で當局者を攻擊することを欲しない。當局は無擔保で募集し得たことを誇りとしてゐるようであるが私は反對に若し我國が相當の擔保を出したならば幾分なりとも利子步合を低くすることを得たのではないかと想像するのである。成程擔保を出したとなれば形式上からは甚だ不面目のようであるが、我國の信用ではそんな形式に拘泥する秋ではない、少しにても利子步合を低くしなければならぬ秋である。所で擔保を出した所で契約通りに償還することが出來たならば擔保は何等の問題を生ぜぬものであるから決して實害はない。唯體面とか名譽とか、いはば形式上のことの爲に實害のない方を採らなくて却て實害のある方を採つたといふことは私の意見では贊成し兼ねるのである。而かも之を以て恰も成功のようにいはれるのは其の意を得ないのである。但しこれは擔保を出せば利子步合を少しにても低くすることを得るといふことを前提とするものであつて、事實上之を期待することを得ないとすれば、私の意見は成立たぬことになるのである。私のいはんとする所は利子步合等條件が不利であることは已むを得ないことではあるが、當局の努力でもう少しは有利なる條件で募集することは出來たのではなからうかと想像することが出來るといふことである。

五　外債の影響

以上は今回募集せられた外債に對する私の意見を略述したに過ぎないのであるが、條件の良否等は兎角として數億圓の外債は成立したのであるが、これ等は現金として我國に輸送せられるものではなく、之を以て復興材料の購入の費用に充てたり、舊債借換の資金になすものであるから、現金で我國に輸送する場合とは全く影響を異にせざるを得ない。尤もこの外債が成立しなければ、在外正貨は勿論、我國にある正貨準備も或は減少しなければなるまいから所謂保證準備でも擴張すれば兎角、然らざれば通貨は縮少し物價は或程度まで下落しなければならなかつたかも知れないが、外債が成立した爲に其の必要の程度を緩和したから或は金融は多少緩漫となり物價は多少昂騰し所謂中間景氣を生ずるかも知れない。然し其の中間景氣は性質上今述べたるが如きものであるから程度は大なるものではないと信ずる。故に少し景氣が良くなつ

たからといつて放漫に流れると其の反動は實に恐るべきものがあるに違ひない

私は甚だ悲觀論をするようであるが今回の外債募集の成績から見ても我國の信用は殘念ながら甚だ低いものであつた。何人がいひ初めたか知れないが三等國である。我等はこの際大に奮發しなければならない。奮發して我國の經濟狀態をよくするには別に妙案があるのではない、第一には我等は出來る丈消費を抑へるのである。我等は近頃では不知不識の間に奢侈に陷つてゐるようである。而も内國產を棄てゝ外國產物を喜ぶ風が洵に盛である。輸入超過が上に陳ぶるが如く甚しくあつて、從つて我國の信用を低下したヿも其の一部分の原因は我國民が國產を棄てゝ外國產物を喜ぶにありと信ずる。我國でも一時盛に國產奬勵論が唱へられたが今日では之を顧るものが少いようであるが、實に痛嘆の至りに絕えない。成程極端なる國產奬勵は宜しいヿではないが、今日のように外產崇拜從つて輸入超過の勢を甚しくするのも決して賞すべきヿではない。國民は須く其の消費狀態について猛省しなければならない、之と同時に我等は勤勉努力して生產を增加するヿを努めなければならない。私の見る所では我國の勞働者等は生活の程度を高くするを得たのは勿論喜ばしいが勞働能率が却つて減少したヿは實に嘆はしいヿである、元來生活の程度の向上は勞働能率の增進を伴うべきものであるが、それが却つて反對の結果を見るに至つたのは痛嘆せざるを得ない、これは畢竟精神的緊張味が減じたからである。國民にして今にして猛省する所がなければ遂に濟ふ可らざることにならなければならない。



婦人が政治に參加する意義

長谷川如是閑

政治と云ふ事を歷史上の事實として見ると、夫れは常に反抗されて居た一の權力作用であつた。社會のある階級が他の階級に對して、權力的に支配すると云ふ事が政治であつた。故に夫れは支配するものにとつては生活の最高の態度であるが、支配されるものにとつては、夫れは生活の壓迫に外ならなかつた。政治と云ふものを斯樣な事實として見ると、政治に入り込むと云ふ事は權力者になると云ふ事である。歷史上政治と云へば必ずそう云ふものであつた。

そこで政治を極端に理想化する階級と、夫れを極端に排斥する階級とが何れの社會にもあつた。無論學問上にもこの極端な見地を代表する人々があつたのであるが、併し夫れよりも著しいのは、理窟の上でなく、生活上政治に憧憬るゝものと、全く夫れに沒交涉のものとあつた事である。如何なる時代にも、社會の一方には生活の理想は政治に於いて窮極すると考へ、權力を得る事が人生最大の理想であるとして居た階級があつたと同時に、他方に於いては全くそう云ふ權力に對する憧憬を知らないで、生活とは、そう云ふ權力とは全く沒交涉な人間的心持並びに行動をとる事であるとして居た階級があつたのである。歷史と云ふものを見ると右の前者の階級即ち政治に終始する階級だけの生活が記されて居るので、社

會は只これ等の階級に依つてその生存を保たれて居たやうに見えるが、併し歷史を讀んでもわかる通り、夫れ等の人々は決して、本當の社會的生存を保持するやうな行動を少しもとつては居なかつたのである。日本の歷史を見ても、藤原氏の生活、源平の爭ひ、戰國時代の混亂、大名貴族の生活と云ふやうなものは日本の社會的生存を持續する積極的の生活ではなかつたのである。若し日本國民全部が、藤原氏や、源平や、大名貴族やの生活をして居たならば、恐らく夫等の榮華のあとを、バビロンの夫れのやうな廢墟として殘しただけで、日本の國は亡びて居たであらう。

夫れが歷史上の政治と云ふ生活である。日本の國は、國民の多數が古來そう云ふ生活と離れて社會生存の積極的生活、卽ち精神的並びに物質的生產の生活を續けて居た爲めに保持されたのである。故に政治と云ふものを、右の歷史上の政治と云ふ事に限定するならば、人間の生活の理想としてはそう云ふものに入り込まない方が道德的なものである。尤も古來政治を學問の根柢とする人々は、決してそう云ふ道德を主張しなかつたのみならず、權力行使の過程に入り込まない人間は、奴隷であるから牛馬に等しいと考へたのである。古ギリシヤの學問でも、支那の儒敎でも皆そう云ふ見地をとつた。

けれども他方には又之れと正反對に、生活の理想はそう云ふ政治の生活に入り込まない事であると考へた思想が澤山榮えた。無論この思想は、古來の社會が政治を中心として居た爲めに壓迫され所謂危險思想視されて、政治階級の思想のやうに廣く宣傳することを許されなかつたが、多數人民の心理には社會的生活そのものから割り出した無意識的な心理傾向が自ら政治に對する嫌惡となつて存在して居たのである。多數人のうちに常に權力に對する反抗の傾向があつたのは卽ち夫れである。

政治をそう云ふものとして見れば、ただに婦人のみならず男子と雖も政治に憧憬ると云ふ事は、生活から離れた人々の階級理想である。そう云ふ理想を抱く人間は必ず社會的生存にとつて積極的に必要な生活態度を離れて了ふのである。

地方の農民が政治運動をやれば米を作る事を忘れて了ふやうなものである。凡ての人間は決してそう云ふ權力への憧憬を持つべきではない。

けれども實際の社會は、その權力で生活が支配されて居るのである。そこで多數人民は眞純な生活理想から、權力との折衝を嫌つた日には、古代の隱者のやうに、山の奥へでも逃げ込まなければならない。併し社會人は自分一人を潔よくして、己れだけを生かすと云ふ主我的な生活をとる譯にはゆかない。凡て隣人と共に生きねばならない。そこで昔の人はよく多くの隣人を率ゐて、政治的權力の及ばない土地に逃げ隱れやうとしたのである。今のアメリカ合衆國はそうして出來た國である。處が其處にも亦、政治が發生する事は、原始時代の生活から政治が出來たのと異ならない。そう云ふ處置により政治から遁れやうとしても、夫れは無駄手間である。新らしい村にもやがて古い村と同じ政治が發生する。

夫れよりも社會人がとるべき道は、遁れる事ではなく、そこに居てよりよき生活を持ち來す事である。そこに居てとは、世の中を捨てずに自らその中にあつて、世の中のよりよき組織を持ち來す事である。之れは決して個人的な思ひ付き、又は英雄的な壓迫では成り立たない仕事である。社會は夫れから遁れる事に依りて決してよりよくならないと同じやうに、思ひ付きによつて造りかへる事に依つて、よりよくされるものではない。古來英雄豪傑が、屢々之れを試みたが彼一代の間も續かなかつた。そこでそれと正反對に凡てを放任して置くがいいと云ふ考へも生じたのである。

放任は併し乍ら人間の生活に於いては、決して出來得る事ではない。赤兒を育てるにも放任ではなりたたない。一つの組織が作られ、處置されるにしても、そこに人間の意識がはたらきかける世の中に、ありとあらゆるもの、一として放任されて成りたつて居たものはない。人間の社會で生れ育てられたものが、人間の心持で加減されずに居たと云ふ例はない。そこで昔の隱遁的の聖者の考へたやうなやり放しの生活と云ふものは事實成りたたない。

社會はやり放しに依つては、成りたゝないとすると、そこに何かの組織がある以上は、夫れを人間的意識で處置すると

云ふ方法がなければならぬ。三人寄つて何か協同で仕やうとすれば、必ず三人の心持ちなり行動なりをとりまとめる方法がなければならぬ。歴史的にはその方法は、三人の中の一人が他の者を壓迫する事であつたが、三人ながら相當人間的能力を持つやうになると、一人が他を壓迫すると云ふ事も出來なくなる。三人が三人の心持ちを尊重して夫して、協同の心と、行動とを成りたゝせなければならぬ。斯樣に協同の心及び行動を取りまとめると云ふ事は、いやしくも社會の生活の存する限りはなくてならぬ組織である。政治も古代の壓迫から、斯樣な協同のとりまとめと云ふ事に進化してゆくのである。

權力と云ふ事を中心とした政治は、歴史上の政治であつた。夫れが自ら進化して、權力に依る壓迫から、協同の心理に依るとりまとめに迄進むと云ふのが、之れ亦歴史上の順序であつた。古代の政治は一方に權力があり、他方には隸屬があり。その間の關係は壓迫であつたが、近代に到つて、權力と隸屬との關係が、壓迫に依らずに協同の心理に依ると云ふ事に進みつゝあるのである。

勿論斯樣な進化もまだ、全く途中にあるだけで、今日も尙權力的壓迫が政治から離れては居ないが、權力の成立がより多く協同の心理に依賴せねばならなくなりつゝある。昔は平民と云へば牛馬と等しく絕對隸屬の外はなかつたのであるが、その平民が今は權力にわり込んで、貴族軍人をあべこべに壓迫して、立派な權力者とならうとして居る。この權力は矢張り昔の權力と同じく壓迫の關係で、更に下級の多數人民を隸屬させて居るが、併し既に平民が權力に割り込んだと云ふ事實があつた爲めに、今度は更により下級の多數人民が、この平民の權力に割り込まうとする傾向を生じたのである。無論斯樣に權力を追ひかけて居た日には、何處まで行つても、政治は權力者の壓迫關係にとどまるが、併し權力者が多數人民からなると云ふ事の爲めに、英雄や一部階級の權力とは要素の異なつたものが生れるのである。多數人が權力者たるにはその力の取りまとめに於いて、甚だ多分に協同の心理を取り込まなければならない。この協同の心理は夫れが實際社

會的生活を營んで居る多數人の心理である場合には、そう云ふ社會生活を營まない、貴族軍人の階級の協同心理とは甚だ異なつたものである。詳しく云へば、夫れは貴族軍人の社會心理が全く權力組織の夫れであつたのに對し、多數人民の社會心理は生產組織の夫れを基調として居るのである。既に町人が政治に割り込んだ時に、軍人や貴族の政治と異つた商業尊重の政治が起つたのである。夫れと同じく町人の商業主義の政治は、この次の勞働階級が夫れに割り込むと、今度は一層生產的の政治が生れる譯である。同じ權力でも次第に反社會的から、社會的にと進化してゆくのである。

政治が、斯樣な社會的な傾向をとると云ふ事を、他の一面から見ると、凡そ人間社會の協同生活では、すべての人間がその協同生活の支配に參加すると云ふ傾向になつてゆく事である。この意味の政治運動に對しては婦人も亦當然參加すべきである。初めに云つた權力としての政治に對しては、婦人はおろか男子でも、それから遁れる方法を理想とすべきであるが、その權力政治を社會化する爲めに、町人が加はり勞働者が加はる事が必要であつたやうに、婦人も亦之れに加はる必要があるのである。

けれども考へなければならない事は、政治が社會化すると云ふ事は、今云つた樣に昔少しも社會的生存の生活にあづからない階級が權力を握つた狀態から、次第に實際社會的生存を保持する人々が生活を管理すると云ふ事に進むのであるから、いやしくも生活の管理に任ずる者は、現實生活にとつて重大な仕事を營んで居る人々でなければならぬ。勞働階級が政治的に有力になりつつあるのは彼等が現實社會的生存を保持する有力な仕事に任じて居る階級だからである。

婦人が政治に入り込む時にも同じくこの條件に從はない譯にはゆかぬ。なるほど、婦人の家庭の仕事は、社會的に最も重大な仕事であるから、夫れだけでも婦人が生活の管理に任ずる資格があるとも云へやうが、併し夫れはその管理が矢張り家庭の事柄に關しただけに止まらなければならない。云ひ換へればその場合には婦人の政治に對する參加は家庭問題の範圍を出る事が出來ない譯である。

處が婦人の現狀は決してそこには止まつて居ない。社會が婦人を要求する方面が現代に及んで著しく擴大された。家庭以外色々重要な社會的任務を婦人がとらねばならぬ傾向に進んでゆく、學問でも、事務でも、生產の仕事でも、婦人は仲々有力な分擔を持つて居る。殊に農業、織物業等に於いては婦人の分擔は男子の夫れに決して讓らない。そうなると生活の管理に婦人が入り込むと云ふ事は、家庭以外色々な方面に益々必要になつて來る。云ひ換えれば婦人は男子と同じく、彼女の社會的生存の仕事の分擔の上に管理權を持たねばならないのである。

夫れ故に現代政治に於いて、婦人の參加すべき範圍は決して男子のそれよりも狹くなければならない理由はない。只實際上まだ多くの社會的任務は男子に負はされて居るから現實要求される範圍は自 狹くもあらうが、理論上女子の社會上の地位は男子の夫れと異ない以上、女子の生活理想は次第に男子の夫れと一致して、政治の方面に於いても、全く協同的の地位を占めねばならないのである。

婦人の政治上の地位は、夫れ故に彼女の社會的生存の仕事の分擔の擴大されるに伴つて擴張さるべきものである。男子の寄生蟲にすぎないやうな女子は、到底これからの有力な政治的要素ではあり得ない。昔の政治は往々寄生蟲にすぎない婦人が、政治上の有力者であり得たが、夫れは政治的權力者が全部寄生蟲であつた時代の事である。社會的生存の保持者たる任務の重大さが、その管理の重要さを決定する今日に於いては、社會の寄生蟲は男子たると女子たるとを問はず、政治上たると社會上たるとを問はず、決して有力になる事は出來ない。

これを要するに、婦人が男子に寄生する生活狀態をつづけながら、婦人が政治的に有力にならうとする運動は決して成功しない。「婦人も亦人間である」といふやうな單純な思想に基く婦人の政治運動は、理論上如何に立派に成立しても、實際上有力に成り立つことは覺束ない。婦人が政治上有力な地位を占めるには、先づ社會的任務に於て、彼女が有力な地位を占めることを要する、一言で云へば、婦人が政治に參加する意義は、勞働者が政治に參加する意義と同一でなければならぬ。

學校から社會へ出る女性に

家庭内の毒素を警戒せよ

原田實

今年もまた、何萬といふ若い女性が學校の門を出て、若々しく勇ましく巣立ちをする時となつた。その群れ散る姿は、ぱッと開き移る萬華鏡を想はするあでやかさである。おもへば、何といふ晴々しい三月四月ぞやと詠歎したくなるばかりである。然しながらこれらの若い女性は學校の門を出て果して何處へ往くであらうか。前途は吉か凶か、踏み止まつて暫く考へて見る必要がある。

ひと口には、臆病な教育者に依つて窮屈に狹く築かれた學校の垣から解放せられて、廣い〳〵社會に出ると謂はるゝのだが、然し、彼女等のうちの幾人が、果して、學校の卒業に依つて、廣い〳〵社會に翼を展ば得るだらうか。彼女等の多くは、實は、學校よりも更らに一層狹い世界である家庭のうちに引摺り込まれて行くのではあるまいか。そしてそこには、學校の先生よりも更に一層臆病な親といふものが、おまけに虚榮心と欲心とに魅かれてゐる親といふものが、その娘たちの學校から出て來るのを待ち受けてゐるのである。そして、彼等に依つてそこに、彼女等を陷れようとする運命の民が、多くは陰險に、或る場合には心地よくさへ、用意せら

れてあるのである。
　而して、この運命の罠に陥まつたが最後、無限の可能性を恵まれてゐる彼女等の一生も、容易に見透しのつく有限のものと化せられてしまひ、またそれに陥まつたが最後、彼女等の生活は、生命の藝術ではなくなつて單なる仕事と化してしまふのである。そして、藝術なき生活、創造なき生活、不生産的な生活が、彼女等に運命的にそこに始まるものである。家庭の空氣の沈滯、親たちの虚榮と強欲とまたその盲愛、これらは實に、若き生命にとつては、眞に恐るべきものである。
　教育者の臆病と無氣力とに少しく眼の開きかゝつた社會批評家たちよ。卿等は何故に更らに一層荼毒的な家庭の空氣を批評しないのであるか。私は決して、家庭そのものゝ使命を安價に見積らうとするものではない。また、家庭の天地が、女性の世界として狹隘に過ぎると言はうとするのでもない。それらには茲では觸れない。こゝに言はんとする要は、利己主義化した今日の家庭經營者を責めよといふにある。具體的に言へば、今日の親たちを忌み憎むのである。昔キリストは地に劍を出だすために來たと言つたといふが、今日の私たちは、實に、家庭に劍を出だすことを躊躇すべきでないのだ。
　今日、多くの家庭は、家族制度から發した陰險な傳統と因襲生活からの粗雜な權威とに依つて、いつ知らず憎むべき利己主義に墮してゐるのである。そこには、強欲が育ち、臆病が育ち、虚榮心が育ち、投機心が私生兒として生れてゐる。若い純な生命は、そこに伸び〳〵と呼吸することが出來ぬ。容易に毒素に傷けられ、その純潔を麻痺せしめられてしまふのである。わけても、反撥の習慣をもたない女性の生命は、そこに容易に傷けられ、歪められ、墮落せしめられてしまふのである。最もその難を免れたものでも、僅かに淋しい諦めのうちに遁れ、正を正として飽くまで突き進むといふ樣な純潔な勇氣は奪はれてしまふのである。
　私は、今日の學校に滿足してゐるものでもなく、況してその讃美者でもないのだが、それが、今日の家庭に沈澱してゐるこの種の毒素から若き生命を幾らかでも救ひ出してゐるといふ事實に對しては、ひそかに感謝してゐるものである。少なくも學校へ行つてゐる間だけは、少女たちも多くは生き〳〵して呼吸してゐると言つていゝからである。
　新しく校門を出る若き女性たちに對して言ひたいことは決して二三に止まらぬが、何よりも先づ、學校から家庭に再び復ることに依つて、そこに沈澱してゐる毒素に染まることを

するといふことを、私は力をこめて言ひたいのである。

然り、私たちの若い女性たちは、今日の家庭に沈澱してゐる利己主義に兜を脱いではならぬ。純潔に勇敢に若々しい生命の鼓動につれて、正義を踏んで進め。人生觀と職業と結婚には、自己自身の信念に依つて決せよ。決してこれらをご都合主義に依つて決めてはならぬ。

この試煉に打ち克つことが出來て始めて、日本の女性も眞に文化高上の事業に參ずるのヴイゼを與へられようといふものである。

思索と自らを鞭打つこと

小川未明

獨り立ちになつたら、どんなに自由であらうかと、思つたことは、一片の空しき頼みにすぎなかつたといふことをしばらくして悟るでありませう。

學校の窓から見た社會と、實際に接觸した社會とは、甚だ異つてゐるからです。たとへ、いろ〱な學課は、頭を苦しめ試驗は、時に、無形の束縛であつたにしても、まだ考へる自由を有し、知るといふことの興味は得られたからです。

その人々の境遇によつて、もとより一樣には言へないけれど、凡そ社會へ出たからには、自ら働き、自ら生活して行かなければならぬものです。

人間が、生きるといふことも、たゞ、生きればいゝといふなら、もとより學校へはいる必要もなければ、研究するといふことも要らない筈ですが、そこに、意義ある生活をせんために、努力を要し、反省を必要とするのであります。

しかし、今の場合、一たび、社會に出て、職を得れば、朝から、晩まで、そのために働かなければならない。幸にしてその仕事がこの人生に密接なものであれば、それによつて慰められるけれど、不幸にして、たとへさうでなくても、ちや

うど廻はりはじめた車の輪のやうに、生活のために、深く考ふることもできずに、たゞ働かなければならない實に、世間の多くの人々は、獨り、衣食のために、勞働を餘儀なくされてゐる者が多いのであります。

讀書の時間は奪はれ、靜かに、思索するといふ頭の餘裕を失つてしまふのです。

もし、時勢に、遲れざらんとするには、常に、これを補ふだけの大なる努力を要します。しかし、大抵の人は、いつしか、眞理への奉仕といふことから遠ざかつてしまつて、世俗的に、樂な暮しをして行くやうに、求むるものです。

社會へ出ない前には、社會に對して、一種謹嚴な、恐怖の感を抱いてゐた。社會は、廣い、そして、あらゆる智識と經驗の群がるところだ、さう思つて居た。それが爲に、社會へ出たはじめは、誰しも謙遜ではないものはないといつていゝのです。

眞實をもつてすれば、眞實をもつて酬いられ、正義は常に勝ち。2に2を加へれば、4になるといふことは、學校にある間は疑ふことのできない眞理とされてゐたものが、社會に出ると、それは、かならずしも、さうではない事實を目睹するに至つて、驚かないものはありません。

「世の中といふものは、かういふところだ」と、はやくも、それと妥協してしまふ者にとつては、苦痛でないかもしれぬけれど、眞理に二つなしといふ考へを有するものには、いつまでも忍從することができなくなるのです。

「社會へ出る人々へ」の、私の言はんとするところは、こゝであります。

自由な、幸福な世界は、過去にあつたのです。しかし、いまさら、それを望んでも及ぶものでない限りは、勇敢に、人生の戰場に出て働くことです。

自らを欺き、また、おざなりと言つてすまされない正直な誠實な人々は、この社會の矛盾が、どこから來てゐるか、何に因つてしかるかといふ、病弊を研究し、不正と戰ひ不義と爭ひ、そして、人間の協力によつて、より善い社會が建設されるものなら、そのために努力するのが、目醒めた人々の義務だと信ずるのであります。

しかし、男なら、いゝ地位を得たり、虛名を得たりすればそんなことを考へなくなります。そして却つて保守的になる者の方が多いのです。女なら、子供ができたり、餘裕でもできると、先づ、享樂の方に、考への向くものが多いのです。

いつまでも、眞理の徒たらんとするには、自から鞭打つこ

とを怠つてはならない。それには、讒謗を發してはならぬことです。常に新思想に親しみ、その思想の因つて起らなければならぬ理を、現實の社會現象について觀照することです。

しからば、いかに、そこには、良心ある人間の手によつてなさなければならぬ、幾多の事實が存在するでせう。そのことは、諸君を勇氣付けずには措かないと思ひます。

次に　環境に馴れることの危險であります。このことは、曾て、この社會に對して、謹嚴と恐怖の感を抱いた、當初の謙遜な心持をいつまでも持續して、妄りに、浮薄な感情に妥協しないことです。でなければ、ほんたうに犀利な眼光をもつて、眞相を批判することができないからです。

社會の改造を、いつの時代でも、ヤンガーゼネレーションに期待してゐます。そして、諸君こそは、まさに、この責任ある人達なのです。

―二・四二―

社會に巣立つ人々へ

上代たの

天地は、春の裝ひに忙がしい。美しい嫩芽は、鱗片一重、綠の玉とふくらんで居る。樹間には、既に、花の氣が漂うて居る。新たに巣立たうとして、喜びと慄きにふるえて居る若い人の心は、丁度此の早春の自然の樣に、目に見えぬ、音に聞えぬ多くの詩と夢とをのせて居る。私は、此の樣な美しい自然な人生に對して今更に冷たい警戒をあびせ樣とは思はないが、春、又春と別れて行く時、心潛かに彼女等の前途に希ふことは數々ある。

私は、先づ、私の若い友達に、其の心の底か、凡らゆる自己優越感をとりさることを希ふ。此の言葉も、或は余りに強きに過ぎて居るかもしれないが、吾々の教育は、兎角、吾々に無暗と社會の指導者たる覺悟を促がし、知識的特權階級としての特種の責任を感ぜしめるのではなからうか。之は一應尤もな考方であるが、吾々は其處に恐ろしい躓の潜んで居る

ことを忘れてはならない。吾々は社會の指導者たらんとして指導者たり得るのではない。一足とびに聖人になれない樣に、吾々は、たゞ、自らの美しく正しい生活を追ひ求めて居る隨に、偶々、其の指導者、若くは暗示者となるに過ぎない。

殊に、今日まで、知識階級としての吾が國女性の地位がすこぶる危かしい。所謂知識の專門化から云へば、凡そ未開拓の原野に過ぎない。吾々はこの事を、もつと〳〵深く心に留めて今後本當に教育の機會均等を實現しなければならない。隨つて、假に自分が、一般女性に比較して、稍々知識階級の特權に與つて居ると云つても、それが、決して誇りでも名譽でもない事を覺悟しなければならない。今日の樣な時代に於いては、知識階級に屬する人が必ずしも優秀な頭腦の持主でない事が多い。吾々が教育を受け得たのは、教育を享け得る條件を他の多くの女子より比較的多く備へて居たのに過ぎないのだ。本當の知力から云へば、教育を受けないそれ等大多數の女子の間にどれ程、すぐれた人が居るかわからない。否な、むしろ、知力劣等な女子が、却つて、高等な教育を受けるといふ樣な場合がなきにしもあらずである。

猶ほ、進んで知識生活最後の理想から考へてみても、吾々の知識が決して一部知識階級の特權に止まつてはならない。知識は何處迄も共産を理想とする。今日吾々は、全く新らしい世界に住んで居る。凡ての人の正しい最大限の幸福を瞬時も忘れる事が出來ない世界に居る。そしてこれは物質生活に於いても同じ樣に、目に見えぬ知識の世界に於いて、吾れ、共に、心ゆく迄逍遙する權利を與へられる可きことを意味する。教育の機會均等は、いふ迄もなく、吾々の日常生活其のものの中に、吾々の人生を整統して行き得る丈けの、思索と研究と讀書の機械が誰もに與へられなければならぬ。ソローがワルデンの小屋住ひで體驗したあの樣な生活がよし其の形式は何であらうとも吾れ〳〵共に味はれなければならない。知識の專門化必ずしも眞の知識生活ではない。その人間化こそ、本當の目的である以上、知識階級としての自己優越感は、却つて最后の目的に全然反する。其の心的態度に命數的な何者かが含まれて居る。若し吾々が、此の優越者としての自負を捨てゝ知識探究を人生に即し常住的の必然事とみなし、萬人の權利を考へ得るならば、吾々自ら日に日に新たに、日に日に多く深く知識の世界に參與することが出來る許りでなく、總て、自分をとりまく社會人に對し彼等の人格の平等絶對性を、何ん等か積極的な方法に於いて保證して行かうとする態度に出るにちがゐない。例へば、近頃外國に頻りに行はれて居る、女子

の大學卒業生が、一般勞働婦人の味方をして、姉妹の樣な心的關係で互に相助け、相導く事の如きそれである。之は唯だ其の一例であるが、吾々が若し、眞に知識階級としての優越感を脱する事が出來たならば、社會奉仕の具體的な方法が、もつと自ら心に湧出して來ると思ふ。

次ぎに述べ度いと思ふ點は、吾々女性としての自覺に就いてである。吾が國文化に對する女性の使命が、重且つ大なるものであることはいふ迄もないが私は、之を以つて無暗に人工的、速成的自覺を促がしたくない事である。女性は何處迄も女性であつて、到底男性であり能はぬ事であるから、其處には、自ら吾々の使命が特徴づけられるのは勿論であるが、私の此處に云ふ意味を、吾々は、特に女性として吾々の思索を、行爲を、感情を制限づける必要がないといふ事である。吾々の人性に人工的範圍を設けないといふ事である。吾々は唯だ吾々の夢み得る最も美しく、最も高いものを追ひ求めて顧る處がなければならないのである。即ち吾々の爲さんと欲する如何なる人生の働きにも、勇ましく、躍り込む勇氣を持たなければならない。人生は畢竟心靈の冒險である。此の貴い冒險を、女性なるが故に少しでも局限せられる事があつてはなるまい。斯くの如き自覺は致命的である。性的に之れを考へてみても本當の女性であるならば、自分が女性であることを忘れて人格的に發動する。そして、偶々本當の男性とめぐり合ふたならば、眞の女性としての輝きが、其の間に自ら發露する。吾々は、凡てを忘れて、吾れ自らになりきる事を心掛けねばならない。

最后に一言し度いことは、吾々女性はもつと、眞劍に、働かなければならないといふ事である。人生は未知の太洋にとりまかれた孤島の樣なものである。凡て未知數であるのにかかはらず唯だ一つ確實なものは、自分の一歩〳〵と踏みしめて行く跡である。自分の内から生み出して來る仕事のみである。仕事のみが、更に大きい人生に吾々の運命を開拓してくれる。殊に自分の仕事になり切らぬと、何時かは、自分が萎靡して仕舞ふ。自分そのものが、消え去つてしまふ。今日輝きにみちた社會も、次第に暗い影に包まれてしまふ。即ち自分に愛想がつきる。人生の凡てがいやになる。而して、倦怠の極、自暴自棄に陷る。人間は、涙のにじむのを制し得ても、倦怠の感を制する事は出來ない。吾々女性は何よりも恐ろしいこの空虚感から脱する爲めに、其の形式の如何に拘らず、自らの渾身の勢力を傾注して、何物かを人生に貢獻する事を考へ度い。

之れが爲めには、社會に巣立つに先だち、吾々は、先づ、社會が、自ら其の身に心にしつくりとあふ出來合ひの理想郷でない事を覺悟して、之れを改造して、一人でも多くの人の住心地よい世界を創造す可く、自分自ら働きかけて行く決心が大切である。勿論此の努力、此の働きも、バベルの塔と終るかもしれない。併し其處にはなをず、人生の本流がある、本當の人生の尊さが味はれ本當の自分の滿足がある。いくら、もがいても、結局、此の自分に立ち歸らぬと人生の意義がさとられない、一面、罪にけがれ、矛盾に充ちた社會も、若し此の覺悟の基礎が搖がなければ、人生は永久に詩にてみち、夢に飾られて行くにちがゐない。私は此の春も亦社會に巣立たうとして居る若い人々と共に此の輝きの未來の社會を想ふ。

本年卒業する諸姉に贈る言葉

石原純

藝術を愛好し科學に信頼する年わかい姉妹たちよ。あなたがたが新らしい心をもつて世に出られることを私はよろこばしくうれしく思ふものです。あなたがたの純眞な魂はまだ恐らく理想に燃えてゐることでせう。それに對して社會の人たちは彼等が既にもつてゐる制度とか規約とかをもつてあなたがたを教へ縛らうとしてゐます。現實の社會が美くしい完たいものであるなら、私もそれを是認したかも知れません。けれどもいまの社會の裏面には餘りに卑しく醜いものが充滿してゐるのです。さうして社會の制度なるものは、徒らにそれを蔽ひ隱さうとする器に過ぎないのです。謂はゆる道徳と稱するものさへこの制度に依存する限り、それはやはり同じ意味をしかもち得ないでありませう。あなたがたはこれからいろ〳〵な社會的事實に出遇つて實際の經驗をつまれることでせう。そのとき本當にその卑しむべきものを取り除かうとして之を蔽ひかくす器に手を觸れることを恐れてはなりません。私は只あなたがたに眞摯な人間としての行爲の何である

べきかを判斷する十分の準備を望みます。裁縫や家政も女性として或る程度までは必要であるかも知れませんが、遙かにより多く人間として生きることを知らないでは、それらに果して何の意味があるでせう。新らしく生れるものは絶えず新らしい眞理を追究する義務をもつてゐるのです。それは神が人間に限りある生命を與へ絶えず新らしく生れ代るべく運命づけたところの深い意味の存する所以であると私は信じます。

私はこゝに新らしいと云ふ言葉のもとに決して流行的思想を云はうとするのではありません。流行と云ふことは人間の或る心理的機微によつて結果するものであつて、女性が特にその服裝々飾等に關して之に甚だ敏感なることを私は必ずしも咎めやうとするものではありません。けれども之に反し思想に關しては私たちはいつももつと本質的に深く考察しなければならないと私は思ひます。これがために十分の根本的な教養を必要とするでせう。あなたがたの學校教育は恐らくは餘りに形式的に終始したのでした。或は讀みたい書物をさへ繙くことを抑止されたかも知れません。今は併し社會に於ける一人の女性としてあなたがたはその自由をもつのです。只自由のある處には十分注意ぶかい價値選擇が必要です。私はあなたがたのために之に關してその謬りの最も少ないことを痛切に祈るものです。

愛に生きることが人間として大切であるのは云ふまでもありません。併し現時の事情は特に女性に對して之を最も希はしいことにするでありませう。なぜなら、女性に於てはまだ男性に於ける程他に身命を打ちこむべき仕事をもつことが少いからです。私はせめて女性によつて愛がこの世に具現されることを望みます。あなたがたは之に對して固より愼しみ深く行動しなければなりますまい。未だ相愛することなくして若くは相愛の生活に入ることが出來るかどうかを確にしないで、容易に一人の男性と結びつくことは絶對に避けなければなりません。かやうなことは私たちの社會に於ける一つの悲慘なる因襲的習俗です。苟くも自由な意志を惠まれた新らしい女性は敢て之を繰返すことを良心に恐れ恥ぢなければなりません。之に反して若しあなたがたが一人の相愛する若くは相愛し得る男性を見出したならば、彼と生活を共にすることによつて人生を意味あらしめるべく、あらゆる努力を惜まないことが必要です。之等の問題に關しては私はより多く抽象的な言葉を費しますまい。あなたがたはその心の奥にいつも正しい批判を用意すればよいのです。

私があなたがたに餞けたい言葉は尚ほたくさんにあるやうな氣がします。けれども私たちの若い姉妹たちよ。私はあなたがたの將來に於ける心の自由と幸とを、ひたすらに祈ることをこゝに云ふのにとゞめて、その外の一切を暫らく省きませう。

美しき心を保て

吉田絃二郎

單純から複雜へ、無自覺から自覺へ、他力から自力へ。初めて世の中へ出る若い人々は必ずこのやうな經驗を意識するにちがひない。

學校生活はたとへそれが不完全なものであるにせよ、少くとも社會よりは理想的である。そこでは階級的差別や、貧富の觀念といふことは餘り問題にされてゐない。時としては貧しいといふことが名譽とされることもある。清貧だの、殉敎だの、節操だのといふ言葉に胸を躍かすのもその時代である。學園内に於ける若い人たちの生活は、この地上に於ける最もユウトピヤに近いものと言ふことができよう。

一歩世の中に出れば恐らく若い人々のユウトピヤを破壞されるであらう。世の中にはかれ等が考へてゐるほど清貧を樂しむ人はあまり多くゐない。殉敎者もすけない。隣りから隣りへ俗人が多い。我利的な人が多い。無節操な人が多い。不親切な人が多い。學園の生活は詩である。世俗の生活は散文である。

しかしながら學園の生活は要するに人生の一準備的階段に過ぎない。所詮人は死ぬ日まで世俗の人間として生きなければならぬ。若い日の快い詩のみに醉つてはゐられぬ。苦澁な散文の中に生きて行かなければならぬ。

人生とはむしろ苦澁凝滯の散文の世をいふのである。そこは覺めた人々の生活である。一本立ちの人々の眞劍な生活場である。苦しいことも悲しいことも自分一人で決めてかゝらなければならぬ生活場である。他人に賴つてはをられぬ世界である。眞實に人間といふもの。人生といふものがわかつて來るのはその散文的世界である。

或る西洋の作家は、たとへ七つの星の世界の數さは計ることが出來ても、たゞ一つ永遠に量り知ることのできないものがある。即ち人間そのものであると言つてゐる。

まことに人間といふもの、人間といふものゝ心ほど深く、不可思議なものはないであらう。すべての藝術も、宗教も、哲學も、人間の不可測な不可思議を巡つて作り出されてゐる。

世の中とは畢竟この不可測な不可思議を持つた人間の心と心の結合の上に、もつれの上に編み上げられた現實でなければならぬ。その不可思議な網のもつれを解きほどすことのできるのは、世の中の複雜性そのものゝ中へ飛び込んでからでなければならぬ。

近松の傑作が生まれるのも、この涸濁した複雜な俗世間の中に作者の魂が浸され切つた後でなければならぬ。

世の中は複雜である。複雜であるがゆえにはその中には汚れたものもある。醜いものもある。厭はしいもの、淺猿しいものもある。同時に世の中でなければ見出せない清いもの、尊いもの、美しいものもある。

世の中へはいつて行く時、人ははじめて美のいかに美しく人の心のいかに尊いものであるかを實感する。同時にかれ自身醜いもの、淺猿しきものにも馴れ親しみ易い機會を多く持たなければならぬ。

世の中へ飛び込むといふことは大きなしかし愉快な冒險でなければならぬ。複雜極りなき世の中へ飛び込んで清淨なもの、尊いものを體驗するか、或ひは醜いもの、淺猿しきものに馴れてしまうかといふことは、かれ等自身の心の置き方一つであり、そこから人生を善く生きるか、惡しく生きるかの二つの道が岐れる。

いつまでも子供の心を失はないものは天國に入るといふのは、世の中へ飛び込んで醜いもの、淺猿しいもの、利己的なもの、腐敗的なもの、渦巻の中に置かれながら子供の心を失はないものゝみが善き生き方を持ち得るといふことでなければならぬ。

家屋敷を持つ事、富を持つことが決して善い生き方ではない。二十代の人々にはこんなことは問題にならないかも知れぬ。併し三十代四十代の人々はそれが大事な問題になつて來る彼等は既に世の中の醜い形に襲はれつゝあるからである。

人を疑つてはならぬ。人を輕蔑してはならぬ。若い人々にとつてはこれは問題でないかも知れぬ。しかし幾度か僞られ裏切られた苦しい經驗を持つた世の中の人々は人を疑ふやうになる。輕蔑するやうになる。何の俗な墮落である。

子供は人を疑はない。人を輕蔑しない。子供の心を失つてはならぬ。

若い人々の眼はいつも美しい。その眼の美しさを失つてはならぬ。心が曇る時、私たちの眼も曇る。

十六歳にして人の妻となり、一ケ月ならず自ら望んでこれを破婚とした本篇のヒロイヌ（彼女）は爾來都に流浪して子守女、女中、廓町の仲居、監獄の女看守、小學教師などの境涯を經た後、日本女子大學の設立せらるるに及び第一回生として直ちに入學、國文學を專攻し、卒業後は、國婦人會宣傳、婦人辯士、女學寄宿舍の舍監、女學校教師、雜誌及び新聞の婦人記者などをも務め、而して、今は靜かなる宗教的信仰を抱きながら洛東高台寺の月眞院に有髪の尼僧の如き生活を送りつつある。本篇は一切の虚飾なきその間の生活記錄であると共に、數奇な運命の弄ぶ所となつた一女性の魂の秘史である——記者——

人間巡禮

深澤邦子

一　破婚の日まで（生ひ立ち）

彼女は今から四十年餘り昔、西播州の片田舍に生れた。

彼女は父の顔を覺えない。彼女が生れてから丁度一ケ月ほど經つた時、父は三十六歳を一期として死んだ。死ぬる前、まだ紅い産衣に包まれて小さな蒲團の上に寢かされてゐる彼女を、枕の上から見やりながら『邦子か』と一言、苦しい呼吸の下から洩らしたと言ふことと、成長の後彼女は母から聞かされたが、今もそれを思ひ出しては時々涙ぐむ事がある。

彼女の母は二十七歳で後家になつた。母の手には彼女の外に、當時五歳の春を迎へたばかりの男の兒が殘された。しかし彼女には兄に當る此の男の兒もその後半年と經たぬうちに

腦膜炎で死んだので、彼女一人がただ、母の希望とも、慰籍とも、いな、全生命とも慈しまれながら、その温かい懷の中で生ひ育つた。

良人の死に續く愛兒の死は、確かに當時の彼女の母を途方に暮れさせたに違ひなかつたが、しかし非常に勝氣な、非常に聰明な、そして非常に算數の道に明るい婦人であつた丈けに、家の職業が紺屋であつたゝめ、これ迄に見覺へて知つてゐた玉繭精製の事を思付いた。これは非常に時機に投じ、もともと裕かであつた一家は俄かに產を殖して、「金持後家」の噂を近郷近村にまで立てられるやうになつた。

彼女は當時の一般的慣習であつたやうに、六歲にして小學校に上つた。田舍の小女は、山登り、水泳、雜魚とり、蕨狩り、茸狩り、栗拾ひ、男の兒と共通の遊びもするが、摘草お手玉、毛毬など女の子に特有な遊びもする。――彼女の毎日もさうした遊びの中に送り、迎へせられた。

彼女が八歲になつた時、父が出來た。

『お前にもお父さんが出來るんだよ。』と、ある夜母から言ひきかせられた時、學校に通ふやうになつて以來、友達からお父さんのない子と言はれる度に淡い侮辱を感じてゐた彼女は、どんなに喜んだ事であらう。披露の宵には親戚や近所の人が來て、賑かだつたのも彼女を嬉しがらせた。しかし翌朝母から、

『このおぢさんがお前のお父さんだよ。』

と言はれた時には、彼女は思はず、『いやだ、厭だ。』と言つて泣き叫んだ。幼い子供心にも、生さぬ人を父と呼ぶことの不自然さが直覺されたのであらう。彼女はこの新來の繼父を一度も『お父さん』とは呼ばず、いつも『おぢさん』と呼んでゐた。この人は彼女の母の、妹婿の兄で、老莊の學を收めた仙骨を帶びた人であつた。金錢は使用しなければ瓦礫に等しいと口癖のやうに言ひ、能書が自慢で、神社に納める額や札はみなこの人が書いた。

母は若後家で、いろ／＼と人の口の端にかゝるのがうるささに、親戚のすゝめで再婚はしたものゝ、蓄財の力に秀でた勝氣な氣象ゆえ、此の仙人のやうな良人では滿足出來なかつた。再婚の翌年、一人の女の子――彼女には異父妹――が生れると幾程もなく離別した。

月日のめぐるのは早く、彼女が小學校を終る日が來た。彼女は入學から卒業まで、いつも首席で通した。

その頃の彼女の一番大きな念願はもつと學問したいと言ふことであつた。彼女は、いつであつたか小學校の校長さんが

縣廳へ正教員の試驗を受けに行つた時の話をして

『百人程の受驗者の中に、たツた一人だけ女がゐた。男の教師は數が多いから月給も安いが、女の教師といふものは數が少いから、澤山月給が貰へるだらう。』

と、感嘆と羨望とを交へたやうな語氣で言つてゐたのを洩れきいてゐたので、どうかして女の教師になりたいと思つた。

けれども學問をしやうにも、書籍が手に入らなかつた。彼女は止むなく父の遺しておいた淨瑠璃本の、あの讀みにくい文字を拾ふて讀むことを覺えた。

十四の春からお針屋へ裁縫の稽古に通ひ、家では母から機を織ることを教はつた。その前後に、彼女の家の近所へ移り住んで開業した醫者があつた。その妻と言ふのは神戸の料理屋の娘であつたと言ふ事だつたが、なか〳〵美しい淑やかな婦人で、碁の心得もあり、小說を讀む事も好きであつた。彼女の眼前にこの婦人の出現したことが、少なくともその後の彼女の發展に、一つの重要な楔となつたと言へる。――それは稿のすゝむに隨ひ、自づと解つて來るであらう。

彼女はこの婦人から、主として德川時代の小說講談などを借りて讀んだ。中でも『伊達家實錄』は幾十度かよみ返して、政岡の忠勤振りに、ひどく感動せられた。

十五になると、彼女も髮を桃割に結ふやうになつた。華美好みの母は、わざ〳〵姫路市から取寄せた目のさめるやうな花簪　花櫛を鹿の子の間に差しこんで呉れたが、その短冊總がきら〳〵と眩ゆく動くのが殊に彼女には嬉しかつた。帶は巾廣い紅地繻子をお太鼓に結び、足にはぽこ〳〵と鳴る木底下駄を履いた。彼女の異父妹――市子と云ふ名であつた。――に此れに相應するやうな服裝をさせ、母はよく二人を連れて寺參りや、祭禮に出あるき、『まあ、可愛い娘さんだ。』とか、『立派な衣裳だ』とか、人から言はれやうものなら、それが何よりの得意であつた。

その頃からぽつ〳〵彼女には養子の話があつた。寺參りや、芝居見から歸つて帶を解くと、いつの間に入れられてゐたのか、手紙がかすかな音を立てて疊の上に落ちることなどもあつた。恐怖と幸福と羞恥との融け混つたやうな、窒息でもして了ひはすまいかと思はれるやうな悩ましさで彼女の胸は一ぱいになつた。

さうして彼女に戀文をつけてゐた青年の一人が、家柄がいいと言ふので彼女の養子に選ばれた。十六の年の舊三月、彼岸櫻の散る頃に、吉日を選んで式が擧げられた。田舍の習慣

で、花聟が入來したのは夜の十時であつた。酒宴は東の空の白むまで續いた。その翌日は村の若衆、翌々日は女衆を招待して、ここに式はめでたく終つた。

結婚をするに就いて、彼女には別に深い考へはなかつた。只、女は相當の年齡になれば配偶者を求め、彼女のやうな境遇にある者は家督を繼いで、母を安心させなければならないのだ位の考へしかなかつた。

戀だの愛だのと言ふ氣持はなかつたにしても、結婚の當座はさすがに夢のやうな嬉しさを覺えた。恥かしい氣持の底から擽ぐるやうに歡びが湧いて來るのを抑へることが出來なかつた。當座は親戚廻りで、今日は港の町、明日は溫泉場と言ふ風に(丁度さう云ふ道順になるやうに親戚があつた)經めぐる事によつて、蜜月は流るるが如くに過ぎて行つた。

彼女は暫くの間、幸福以外に何の不滿も覺えなかつた。ある夕べ、母讓りの圓形の古風な鏡に、良人と二人湯上りの顏を映し、自分が手を下して、良人の脣に紅をさしてやつて、二人憚る所のない笑聲を立ててゐる所を、母に見られて、穴にも入りたい程恥しく思つた事が、今も明かな記憶として殘つてゐる。

一年過ぎた。その頃から譬へやうのない空白な、不滿な感じが、抑へても〳〵胸の底から滲み出して來た。非常に期待をかけた夫婦生活と言ふものの存外な呆氣なさ。それも原因になつたらう。人としての良人の頼りなさ。それも原因になつたらう。血のつながらない闖入者が彼女の愛を母から奪つて行つたが故に、俄かに從前よりも一層濃密になつた母と異父妹との間。それも原因になつたらう。――兎に角、彼女は良人と離別して都會へ――神戸へ、出た。この間の氣持は、今、年月を隔ててもなほ、彼女は語りたくもないし、第一語れもしない。以上は彼女の生涯の序曲である。今になつて振り返ると、よくもあの下を潜りぬけて來られたものだと思ふやうな數奇を極めた運命は、これから開けて來るのである。さま〴〵な世間、さまざまな人間の哀樂の前に、一個の巡禮として流浪漂泊するの境涯は、この時から初まつたのである。

二　流浪のかどで(子守としての初奉公)

神戸!

そこで彼女一家の知り合ひの人が、大きな酒類問屋を開いてゐるのを唯一のたよりとして、彼女が、髮は高島田、帶は立矢の子守結び、着物は白丈長のうぶ〳〵しい姿を、その儘

さきに現はしたのは十七の秋であつた。

店は主人夫婦に養女が一人、店員は十名ばかり、それに上女中と下女中と合せて三四名に女中取締の老女が一人と言ふ大家族であつた。彼女はその養女の子守として雇はれたのであつた。

彼女が既に一度結婚したことを知る者は絶えてない。一體が小柄の生れつきで年以下に見られたものだから『邦ちやん、邦ちやん』と言つて、その初心らしい容子をみんなから可愛がられた。彼女はたゞ、もし襁褓でも洗はせられるやうだつたらいやだと思つてゐたが、それは下女中の分擔だつたので、ほつとした。彼女の仕事は、子供をあやしたり、背負ふて外に出たりする以外には、夜業として雜巾指しを手傳ふ位なものであつた。

田舍に生れた彼女には、一日家の中に閉ぢこもつてゐることは一つの苦痛であつた。彼女は日光と土の色とを見なければ、身體が痩せ細るやうな氣がした。で、子供を負つては外へ遊びに出ることは、子守としての生活に於ける彼女の最上の喜びであつた。

彼女は小學校の地理や歴史で學んだ名所古蹟の見物に餘念がなかつた。又、學問を人生の最もめでたき物と思つてゐたので、その淵叢とも言ふべき學校の所在地を見る度に、胸の躍るのを覺えた。何々私塾、何々學校教授などと記された看板も丹念に見あるいて、どこの町にも何を教へてゐる先生がゐると云ふことまで、袋の底のものを探るやうに、一々諳ちなく言ふことが出來た。

と同時に、附近の町々には料理屋や茶屋が多かつたので、そこにゐる仲居の生活や、そこに出入する藝者の華かな衣裝に魅惑せられる事があつたのも、娘心として當然であつた。

が、學問が彼女の心を誘引する力は、更に遙かに强かつた。ある宿下りの日、彼女は日本髪を俄かに束髪にあらためて、女學生風を裝ふて、圖々しくも或る小學校の參觀に出掛けた事があつた。丁度授業中で、教員室には校長一人が居殘つてゐて、その人が應待してくれた。大きな世界地圖の掛つてゐる應接室へ迎へられ、青いクロースの掛つたテーブル、赤い椅子などを見た時には、かねて憧れてゐた世界へ第一歩を踏出す端緒を捉へ得たやうな誇りと歡びとを覺えた。彼女は校長の前にもつと學問をしたい希望のあることを述べた。そして、

『先生のお家で、私を子守か女中かに雇つて、暇に學問の手ほどきを授けて頂けますまいか。』

と云ふ言葉が咽喉まで出かかつて來たのだが、さすがにそこまでは言ひ出しかねた。それと共に、折角チラとのぞいた憧憬の世界の扉は、永久に彼女の眼前に鎖されて了つたやうな氣がした。

その後幾何もなく、又例によつて子供を負ひながら、町々をさまよひ歩いてゐると、大きな女學校の前に通りかかつた。彼女は吸ひ寄せられたやうに門まで行つて、その柱に身を寄せながら中を眺めた。そこには、彼女が求めながら未だ得ないでゐる寶を自由に與へられてゐる幸福な少女達が、紅や紫の袴を翻しながら嘻々と遊び戯れてゐた。彼女は羨望に堪へなかつた。

それ以來、雨さへ降らなければ、彼女の姿は毎日のやうにその門前に現はれた。彼女はその女學校が隣りにある大きな寺院の經營であることを聞き知つた。ある時彼女は寺男が寺門の前を掃いてゐるのを見かけた。人の好ささうな老人なので、つい彼女も一種の馴々しさを覺えて口をきいた。

『お爺さん。このお寺では女中はいらないの。』

寺男の老人は箒の手をやめて、白い長い眉の下から、瞳を凝らしながら、不審さうに彼女を眺め廻した後、答へた。

『お前さんが奉公したいのかい。』

『ええ。』

『一人入用じやから、ほんとにお前さんが務めるのなら話してやらうか。』

『ええ、どうぞ。』

この機を取遁してはならないと思つて、彼女は熱心に頼んだ。交渉は極めて簡單に纏まつた。彼女は酒類問屋から暇を取つた。

三　女を巡る親子の出家（第一回の下女奉公）

彼女が新らしく住ひこんだ寺も、さきの酒問屋に劣らぬ大家族で、住職の外に、老僧が一人と役僧が五人、女中取締の老女（彼女は當時老女だと思つてゐたが、今から考へて見ると四十前後位だつたのだと思ふ。仇ツぽい所のある美しい女であつた）外に上女中二人（この一人が缺けてゐたゝめ、彼女が雇ひこまれたのである）下女中一人、都合十一人であつた。

いよ〱住ひこんで見ると、彼女の相棒との上女中は、偶然にも彼女と同じ城下の舊家老の娘で、彼女は前々から顔を見知つてゐた。しかし先方が氣付かないのを幸ひ、自分の身の上話をすることはなるべく避けて、知らぬ顔をしてゐた。

夜になると、その仇な女中取締の周旋に、三人の女中が針箱を出して裁縫をするのであつた。そこへ役僧等が集つて來て、托鉢に行つた話や、法要の布施を貰つての歸途、肉屋の前で仲居に引張りこまれて困つたなどと云ふ話を面白さうにした。

暫くゐる中に人と人との關係もほゞ分つた。影のやうに靜かにしてゐる老僧は、現在の住職の父であつた。住職は三十五六の體格の偉大な、眉目のよく調つた仲々の美男であつたが、まだ無妻なので、遊廓の界隈では大もてであると云ふ事だつた。

女中取締の仇な女は、老僧がどこからか連れて來た寵妾なのであつたが、現住職が何うしてかそれに横戀慕をして、日頃からそれを　めぬいてゐるのであつた。

彼女は、この女中取締から、無作法者だと言つてよく叱られた。ある時は、飯櫃の上に香の物の皿をのせて老僧へ食事を運んだと言つて。又ある時は、湯殿へその女の着替えを運んで「お腰」と言はずに「腰卷」と言つたなどと云つて。

又、住職が怒り狂つて、その仇な女中取締を室から室へ追ひ廻してゐる所を見かけた事もあつた。後から聞くと、住職に出された御飯の熱が足らなかつたが、それは、あの仇な女の指圖によるに違ひないと言つて、怒つたのだと云ふ事であつた。兎に角、住職には、その女が老僧の食事の給事に許り出るのが癪で堪らないのらしかつた。

月のいい初夏の夜のことであつた。住職は庫裡と本堂との前庭にある木立の影に床几を持ち出して、六甲からおろして來る涼しい夜風に吹かれてゐた。彼女はそこへ氷水を盆にのせて運んだ。二人ばかりの好い機會であつたから彼女は話のついでに、自分も物理化學や、世界の歷史地理も概略位は心得てゐると言つた。こんな素行の修まらない坊さんに、何を話したつて駄目だと言ふ氣もしたが、併し、何にせよ女學校の校主なのだからもしや何かの機から、多少でも學問の出來る手がかりが或はこの人によつて得られはすまいかと言ふ果敢ない期待が、さう云ふ話をさせたのであつた。

『女中風情が生意氣な……。』

とでも言ひたげに、彼女の話を聞くと、住職は鼻先きに嘲りの色を浮べた。

が、それ程學問に憧れてゐるのなら、明日學校の中を見せてやらうと言ふことになつた。

翌日、午飯の跡片付が濟むと、役僧の一人が彼女を學校につれて行つて、既に放課後で、生徒も教師もゐない、大きな

空洞のやうにガランとした教場から教場へと案内してくれた。どの教場でも、黒板のみが淀んだやうな空氣の中に白々と光り、下をすかすやうにして見ると、机と腰掛けの脚のみが徒らに淋しい賑やかさを見せてゐる丈けで、他に何の奇もない。

――と思つてゐると、役僧はいきなり彼女の背後から飛び掛つて、腰掛の上に押し倒さうと試みたが、田舍育ちの彼女の力は、それを突き飛ばして逃げるに不足はなかつた。この役僧はそれまでよく彼女に、法要から歸ると五厘や一錢の銅貨の取交つた端した金を別けてくれたものだが、それ以後は何も呉れなくなつた。

浮世を超絶して清淨であるべき寺院に、意外にも咽せ返る程に濃厚な人の香が渦卷いてゐることは、彼女を驚かすに充分であつた。かうした墮落坊主の巣窟は遂に身を托する適所でないと悟つた彼女は、間もなくここをも暇を取つた。

四　宵闇に咲く花（第二回の下女奉公）

彼女はさしあたつて行くべき所もなかつた。が、この時彼女の胸に甦つて、その滅入りこまうとする心を勇氣づけてくれた一つの記憶があつた。

と言ふのは、初めて田舍から出て來て、神戸驛に身をおろした彼女は、暫く町を迷つた後、ある小酒屋の前で、

『花隈といふのは、どう行くのです。』

と尋ねた。すると、店先で樽を洗つてゐた五十ぐらゐの小作の男が（この男が主人である事が後にわかつた）親切に教へてくれた後、風呂敷包みを抱へた田舍から丸出しの姿をつくづくと眺めて、

『あんた奉公するんかいな。』と、聞いた。

『はい。』

『奉公するんなら、うちでも女中が要るんやで、何なら、うちへ來てくれんかいな。』と言つた。

その時は、知邊をたよりに出て來たのだから、それに應ずる譯にも行かなかつたが、ここで彼女は、一つあの小酒屋に當つて見やうと思ひ付いた。彼女はそれが「山北屋」と云ふ屋號であつた事まで、はつきりと覺えてゐた。

山北屋では五十位な品のいいお主婦さんが應待して、すぐ雇つてくれる事に話がきまつた。

既に二ケ所を奉公して來た經驗のある彼女は、町の家庭に馴れて來たので、この家で格別まごつく程のことはなかつたが、只一つ十六歳になる安吉と言ふ小倅を『安どん』と呼ば

なければならないことにのみは當惑した。
『安どん、安どん。』
と、幾度心で稽古してみても、口にはその言葉がどうしても出なかつた。で、彼女を呼ばなければならない時には、いつも『安さん』と言つて、その『さん』だけを口の中で小聲に消とす云ふ猾手段を用ゐた。
夜はこの安どんと一つ蚊帳の中に寢かされたが、彼女は、子供と一緒に寢てゐると云ふ感じ以上のものは抱かなかつた。安どんの方でも亦決して猥りがましい事はしなかつた。
彼女は毎朝、安どんと一緒に起き、彼は店の雨戸を繰つて、ハタキを掛けて土間を掃くし、彼女は竈の下に火を焚きつけ、朝食の粥を煮、香の物を切る。主人夫婦は、臺所の疊の上に高い箱膳を前にして坐り、それよりは一段低い、巾一尺程の揚板に彼女と安どんとは土足のまゝ腰かけて食事を取るのであつた。
朝食が濟むと、彼女は奥の間の掃除にかかつたが、その時彼女の心を唆つて、惡いこととは重々知りながら、遂に手を出すのを抑える事の出來ない誘惑物があつた。それは茶簞笥の袋戸棚に、客用にとて用意されてゐるうまさうな蒸し菓子であつた。彼女はよくそれをつまんだ。お主婦さんは氣が付いてゐたのには違ひないが、口に出して叱つた事は一度もなかつた。
その盗み食ひは叱られなかつたが、併し彼女が御飯を焚く際、お焦げでもこさへやうものなら、お主婦さんは容赦なく叱つた。關西地方の商家は大抵、朝は粥を食つて、晝と晩とは普通の御飯をたべる事になつてゐたが、それを焚くのに、馴れない彼女はよくお焦げをこさへては叱られた。
しかし間もなく彼女は、お焦げを作つても、そツとそれを處分する名案を發見した。
井戸端に沿うた切戸をあけると、諏訪山方面にのぼつて行く阪路があつて、そこに六疊と三疊の小さな家が一軒建つてゐた。住んでゐるのはかなりに年とつた老婦人と二十二三餘になる斜視の娘と母子二人きりであつた。老婦人の方は福原遊廓に所謂「ヤリテ」婆を勤めてゐるので、滅多に家へは歸つて來ず、娘は朝から晩まで根氣よく藝者や娼妓の着物を縫ふことを賃仕事に請負つて、餘念もなく針を働かしてゐた。母は廓で、多くは客の取つて呉れるものを一緒に喰べるので、家では娘だけが、小さな土鍋で一人分だけの御飯を焚いてゐた。どう云ふ緒口からであつたか、いま定かには思ひ出せないが、彼女は、この娘と親しくなつて焦飯の出來た時には、家の人には内緒でこれを與へた。

『澤山焚く御飯だから、ほんとにおいしいわ。土鍋でぽつちり焚く御飯てそりや拙いのよ。』

と、喜んでくれるので、彼女は焦飯の出來ない時にも、聢しては持つて行つてやるやうになつた。この娘の名はお蝶さんと言つた。

『邦ちやん。あんたはもう男を知つてるの？』

かなり懇意になつてから、お蝶さんは彼女にそんな事をきき出した。

『男を知るつて？』

『あら、それぢや、あなたはまだ生娘なんだわね。私？――私はもう、さうぢやないのよ。十六の時に母の言ひつけで、淫蕩い日見えに行つた事があるのよ。最初の晩、三十圓の枕金を貰つたけれどね、一晩きりでお排箱になつたわ。』

お蝶さんは些少の羞恥心も持たずに、臆面もなくそんな事を言ひ出したが、しかし年若い娘でありながら性慾的な匂からは超絶し切つてゐるやうな所があるので話しにも醜悪な感じは少しも伴はなかつた。」彼女は、この話で初めて「枕金」などと云ふ言葉を覺えた。

又、北の切戸をあけると一棟三軒になつてゐる二階建の家借があつて、その二階に十七位な娘で燃えるやうに眞赤な帯をいつもお太鼓に結んでゐる娘がゐた。在郷當時に散々紅いものを身に付けた加減か、紅くさへあれば田舎臭いと思ひ、淡泊して居りさへすれば都會風で品がよいと思ふやうになつてゐた彼女は、紅い帯のために此の娘を蔑んでゐた。その父は海岸通りの商館に通つてゐるとか聞いたけれど、彼女は直接には、その一家とも、娘とも、何等の交渉をもつ機會がなかつた。

話はあちら此方に飛ぶが、彼女の奉公してゐた山北屋のお主婦さんは、なかなかしつかりした女で、新調の單衣を初めて洗濯する時は汗さへ落せばいゝのだから、盥に水を一ぱい入れて大方は振落しにしなければならぬと云ふやうな細かい事から、蒲團の仕立方などまで敎へて呉れた。彼女は在郷の頃裁縫の稽古はしたのであるけれど、蒲團を仕立てたのは此の時が初めてであつた。彼女が新調の着物や蒲團を、日にあてるため借家の前の空地の干場にかけると、商館へつとめる家の妻君達が、

『うちでもあんなに裁縫の出來る女中がほしい。』

と噂しあつてゐた。そんな時には、主婦さんは自分の家で他から羨まれるやうな女中をおいてゐる事を一つの誇りとしてゐた。

そのうちに于蘭盆會が來て、彼女も一日の休みを惠まれ

た。斜視のお蝶さんが、一緒に布引の瀧を見物に行かうと誘つた。彼女も喜んでそれに應じた。彼女は田舍から持つて來た紺絣の帷子に、縞繻子の帯を結んで家を出た。

お蝶さんと彼女と二人は、近くにあつた帳場まで行つて、そこから車に乘つた。彼女が神戸へ出てから車に乘るのは此れが初めてであつた。勢よく走る車の上から、兩側の町並を見卸した時には何となく誇らしい氣分に胸が躍つた。瀧前の店で休んで立上がる時お蝶さんが茶代として二十錢銀貨を一つおいた。彼女は、都會の人と云ふ者は何うしてこんな無駄な贅澤をするのであらうかと不審であつた。とも角も自分の割前だけは出さねばならぬと思つて、十錢銀貨を金入から取出すと、

『あら、いいのよ、いいのよ。』

と、お蝶さんは手を振つて受取らなかつた。

彼女は、なる程こんな時にはこんな風にするものかと、一つの大切な社交心得を敎はつたやうな氣がした。

しかし此の店も、彼女が憧れる世界の足場には一向なりさうでなく、小僧の安どんと時々喧嘩をする以外には變つた事もないので、盆が過ぎるとすぐ暇を取つた。その後今日まで二十餘年、人の世の幾艱難に揉まれて來た彼女ではあつたが、あの山北屋のしつかりしたお主婦と、それから宵闇に咲いた月見草の花の如く、陋巷に仄かながらも生淨な生を營みつゝあるお蝶さんとの面影は、折にふれて屢次彼女の胸に甦つた。

五　愛にせめぐ姉妹（第三回の下女奉公）

山北屋を暇取ると、彼女は初めて、口入屋の暖簾をくゞつた。その頃の口入屋は今のやうに惡辣ではなかつたに違ひないが、それでも口入屋をくゞると云ふことは彼女に、何となく自らを憐れむやうな、みじめな、なさけない氣を抱かせた。

そして今度は元町通りの小じんまりとした、裕福さうな陶器商の下女となつた。主人公は年五十位、體重は二十貫もあらうと思はれる程でぶ／＼に肥つた婦人で、頭には小さな髷をのせ、その櫛の目からは紅く光る禿地がすいて見えてゐたが、しかし何處かに粋な所があつた。お智江ちやんと云ふ八歳ばかりの養女があつて、小學校にも行かず、朝から晩まで三味線の稽古をしては、黄色いやうな聲を振り絞つて歌をうたつてゐた。女主人の姪をつれて來たので、ゆく／＼は藝者に出すのだ云とふ事であつた。が、お智江ちやんは如何にも藝者が辛くて堪らなさうに、始終涙ぐんでゐた。

或る日、丁稚が八百屋から買つて來た五十ばかりの巴旦杏

が茶の間に置いてあつた。山北屋にゐる頃、盗み食ひの味を覺えて、しかもついぞ咎められた事のない彼女は、この時も一つ抓んで喰ふ慾望を押へる事が出來なかつた。數が澤山あるから見付かる氣遣ひはあるまいと安心してゐた。が、女主人はすぐそれを發見した。

『誰や、誰や、巴旦杏を一つ盗んだ者があるにきまつとる。』

と云ふけたゝましい叫聲が起つた。彼女は思はずハツと胸を轟かせた。嫌疑はすぐお智江ちやんに掛つた。女主人はお智江ちやんを前に引き据ゑて、

『お前が盗んだに違ひない、白狀せんとひどいよ。』と言つた。

『あたへ、とれしまへん。とれしまへん。』

と、お智江ちやんは鷹に狙はれた小雀のやうに、おど／＼と慄へて辯解してゐた。

女主人の責め方があまり激しいので、彼女はついお智江ちやんが氣の毒になり、本當の犯人は自分である事を白狀して、幼なき犠牲者の冤罪を救はうかと、よツぽど考へたけれど、又、しかしこの苛酷ないびられ方が自分に向けられては堪らないと思ひ返して、咽喉まで出かかつた言葉を殺して了つたお智江ちやんもたゞ泣き入るばかりで、結局此の犯人は誰であるか解らずにしまつた。

『それにしても何と云ふ細かい、吝つたれなお主婦さんであらう。』

と、彼女は考へずには居られなかつた。田舍にゐれば果物は樹からもぎ取り放題で、五十あらうと、百あらうと一々數へておく者はないから、一つや二つ盗んで喰つたつて知れる氣遣はない。よし知れた所で、それが何であらう。山北屋のお主婦さんは菓子器に十とは入れてない蒸菓子を再三盗み喰ひしても一度も咎めなかつたではないかと思ふと、彼女は自分の惡かつた事は棚にあげて、此の主婦に反感を抱かずには居られなかつた。殊にお智江ちやんに對する嬲り方の殘虐に過ぐるのも敵意の種子となつた。

彼女が眞の犯人である事が遂に發覺しなかつたのは、暇さへあれば拭巾に毛糸で屋號などを縫ひ出してやる手の器用さと　田舍者で如何にも忠實らしく見えるおとなしさとの賜物であつた。

家が無人なのを氣遣つてであらう、この陶器屋の二階はいつも人に借してあつた。彼女が下女として住みこんだ頃には、お豐さんと云ふ圍はれ者らしい、眼のさめる程美しい女が借りてゐた、お豐さんは或る時は髷に結つたり。或る時は束髪に結つたりして、粋な姿を時には諏訪山の常盤あたりへ見せ

た。お豐さんが出て行く度に女主人は、その後姿を見送つて

『あれくらゐな別嬪は、中檢にも外におまへんな。』

と、感歎してゐた。お豐さんはもと中檢で香牡丹と言つた一流の賣れッ子だつたのが、ある會社員に落籍され、もとからの知合ひであつたのをたよりに、此の陶器屋の二階を借りる事になつたのだと言ふ事であつた。旦那と云ふ男は一週間に二三度宛夜をきめて遊びに來た。それ以外の夜だと、お豐さんは旦那の目をしのびながら、昔通りに左褄を取つて、料亭の招聘に應じて行く事も珍しくはなかつた。

彼女は、お豐さんの居間へ、火種子や、お湯を持つて行かねばならなかつたが、炭のつぎ方が拙いと言つてよく笑はれた。ある時彼女が風呂から上つて化粧した顏をつく〲見て、お豐さんは

『邦ちやんは、おつくりさへ上手にしたら、なか〱えゝ顏や』

と言つた。

『でも、この子のやうに足が汚なうては、仕樣がない。』

と、女主人は投げ捨てるやうに言つた。自分の足の汚い事は彼女と雖も承認しない譯には行かなかつた。

彼女は、今迄白粉を塗つた顏を、店の丁稚から眺められて、石灰倉の鼠だと言つて嘲られてゐたのだが、お豐さんの思ひもかけない賞讃の辭には、多少の嬉しさを感じた。

店の女主人の所へも毎夜十時過ぎになると、五十三四位の男が泊りに來て、二人一緒に寢てゐる事は、その寢床を敷いたり、上げたりする、彼女の直ぐ見拔いたところであつた。女主人は寢る前にはきまつて、年に似合ぬ派手な友禪形の長襦袢一つになりながら、茶の間へ出て長煙管で二三服煙草をのんだり、茶を啜つたりした。彼女には、この男が何者だか暫く分らなかつた。

すると或る日のこと、女主人に瓜二つの顏をして、年は二つ三つ上と思はれる女が訪ねて來て、二人で何かひそ〲と話してゐた。女主人は時々泣いたり怒つたりした。

後に彼女は、ある機會を見つけて、丁稚に聞いたものだから、この疑問としてゐた家の樣子がすつかり分つた。先日訪ねて來て、ひそ〲と話してゐた女は、この陶器店の女主人の姉で、こゝから少し離れたある町にある大きな料理屋のお主婦であり、且つ毎夜この家へ寢に來る男の正妻なのであつた。陶器店の女主人はその男の妾なのであつた。言ひ換えれば姉妹が一人は正妻となり一人は妾となつて、一人の男の愛を爭うてゐるのであつた。

もとの話をきくと、この女主人の姉夫婦は、初め伊勢の山

田から神戸へ出て來て、料理屋を開いたが、いい幸福に繁昌したので、主婦さんは自分の妹が出戻りになつて家にゐたから、それを仲居の手傳ひに呼んだところ、主人はその妹にも手を付けて了つた。そして別に圍つて店を持たせたのが、彼女の今奉公してゐる陶器屋なのである。妹の勢力は姉を凌いで、男が夜毎自分の家へ寢させねば承知しなかつた。

所が姉が先日來て話したのは、主人がどうも別にまた女をこしらへて圍つたらしいと云ふ事だつたので、妹の方はそれで怒つてゐるのであつた。さう言へばその時の姉の顏には、妹への日頃の面當とも見える一種憎々しげな快さが、色に現はれてゐたことを、彼女は思つた。

その後暫く經つて、何でも二階の美しいお豐さんの所へ、會社員の旦那が來てゐる夜の事であつた。彼女は表二階の元町通りに面した部屋に寢てゐると、雨戸はしめず障子だけにしてあつた。窓が急に明るくなつた 彼女が覺えず跳ね起きて、障子を開けると、眞向ひの料理屋は一面の火になつて、炎がこちら吹きつけて來た。彼女は驚いて自分の全財産なる風呂敷包みを抱へながら、階子段を斷けおりたが、ふと氣付いて、『火事です。火事です。』

と叫んだ。そして道の隔つてゐるのも恐とせず、女主人の姉の開いてゐる料理亭を目あてに斷け出した。

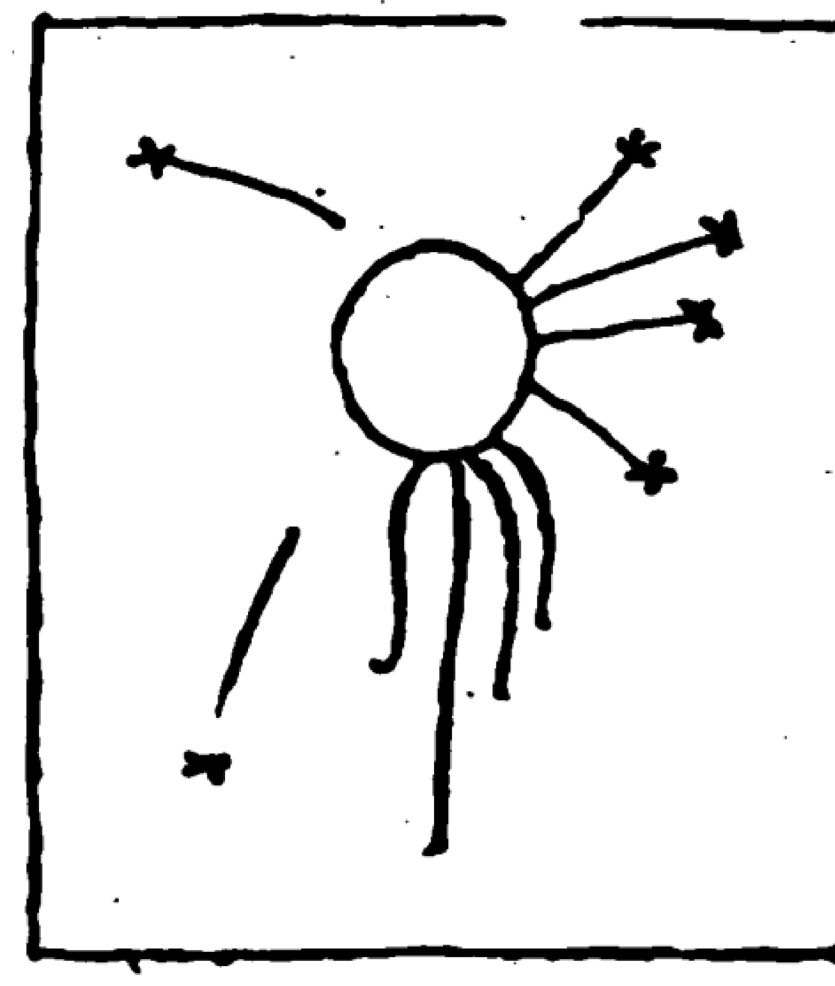
この時は瞬く間に七十余戸が燒けた位で、彼女は生れてから初めて見た大火であつたけれど、料理亭まで逃げた時に恐ろしくも、悲しくもなかつた。たとへ主家は燒けたとしても、自分に大した關係はないのだから惜しいと思ふ理由はなかつた。むしろ肉親の姉を苦しめる妾と言ふので多少いい氣味だと言ふ氣さへ起つた。しかし涙が一滴も出なくては、餘りに義理知らずに思はれやうかと心配して、料理屋の片隅に悲しさを裝ひながら、俯いてゐた。

が、猛火の中に包まれながら、不思議なことには、件の陶器屋は類燒を免れた。二階にゐた美しいお豐さんの旦那は、靴も履かないで、自分一人が慌てゝ逃出したものだから、後で女からその薄情を恨まれたと云ふ話や、火元の料理屋では抱え藝者の出來揃つて來た春着がみんな燒けてしまつたなどと云ふ話をきいた。

この、半夜ばかり、料理屋に避難してゐる間に、彼女ははからずも、料理屋の仲居と云ふ商買が如何に華かで、活氣のついてゐるものであるかを見知る機會を得た。又、仲居をしてゐれば客から貰ふ纏頭（かういふ言葉も今ではチップと變つてゐる）がどんなに多くて好きなものを買ひ、贅澤が出來るかと言ふとは今の女主人から常に云ひ聞かされてゐる事であつた。

彼女はここで愈々、暫く料理屋に身を沈めて仲居となり、その間に學費を作つて、自分が多年の念願なる學問をしやうと決心した。

（つづく）



ルノアルの女

田中喜作

千八百四十一年、中部佛蘭西の山地の古市リモオジユのさゝやかな裁縫師を父として、ルノアルが生れてから、現世紀の十九年十二月三日、南佛のアンユの町、ヴイラ、コレツトの家に、橄欖の銀のレエスの翳影に地中海の紺青を見下しながら、ラテンの大氣のうちに、この世を去つた彼の七十八年の長い生涯は、たゞ精進そのものゝ歴史であつた。彼の一生は他の多くの畫人に見るやうな生活の劇的な場面の一幕をも有つてゐない。彼は自ら常に語つて「不可抗力以外に驚かずに一日を暮すことが出來やうとは思はない」と云ひ、「私は五分間を惜むで勉强した」と云つたほど、彼の生涯は殆ど描畫と觀察との不斷の連續であつた。彼が漸く這ひ廻ることが出來るやうになつた頃、生活の安定を求めて此の靜謐な古雅爲の町を去つた父母と共に、早く已に主都の慌しい生活を見せられたこともある。僅に十二歳の少年として陶器繪付けの職人の群に入つたこともある。然し齡已に二十を數へ初めてグレエルの畫室に師事して以來、半世紀に餘る長い畫人生活の間、彼の生涯には描畫以外の何ものもなかつたのである。彼は病院に手術を待つ數時間にも畫かずにはゐられなかつた。死の前日にも尚一枚の靜物を殘した。十數年の晩年は彼の痼疾が更に加重して彼の手は枯れた梨の木のやうに節くれ立つて、――彼は自ら云つてゐる。「私はもう手も足もなくなつた。大作を畫きたいのに。私はたゞヴエロネエズを、『カナの婚禮』を夢に見るより仕方がない。本當に淋しい」と――自ら畫筆をとることすら出來ないやうになつたが、それでも彼は助手の手を借りて、大石を運ぶやうな思ひで畫筆を運び續けた。

かうして彼が一生涯の間に畫き殘した作品は零細な斷片を除いても四千に餘ると云はれたことが已に死歿の數年前であ

るが、この莫大な作品の數のうちには、無論他の多くの畫人に見るやうに、あらゆる題材の範圍に亘つてゐる。そこには肖像がある。風景がある。果花、人物、社會的生活の題材と、殆んどあらゆる實在の上に、いやしくも彼の視覺を刺戟し直觀を蕩搖せるものには一つとして筆を染めてゐないものはない。而巳ならず、彼が機械のやうに絕え間なき努力と向上――それは彼の先人に對する思慕が十九世紀初頭の畫人に起つて世紀を溯り遂に古希臘に及むだことを見ても解るが、是れと同時に彼の畫人としての技巧と思想とが亦、年と共に止まる時なき更新の一途を辿つてゐる。隨つてこゝに彼のあらゆる主題に亘つて其の意想を縲ぬることは許されないが、今、若し肖像畫家と云ひ、風景畫家と云ふやうな要約の言葉が、彼の上にも必要であり可能でありとすれば、彼を女の畫家と呼ぶことが、いくらか妥當であるやうに思はれる。

彼がたとひ生涯の間、如何ばかり明朗な色と光とに依つて葉叢を描き、果肉を描き、また花を描いたとしても、それ等は要するに彼が多くの麗女を描いて異教の神を奉祀したる祭壇の美しい供物であつたのである。彼の零細な靜物の斷片も尚『水浴の女、(一八八五年)』の如き『ムウラン、ドラ、ガレット』の如き大企畫の作品の前に其の優劣を爭ふことが出來るとしても、彼の全作品の上に特異の色を描いてゐるものは要するに女であつたやうに思はれる。實にルノアルの全藝術の上には女性は厳かに君臨してゐる。曾てリウベンス、ワトオ以來何人もより以上に女を會得したものはなかつた。かくまで奕奕たる境地にそれを知り盡したものはなかつた。

そこには市井の女がある。ブウルジョアの娘がある。貴族の夫人がある。また華美な裳裾に破廉恥を包んで誇りがに大都の步道に男を誘ふガアテエがある。水と樹叢と、ルビイを鏤めた瑯玕の天地に久遠の花と咲いてゐる水浴の女がある。澄明な初夏の瀨氣に生の喜びを唱ふトリオがある。質素な衣裳に日曜を踊り暮す謙讓な心の持主、神話の名を負ふて嬉戲する女、羞恥を知らぬ純朴な妊婦すらある。また彼の祕室の一隅に魅惑の衣を着るために衣裳を脫ぐ無數の女がある。而も皆何れも永遠の微笑と健康とを湛へてゐるが、其の中にあつても、彼が自ら客に語つて「最も單純な主題は永遠のものである」と云ひ「裸の女が浪間から出ると、寢床から出るとによつてヴイナスと呼ばれ＝ニイと呼ばれる。これ以上の何ものをも發見することは出來ない」と云つたやうに、漸次あらゆる社會的な漸滅の環境を振り捨て、晩年ヴイラ、コレットの一室から豐饒の角のやうに生れ出でた無數の裸女こそ最

も美しい女性であると云はなければならない。こゝに女の畫家と云ひ、美女の作と云ふ。然しそれは決してグリウズが呼ばれる意味に於ける美人畫家ではなかつた。シヤプランに冠せらるゝものでは尚更ない。彼はかく無數の女を描いたとしても、世俗的な美人の一人をも其處に見出すことは出來ない。彼は曾て一代の美妓と呼ばれたる喜劇女優サマリイを畫布に立たせたこともある。まだヴオラアルに語つて「女の美しさのうちに私が最も愛するものは其の蠱惑である。實に稀に見るものでただ一人ジヤン、ガルニエ（女優）を知つてゐるばかりだ」と云つたことがある。然し彼自らが云つた此のシヤルムと云ふ言葉すら果して彼の作品の上にどれだけの專横を敢てしてゐるかは疑はしい。此の晩年の諸作の如き何れも豐艶な肢體の所有者で、また其の色華と目の輝きと髮の反映と日光の愛撫とに、あらゆる女の藝術的な美しさを描いてゐるが、而も此の言葉が説明するやうなシヤルムをそこに見出すことは出來ない。

　彼の女の低い額と頬とは脹れ上つて、或ものは毬のやうである。彼の女の鼻は短くして反り返つてゐる。彼の女の口は或る評家が花のやうに咲き亂れてゐると云つた程執拗な線を描いて飜轉してゐる。それは我々をして古代の作品の或るものを想起せしめる。それも無論、官學的な教授のデツサンに見る正確な、然し血の氣のない私生兒の古風蹟型ではない。さながら古希臘の面に見るやうな野性の一味を藏してゐる。彼が如何ばかり彼の女の豐滿な肉體に魅惑の衣を着せたとしても世俗的に美人であると何人が云ふことが出來やう。彼の肥え太つた短い足の女は到底十七世紀の詩人の三十相に符するものではない。東洋的な三十二相の一つをも尚更値するものではない。然しそれあるがために何人が彼の女等を不美とすることが出來るか。

　彼にとつては世俗的な美人相と云ふものは何等の價値をも齎さなかつたので、たゞ何よりも先づ健康と微笑と艶やかな肢肉と若々しい生氣とに至上の美しさを感じたのである。溫い乳房の豐にして緊密な形に美しさを感じたのである。――彼は云つてゐる。「あゝ、この乳房、柔かで重い。其の下の美しい影は黄金のやうだ。何と云ふ貴さだ。若し乳房が無かつたら私は女を描かなかつたかも知れない」と――そして純朴にして簡素なる久遠の女性、さながらなる原始の女に美しさを感じたのである。野性の動物に咲き亂るゝ花に悠久の神意を見たるが如く、こゝにもこの至純なる太古のまゝの女に美しさを見たのである。彼の女は十八世紀の畫人に見るエロ

チズムの追憶に生きる女でもなければ、英吉利肖像畫家の思ひ上つた麗人でもない。またドガの平俗嫌忌に生れた皮肉の女でもなければ、モロオの神秘劇の奇古を衒ふ女でもない。ここにルノアルの女性の特異なる品性が浮び上つてゐる。彼はまた曾て云つた。「女の手、實に美しい。然しそれは事實臺所仕事にも携はつてゐるやうな手だ。羅馬のフアルネエゼにはラフアエルの描いたジユピタアとヴイナスの畫があるが、そのヴイナスは實に頑丈な手を持つてゐる。非常に氣持ちのいゝ手だ。何だか今にも臺所で働きさうな、善良な、丸々太つた氣の輕い女を見るやうだ。曾て名高いスタンダアルはラフアエルの女は平俗な重苦しい女だと云つたが彼は實に思ひ上つた骸骨を夢想してゐたのだ」と。彼自身の此の言葉は最もよく彼の女性觀を要約してゐるものであるが、觀者はまたボオドレエルが『古代の動物のあどけなさ』と云つた言葉をも想起することが出來る。

然し彼の藝術、裸女の作品の高貴がたゞ單に此の特異なる女性觀のみによつて完成せられてゐると考へることは無論大きな誤解である。

彼は已に壯時、印象派興隆の時代に彼等同志の畫人と共に外光の秘密を會得して、彼のパレツトを淨化し視覺を淨化し華麗なる色の祀祭に奉仕してより、彼の不斷の精進は更に其の飽和と諧律とを年と共に高調し、晩年居を南佛にトするに及むで、遂に其の極度に達し色と色との各が互に燃燒し沸騰して紅紫樣々の氣體となつて揮發するやうに思はれるまでになつた。彼はこの無上の色彩を得ると共に彼の生れながらの熱烈な愛慾と默想し把握するいらだたしい心とを以て、あらゆる對象の內面に浸透したのである。而已ならず彼はまた一面に自ら語つて「希臘人こそ何と云ふ愛すべき國民だらう。彼等の生存は彼等が樂園を囘復し愛するために神々が大地に降つたと想像し得た程幸福だつた。そうだ。この大地こそ神々の樂園だつたのだ。私が畫かうと思ふのもそれだ」と云つた程。彼自らさながらに純朴なる古代民であつた。彼の描畫の半面は長い生涯を通じて技巧の精練に對する傷しい苦鬪の歷史であつたが、而も彼の心の如何なる隅にも哀愁と懷疑との影すらも求めることは出來ない。些かの感傷も彼を迷はすことは出來なかつた。

彼は實にかうした心によつて見、かうした技巧によつて彼れ獨自の女を描いたのである。彼の藝術が自らに咲き亂れた

ことも當然であると共に、またこの蠻人の女の顏容に巣くふてゐる一味の野性の美しさも、この純朴なる古代民の心に根を下してゐることが解る筈である。ギユスタアヴ、ゼフロアは云つてゐる。『流れ行く水と、太洋の眩惑と、岩石の建築と、葉叢の波動と、すべてがここに快き樂園となつて、其處に彼の水浴の女達の若々しい肢體が呼吸し咲き亂れるのである。そこに蠻人は執拗な觀察と敬虔な愛とを齎すのである。またそれは何よりも特異なる意想で些の惡業も知らぬ感應的な、また異性を惱まさうとする樣もなく、つつましくも心に目醒めながら、その自覺もなき彼の少女等に應はしいものである。彼の少女等は限なき生氣と愉悦とを以て彼女等の感應に理性を原ぬることもなく其處に生きてゐる。彼女等は子供のやうに、寧ろ若き悦樂なる動物のやうに、また大氣と露とを呼吸せる花のやうに生きてゐる。華冠にも似たる彼等の魅惑の目差し、豐に自由に滿ち滿ちたる彼等の肉體、柔軟な樣子、生き生きした愼謹な動作、それは蠻人の眞實な表現のうちに作りて觀者を驚かせる本能的な生物であり、またそのままに靑春と日光の祀祭である」と。

私はこの一篇の序に彼の歿日について數行を附け加へておく。彼の歿日は彼の遺弟アンドレエによつて十二月二日と記され、またルノアル、その生涯と藝術』の名著の著者として有名なる畫商として常に彼の畫室に出入してゐたヴオラアルによつては十二月十四日と甚だしく誤り傳へられてゐる。それのみならず比較的最近に出版せられたフオスカの著述にも十二月十四日と記され、自分も亦貧しい自著に於て是を二日と誤り傳へたが、事實は二日の深夜、十二月三日午前に入つて歿したものであることを遺族から聞くことが出來た。この委曲については曾て『明星』誌上に書いたことがあるが、かくフオスカも亦ヴオラアルを繼承したことに驚いて、こゝに十二月二日死歿の事實を明にしておく。まだ漸く昨日のやうな此の近代の巨匠の死が已に傳説化せんとするを怨れるに過ぎない。

テマの解けた氣持

大橋房子

尨大な地球の、打ち貫き得やうもない太鼓腹を中に、故國に殘して來た愛するものたちとの交信の久しく打ち絕えた不安と焦慮との極みに在つた時、ゆくりなくもふと耳にした親しい友の死ほど、切實に、私に死そのものゝ臭氣を嗅がせ、狂ほしい昂奮の渦卷の只中に容赦なく私を捲き込んだものが、今までに嘗てあつたとは、思ふことが出來ません。親しい友——といつても、何か特別の事情の促さぬ限り餘所の閾を跨ぐことの極端に嫌ひな私のこと故、長い、豐かな友愛の途上でも、たゞ偶にめぐり遭ふ機會を樂しんだほか、しみじみ面と向つて語り合つたことなどは、ほんたうに數へるほどしかないのですが、それでも、此の二人ほど、友として、人として、私の心に近く、鮮かに、そしていつも氣持のいゝ微笑を湛へながら坐つてゐてくれる存在は、他にない氣が致します「此の世の中でめぐりあつていゝことをしたと思ふのは……」と何かの話の間に芥川さんの仰しやつたそのお言葉が、「パパサマ」と手紙の上でお呼び申してゐた武郞氏と學生時代からの唯一の同性の友である波多野さんとを思ひ起す場合、ほんたうにそのまゝ當て塡るやうに思はれるのです。が、私自身最初から或る懸隔を置いて、それだけ全く拘泥のない心でお交りして來たからでせう、此の死が私に與へた痛烈な悲しみ苦しみは別として、お二人の死の事實も、今までの友情のかたみである此のいゝ氣持と共に、靜かに、拘泥なく受け容れ

ることの出來るのを、悦しく思つて居ります。
秘密を知つてゐる筈と所々に書かれたやうですが、それは全く事實に反した推量といふものであります。煮つめられた魂と魂とのひそやかな燃焼である厳粛な戀愛の事實とその宿命的過程とは、當事者以外のなにものにも洩され得べき性質のものでないといふことを、私は知り過ぎるほど知つてゐます。と同時に、また、不可抗な宿命の暴力に引きずられて、否應なしにあのキヤタストローフへと登り着いたお二人の氣持を、誰よりも近く、誰よりも切實に自分の内部に感じ得るといふことも僞り得ない事實でございます。

あからさまに言へば、私は、其處に多くの死の暗示を與へられてゐたにも拘らず――殊に六月の初旬から切なく身内に渦巻き出した異樣な苦悶と不安とを、なにものかの死に結びつけて怯えぬいて居りましたのに、そのなにものかをあのお二人と裁斷する、術を知らずにゐたのでございます。それが確か七月十八日の午後、日本ではお名前さへはつきりとは知らなかつた藤山雷太氏を、巴里の雜誌の使者となつてその宿にお訪ねした時、ふと倫敦で聞知せられたといふ有島武郎氏自殺の噂を話題に出されて、あゝこれだつたのか？ と思ひあたると同時に、今度は、また、妖氣に充ちた死の幻像が無數の黒いクエスチヨン、マークと共に、私を自失させるばかり、群り出て來るのをどうにもすることが出來ませんでした。が、一緒に死んだのが波多野さんだと知つた次の瞬間私は數學のテマの解けた時のやうな朗らかさに救ひ出されることが出來ました。つまり、長いこと抑壓せられてゐた慾の潛流に逸脱の機會を與へ得るものは彼女以外の何者でもなく、又、所詮は地に吸はるべき噴泉を翔躍の頂上に於いて惜しげなく斷ち切り得る力は彼女にのみ惠まれたものであり、同時に、また、彼女の力に乘り、彼女の凡てを受け容れ得るのも武郎氏以外の何者でもあり得ない――凡ては周到に希圖まれた運命劇の筋を、さうと知らずに踏んで行つたやうなものだとへふ結論を與へられた譯であります。

思ひあたることども

いつたい私は、口の重い性分だからでもありませうが、幼い時から自分の心は他人に解らぬもの、といつた絶望的な隔離感から、自分の私生活とか内心の問題とかに就いては、語るどころか、大抵の場合は必要な説明さへ略して頑惰に默してしまふ傾向があるので、長い學校生活の間にも、自分から積極的に話相手の友を求めるといふことは殆んどありません

でした。が、それにも拘らず――或ひはその性癖の故かもしれませんが、私は妙にいろいろの人の身の上話しの相手にされたり、愚痴のこぼし場にされる――謂はゞ芥溜の役を務めさせられることが多うございます。巴里に來てまで、「秘密の手箱」といふいかにも佛蘭西らしい傳奇的呼稱の覆ひを掛けられては居るもの〻、實際に於いては芥溜と少しも違はない位置によく置かれるのを、自分ながら不思議に思つて居る次第です。

波多野さんの場合にも、毎日顏を合せてゐた青山女學院時代には、よくその芥溜の役を振られたものですが、たゞ默つて受身にその話しを聞いてゐただけのことで、此方からその話しの根を探つたり、自分の方から心を割つて相談しかけたりするといふことは全然ありませんでした。殊に最近の數週は、自分一個の內生活の戰爭のやうな劇しさに追はれて、一屏もちまへの隔離症を凝らせてゐました爲、お目にかゝることが何となく氣づまりで、度々お招きを受けても、わざとその機會を外してゐたのでした。それ故今考へてみても、長い間に注ぎ込まれた樣々の心象が錯然と甦つて來るだけで、自分でしつかり摑んでおいた活畫布を擴げ返すといつた氣持の少しも起つて來ないのを、自分ながら少し物足りなく思ふくらゐです。

ところが、去年の秋の半ば頃、私は突然波多野さんの訪問を受けました。勿論雜誌の方の用件もあつたのですが、顏を合せると同時に彼女は、三年も會はずにゐた人とは信じられぬほど短刀直入に、もちまへの高びしやな調子で、何にも存じない筈の私事に立ち入つたことをあれこれと問ひつめられるのでした。それが、一昔前の投げやりな話しかたとは違つて、何處までも條理を踏んで探求して來られるのと、その訊ね方が如何にも眞摯で情に迫つてゐるのとには、意外な氣持を抱かずには居られなかつたのを、今でもはつきり憶えてゐます。が、細い私の心持などには觸れ得やうもない局外者に死さへもが何の力をも解決を與へ得ない極みに置かれた內心の苦悶を洩すことの空しさを知つてゐた私は、さう眞摯に內迫されても、たゞ靜かに、他人事のやうに、早くもうその問題の渦中に飛び込んで居る彼女の地團駄を宥めるだけの言葉を發してゐたに過ぎませんでした。が、答へながら私は、何時の間にか主客を轉倒した形の波多野さんのあの鮮かな瞳に、涙がギラギラと、而かもそれまでの波多野さんには見られなかつた女らしい熱情を湛へて光つてゐるのを見て、オヤ！ と思はずには居られませんでした。追ひかけるやうな

日足の早いしめやかな雨の日暮方でした。蒼褪めた反射光の下、洋卓の向ふにきれの鮮かな彼女の昂奮した面貌を見守りながら、私は人氣のない家の中の暗闇に、私達を窺ふ恐ろしい何者かが聞耳立てゝゐるのではないかと、譯もなく怯えてゐたことでした。と、彼女は突然、

「何故死なないの？」と迫るやうに言ふのです。が、既に主客を轉倒してゐた話しの續きにそれを聞くと、彼女自身死ぬのがほんたうだ、と言つてゐるのとちつとも變らない響がするのでした。私はも一度、オヤー と思はずには居られませんでした。波多野さんは私が學生時代に或る興味から自殺を研究してゐたことをよく憶えて居られました。そして、死ぬなら首を縊るのが一番手つとり早くていゝ氣持ですつて、などと言ひながら、その華奢な手を御自分の喉にあてゝみたりされるのでした。

かう思ふと今度は、爲事の關係上裏面を窺ひ知る機會の多い誰彼の戀愛事件を持ち出して、他人の私事に全く無頓着な私を吃驚させるやうなことを、あれこれと話し始めました。が、波多野さんはその何れに對しても、同情を持つといふよりは、寧ろ辛辣な批評の小刀で裏面から打ち壞して行くといつた氣持を露骨に示されるのでありました。私はよけい口を噤んで、さうした毒言を何の拘泥もうしろめたさもなく吐き出すことの出來る彼女を、眩しげに見守つてゐるよりほかありませんでした。

多端な彼女の言葉の要點は、戀愛はどのみち永續きのしないものであること、戀愛が妥協的な結婚生活に平され、馴らされるまでには幾度も危險な爭鬪の關を切り拔けねばならぬこと、さうして築き上げられた結婚生活はもう熱も歡喜も感激も失はれた味のないものであること、が若し新しい感激へと走るドン、ジユアンの心をかうした退屈な結婚生活から逃避せしめない力があるとすれば、それは子供の存在にほかならないことなどでありました。そして、それほど忌憚ない評言を吐きながら自分の結婚生活を是認し得る所以は、春房氏が夫といふよりは兄のやうな方であり、從つてその結婚生活が友達同志の生活に近いものであり、お互ひが違つた爲事の世界を持つことによつて絕えず氣持を更新し得るからであるといふことにあるのでした。子供を造らないのは春房氏の意志であるし、自分も子供を生むのは死ぬよりいやだけれど、何といつても三十を越えた女の身には子供のないのが寂しい、だから家庭の子供や童話の世界に交渉の深い今の爲事はある意味に於いてその缺陷を充してくれることになる、そんな氣

持のあるせいか近所の子供が大變なづいてくれるので、日曜には其處らぢゆうの子供を集めて遊ぶのが樂しみだなどといふことも、今までになくしんみりと話されました。

「私だつて女ですもの……」と子供のない寂しさを訴へられた時には

「オヤ、あなたも女だつたのですか！」と問ひ返したい氣がしました。今は定評になつてゐるやうですが、實際波多野さんは學生時代からどんな綺美にけはひしても、女といふ感じのこれんぱかしも出ない不思議な存在だつたのです。體格檢査の席に居合せて、彼女が女でないといふことを確めたなどと私語するクラスメートもあつたくらゐです。が、その噂が噂に止るといふことは、その後聖路加に入院中の彼女を見舞つた時、彼女自身の言葉や春房氏と看護婦との間に交された會話によつて明かにすることが出來ました。さうと知つても私は、春房氏と同棲秋子さんが極端に姙娠を嫌つて居られる事實を、訝るどころか、寧ろ子供など造り得ないのが當然だとさへ思つてゐたのでした。

そんなこんなで、その日は、夕方までに行かなければならないところがあるといふ前言があつたにも拘らず、原稿のことにけりをつけて坐を立たれたのは、秋雨の日の氣味惡いほど濕く暮れはてゝ後のことでした。

「死ぬ前には、きつと、私にだけ知らせるのね？ よくつて？ きつとよ！」

彼女は立ち上る前に、ギラギラ光る眼で、彼女自身を私の心の底に燒きつけずには置かないといつた見据ゑかたをしました。

「あなたもね……」

劇藥のまどはしやかみそりの玩弄から漸く逃れて、死よりも苦しい苦行の生の朗かさに到達しやうとあがきぬいてゐた當時の私は、自分にさし迫つた自殺の企畫のないところから相手にはなほさら有り得べからざる事實を假定して、さう他人事のやうに答へるよりほかありませんでしたが、ほつそりしたその人の姿の街路の暗闇に紛つてしまふと、私はどうすることも出來ぬ物悲しさに怯えて、獨り居の家中の電氣を點けて廻りながら、波多野さんが自殺をするといふこともあり得ないことではなさゝうだ、と自分に呟いて居たのを思ひ起します。

その時既に波多野さんは「これはさうだ」と劬られたほど痛みはてゝゐた私は、間もなく獨り居の書齋を閉めて、海岸の養家に靜養せねばならなくなりました。が、時日を迫られ

た爲事の數日の後繙つてみると、溜つてゐた郵便の中に、思ひ設けぬ武郎氏の美しい筆跡が光つて居ました。

「此の間波多野さんから小さい御書齋の中の御樣子など詳しく伺つて……」

さういへば、波多野さんもあの雨の夜武郎氏の噂をして居られたと、讀みながら私は忘れかけてゐたその晩のことを注意深く思ひ返してみました。ちやうど「泉」の創刊を口實に他へは斷然寄稿しないと明言せられたすぐあと、「婦人公論」に武郎氏の名の見えたのを不審に思つてゐるところでしたので、

「武郎さんの所には何誰が行くの？　あなた？　どうりで……いくら武郎さんが頑固でも、あなたにはかなはないでせうからねえ。」などと何の氣なしに笑つていふと、彼女は勝ち誇つたやうに、それでゐて又とりなすやうに、

「あれはみんな私が筆記するのよ。」と、例の燒きつくやうな眼をするのです。何故か私はその眼に遇ふと妙にたぢろぐ癖があるもので、その時も直ぐそれとなく俯向いてしまひましたが、俯向きながら私は、靜かな午後の書齋のソファの一隅に堅く坐つて、處女のやうな瞼を瞬きながらさはやかにボキボキと口述して居られる武郎氏と、小卓に向つて忙しくペンを運んでゐる、亂れ髮の奧の、伏せた時には殊にも惹き入れるやうな美しい眼の持主とを、鮮かに想像の眼に見て、造り物のやうないゝ場面だなと思つたのを憶えてゐます。

それに續いて波多野さんは、「ブロウが、ブロウが」とわざと冗談めいて武郎氏をブロウと呼び棄てにしながら、

「ブロウがね、よく、何故此の頃は大橋さんと往來なさらないのです？　つて訊くのだから、私、おほかた大橋さんには澤山いゝお友達がお出來になつたから、私のやうなものは……つて言つといたの。さうにちがひないでせう？　ね？　ね？」などゝ突つつくやうに言はれるのです。「澤山お友達がお出來だから……」とは、ずつと前に武郎氏から冗談半分皮肉に投げ掛けられたことのある言葉なので、そんな思ひ出話しから、作家としてはとにかく、危つけのない人間として武郎氏ほど氣持よく交はる友は他にないと、私も正直に武郎氏のひととなりを稱めたりしました。その時の樣子では、波多野さん自身も、武郎氏の作品に隨喜して居られるとは見えず、私と同樣武郎氏の人間味を好いてゐると言つて居られたやうに記憶します。

いつたい波多野さんには、何か特長のある氣に入つた言葉を見付けると、無意味に、執拗く、必要以上に頻々それを口

にせられる癖がありましたが、その癖を飲みこんでゐた私にも、その夜の「ブロウが、ブロウが」はいさゝか耳觸りでした。と同時に、友としてはずつと古い私の全然知らない武郎氏の身邊の近事を、波多野さんがあまり詳しく知つて居られるのに、内心驚かされもしました。尤も、交信の期間が永かつたとはいへ、やむをえぬ用で一度番町のお宅に上つたきり、偶然の機會を除いて全然お目にかゝらうとしなかつた私のこと故、筆の先でこそずゐぶん思ひきつたいたづらも爲合つたものゝ、武郎氏の私生活には何らの交渉も持つてゐなかつたのでした。

が、「ブロウ」の耳觸りもいつとなしに忘れてゐた數日の後前記のやうなお手紙を常の武郎氏からいたゞいた時には、雜誌の顧客である文士との個人的接觸を極端に嫌つて居る波多野さんが、有島氏には必要以上に接近して居られること、と同時に、武郎氏も亦何らかの意味に於いて秋子さんの快いインフルエンスのもとに居られる事實を、ほゝゑましく感知せずには居られませんでした。そして、波多野さんが武郎氏を友に選ばれたことも、武郎氏が快く波多野さんの異常な心力に惹かれつゝあるらしいことも、全く無理のないことだと思ひました。

波多野さんにはその後直ぐ上るお約束をしたのでしたが、例の出不精から山の手線の停車場一つがどうしても越して行けずに居りましたが、此の春急に渡歐の期日が確定してからお別れに一度どうしても小野の御新居を訪れなければならなくなりました。ところが、ちやうど定めた日の二三日前、新聞にいたづらをされたもので、とりあえず引合ひに出された武郎氏にお目にかゝる必要を生じ、何年ぶりかであの奥まつたお書齋に入つたのでありました。髪を五分刈になすつてから初めてのせいもあつたのでせうが、扉を押してこせこせと入つて來られるのを見た瞬間、私は、あの澄んだ眼が力なく凹んで、それまでに見たことのない憔悴の影が頰骨の上にまで蒼黑く流れ落ちてゐるのに氣がついてハッとしました。

「少しお痩せになつたのではないでせうか？」

その時ちやうど、あの幕の下つた書棚の前で、何かを探しかけて居られた武郎氏は、遠慮がちな私の小聲を聞くと、急に振り返つて驚いた――といふよりは少し怯えたやうな眼でまともに私を見られると直ぐ又私の凝視をおもはゆげに避けて、わざと書棚の方に顏を廻しながら、

「私？　へゝ、痩せたり肥つたりしますよ。」と吐き出すやうに放言されました。さう言つて居られる横顏が、壊れさうに

影薄く見えたのを、今でもはつきり思ひ浮べることが出來ます。二月廿七日の、確か午後一時頃のことでした。

「マシマロなどと御自分でも言つていらしつた一項に比べて見違へるほど深みを増されたのをうれしくお見かけしました。そしてあの透き通つた頬の蒼白さ！」

　先を急いでゐた爲、話しらしい話一つせず辭し歸つた直ぐあとに、こんなお手紙をいたゞいた時には、オヤと思はずに居られませんでした。長い、多趣な文通の間に、武郎氏の異常な直觀力には敬服させられてゐましたし、お互ひの神經の尖端をいやが上にもとがらせて、ずゐぶん突つ込んだ筆の上の勝負を爭つたこともあるのでしたが、知らぬ間にスケッチをされたり、黑いリボンのすぐ背後から同じ電車に乘つたのを知るまいなどと私を驚かせたり、「外れかけた幌の上の眼が泣いてゐたが」とすれちがつたあとから手紙を下すつたりしたのが關の山、お目にかゝる機會が少かつただけ、偶に顏を合せてもまともに顏色などまで窺はれるたちの見方は決してなさらない武郎氏でした。だから、そのお手紙を手にした時の「オヤ」といつた氣持は、ちやうどしめやかな秋の夜波多野さんの眼に異常な涙を見、本氣で死を口にせられるのを聞いた時の「オヤ」と全く同じ性質のものだつたのでありますおそらく、その日の武郎氏は、私が氏の面に漂うてゐるかすかなその憔悴の影を見逃し得なかつたのと同じ高調した心の敏感さから、知らぬ間に經て來た私の内的苦悶のあとを、「透き通つた蒼白さ」の中に見出されたのでありませう。

　こんなことがあつたので、幾年ぶりかで波多野さんの新居を訪れた時にも、勉强道具と共に春房氏を別室に退けて後の話しの間に、武郎氏を訪れたことの挾まれたのはもとよりのことであります。私達は、日本にもこんな氣持のいゝ住家があり得るのかと疑はれるほど何から何まで氣持よく整へられた洋室の一隅で、一ツ羽根布團の下の丸火鉢に足をかざしながら、中野の外れの、二重硝子の奥の、全く音のない眞夜中の靜けさそのものに昂奮して、小聲に、しんみりと語り合つて居りました。

「武郎も此處に來たのよ。」

　さう例の、そゝのかすやうな調子で言はれた時には、あの底深い眸が、明るく、幸福さうに光つてゐました。何でもそれは石本さん達と持ち廻りで開いて居られる講演會の一つの時だつたといふことでした。私的な招きにも快く應ぜられる事實を知つてゐた私は、武郎氏がその會の爲波多野さんの家に來られたことを別に不自然にも感じませんでしたが、さう

いたづらさうな眼をして言はれる秋子さんを見てゐると、武郎氏が秋子さんのインフルエンスに快く醉うて居られるらしい事實が、よけい確かなものゝやうに思はれて來るのでした。がさうした若々しい眼をした直ぐあと、今度は人生其物の嚴粛さに面接したやうな眞面目さで、春房氏との戀の經緯を、それまでにない詳しさで聞かされては、あの淡白な秋子さんが春房氏を餘所に愛人など持ち得やうとは、假定する餘裕もありませんでした。

「話しがあるのだから」と春房氏に退却を命じたその「話し」は、結局、口を切りかけては厚い覆ひを掛けられ、又首を出しかけてはよそに流されしてゐるうちに、たうとう糸口を失つてしまひました。自分を語ることの苦しかつた私は白洲に出された罪人のやうに、美の暴君に見据えられながら、おとなしくその訊問に答へてゐただけで、もとより、不審の節にも質問の鉾を向ける元氣もありませんでした。

「何だか、これがもう、お別れのやうな氣がしてならないの。あなたが立つてしまふともう永久に逢へないやうな……」

彼女は涙を一杯ためて、思ひなしか氣抜けのした私に物足りなさうに、幾度もさういひました。が、さう繰り返されても、私は、又會ふ機會が得られないとすればそれは私自身の意志からだ、と思ふより外ありませんでした。そしてたうとう私達は、お互ひに何かを言ひ殘し、聞き殘した氣持で、躊躇ひながらも、一時少し前、めいめいの寢室に退いたのでした。翌朝の八時半には家を出なければならない爲事のある彼女でしたから。

その前後に私は、幾年にもなく偶然、或ひは必然、幾度も彼女に會つてゐます。發表せられた手紙によると、武郎氏が「子供に歸りませう」と書かれたのは、ちやうど私の送別會の日に當つてゐるやうです。その夜の宴席では私の眞前が武郎氏、秋子さんは小山内先生を挾んで私の左に坐つて居られました。いつもは何となく童貞の香りを思はせる武郎氏の澄んだ眸が、その夜は眼鏡の奧に力なく曇つてゐたやうに記憶します。氏は、いつものくせの、面はゆげに眼をそらして、パンの小切を嚙み砕きながら、齒ぎれのさわやかな調子で、隣席の三宅やす子女史と、お子さん達の學校の話しなどして居られました。卓のはての誰かゞ昂奮して少し聲を高めた時とがめるやうに神經質な眼をされたのを、あとで、いかにも有島さんらしかつたと話し合つたことでした。別室に退いてから、秋子さんはかなり昂奮して、例の、がむしやらに身を擦り寄せたり、私の肩を突つついたりしながら、いつの間に

か武郎氏や小山内氏達と小さい一群をつくつてしまひました。
「何故だれそれは此處に來ないの？　一緒になつて、もつとお話しませうよ。」など、無意味た言葉をはずませるかと思ふと、いたづらな耳打ちなどして獨り打ち興じて居られました。
　咳の藥をとりに部屋に歸ると、波多野さんが追ひ駈けるやうに入つて來て、
「あたし、もう歸るわ。」と言はれました。
「さよなら！」を殘して出て行かれる横顏に、今まで見たことのない不安の影の漂つてゐるのを、異樣に見据えながら、私は獨り歸つて行かれる夜道の遠さを思うて、暫らくぼんやり佇んで居りました。
　私が藥を持つて宴席にもどつた時には、武郎氏の姿が見えなかつたところをみると、十七日の晩はホテルから麴町の方へ、あのお堀ばたを一緒に歩いて行かれたのかもしれません。武郎氏の長い手紙が十七日附であり、その日に武郎氏が中野のお家を訪ねる約束があつたとすると、手紙が送別會の前後に手渡しされたのでないとしても、約束を反故にしたいひわけなしには別れられなかつたでありませう。
　武郎氏には、ゆつくり上るお約束を果す暇も得られず、東京を立つ廿二日の午後紹介狀をいたゞきがてらお別れに、御門口まで車で駈けつけるよりほかない次第でした。お別れのつもりで「ごきげんよう！」を言ふと、武郎氏は、
「いゝえ、も一度停車場で……五時半でしたね？」と言はれるのです。いくら辭しても、「いや、なに、上ります」と例の一本氣で押されるので、も一度「どうかおやめ下さい。」を殘して出て來てしまひましたが、五時少し過ぎに中央停車場に行つてみると、武郎氏は入場券賣場の少し奧に、お宅の玄關でお別れした時とは見違へるほど貴公子然と、瀟洒なステツキさへついて、が、大變沈んだ面持で立つて居られました。少し遲れて波多野さんが島中雄藏氏と、風を切つて廣場を横切つて來られました。
「何だか、もう、これつきり逢へないやうな氣がするの！」
日沒前のあつけなく白ちやけたプラツトホームに佇んでゐる間も、彼女は幾度となくさう言つては、何かに迫られてゐるやうな眼をするのでした。さう言はれないでもこれが人と所との最後であるかも知れないと思はない私ではありませんでしたけれど、もう乘つた方がいゝでせう、と促されて車上の人となつてからも、電車が横濱行なのと、出帆が翌日だと

いふ氣持があるのとで、どうしても突きつめた別離の哀感は湧いて來ませんでした。其處に、洋杖をついて感慨深さうに立ちつくして居られる武郎氏と、もう涙を一つぱいためて、例になく狼狽へ氣味に足踏みして居られる秋子さん——實際此の二人ほど私の眼を、心を、惹いたものはありませんでした——とを目の前に見ても、送られてゐるのが自分で、あの人達の感動が自分故のものであるとは思ふことが出來ず、あべこべに、悲しんでゐる此の二人を——他の誰の顔も此の二人ほど沈痛には見えませんでした——慰め、ほゝゑませてあげたいと思つたくらゐでした。

三月廿一日、日暮れ近くのプラツトフオームに、かつて見た日の中で一番美しく、一番人間らしく、一番沈痛に立ちつくして居られた武郎氏と、いつになく取り亂した感情を流露してゐた淋しい秋子さんの姿とは、私への最後の、そして、消え失せやうのないかたみとなつたのであります。翌日船に來てくれた人の言葉に、お二人とも悲しさうに默したまゝ、伴れだつて歸途に就かれたとありました。私は、最後を最後と知つて最後まで、眞實にうるほひのあるいゝ友として、心の底からの「さよなら」を言つて下すつたお二人に、今涙をもつて感謝せずには居られません。

「——自殺といふ字を目にすると、何故かきつとあなたを思ひ起します。今でも死をお考へですか？」感傷的な言葉の末淋しくてゐたゝまれないと、中野のお家で五月の末近い雨の日に書かれた秋子さんの手紙を手にしたのは、巴里に來てやがて一月にもならうといふ頃のことでした。氣も狂ひさうな當時のいひやうのない不安をなにものかの死の直觀と斷じて、既に問ひ合せの打電までしやうとしてゐた私も、待ちわびてゐた便りの代りに、見慣れぬ英字の表書を目にした時には、妙な腹立たしさを覺えたほどでした。が、さすがに寢靜まつた夜更けの天井裏でそれを幾度も讀み返してゐるうち、私は、何故ともなく、言葉の底にしんそこからの寂しさの流れてゐるのに戰慄したことでした。今思へば「死ぬ前には知らせるのね？」と誓つた言葉を忘れず、迫りつゝある死をそれとなくほのめかして下すつたのでせうに、焦慮の極他の數多くの手紙と共にそれを破棄してしまつたのを、口惜しく思つて居ります。

つけたり

「思ひあたることども」の一項に續いて、私は大正五年の春初めて彼女に會つた時の印象から、長い間の交遊の間に彼女

自身の口を遮した僞りのない彼女の生ひ立ちと、春房氏との生活の經緯を述べ、更に、しのびやかに私達二人に近づいては過ぎて行つた樣々の事件に對して時々に發露された善良な彼女の感傷癖、翻弄癖、殘忍性、征服慾といつたものを、いちいちのケースに例證して說き並べ、さうした彼女の性癖に最大限の解放を與へてゐると見えてその實蛇の智慧と執念とで遠廻しに、而かも根强く彼女を自分へとくゝりつけてゐた春房氏の異常な性格との對立が終に彼女を此のクライマックスにまで昇らしめた心理的過程を明かにするつもりで居りましたが、震災の悲報に續いて日にし耳にした樣々の事實は、一切合切嘲くとお答へした山本さんへの言葉を反對にするよりほかない全く別の境地に私を導き出してしまひました。私は一方ダダイスティクた氣持に追ひつめられながら、他面に又ますます鮮かなアイディアリストの夢を廢墟の巷に搜し出すべく、雄々しく歸途につく氣持になつて居ります。

日本の論壇は今、震災と大杉氏等の慘殺問題とに賑うて居るのでせう。此處數日間の巴里は、文豪ドデエの孫であり、帝政復興主義者レオン、ドデエの息子にあたる十五歲の青年フイリツプの自殺問題で持ちきりの有樣であります。家柄が家柄なのと、フイリツプが父とは正反對な無政府黨の群に投じてゐた爲政治的背景も手傳つてかうまで騷ぎ立てるのでありませうが、そんな事件に拘泥つてゐるうち、巴里の歡樂場が一夜の中に灰となるのを知らないのかとわけもなく警告したい氣持の湧き上つて來るのをどうにもすることが出來ません。

「お前の許婚とは、死そのもののことであるぞよ。」

コメディ、デ、シャンゼリゼーの舞踊劇の一場面がふと私の目の前に浮んで來ました。アレクサンドル、ブロックは、ピトエフの扮したピエロにさういひきかせてゐます。或ひはそれが眞理であるかもしれないけれど、若しさうでも私はやはり私のほんたうのフイアンセを求めて、死の深淵の底にまで、驀地に飛びこむより外ないでせう。

――一九二三、一二、七夜半――

露西亜と子供

黒田禮二

○

『女性改造』の愛讀者の中には澤山の良い阿母さんも居るだらうし、將來又小兒に關し特殊な希望や考へ方を持つて居られる方々も嘸かし多いことでせう。處が僕自身にとつて小供と動物とは誠に鬼門で、まだ育兒のことゝか動物の愛護なんて言ふことを眞面目に考へたことがないので折角筆を執つても誠に申譯のないことしか書けない。

小供は鬼門だ…と言ふのは今迄小供から良い印象を受けたことが一つもない。自身々々、鼻汁を垂らした小供の時代にはお隣りの惡太郎は自分の喧嘩を吹つかけるもの、横町の凸坊は僕を虐めのものと相場を極めて居た。怎うか成可く早く大人になる樣に、大人になつたらうんと豪くなつて奴等の鼻つ柱を皆んなくこいてやる、と言ふのが僕の唯一の希望であつた。

大人になつた今日でも矢張り小供には叶はん。矢張り小供には虐待される。西洋を迂路ついて居た時もよく小供の群れに出會はすと遠廻りをして逃げて歩いたものだ。『改造』の秋田君なども大變伯林で學校歸りの餓鬼大將連に出會ふと酷い目に逢ふからと閉口して居た樣であつたが、僕も矢張り秋田君と同じ樣に小供の世界には縁なき衆生と見えて、いろんな惡戯をせられるのが怖いから誠に世間を狭くして小さくなつて毎日を暮した譯だ。

『失禮ですが今時計は何時ですか？』

背嚢を背負つた十歳計りの女の兒が突然横町から驅けて來て丁寧に尋ねる。

可愛いゝ兒だと思つてお愛嬌を見せて、

『三時半だよ、小さいお孃さん』と答へてやる。其の娘の兒

は連れの友達の矢張り學校歸りらしい二三人と意地の惡い眼配はせをして、

『あの外國人、獨逸語が分かるよ。でも可笑しい發音えね。可笑しい、〱。やあーい！　赤んべえ！』

なんて怪からん。東洋の士君子を小供の奴が語學の試驗しやがる。こんな鹽梅だから犬と子供は拔き足で逃げて廻るに限る！

○

獨逸の樣な所謂文明の開けた國の、然も都會の眞ん中でもさうだもの。所謂『開けない』國の田舍へでも行かうものならそれこそ事だ。匈牙利の內地へ這入つて百姓家の間を彷徨つて居たら餓鬼大將の群れが何時でも一大隊ほど後から跟いて來て閉口した。中には僕の後から前へS字形に驅け拔けて人の顏を差し覗つては又後へ戾りわい〱と騷ぎ立てる奴さへあるには降參した。煩さいから衣囊からボン〱を出して退散させ樣と思つたらその分配に預り得なかつた他の奴等が腹を立てゝ後から石や泥をぶつ付ける。杖をしい〱と犬でも逐ふ樣に振り廻して逃げたことは一遍や二遍ぢや無かつた。

西班牙の田舍を步いた時も此の小供難には殊に僕は苦心した。マドリッドの南にある古い廢趾のトレドの町へいつた時、町の中では乞食や何か煩さいもんだから其の町の小河を距てたセルヴァンテス丘の頂邊に登り芝生の上に寢轉んで居た。而して夕日に沈むトレドの町を手に取る樣な距離にじつと眺めつゝ瞑想に耽つて居たと思ひ給へ…其の時丈けは僕も中世紀の哲學者にでもなつたやうな氣持で靜かな獨りを樂しんで居たのだ。脚の下に懸つた古い石橋の上を髮の毛の黑いカルメンの樣な女が通る。荷物を付けた驢馬が通る…呑氣にじつと眺めて居る眼は旅の疲れに睡氣を催したのでうと〱する。伸んびりとドン・キホテの愚など見て居る…すると周圍が急にがや〱騷しくなつて不圖夢路から眼が覺める。芝生の上へ大の字なりに寢て居た僕の周圍には緣日商人の周圍へ野次馬が集つた樣に例の鬼門の西班牙の小供の奴等が十重廿重に取り卷いて、口々に騷々しく罵り乍ら不思議な黃色の睡眠者を眺めて居るのだ。中には僕の嫌ひな犬まで連れて來て、それを使嗾かけたのだらう。其の不愉快に吠える聲に僕の太平の眠りは邪魔されたのだ。矢庭に起き上つて、例の通り四十八手の術策として『こら、退かんか〱』と持つて來た杖を水車の樣に振り廻す。小供は吠え立てる犬を連れて罵

り作ら逃げて了ふ。ドン・キホテの國を旅行して居ると誰れにもそんな武者修業が必要であつたのだ……

○

そんな工合の僕だから露西亞へ流れて行つても鼻垂れ連には成可くお近付きを願はぬ樣に敬遠して逃り歩いたものだ。從つて露西亞の小供を研究しその『小さなエンゼルの魂』を小供に對し特別の理想を持つて居られる『女性改造』の愛讀者たる諸姉妹に御參考となる報告をすべく、僕は誠に資格のない人間です。

でも方々を旅行すれば小供を見ないと言ふ譯にや往かぬ。悲しい哉小供と犬とは何處を歩いても飛んだり跳ねたりして居る。何處でもその土地の人口構成の半分は所謂小供なのだから。殊に露西亞と來たらとても小供の多い國だ。從つて假令鬼門なりと言へ、矢張り小供にぶつ付かる機會はさらに有るので、特別な研究はしなくとも良かれ惡しかれの見聞に依る印象記は僕にだつて出來る譯。そこでそれをやつて見る。

小供は乞食に適當して居ると見えて、小供の乞食の居ない國はない。何となく憐れつぽいから通行人がお惠みをする氣になるのだ。日本でも乞食と言へば大抵小供を二三人雇つて來て『西や東の旦那樣や……』と暗誦させて置く。乞食の親爺は只默然として眼をつぶつて坐つて居れば銅貨をチリンチリンと放つて行つて吳れるのだ。日本の乞食の小供は其の雇主たる親爺にむざ〳〵搾取されることになつて居る。處が外國の乞食の小供は誠に企業的獨立心が强い。皆な勝手に自由競爭で通行人に對し小さな掌を突き出すのだ。莫斯科の銀座街たるモストワヤの附近でも澤山な襤褸の小兒が素足で澤山通行人の後から前から群つて來る。盲目爺に連れられてるのは一人もなく、皆な獨立なのだ。それが活潑にメンコをやつたり鬼ごつこをしたりして遊んで居る。そこへ外國人が來たと思ふと急に、本職に歸り掌を突き出すのだ。

『ダイチエ・パジヤールスタ！ ミリオン・ダイチエ！』と四方から集つて來る。『怎うぞ百萬兩下さい』と言ふのだ。向ふから貰ふ可き金額を極めてやつて來る。『幾らでもいゝから惠んで下さい』と言ふんぢやない、『ミリオン（百萬留）下さい』と來るのだ。百萬留と言つても五錢計りだから、まあ我慢して紙幣一枚投げてやつたらそれこそ事だ。『ダイチエ ダイチエ・イエスチヨオ・ダイチエ』（もつと〳〵下さい）とやつて來る。支那の小供乞食の『給我銅頭兒！』の煩さいのより始末に終へぬ。金額指定の懸け引でやつて來る丈けに罪も一

興深い。

○

汚いレストラントに腰を卸して飯を喰ふ。入口の處にはもう小供の乞食の二三人と犬の二三疋とが待つて居る。喰ひ殘しのパンの破片を犬にやる積りで放つたら皆で生存競爭で奪ひ合ひをした。矢張り人間の兒が犬の仔の方よりは敏こいと見えて折角犬の咥へたパン片れを一人の小供が奪ひ取つて頰張つた。

でも露西亞は物資の豐富な處だから田舍へ行くと大きなパンの塊りを肩に擔いで歩いて居る乞食の小供も居る。カザンの停車場で僕が鰯の罐詰を明けて居たら小供の乞食が『それを少し計り分けて吳れろ。其の代り此のパンをやるから』と擔いで居た大きな黑麪麭を裂き始めた。物々交換が盛んになつて居るから、小供まで『交換』と言ふ觀念が强くなつてるのか知らと思つた。

それでも露西亞の小供には可愛い處もある。西歐羅巴の田舍見たいに僕の樣な外國のおぢさんが歩いて居ても物見高くぞろ〱ついて來る樣な事はない。僕の樣な面は露西亞では割合平凡で珍らしくない爲めかも知れぬ。韃靼人でもチュワチエン人でもギルギス人でも矢張り僕等の樣な面をして居るのだから、偶々僕等が歩いても、韃靼人が町へ買出しに來た位にしか考へて居ない爲めでもあらう。それに餓鬼大將連や乞食の子供で假令後から石をぶつ付ける樣な奴があつても、何か喰ひ物を配けてやると忽ち皆な一樣に喜んで從順になる。此の筆法なら先づ大丈夫と僕の小供觀は露西亞の田舍では幸ひ餘り感じなかつた。そこで露西亞の田舍に著しい親しみを感じた。

小供と言へば皆な乞食の樣に言つたのは僕が惡るかつた。後難が怖しいから早速訂正しやう。小供と言へば露西亞にも中々種々の小供が居る。先づ第一に勞働者の小供。之れは勞農露西亞に居なければ成らぬ種類の小供である。

○

小供の乞食には何處へ行つても閉口した。伊太利の小供には『紙卷煙草』を吳れとせがまれて困らされるし、西班牙の小供には何もやらぬと後から犬をけしかけて酷い目に會はされるし、昨今の獨逸の小供には『飢じい！飢じい！』と泣き付かれて逃げ路を斷たれて閉口させられた。それでも露西亞の小供乞食が執拗い樣でも結局一番素直ほなので氣持は餘り

恐くなかつた。然し要するに乞食の小供の多い國はよく〱其の國の社會經濟狀態が逼迫して苦しんで居る事情を表徵して居るのであるから何と言つても氣の毒である。而して獨逸の様に乞食の數が增々殖えて行く國があると同時に露西亞の様に次第に減つて行く國もあると言ふ事は後者にとつて大變悦ばしい事だと思はれた。戰爭前の露西亞と言つたら、支那や伊太利と同じ様に世界の乞食國として隨分澤山な物貰ひがうよ〱して居た相である。其の狀態は今でも教會や禮拜堂が無くなつて了はないで殘存して居る様に依然として今日でも存立しては居るが、それでも大變尠くなつたとはソヰエトの連中が常に口にする所である。ソヰエトの連中の自慢は『今日の露西亞には無教育兒童と乞食と賣春婦が減少した』と言ふことである。之れは何れも餘り惡い自慢ではない。がそれ丈け又戰爭前の露西亞なるものゝ如何に酷い國であつたか、如何に文盲兒童や乞食や賣春婦の多かつたかと言ふ事が想像されるのである。文盲兒童でも乞食でも賣春婦でも決して富豪や有產階級の間に發生するものでない。資本主義の治下に於て飯の喰へないルムペン・プロの間に生ずるものである。從つてプロレタリアートが政權を執つた露西亞の治下に於て是等の悲慘な現象が增加したとは常識の上にでも想像が出來ない道理で、又實際統計の上にも大變減少して居るのは大に褒めて置いて良い點だと思ふ。

それも其の筈である。ソヰエトが布かれて以來爲政者は極力勞働者教育と勞働者の物質的救濟に依る施設とに意を用ひたことは今日では誰れも認めて居る處である。國事多難の眞最中なる一九一九年の當時の就學兒童の數は帝政時代よりも五割以上多くなつて居た事實も明かにそれを語つて居る。今日では財政困難の爲め教育委員部の豫算が戰前と同じ程度位に下つて來たと言はれて居るけれど、教育の方針が一般に輕便で進取的であり困難な綴字は改良され、讀み書きの文體は簡明で科學的となり、詰め込み主義は廢止され、又在來の如き宗教上の問題や勞働者生活に不必要な有產階級倫理の押し賣りが撤廢されたので初等教育の能率が實際の數字以上に上つて居る次第である。

○

資本主義國では小供は『次の健全なる國民』として大切に教育されるが、其の大切なりと言ふ裏面には資本階級に成る可く從順にして常には勞働傭兵となり戰爭の際は大砲の餌食となり得る爲めの大切、と言ふ意味が含まれて居る。處が

勞農露國ではそんな意味の『大切』は殆んど意味をなさないので寧ろ勞働階級が結束する所のソリダリティの上に協助協存の幸福を增進せしむる意味に於てのみ小供と言ふものが國家に有用なものとなつて來る。從つて生產者の小供は矢張り次期の政權を掌握すべき生產者でなければならぬ。家庭の個人主義的な私有物でなくつて階級に大切な共同の小供である。其の裏面には小供國有の理想が流れて居る。

從つて今日露國の都會及田舍に發達して居る小兒園及び小兒都市の發達はよく此の邊の消息を明かにするものである。小兒園及小兒都市は莫斯科附近にも極めて多いが、其の中心をなすものは飢饉地方なりしウオルガ流域方面である。始めは孤兒の收容から育兒院の樣な職能をして居たものが、今日では何れも乳吞兒から十四歲の男兒女兒を組織的に收容育英して規律と訓練のある農夫及勞働者靑年を養成する處としてある。從つて資本主義諸國の小供の樣に家庭教育と稱する個人主義的な差別的な、有產者に有利な教育法には據らしむる處を極めて尠くし、總て共同生活に於て智德體の教育をスパルタ流にやらせることにしてある。大變面白い方法だと思つた。資本主義國の市民の理想賢妻良母主義であり個人主義的文化生活であり家庭教育に依る育兒であるが社會主義國ではそれが生產者としての人間主義であり協同生活であり小兒公有の育英法であらねばならぬから。

○

だからそれは單に教育の方面許りぢやない。小供の生活の一切に亘るのである。資本主義國であれば教育丈けは成る程所謂『次期の從順な國民を作る爲めに國民教育制として普遍的な方法を執るが小供の個人生活に付ては總てそれが父母の負擔に任せてある。有產者の子女は美衣美食に飽き避寒避暑もやり享樂や遊戲にも耽られやうが、勞働者の小供に至つてはさうは往かぬ。其の父母と同じ樣に矢張り悲慘な生活をしなければならない。其の點に於てソヰエット露西亞と言ふ勞農國は勞働者の小供に對し家庭生活上の一切の世話を同じ樣にしてやる目的を以て數多の小供園及小兒都市に遊戲と音樂と勞働とを享樂せしめて居る。

又勞働者の小供に對して保健衛生上の施設には他の外國に比を見ない程完美して居るのである。小兒の肺結核患者其他の孱弱幼兒に對する養生院(サナトリウム)の如きも帝政時代の盛時(一九一四年)に於てすら全露を通じて十二しかなかつたものが、一九二一年のソヰエトが非常に困つて居た時でさ

へ五十八に增加されて居た。之れは皆地方の大地主や富豪の別莊を沒收して可愛さうな小供の爲めに解放したのである。

又病兒に對する無料診斷所の如きも一九一七年に僅か十六しかなかつたものが一九二一年には百七十九ケ所となり、托兒所と授乳所幼稚園とを兼ねて少兒保護所の數も七ケ所から實に五百四十七ケ所に增設された。海岸や丘陵や森林の風光明眉な高燥の土地に、つい近頃迄はブルジョアの豪澤な別莊が並んで酒池肉林の觀がつくされて居た。農夫の小供や勞働者の小供は指を啣えてそれを覗くことすら許されなかつたのは昨日のことだ。それが今日では小さな未來の生產者連が樂し相に共同に住んで樂し相に遊戲し得ることが出來る。此の點から考へたらソヰエトは小供の爲めに此の世の天國でなければならぬ。

○

勿論今日の露西亞其の者がまだ共產主義への理想へ僅かに第一步を踏み出したに過ぎない。而して西歐の諸資本主義の經濟的政治的壓迫に孤立せしめられ、切角ある點まで踏み込んだ步調をも仕方なく二三步退却しなければならぬ樣な破目に陷つて居る。だから理想的に建設せられた諸制度でも實際は希望の十分の一も遂げられて居ない現象も極めて多い。假令其の數は帝政時代より少くなつたとは言へ前に述べた樣な小兒乞食の如きも矢張り賣春婦の橫行と同じ樣に存在して居ることは事實である。今日の程度ではそれは已むを得ない。唯僕の目に印象として映じたのは斯樣な悲慘な現象が獨逸では益々絕望的に進み露西亞では希望の方面へ一步一步近づきつゝあると言ふ一事である。尠くとも小供の生活が次第に社會化されつゝある露西亞の社會はそれ自身に將來の光明を認めて居ると同時に、無產階級の小供自身が又どれ程幸福になり行くか分からないと考へさせられた。資本主義國家の小供は兩親の私有物として成長し、成長の後は其の家庭的に個人主義的な服從心を有產階級の護衞の爲めに犧へに出すのに對し小兒社會有の世界では社會が小兒自身のものであるから！解放されて社會化された男子が人間であり、解放されて社會化された女子が人間である樣に、家庭から解放されて社會有の下に立つ小供は最早や小供でなくつて一人の人間であるから！

僕は元來男が嫌ひだ。女も大嫌ひ、煩さい小供も前に述べた樣に僕に取つては鬼門だ。

然し人間は好きだ！



その頃の詩人の話

河井酔茗

□

明治年間の詩人で、最も多くの戀愛事件を起したのは横瀬夜雨氏だらう。氏も現在では聰明な奥さんにかしづかれ、やがては二人の子のお父さんにもならうといふ幸福な生活に入つてゐるのだから、今更舊い戀愛事件などを引張り出すのは罪作りのやうだが、舊い過去のことでもあり、罪滅ぼしにもならうかと思つて此處にその一つを紹介する。實は私にも可なり興味のある思ひ出だからである。

私が『女子文壇』といふ雜誌を編輯してゐた頃の話である。その雜誌は隨分若い婦人の讀者を有つてゐた。夜雨氏は詩の選をしたり、感想文を書いたりしてゐたが、なか〳〵熱があつた。無論氏は未だ獨身であつた。獨身者の氏がまた猛烈な女性否定の感想などを書いたものだつたが、でもその態度が眞面目で、凡てが内に燃える情熱から發してゐたので、却て若い獨身の婦人達には同情された。

直接に手紙をやる女も多かつた。夜雨氏も亦實によく手紙を書いた。その手紙たるや、雜誌などに發表するものより對個人的なだけに情調の一層人に迫るものがあつた。そして此頃の文學青年が書くやうな失禮なものではない、極めて眞面目で、素朴で、何處かに深長な意味があるやうにも思はれたので、見ぬ戀にあこがれる女が、次から次と現はれてきた。

その手紙の交際をしてゐる中に、信州の女でYといふのがあつた。私の方へもをり／＼便りは寄越すが常陸（夜雨の郷里）とは餘程繁くしてゐたやうだ。

彼女の書く文章を見ても、詩を見ても、何處といふ取りえはないが、たゞ如何にも無邪氣だ。深い思索や省察はなかつたやうだ。私には無邪氣な田舍のお孃さんを聯想させた。

彼女と夜雨氏との贈答が、戀愛にまで及んでゐるとは私にも察せられるやうになつた。察しながらも事件の推移を眺めて默つてゐたのは、例の私一流の考へからであつた。寧ろ出來るものなら出來てもいゝと思つてゐた。

ある日、社に居る私へ上野停車場前の何とかいふ旅館から電話がかゝつてきた。T氏といふ舊友の聲で、今信州からYさんと、Yさんの父親と三人で上京した、君にもなるたけ早く來てもらひたいといふ電話だ。私は直ぐに出かけることにした。

Tといふのも矢張信州の人で、以前には私と机を並べて勉強したこともあるのだ。家の都合で學事を廢し、その頃は一個の商人になつてゐた。氏の郷里とYの郷里とは然う離れてもゐなかつた。

Tはまた夜雨とも私同樣に親しかつた。たゞ郷里へ歸つてからは、方向を異にしたので、私ほど夜雨には近しくしてゐなかつただけだ。

旅館へ行つてみると、三人とも一つの室に居た。T氏は例の切口上で久濶を抒べた。それから二人を私に紹介した。

Yさんのお父さんといふのは、四十年輩のおとなしさうな商人だつた。いんぎんに初對面の挨拶をした。Yさんは思つたより大柄な女であつた。顏だちは十人並、ふつくらとはしてゐたが、何處と云つて魅力のないのが物足りなかつた。少しは恥かしさうにでもしてゐてくれると有り難かつたが、別に然ういふ風でもない。

Yの家は養蠶業だが相當に富裕にくらしてゐるらしい。父親の樣子といひ、Yさんの服裝や身のまはりが流行づくめで中產階級の令孃といふ樣子をしてゐるのでも分る。暑い頃だつたが、うすものゝきれいな肩掛などが室の隅に置いてあつた。

Tはポツリポツリと話の筋を順序立てゝ語り出した。凡てがもう私の推察通りだ。何うしても夜雨先生の處へやつてくれねば死んでしまふ位に勢ひこんだものらしい。うつちやつて置けば家出もしかねまじき樣子なので、秘藏ツ子に若し間違ひでもあつてはと可愛いゝ一圖の親心に、たとへ先方は病

者であらうが、何であらうが娘がゆく氣ならやつてもいゝとまで父親は決心したのである。でもそれには娘一人をやるわけにも行かない、幸ひ近い町に夜雨氏の舊友Tが居ることを聞いて相談に出かけた。

相談を受けてT氏も驚いたが、自分の一存でも計らひかねるから、兎に角上京して河井君の意見も聞いた上で方針をきめようといふことにした。そこで三人が上京したわけだ。

元來信州人には理窟つぽい癖があつて、實業家だつて皆一理窟云ひさうな顔つきをしてゐるが、就中Tは前から頑強な男で、何處までも自信を曲げない點などは申分のない信州型である。併し戀愛事件など取扱つたことはなからうから彼の態度も一人では決しかねた。一人では決しかねたものゝ、Y氏には氣の毒なといふ感じを持つてゐる、夜雨氏には自ら相當した女もあるだらう、Yさんには限らない、出來ることなら普通に所謂良縁を求めた方が彼女の爲にも安全だ、と斯う考へたに違ひない。それで彼は上京の途中も、情理併せ説いて彼女を説得したものらしい。處が一向きゝめがない、夜雨に傾倒してきゝめがないのなら頼もしいが、いはゞ考へが淺薄なんだ。反省も煩悶もなく、たゞお嬢さんがだだをこねてるやうなものだから、さすがのTも聊か張合拔けがしてゐた。

旅館で話してゐるうち夕方になつた、すると横濱からK氏がきた。K氏も亦われ〳〵仲間では最も親しくつきあつてゐた。Tは、この事件の相談に參加すべくKが勤め先の銀行に電話をかけて呼び寄せたのであつた。

三人は額を鳩めて凝議した。K氏は氣の早い横濱ツ兒であり、聰明な男だけに兎に角こゝまで來た上だから二三日夜雨の所へ連れて行つたら何うだらう、河井君には御苦勞だけれどと云ひ出した。私は即座に承知しましたと答へた。

正直のところ私は初めからYよりも夜雨に同情してゐる。電話が掛つた時、まだ女の顔は見なかつたけれど、來た以上は是が非でも常陸へ連れて行かうと思つた。逢つてみて彼女がそれほど乘氣になつてゐないので、聊か失望したやうなものゝ、反感を持つほどの材料もない。私が此の話を否定したら常識本位のTは勿論彼女を信州へ連れて歸つたらう。Kが中立的の態度を取つたのと、私が行かうときめてゐた心持が勝つてゐたのとで常陸行がきまつた。恐らくYよりも私の方が遙に乘氣であつたかも知れない。

では君、うまく頼むよとTは苦笑ひするやうに云つた。何しろ夜雨君は手紙を書くことがうまいのだからなど獨り言の

やうに云ふと、いや、うまいとか、うまくないとかいふわけではない、矢張夜雨の眞情から出る文句だから人を動かすんだよとKは洞察するやうに云つた。

「花なる人の戀しとて、月に泣いたは夢なるもの。紅葉あやなす蘆穗山の、麓に今は歸らうよ。破れ太鼓は叩けど鳴らぬ、落る涙を知るや君」行歩不隨な夜雨氏が一夜K氏の家に泊つて作つた詩である。その頃、好きな山ばかり歩いてゐたKにも、單なる友情ばかりでなく、人間として感激の涙なきを得なかつた。

相談のきまつた上は、私は明日の朝Yさんを連れて行くことにした、そして話が何ういふ風に進行しようとも二三日たつたら一應Yさんを東京へ連れて歸つて、再びお父さんと會見することにした。

青山の先生にさへ連れて行つて頂けば、私も大安心ですと父親は胸撫で下したやうな樣子、女の子を持つ父親はみな善良なものらしい。

TとKと二人して若干かの金を私の前に出して、君失敬だがこれを旅費に持つて行つてくれたまへといふ、私は辭退した。何時だつてのんきな旅行するやうな餘裕はなかつたけれど、常陸へ行く位のことは何でもない、私は再三辭退したが、二人は友人を懷ふ情誼として是非納めてくれといふので、私も快く預かつた。

Kは横濱に歸り、私は青山に歸つた。Tは明日一先づ信州に歸ることになつた。

翌日、私は社の方へ二三日休む旨をこたへて置いて、朝早く旅館へ出かけた。やがてYさんの支度も出來たので、上野驛から乘車した。

汽車中でも格別の話はなかつた。文學の話などをしても、彼女は殆ど『女子文壇』以外のものは見てゐないやうだ。それは結構だが、外のこともつと知つてゐて欲しかつた。對ひ合つてゐると私にはキラ〱したきものや肩掛や、折々取り出す旅行用の化粧函などが氣になつて仕方がなかつた。

水戸線の下館驛で降りた。そこから夜雨の村までは二里餘りある、俥で行かうと思つて驛前の茶屋で一休みしてゐると、夜雨が俥に乘つて迎ひに來た。電報を打つておいたのでわざ〱出かけてきたらしい。

夜雨は俥から降りないで、直ぐ家まで行かうといふ、それもよからうと私達も二臺の俥をその後につゞけた。

ひろ〱と開けた常陸の野を走つて、寂しい村に着いたの

は、筑波の山に夕雲の漂ふ頃であつた。

三人で夕御飯を食べた。夜雨氏のお母さんは立派な息子を幾人も育て上げた人で、田舍には稀な賢い婦人であつた。Yさんの樣子を一目視て、何も彼も承知したやうに、懇にお客樣あしらひをした。

夜雨はいつもの書齋に引籠つて机の前に坐つた。彼女もその傍に居た、私は一寸宵のうちだけ話をして、客室の蚊帳の中で臥た、横に臥しただけで眠つたのではない。

夜雨の訛のあるおちついた聲と、彼女のさら〳〵とした話し聲が十二時頃までも斷續して聞えてゐた。頓て彼女は別室の方に取つてあつた臥床へ入つたやうだ。

私の臥てゐる室の前の緣側の戸が一枚開かれた。顏をあげてみると、蝕んだ低い緣側の端に柱に凭れて夜雨は月を見上げてるやうだつた。私は起きて傍へ行つた。

「君、好い月じやないか」と夜雨はゆつたりとした調子で空を仰ぎながら云つた。聞かれるだらうと思つた彼女に就いてのことは何事も聞かない。私はT氏K氏に對しても稍審かに今回のなりゆきを話さないでは居られなかつた。彼はたゞフン、フンと應へながら聞いてゐた。

Yさんの話がなくなつても夜雨は默つてゐる。私も亦深くその意向を探らうといふ氣にもならない。

私は眠くなつてきた、昨日からの氣疲れも出たのだらう、君、もう寢ようじやないかといふと、君、先へ寢てもいゝよ、かうして月が西へ落るまで起きてゐることはよくあるんだから僕は平氣だよ、といふ。息をするのも分るほど靜かな平野の夜、月は皎々として夜雨の顏を半分照らしてゐる。彼の眼にはキラ〳〵と涙が光つた。

お先へ御免蒙つて眠るとしよう、君も早く寢たまへと云つて、私は蚊帳の中へ入つた。夜雨は木像のやうにきちんとしたまゝで身動き一つしない。私は何だか氣になつて、起きてゐよう、起きてゐようと思ひながら、いつのまにか寢入つてしまつた。夜雨はいつ頃眠りに就いたか知らない。

その翌日は三人で何の氣も置かずに話し合つた。夜雨にはそれからそれと話の種が盡きなかつた。

彼女が傍に居ない時、夜雨は私に明日Yさんを連れて歸つてくれと云つた、お父さんも待つてるだらうから早い方がいいといふのだ。夜雨の言葉のはし〳〵にもYはだめだといふやうな氣持がみえてゐたから私はうなづいた。だめなものを何時までも傍に置くのは却ていけない。明日は連れて歸らうときめた。

Ｙさんはまたのんきなもので　私さへ居るといへば四日でも五日でも遊んでゐるつもりらしい。私は用事にかこつけて明日は歸りませうときめてしまつた。

その夜も夜雨と彼女とは話してゐたけれど、昨夜ほど遲くまでは起きてゐなかつた。彼女も夜雨も早く眠つた。私もだん〳〵安んじたやうな氣になつて熟睡した。

夜雨氏には再會を期して、私はＹさんと一緒に夜雨の家を出た。彼は舊い門の外まで出て見送つた。村には人影もない。

私達は來る時に休んだ茶屋に上つて、汽車の時間を待ち合した。

座敷に置いてある大きな姿見の前に坐つて彼女は顏をなほしたりしてゐた。私は緣側に立つてぼんやりしてゐたが、フト夜雨は今頃何うしてるだらうと思ふと、急に淋しい氣持になつて涙ぐんだ。

彼女は別に何とも感じないらしくお化粧をしてるのに、私だけ感傷的になつても仕方がない。かうなるのは分つてゐたのではないかと思つても、やつぱり涙がこぼれるので、とうとう私も顏を洗ひに行つた。

汽車の中でも私は言葉少なにしてゐた。一寸重荷をおろしたやうな氣もするが、また張合の拔けたやうな氣持もした。だが何うかすると女が憎らしくなつてしようがない。女は憎むに當らない、何も知らないのだと感傷を抑へようとしても、なんだ、この女が、といふ氣がして、むら〳〵と憎らしくなる。私は早く此の事件から免れたいと思つた。

夜雨との會見が濟んだからとて私の責任はまだ果されない、大切な他の娘を預かつてるのだから、父親に渡すまでは安心がならない。東京へ着いてから一先づＹさんを私の家へ連れて歸つた。

一晩私の家へ泊めた。ちやうど父親が樣子を聞きに來たので、話は簡單に、Ｙさんをお父さんに渡した。お父さんは何といふこともなく喜んで娘を連れて歸つた。東京見物でもしてまた國へ歸るのだらう。

空想家の私も、すつかり夢が覺めたやうになつた。

その後、Ｙ氏からお禮だといつて、眞綿を澤山送つてきた。それきりで彼女の消息は一度も聞かない。

その話があつてから、もう彼れ此れ二十年近くにもなるだらう。Ｙさんばかりでなく、夜雨の詩にあこがれた花の如き女達も、もう皆いゝ齡になつた筈だ。天變があつても、地異があつても、彼女達の上に祝福あれ。

□

「舞へとあらば、舞ふてもみせんさりながら、思へば思へば鎌倉殿」と謡曲のやうな詩があつた。題は「靜御前」調子がおもしろいので私達は暗記したものだ。作者は梅花道人といひ、明治廿四年に『新體梅花詩集』一冊を出版したきり、あとにも、さきにも消息の世間に知れない詩人だつた。

私はその詩集が出ると直ぐ求めて、愛藏してゐたのを、或る時他に貸したきり失つてしまつたのを殘念に思つてゐる。紹介狀を持つてその書物を借りに來た男の樣子は、今でも覺えてゐる。二十歳位の書生風で、筒袖を被てゐた、筒袖はいゝとしてもかすりのシャツが變妙だつた。それに顏がまた變妙な顏で、何ういふものか芝居のトツタリを聯想させた。この男に白の襷を十字にあやどらせ、手に房のついた十手を持たせて、クワタクワタと板をたゝいたら苦もなく二三度とんぼかへりをするだらうと思はれた。私はそんな男に世に稀な『梅花詩集』を渡すことは不安でしようがなかつた。紹介狀の手前渡さないわけにもゆかなかつたので、とう〳〵渡してしまつた。紹介狀を書いてよこした人も、或る日借金取を追返すのに床の間に飾つてあつた名刀を引提げて出たなどいふ數々の插話の持主で、必ずしも信頼は出來なかつたが、知合でもあつたし、詩も理解出來るし、相當文士間にも交際の廣い人だつたから、一冊の書物ぐらゐ何うといふこともなからうと思つて渡してしまつたのだつた。二人の話はそれつきりでおしまひ、詩集もそれつきりで返つて來ない。

北村透谷、湖泊堂などいふ當時の詩人肌の人は、その晩年に氣が狂つたようだが、中西梅花も亦氣が狂つて死んだ。『靜御前』のやうな詩は別だが、その他の詩には奔放自由な破格な作があつて、深くはないにしても感激と情熱が籠つてゐた。

詩集には鷗外、露伴、蘇峰などの先輩が序文を書いてる位だから、その天分は認められてゐたにちがいない。たゞその人間が詩以上に變り者で、變り者といふより殆ど狂に近かつたのである。矢張彼と一時親しくしてゐた內田魯庵氏から聞いた話を私が或る雜誌に書いたこともあるが、それでみても殆ど狂人らしい行動のあつたことが分る。

自分の氣持では然うしてはならないと思つても、手や足が承知しないと云つて、無意識に人を撲つたりするやうなこともあつたらしい。京都のきちん宿へ泊つて、爐を圍みながら

世間話をしてゐるうち、フト氣が變になつて巡禮の頭へ鐵瓶を投げつけたといふのだから亂暴だ。自分でも然ういふ病氣のあることを自覺してゐたものと見え、美濃の虎溪禪師の許へ參禪した。併し、禪の悟道でも詩人の熱情を抑制することができなかつた。彼は山を出てまた放浪の旅をした、『梅花詩集』はその旅土産であつたらう。

現代のダダイズムは云ふことは烈しくても、行ひにまで表はす詩人は少ないやうだが、彼はダダイストからだん／＼本ものの狂人になつていつた。

夜途が恐いとか、電信柱が睨みつけてゐるとか云つてた間は、彼の行もまだ詩人的感激の發露だらうとも思はれたが、刄物をふりまはすようになつてはもう仕方がない。

彼は幾歳でなくなつたのか、よくは分らないが、恐らく若かつたらう。なくなる前に女に關係した事件もあつて、場合によつては結婚といふ所まで漕ぎつける事も出來たらしいが、何しろ然ういふ性格では對手の女も手を引いたにちがひない。彼は失戀の結果、病氣が昂じるばかりであつた。

彼は晩年になつて千束町の家に歸つてゐたが、ある日、表を通りかゝつた植木屋に後ろから斬りかゝつた。無論一時の發作だらう、然ういふことがあつて間もなく、彼はその家でなくなつた。

□

童形童心の北原白秋氏も、今は堂々たるお父さんになつたが、それでも永久の童心は失ふまいと思はれる。氏は一徹の人であり、また激しい氣象の持主でもあるが、同時に永久の童心が潜んでゐる、その童心に古人の所謂「思無邪」の三字を點睛したい。

白秋氏はをり／＼感涙をこぼす人で、それは嬉し涙である。「思無邪」の人のみがこぼす清い涙である。

氏は詩の道の難行苦行を經てきた、その間に苦しい涙や辛い涙をしぼつたらうが、それは決して人に見せない。暗涙を呑んで詩の行道を辿つてきた。そして私たちにはたゞ嬉し涙や喜び涙をよくみせてくれた。

私は氏の涙のことを云ふと共に、詩人の會合をした昔話を語りたいのである。

明治三十八年四月の末、上野淺草はまだ花見氣分の人で亂醉狂舞、春闌なる頃であつた。隅田河畔の梅若塚で詩人の會合があつた。

梅若塚とは何ういふわけで選んだものか、發起者の一人であつた私にも記憶はないが、傳説的の興味が主であつたには相違ない。今なら詩人の會といへば、何處かのレストランの階上で、幾皿かの洋食を平らげ、卓上感話に詩論でもたゝかはす處だが、當時の詩人達にはそんな成算も意圖もない。ただ何處か面白い所へ集まらうといふだけで會は成り立つのだ。

最もそれまでに詩人の會合といふやうなことは殆どなかつた。その會も同好者といふやうな意味で集まつたので、幸ひ三十七八年頃には若い人の間に詩が盛んに讀まれるようになつてきたので、兎に角三十人近くの同好者が集まつたわけだ。

白秋氏はその前年に九州から上京してゐた。「全都覺醒賦」といふ長篇の詩を作つてその才分を發揮したのもその頃だ。氏は早稲田に通學してゐた、外にも早稲田の學生が主で、雜誌『文庫』を中心に若い詩人達が期せずして集まる機會が多かつた。

今は『東京朝日』の社會部長であり、此間西洋から歸つたばかりの原田讓二氏なども、原田ゆづるの名で詩を作つてゐた。素より一介の書生さんで、友人と一緒に飄然と梅若へやつてきた。

秋庭俊彦氏なども如何にも寺の小僧然としてゐた。衛生問答で新聞雜誌によく名を見る岡田醫學士も未だ當時は紅顏の美少年だつた。雜誌『住宅』に隱れてしまつたけれど人見東明氏も熱心な一人であつた。誰誰が來てゐたか別に名簿も殘しておかなかつたので忘れたけれど、凡てが青年の元氣と、無邪氣な享樂氣分に充ちてゐた。

さて集まつたところで何をしやうといふ目的もないのだが、その中の四五の人は芝居をやると云つて、私の家から舊い暖簾などかついで行つた、幕にするのだ。梅若丸の活人畫をやるので淺草で面を買つて來た人もあつた。

芝居があり、活人畫があり、詩の朗讀があり、演説があり、寫眞の撮影があり、和氣靄々として賑やかだ。詩の會でも改まつて詩の談論を試みてゐるような人は一人もない。詩談會でなく親睦會だ。

その時である、初めて白秋氏の涙を見たのだ。

氏は二階の片隅に寄つて、溝口白羊氏と何か頻りに語つてゐるやうだつたが、その樣子が少し異つてゐたので、私も傍へ行くと、氏は兩眼から松露にでもなりさうな大粒の涙をハラハラと滾してゐる。私はハツとした。誰かと感情の衝突か

ら喧嘩でもしたのかと思つた。

白秋氏が眼をこすり〱盛んに泣き出すので、これも感激家の白羊氏がまた貰ひ泣きをしてるのだ。

一體何うしたのだと聞くと、みんなが餘りつまらないことをしてるので悲しくなつたといふ話、併しつまらないことは少しもない、みんな面白さうだ。白秋氏自身も面白さうだ、つまりおもしろくて感激の涙がこぼれて來たのだらうと私は察した。まだ面白さが足りないのでつまらないのかもしれぬ、もつと面白くなつたら、白秋氏の感涙はとめどもなく出てしようがあるまい。

對手が白羊氏だから面白い、氏は元來熱烈な詩人肌の男で、醉ふと大いに泣き出す癖があつた。悲憤の涙やら、激昂の涙やら、ふだんおとなしい人だけに醉つて泣き出したら大變だ、あらゆるものを罵倒しては泣くのであつた。この日も多少の酒氣があつたので、對手が喜び涙だらうが何の涙だらうが、好い對手を見つけたつもりで、二人は盛んに泣いたものだ。困つたのは私一人だ。

まア兎に角泣くことだけはやめたがよからうと、二人を慰めて、漸く涙を禁めさせた。

會は永き日の暮れ方までつゞいた。一二本の酒に陶然として外へ出た詩人逹は、三々五々八重櫻ちる大川の堤を歩きながら、詩の朗讀に漢詩の朗吟が交つたり、追分に變じたりした。そして赤い灯の都會を越えて、遠い山の手へ歸るのであつた。

□

今なら帝都の中央で詩の朗讀會を開催するといふやうな向ふ見ずな企てをする人もなからうが、當時新體詩とか新派和歌とかいへば未だ珍らしい氣がして然ういふ會も成り立つた。

場所は神田の青年會館（明治三十五年の秋）で、韻文朗讀會といふ會名の下に開かれた。出席者は岩野泡鳴氏、平木白星氏、與謝野寛氏、兒玉花外氏、山本露葉氏などの顏觸で、音樂家は酒井勝軍氏が出席したかのやうに覺えてゐる。殆ど音樂を無視した朗讀會だからおもしろい、聽衆は滿員であつた。

泡鳴氏は詩の格調を論じて可なり長い演説をした。その他の諸氏は朗讀をやつた。勿論自作を朗讀するのである。

朗讀といつても何等音樂的條件があるのではない。皆が器用に任せて讀み上るだけだ。『日本國歌』で有名になつてゐた白星氏はアギナルドの詩を朗讀したやうだが、感動に乏しかつた。聲の好いのを得意の兒玉花外氏も自作を朗讀したが、情熱餘りあつて餘韻足らずといふ評であつた。花外氏は好ん

で詩を朗讀したが、これも持前の聲以外何の工夫もするのではない。併し氏は夙に『社會主義詩集』などを著はしてゐるほどで、當時の青年には愛された。氏の友人の露葉氏は聲量の嵩も豐かな人で、詩の朗讀も謠曲のやうだつた、聽衆は何でも感心して聞いてゐた。與謝野氏の和歌の朗吟はうまいものだ、但し聊かセンチメンタルな節廻しがあるので、若い聽衆が喜んではやしたり、やじつたりした。

兎に角音樂の素地もなければ、別に稽古をしたといふわけでもなく、たゞ自分勝手に節廻しをつけて、公衆の前で自作の詩を朗讀したのだから大膽な話だ。

それから後には、大仕掛の朗讀會はなかつたけれど詩の朗讀は盛んに行はれた。

何しろ音樂家で詩の領分に手を出す人がなかつたものだから、詩人は勝手に歌ひ、勝手に讀上げるやうになつたのだらう。何か小さな文學的集會でもあると、よく詩の朗讀をやるようだつた。

私の覺えてゐる處では若山牧水氏などもうまかつた。天性の美音でもあつた、それに情熱を加へるから多少の感動を惹起した。

『東京日日新聞』の前社員猪股達也氏（吟鷗）も好んで詩を歌つた。今は法律の方に沒頭して詩の朗讀などは忘れてゐるかも知れない。

それから現に『實業の日本』を編輯しつゝある有本芳水氏も學生時代にはよく詩を作り、詩を歌つた。氏は播磨の出身だけに朗讀が西國巡禮調で、一種の哀調を帶びてゐた。氏が後に『日本少年』をやるようになつてからも詩を作つてゐたが、愛讀者は非常に多い、その哀調が詩にも表はれて、少年の情調に投ずるものがあつたからだらう。上田敏氏の「ちやるめら」などを歌ふと私達は一寸傾聽したものだ。もう株式界の變動や、銀行の內幕などを觀察するようになつては、詩でもなからうと思はれるが、有本氏は必ずしも然うでなく、潛かに現代の詩や和歌にも眼を向けて昔の氣持を忘れないでゐるから頼もしい。

晩翠氏の作は學生の間に汎く歌はれたようだが、一部の間には藤村氏の「おえふ」「常盤木」夜雨氏の「お才」「破れ太鼓」敏氏の「ちやるめら」泣菫氏の「思ひ出」「公孫樹下に立ちて」などが、その頃好んで朗讀されたようだ。

ずつと近い話では福田正夫氏が藤村氏五十年の祝賀會席上で、藤村氏の作を朗讀したのは珍しく又なつかしくも思つたが、更に靜かな時に聞きたいものだ。

音樂が一般的になり、音樂的意識が發達するに連れて詩の朗讀といふやうなことも行はれなくなつた。その代り詩にも譜が附くようになり、童謠の方面も盛んに音樂化してゆくから、自家一流の朗讀を試みるやうな人もなくなるわけだ。

三角關係に惱む友へ

岡田道代

（この長い手紙は、本誌新年號の戀愛に關するある應募原稿を讀んでその友人から送つてきたものです。讀者諸姉の批判を求めたいと思ひます。）

Aさん三十六峰が雨に濡れて黒谷の新緑も深くなつた事でせう。

天龍寺をすぢかひに渡る鳥の聲も念はれます。お別れしてからもう一年餘りにもなります。初春の木の香新らしい空氣を吸つて、清水を越え、鴨川を過ぎりし事幾度、緑の香る頃となれば、あの頃の事が思はれます。

田舍の此頃。私の一日は只靜かに明けて靜かに暮れて參ります。

Aさん。時々頂くあなたのお手紙でかすかに察しするより他に深いあなたの魂の步みを知る事の出來ないで居た私にとつては、あのお手紙は可成はげしく私を驚かさせないでは置きませんでした。

生々しい傷の痛みに堪へていらつしやるあなたの魂を念ふと、何とか言はなくては、何とかしなくてはといふ樣な心に毎日充されて居ながら、やはりそんな價値も力もない私には何もお書きする事が出來ないのです。

なまじひに人間の弱々しい言葉の慰めが人の世の大きな事實を何うすることが出來るのでせう。私逹がほんとうに自らの眞劍な姿に面する時には智的解明も言葉の慰めも何の權威に價するものでせう。

私はあの悲痛なあなたの告白を讀みました。たまらない氣もします。でもどうしたらいゝのでせう。人間の知り得ること、人間の感じ得ることの何といふ小さくみぢめな事でせう。Aさんやはり私には何がほんとうで有るか？　何う生きるのがあなたのほんとうの途で有るかといふ樣な事ははつきり知る事が出來ないのです。ことは餘りに深く、各々の魂の運命にかかはつて居ます。自分の魂の行方をすら、はつきりわかる事の出來ない私に、どうしてあなたの魂の重荷を解く事が出來るでせう。

『長い間の目あての無い生活に初めて活き活きとした生命を注がれた樣な氣がします。』とお書きになりましたね。

あなたも戀を得たのだ。さう思つた瞬間私の眼には言ひ知れぬ涙のにじむのを覺えました。廿歳を越える今日まで、あなたはほんとに純に潔く生きていらした。はげしい嵐にもあはず、鬱々しい雨にもくちずにスーツと伸びた白百合の樣に。

『なぜもつと强く、もつとはつきり自分の思ふ事が行へないのでせう。』とあなたはよくおつしやいました。でもそこに貴いあなたの純眞さが有るのですもの。それ故にあなたは惱まなくてはならないでせう。だがその痛

ましい惱みこそはあなたの魂を淸めるのです。あなたの上にのぞんで居る今の試錬がどんなにはげしくあなたの魂を苦しめてもあなたはそれに堪へなくてはならない。どんな事があつてもあなたはあなたの淸さをけがしてはならない。

Aさんあなたが未だあの古典的な風光の雅を念はせる明石の學校にいらつしやる頃から、F先生はあなたの崇敬のまとの樣でした學校からの歸り路や、日曜日の午後を、あなたは良くF先生の宅にお伺ひしたといふて夕方遲くなつて舍へ歸つていらした事も有りました。でも其の頃のあなたは純な愛をもつて恩師を慕つていらしたのです。

學校を出てあなたが京都に歸るのと殆んどいつしよにF先生が京大の英文科にお入りになつたといふ樣な事はききましたけれどもそれがあなたとFさんとをむすびつける見えざる縁の故だとは知る事も出來ませんでした私とは去年の葉櫻の頃以來お會ひする機會もなくて過ぎました。

あなたの愛はとうとうFさんを獨占しなくては滿足出來ないところまで進んだのでした。とにかくお手紙によるならあなたもFさんも可成りつきつめたところまで眞劍に考へていらつしやるらしい。Fさんがあなたなくしては生きてゆけないといふ氣持も、あなたが、いまではFさんの故に生きがひのある生活をつづけることが出來るといふのもほんとうです。事がそこまでであるなら、あなたは疑ひもなくあなたの道をまつしぐらに進んで行くことが出來るのでせう。

だがFさんには正しい結婚による奥樣があり、二人の子供まであるのです。あなたとFさんとの一舉手、一投足も、ただあなた逹二人のみではなくて、その三人の人とそれにまつはる多くの人逹の魂の運命にかかはるのです。

Fさんがお考へになる樣にFさんとFさんの夫人との結婚がほんとうのものではなくて、新しく得たあなたの戀に眞實のものを見出し、その新しい愛に生きようとしていらつしやるのもあるところまではほんとうでせう。あなたがFさんへの戀こそは惠まれし眞の愛であるとおつしやるのもほんとうだといふ氣がします。だがあなたがさう感じながら、Fさんの妻なる人のことを思ひ、二人の子供のことを思ふときには堪へられぬ氣がする。なにもかも捨ててしまつて、淋しい嵯峨野あたりの尼寺にでも入つて、ただ獨りで聖い愛の思出に生きて行きたいとおつしやるのもほんとうです。

あなたは今、不安ともだえとのために狂ひさうだとおつしやいますね。それで居て、やはりFさんと離れる事は死ぬるよりもつらいと書いて居られるのです。

あなたが歩く途はどこにあるのでせう。血と涙に燃ゆる愛の生涯をあなたはやはり、どこまでも血みどろになつてでも、つづけて行かなくてはならないのでせうか。

あなたの貴い愛慾を捨てゝすべてのねがひをあなたは、その妻なる人の幸福の故に捨て去つて、新しい道を歩まなくてはならないのか。そうすることによつて四人の人逹に眞の幸福は獻げられるのか。

そこには世にも嚴肅な問題があるのです。

Aさん。

一人の人を二人で爭はなくてはならぬ。そしてどちらがその愛を全うされうとしても三人の魂が、それぞれに深い傷手を負はなくてはならぬといふことは何といふ傷ましいことでせう。この問題こそは近代人がもつとも強く惱むで居るところなのです。だがいつでも、そのはてには、いたましい絶望の悲劇が横はつて居ます。

あなたはあのハウプトマンの「寂しき人々」を御覽になりまして。

若い有爲な學者のヨハンネスには美しくておとなしいケチイといふ細君があつた。

ケチイはただおとなしく、唯だ貞淑な女であるといふ以上には何の深さもないために憐れヨハンネスは絶えず寂しい生活をして居るのです。或日スヰスの大學に通つて居る自由な思想をもつアンナ・マアルといふ女が二人をたづねて來る。悲劇はそこからはじまる。

いゝも寂しい生活をして居るヨハンネスはアンナの美と同情とに感激してそこに悲しい戀愛が成り立つのです。細君のケチイもヨハンネスの母もそれぞれに苦しむ。各々の魂の靜けさは全く破壞されてしまふ。

一夜ヨハンネスとアンナとは船に乘じて湖に出でていたましい死をとげる。

同じ樣な戲曲がメエテルリンクのものにもあります。

主人公のメレアンデルが美しい夫人のセリセットと幸福な生涯を送つて居たところアグラベエヌといふセリセットよりも美しく、自由な考へをもつて居る女があらはれて來る。はじめは三人とも愛しあつて行かふとしたのですが、とうとう堪へられないで、セリセットが孤城の塔の上から飛び降りて死んでしまふといふのです。(アグラベエヌとセリセット)

ダヌンチヨの戲曲にもさういふものを取りあつかつたものがあります。パウロとフランチエスカの物語りをいつかお話したことがあります。ね、トルストイやアンドレエフなども度々さういふものを書いて居ます。

何も小說に例をとるでなくても、世情には可成り銳敏なあなたにはこの頃の新聞雜誌の報ずる事實を御存じの事だと思ひます。

性の三角關係。これこそは今日までの人類の歷史が生み出したいたましい性の悲劇なのです。

これをただそのまゝに見て、私達がどんなに、もがいてもどうすることも出來ぬ事實として、なるところまで、それに從つてゆくのが私達の生きる道なのでせうか。

いたましい不調和な最後へまで引かれて行くことが私達の進むべき道なのでせうか。

私はどうしてもそれを信ずることは出來ません。もつと明るい、もつと貴い道が、どこかにあるのではないのでせうか。

たしかに近代の人達はこれまでの結婚といふものについては深い疑ひをもつて居ます。

トルストイでさへも「兩性間の關係は新しい標樣をとらなくてはならぬ。舊い形式は最早壞れて粉碎しつゝある。」と言つて居ます

名高い英の小說家ジョージ、メレデイスも亦言つて居ます。「結婚は早晚必ずその形式

本書の内容

◇善と禍との一致に就いて

◇人間主義と超克主義

◇卑しむべきものに就いて

――嘘言に就いて――告げ口に就いて――或種の謙遜に就いて――裏ぎりに就いて――卑怯に就いて――或る種の贅澤に就いて――慳吝に就いて――大食若しくは食慾に就いて――色魔に就いて――賣淫に就いて――或る種の表出に就いて――懶惰に就いて――自卑に就いて――

◇心なき業に就いて

◇經濟的制約に就いて

◇強くなる道

――ソクラテス的勇氣に就いて

◇善と其の實行に就いて

◇「せずにはゐられない」行爲

◇「古風」に對する愛に就いて

◇猿之助の俊寛を觀て

◇震災所感

◇人間苦より放たるゝ道

◇女性美の段階に就いて

定價貳圓貳拾錢

送料十九錢

東京芝區愛宕下町

振替東京八四〇二

改造社

を變へるであらう。それは一定の期間——たとへば十年をかぎつて許さるゝにいたるであらう」と。

十九世紀から廿世紀にかけて、人の心の底にかくされて居た結婚への深い疑惑は地を破つて湧き出で〻居る樣に思へます。イプセンもその手記に「自由の人といふ樣な事はただ形容の語にすぎない。實はそんなものは存在しては居ないのだ。なぜといつて結婚といふ男女間の關係が、甚しく人類を毀損して、すべての人の面に奴隷の徽を印したからである。」と。

でもこれらの人達は束縛よりの解放を説いたのですが、これから解き放たれた人達の行くべき道についてはつきりしたことを言つては居ないようです。結婚について、もつともはげしく論じて居るのは、英のバアナアド、ショウその人でせう。彼の結婚論はたしかにある徹底を得て居ます。

「一夫一婦の制度の自然的根據は倫理的問題ではない。單に人口に於ける兩性の比例によるのみだ。即ちそれは一夫多妻又は一妻多夫が性質上惡しきものなるが故ではなくて、男子と女子との出生が略々同數であるといふ、冷い事實に基くに過ぎない。だからもし大戰爭の結果男子の四分の三を失ふことがあつたとすればマホメット教の如く一夫四妻の制度を採用することが絶對的に必要となるであらう」彼のいふところによると結婚といふものは決してそれ自身に目的をもつ聖い生活狀態ではなくて、たゞ境遇の如何によつて自然的必要をみたす一の輕便な手段に過ぎないのです。ですから勿論結婚によつて實現せられる夫婦の關係については何の理想もあるのではないのです。彼の離婚についての考へを見ても、離婚は實際に於て結婚の破壞ではなくて却つてその維持の第一條件である離婚は誤まつた配合の訂正である。離婚は結婚をして一層望ましいものとする。——加之離婚が出來るといふ事實け屢々離婚そのものの實現を豫防する。——あだかも戸の開放せられたる室は牢獄の如くに感じないと等しく束縛の感じのないことが直ちに結婚をして現在より〆遙かに幸福なるものたらしむるからである。且また戸が始終開かれてあるならば、現在の如うにそれが生涯にたゞ一瞬間開かれてその後決つして再び開かない時とは異なり、必ずしも之を突出さうと焦慮るの必要がない。教會は「結婚は聖禮典である」と主張してその解くことゝの出來ないことをいふ。たしかに結婚は聖禮典であらう。併し同じ理由によつて結婚がその儀式を以て象徴せらる〻が如き内的精神的の恵みを失つた場合には離婚は正しく聖る義務でなくてはならぬ」

かういふショウのやうな考へがいゝ事であつても又さうでなくても、かういふ考へをもつ人が實際からみて多くなりつゝあることは事實です。そしてかういふ考へをもつてすべての人がすべての場合にのぞむ事が出來るならばあらゆる世のいたましい事件は決して起らないはづであるし、魂の痛手になやむ人もない筈でなくてはなりません。だが社會の事實はたしかにそれを裏切つて性の破綻によるいたましい犧牲者の數ははかり知れぬ程の數に上つてゐます。

人は決して結婚をたゞ單なる手段と見ることをしない様です。結婚こそは貴い創造的生涯です。一人の男と一人の女との結合によつて新しい生命を創造することでなくてはならないと思ひます。それが男女の出生の同數なるが故といふ様な冷い事實を基として結婚といふものが考へられるものでせうか。

私には結婚といふものはもつと祝福せられたものの様に思はれます。

愛こそはその間を結ぶ鎖です。愛するものの故にすべての重荷もかるくせられるのです。愛の故に如何なる苦しみをも歡んでしのぶ事が出來るのです。誠に愛こそはすべてを赦しすべてを忍ぶ。結婚生活は忍ぶ愛を基としなくてはならないと思ひます。

戀しあつて居る男女は愛を讃美することが出來ます。しかしながら結婚は決してそれをゆるしはしない。愛は必ずしも讃美せらるべきものではなくて、試みらるべきものです。

確められなくてはならぬものです。

戀を得た男女がまだ見ぬ神祕の世界への讃美に醉ふ様に、それが結婚にまで進んだ男女にとつては恐ろしい現實へのにがい試錬にあはなくてはならないのです。

私達がもし地をのみ見るならそこには恐ろしい破綻が來なくてはならないでせう。

あなたはあの英の耽美主義の小說家オスカア、ワイルドの小說「ドリアン、グレイの繪」をおよみになりましたか?

ドリアン、グレイは身も心も美しい少年でした。併しその美しい魂はだんだん誘はれて惡へと進んで往きます。そのうちに彼はロンドンの場末の或る小劇場の美しい女優と戀におちるのです。彼がはじめてその名もない女優をその劇場に見た時、その技のあまりに天才的なのとその天女の様な光をもつ瞳に驚いてしまひました。

かの女の眼も髪も、一擧手一投足がすべて美そのものであつたのです。彼はこの美しい天才の世に生れたことを驚かずには居れませんでした。かくて結婚の約束は二人の間にかはされました。或る日、彼は友達を誘つて戀人の舞臺を見に出かけた。二人とも大きな期待をもつて居たのにその日舞臺にあらはれた彼女は何といふまづい俳優だつたのでせう。

何といふその聲のダルな、それはあまりにまづかつたので、友人はとうとう彼をはづかしめました。

ドリアン、グレイは全く失望して樂屋へ飛んで行つて女をなぢりました

「私は今まで私の魂のすべてを舞臺の上にさゝげゐました。だから私の舞臺には力があつたのです。光があつたのです。だが私はあなたを戀したのです。私は私の魂のすべてをあなたにさゝげました。ですから私はもう舞臺の上には何の魂も熱も持つてはゐないのです。——」

若い女優は遂に毒をあふいで死んでしまつたのです。一度怒つた彼が再び女の樂屋に引つかへして來た時にはすでに美しい女優は舞臺衣のまゝ冷いむくろと化して居ました。

Aさん。

ドリアン、グレイが若い女優に對していだ

いた不滿は、結婚したすべての男の心にも涵いて來るのではありますまいか。

どんな女でも戀せられて居る時にはたしかに美しいのです。しかしながらそれが一度結婚すればその戀は自づから變つて來なくてはなりません。

この小說は深くいまのあなたを考へさせなくてはおかないと思ひます。

あなたはいまもつと深い自己省察の眼を持て自分の魂をさぐらなくてはならない時ではないでせうか。あなたの愛は決して不純なものをふくんでは居ないのでせうか。

それに私はFさんがいまの夫人と結婚せられたについてもやはり戀愛といふ樣なものがあつたことを聞いてゐます。あなたといふ人がFさん達のなかにあらはれたためにFさん達夫婦の愛に缺陷が見出されたのでせうか或はFさん達の結婚がまちがつて居たために、あなたへの愛を見出したのでせうか。

Fさんがその夫人について感じて居られる結婚の誤りといふことでもどんな意味なのでせう。私にはそれは、はつきりはわかりませんが結婚のあやまりといふ樣な事は唯だ單に夫婦の間につぶやきが絕えないからとか不滿ばかりが感じられるからといふ樣な單純な理由からきめることは出來ないと思ひます。

世にはどうしても愛することの出來ないいたましい結合もあります。けれどもFさん達の場合をさう考へることも出來ないと思ひます光を見ないで地を見、自分のセルフキツシユな我をとほして暗い人心を見るなら、如何に完全な愛にも不滿と疑惑を感ぜずには居られないでせう。かういふ考へ方は不愉快かもしれませんか、とにかく新しい戀にはうまさがあるものだと申します。

私達は高きを見なくてはなりません。自分の立場よりも高い天を仰ぐ。そこには地の結婚の到達すべき天の結婚があります。私は地に於て幸福な祝福せられた結婚生活をたのしんだ人達を思ひ出します。誠に彼等の生活こそは地上に創造られた天の生活でした。そこには眞に驚異に價する程の生命の飛躍がありました。ブラウニング。ブレイク。カアライル。グラッドストーン。みんな天を見た人達です。

ショウに云はせるなら、彼等は偶然にも幸福なよき結婚をした人達だといふかも知れないでせう。しかし私達は、どんなに疑惑が大きくても、どんなに不滿は深くても、私達はそこから光を見出さなくてはならないのです。不滿を不滿にのみ終らしめ、疑惑を疑惑として放つておき、或はそれにふることを恐れて、不徹底の生活を送るから、そこに永遠の幻滅をまねかなくてはならないのではないでせうか。勇ましいことは恐れずして見ることとです。そしてそこから眞のものを掘りあてることです。そこにはじめて試みに勝つた眞の愛が湧き出るのでけないでせうか。

Aさん。

私達はもつとはつきり、もつと深く私達の周圍を見なくてはならないと思ひます。

いまのあなたの魂を苦しめて居る愛についてもどうかもつと深く見とほして下さい。

恐れずしてあるがまゝの自分の生活を見とほす。そしてそれを愛することこそ世に唯

一のヒロイズムだとロマン、ローランが言つて居ます。

Ａさん。

あなたは決して自分を僞つてはならない。あなたはあなたの魂の底まで見つめなくてはならない。鋭い自己批判のメスはあなたの魂の底までをさしとほす。あなたの生活はいま一度火によつて試みられなくてはならない。

あなたは生命がけといつていらつしやるのです、ね。だがそれこそはほんとうにどちらからたたいても動かないほどつきつめた必然のものなのでせうか。

私はイプセンの言葉を思ひ出します。「私の踏んで居る大地が顫へても私は此處を動かない。——私はもう私の意志の上に立つて居る。今こそは岩山をも打碎いてやる。微塵にくだくことが出來るのだ」と。

何といふ力強い言葉なのでせう。浮ついた、いつもおどおどした私達の不徹底な生活にくらべてこれはまた何といふ眞實さでせう。

私達の日々生きてゆく道は必然即ち止むに止まれぬ絶對の眞實をもつて居るのでせうか。

トロウの言葉に「人にして若し言はざるを得ないものをもつて居るならば、石が地に落ちる樣に何事もなく單順に率直に彼から洩れ出づるものである。石が落ちて來るのに二つの途はない。」

私達の行くてに決して二筋の道はない筈です。どんなにもがいても、どんなに力をつくしてもかうしか往けぬといふ運命的な道ではなくて、すべての選擇を越えて、つきつめた、ただ一つの道、それこそは眞實の道、愛の道なのです。それこそ、すべての魂が生かされる道なのです。

私達のゆく道も亦そこより他にはないのではないでせうか。

Ａさん。

私がはつきり申しあげることが出來るのはそこまでです。つきつめたところの解決はやはりあなただけが知ることが出來るのではないでせうか。

人がかう云つたから、私はかうするといふのがほんとうではなくて私にはかうより往けない。これこそ私の生きる唯一の道の故に私はこの道を進む。それこそ眞實の道です。

あなたは今、狐疑する時ではない。あなたはあなたの信ずる道に行かなくてはならない

Ａさん。

いつかいつしよに讀みました。ね。ブラウニングの"Statue and Bust."

その最後の句は何といひます。?。

"De te fabula". 他人ごとではないのだ。そ。

Ａさん。

いまあなたの惱む問題こそはあなたのことなのです。あなたはあなたの信ずる貴い道に生きてゆかなくてはならない。

あなたの肉體が滅びる樣なことがあつてもあなたの魂をけがしては下さいますな。ことは永遠の問題なのです。

勇ましく、强く生きて下さい。

春雨に大地を割つて伸びるチューリップの樣に。

あなたがどちらの道を歩むでいらつしやるか？　私はそれをきめることは出來ない。

ただ正しい愛の道こそは最後まであなたの友であつて下さい。（をはり）

學窓と別れるに際して（應募當選）

眞の幸福を索める

矢部しづ

十字路へ放り出される時が來た。

風の中の一片の花瓣のやうに頼りなく慄へてゐるのが、初めて世に出る若い女の姿と思つてゐる人がある。それを愛でてさへゐる心も見る。いつかさうした氣分に誘惑されて、女自らが、優しく弱く人に縋つてのみ嫋々と立つものになつてゐはしないだらうか。

嫁入道具の女學校を卒業したからと云つて、親の手から或る男の手へ呉れてやられる。御飯とお小遣を與へる人が異るだけ、今度は夫といふ人の便宜に身體を適應させられるといふほか、何の變つた事が女自身の上にあらう。やがてそのまま無自覺に母となつて終るのなら、何處に人間的の進歩や向上があるか。この境地から女性がもがき出でない限り其の魂は永遠に泥を塗られたままである。婦人の解放も參政も號びのみで消え失せるだらう。

私は進んで初めての十字路に立つ。吹き荒む風にも、無氣味に軟らかに撫でる風にも、はつきりと面を向けて眉ひとつ動かすまい。一日の三分の一を化粧に他の三分の一を稽古事に、殘りを有耶無耶に暮す親の許の生活よりは、現代文明の層の一粒の石塊となりなつて、社會に出でて働いた方が生甲斐があると思ふのである。女性を求むる方面は廣い。小學校では教師を、幼稚園では保姆を、會社では事務員タイピストを、更に虐げられたる階級の救濟には女性の力を待ち望んでゐる。女子の團體の活動が實質的に進渉して行く事は、幾分でも世の中が光に向いて行く事を意味すると思ふ。私は牢獄の看守や教誨師も婦人であつて、母の慈愛をもつて罪人に接し

たならばと空想する事がある。

許される時代に、社會に直面して生活しない事が、女を引込思案な個性の無い老い易いものにするのではあるまいか。

塵にまみれて街頭を行く時、あたら花の色をと惜しむ人もあらう。職業婦人と冷視する人もあらう。或はそれが同性から強いられるものであるかも知れない寂しさに堪へねばなるまい。婦人の握むべき寶はさうした榮ない道を突き進んだ涯にあるのだ。

兎に角、乏しいながらも經濟的に獨立を得る事が教養ある女性の急ぐべき道である。得た金で着物を作つたり指輪を買つたりして男を待つのは淺間しい自滅である。私は現實の獨立によつて精神の自由と確立を得たのである。經濟上の無力の爲に如何に女の魂が蹂み躙られる事か。自由なる魂をもつて、あきらかに自己を知り、自分の行く道を自ら切り拓いて幸福へ到達する事、かくて女性が眞に生きるのである。

幸福ときくと、私の心はあやしくおののく。幸福を求めてこそ私は十字路に立つ。

職業婦人なんか貰ひ手がなくなるよといふ言葉を私は悲しく聞く。男は未だ人形を欲してゐるのだらうか。立派な人間を玩具に墮して共に在る事は、男にとつても自分を卑しめてゐる事にはなるまいか。

私は只、相愛する人に捧げる爲に私の身心を磨き鍛へてゐるのである。相愛すると見究める至難さも、怠らぬ精進からやがて出來得る事となるだらう。

愛人との結婚、幸福は此處にあるのだ。

女はかくて奴隷と賣淫の生活を突き退けて、男を眞に生かす力となるのである。

愛の結婚者はお互に、個性に於て思想に於て自由を確保しながら、猶一體であつて新しき生を樂しみ生きる。若し一方の魂を見失つたならば、灰色の空虚の中へ突き陷されて、乾きつた心で酒肉に滅び果てるほかあるまい。二人の生命は永遠の愛によつて結ばれてゐるのである。

生の光は愛である。愛してあればこそ、女のわざは水仕事も子守もそのまま詩である。

愛によつて男女が結ばれる時、婦人の解放は自然のなり行であり參政も遠い事ではなくなるだらう。

相愛する魂を誤りなく見究め得る心、愛する人と愛に生き得る自由、誘惑に愛を汚したり見失つたりしない思想の堅固。私達は先づ此の力を把握しなければならないのだ。經濟の獨立を得て、社會を理解して。

初めての十字路に立つに、私の心は明るくおののく。

私が經濟的獨立を必要とする理由

後藤靜子

私は今、校門を出る日を前に控へて女性が經濟的獨立を必要とする意義を二つの方面から考へてゐます。一つは女性自身の生活の進化の爲でこれは積極的な意味を持つと思ひます。二つは女性が經濟的獨立の無能力者である事は、私共の生活の展開發達がどれ丈限定されなくてはならないかわからないからです。更に私共の精神生活なり物質生活なりが、私共の生存を保護してくれる親なり良人なりを失つた時、同時に絶たれなくてはならない所の不安と苦痛とを取去りたい爲です。これは對立的で消極的意義を持つものです。先づ私は第一の場合から考へて見たいと思ひます。

現在、女性生活の全般とされてゐるものは先づ總括的に家政と呼ばれたものでせう。この家政はこれを進化の過程を反對に原始時代へさかのぼる事によつて、ことごとく性的本能の發現に歸着せしめる事が出來ます。(衣食住は性的本能の延長で、これを總括して性に基づく生活と私は考へます。)勿論その生活樣式は原始時代のそれに比して遙かに人間化が行はれてゐるのは云ふ迄もない事ですが、事實其の進化の程度は、他の文化現象に比して遙かに低級なものであり、又其の範圍に於ても性的なるもの以外に一歩も開かれてゐない點に於て、それは極めて生活程度の低いものである事を認めなくてはなりません。私は女性の生活の基調を爲すものが、男性が重に外部的理性的であるに對し、重に内部的情愛的であると云ふ事を否定するものではないのです。男子が積極を本性とするならば、女子は消極性を持つ者でせう。然し女は消極性であるが故に生活も消極的に云ふことは出來ません。そこには充分な積極化が行はれなくてはならないのです。

假に人間生活の進化の過程を本能と理性と理想の三階級に分つ事が出來るとして、先づ本能は總て生物的なものであり理性は人間的なものであり、理想は神的なものであると考へる事が出來ませう。人間の生活は本能に出發して本能の滿足に歸するものに外ならないのですが、そこには充分な人間化が行はれねばなりません。人間生活の進化の價値は本能が人

間的理性によつて、如何に調節され、如何に内容附けられ、如何に方向附けられてゐるかの點によつて定める事が出來ます。かくて人間生活は無限に開かれて行くのですが、かく考へて見ると現在の女性の生活は果して、どの程度に進化してゐるかは疑問です。

　數世紀前且て社會生活の全體が性的生活を中心として行はれてゐた時代には、女は云ふ迄もなく男子の生活全般も性的生活を中心として行はれてゐたのですが、それ以後の驚くべき進化は男子の生活をして性的から解放して無限大に伸張せしめたにかゝわらず女子の生活は尚、性的生活をのみ全般として行はれ、今日に到るも未だ、この殼以外に一歩も出る事が出來ないでゐるのです。

　その間には多少の内容の變化は行はれたに相違ないのですが男子のそれに比すれば全く停滞の状態と云ふ外はないのです、それをもつて女性の生活全般であると考へられて來たのは個定觀念から割り出されたものであつて、理由のない附題に過ぎないものです。育兒、家政はあく迄、女性の眞相に相違ないものでせうが、それを生活の全部とする事は出來ません。女性の生活は内容も範圍も將來無限大に展開されなくてはならないものです。それは女性の生活の轉回ではなくて内容の擴張伸展です。その爲には女子の生活も、それが男女の本質的な相違に立脚する生活に屬するものでない限り同樣にあらゆる方面に、發達さるべきものであると思ひます。經濟上の獨立能力を得樣とするのも實に其の一部に過ぎないのですが、只經濟的獨立が現在の女性に、より重要な意義を持つと云ふのは次に私が考へ樣とする第二の意味が加はるものであるからではないか、と思ひます。

　第二の意義とは女子自身の生存の權利が他人によつて保證されてゐる爲に、その生活は、いつ破壞されぬともわからない不安な狀態にある事で、更にその爲には生存の自由な發達がどれ丈障害され限定されなくてはならないかといふ苦痛の生活から獨立した人格的生存の生活に入る爲に女性の經濟的獨立は必要とされます。

　男女の生活が性的生活を中心として行はれてゐた時代にあつては、女子の生存は確實に男子によつて保護されてゐたのですが、現代の樣により複雑な社會事情が生活の中心をなしてゐる時代、特に經濟關係によりて社會が形造られてゐる樣な時代にあつては、やゝもすれば男子自身の生存さへも拒絶され樣とさへするのであつて、まして他人の生活の保障等は到底容易に考へらるべき事ではないのです。この事情は當

然女子をして性的生活以外に導かねばならない所のものとなるのであつて、此所に生存の爲に、職業を必要とする生活がおこるのです。又、よし生存の安定が保たれてゐる間は、職業能力を持つ必要はないとしてもそれが萬一失はれた場合には當然女性の生活は破壞されなくてはならない所のものであるとしたなら、この消極的意義の爲にも常に私共の獨立し得べき順備はほどこされてゐなくてはならない事です。又私共は加様な異常時を豫想する消極的意義の外に、人間が一個の獨立した人格的生活をなし得る爲に經濟生活の獨立者である事を必要とします。現代迄の女性の大部に經濟的獨立が不能であつたといふ事は女性の持つ大きな缺陷であつて、女性の生活が總ての方面に限定されなくてはならなかつたと云ふのは皆この缺陷の障害に外ならなかつたのです。即ち從來の女性が一個の人格的獨立者として資格のない者であつた事を證明するもので法律上に未青年者と同時に婦人が未能力者として示されゐたのも、この點から考ふればあながち不思議とも思はれない事かも知れません。然しそれは女性自身の大きな恥辱ではないでせうか。私共の伸び様とする生活が「養はれてゐる」爲にどれ丈制限されなくてはならないか。女性の生活が何等の障害を受くる事なしに自由に活動される爲に、そして一個の獨立した人間となる爲に、經濟上の獨立をなす事は必要な條件をなすものです。よし將來男女の生活が分業的に區別されて女子が經濟的獨立の能力をもつ必要がなくなり、しかも「養はれてゐる者」の觀念が失はれ再び現在の樣な男女の生活が蹴り來ると豫想するとしても、それは「いつでも、完全に獨立し得る人間」としてのあらゆる内容と資格を抱括したものでなくてはならない筈だと思ひます。

かく考へて見ると女性が經濟的獨立の能力を持つといふ事は女性生活の進化を期する爲に重要な意義をもつものとなつてまゐります。女性の生活を伸張せしめ樣とする事は決して女性のみの持つ世界が從來不安と苦痛であつたが爲に、この世界から逃れて苦痛無き世界に享樂し樣とする樣な享樂的立場に立脚するものではないのです。生活の自由と解放とは來るべき時代を享樂して受取りたいといふ樣な、そして苦痛なき世界へといふ樣な、そんな浪漫的な憧憬から叫ばれるものであつてはならないのです。來るべき時代はより以上の苦痛と奮闘の時代である事を私共は覺悟しなくてはなりません。女性の生活をより複雜により深刻に内容附けて行く事によつて初めて女性自身の生活の進化はもたらされるものではないでせうか。

一つの仕事を見出して

木村絢子

春が來てふつくりとした土の上に柔かい陽をうけて芝草が芽を出すやうに、今私の胸はかぎり知れぬ希望で一杯です。そこには美しい詩のやうなあこがれもありませう。しかし私の希んで居るものはもつと〳〵貴い意義ある希みであると思ひます。女學校を出て春の野の十字路にたちて私ははるかなる行手にむかつて何かしら祈りたいやうな氣がいたします。意義ある青春の日を何ゝせずに暮らすのは如何にも殘念に思ひます。人生の春は再び來ません。寶玉のやうに貴い青春の日を無爲に過す事は一分でも惜しい氣がいたします。私の心は若やいだ輝きでみち〳〵て居ります。結婚するまでに私たちはしたい事が山程も澤山あります。自分自身に與へられた自由な日を自分のしたいと思ふものゝために費したいと思ひます。今私たちの前には洋々たる人生といふ大海があります、私たちは自分の道を見出すためにどういふ風に舵をとつて行くべきでせうか。そしてはるかなる希望と理想に達する事が出來るでせうか。

結婚するのが果して幸福であるか否かを私は信ずる事は出來ません。結婚して不幸に終る人を見るにつけ何だかさみしい氣がして來ます。人間の幸福といふものはその人自身でなければわからぬものですが、しいたげられた生活はしたくありません。自由に伸び〳〵と生きて行き度いと思ひます。私はぐん〳〵手を伸ばして大いに働いて見たくてたまりません　自分で働くといふ事はどんなに愉快な貴い事か知れません、娘時代は親の手にすがり結婚しては夫にすがつてあんのんと暮して行くのは實に無意味な事だと思ひます。人間は女でも何か知ら自分の仕事をもたなければならないと考へられます。職業婦人として世に立たなくとも一つの職業をもつていたらいゝと思ひます。そしてその仕事について熱心に研究して行きたいと思ひます。そして常に向上心をもつて進んで行く事が出來ます。結婚して夫が貧乏だからつまらないなといふ不平をよくきゝますが、夫のわづかな日給で不平をいひながらあんをんと暮して居るより、その不平をすてゝ自分の仕事を見つけて愉快に暮らしたらいゝだらうと私はいつも思ふのです。そしたら夫の職業にも理解をもち不平なんていふのが濟まないと思ふやうになると思ひます。私は貧しくと

も愉快に面白く暮らして行きたいと思ひます。

私は結婚よりももつと〳〵勉強したいと思ひます。私の心はかぎり知れぬ研究心にもえて居ります。私はこれからの女は女學校を出てお裁縫に通つたりお茶生花などを習つたりする必要はないと思ひます。それらは女學校時代に習つた形式だけで一通り心得ておけばよいと思ひます。それよりも自分が職業とする事が出來る一つの仕事をおぼえておいた方がよろしいと思ひます。そして幾分なりとも社會のためにつくしたいと思ひます。自分が一つの仕事をもつて居るといふ事はどんな場合にもどんなに力強いか知れません。女政客にならなくとも政治に關して相應の意見ももつやうになり度いと思ひます。人生に出てどんな人とでも自由に話の出來るだけのひろい知識をやしなひたいと思ひます。私たちは結婚前に出來るだけの見識をやしなひ心を練つておきたいと思ひます。私たちはどんな場合にも研究心を失はずにゐたいものです。學校に於いて私たちは色々な知識を得ますがそれを直ちに應用する事は出來ませんが、學校を出てからは色々の意味に於いてその知識をあらゆる方面に應用して行く事が出來ると思ひます。勉強したいといつても必ずしも上の專門學校に入つて勉強しなければならぬとは限りません。社會に出て一つの仕事をもつて働きたいと思ふのです。自分の趣味を職業化して研究して見たいと思ふのです。それは私にとつてどんなに〳〵愉快な仕事であるかわかりません。それは一時的の仕事でなく永久の研究でありたいとねがつて居ります。私は何處までも眞劍な努力をもつて進んで行きたいと思ひます。そして女の從來の平凡な生活を開拓して行きたいと思ひます。娘時代が人生にとつて一番貴い價値ある時代です。私たちは人生に廣く知識を求め社會的な見識を得たいと思ひます。そして多くの人に接する機會を得て常識を發達させたいと思ひます。それからもう一つ語學を學ぶ事は大いに必要な事と思ひます。異國の人達とも自由に自分の意見をかはす事が出來ますし外國の事情にも明るくなります故英語は勿論フランス語も出來たらなほよいと思ひます。外國の小説位はよむ位の力があつたらよいと思ひます。出來る事なら若い時結婚前に勉強のため外國に行き度いとさへ思ひます。あちらの自由な明るい思想にふれて靜かに研究する事が出來たらどんなに悅ばしい事でせう。あちらに行つてもやはり一つの仕事をしながら勉強するやうにしたいと思ひます。私はいたづらに花やかな生活にあこがれては居りません。貧しきなかに趣味をやしなひ愉快に暮らしたいと思つて居ります。不平をす

たゞ自分の仕事のために最善の努力をつくしたい考へです。はるかなる希望にむかつて出來得る事をつくしたいと思ひます。たとへ自分の仕事が不成功に終らうとも私は失望せず何處までも自分に出來る最善をつくしたいと思ひます。それで私はよいと考へるのです。それで私は幸福だと思ひます。
私は自分の行手にむかつてしづかに御祈りいたしませう。そして人生の青春の日を讃美いたしませう。

初めて十字路に立つ心

村瀬光枝

□

谿の直ぐ下を流れてゐる小川の岸に四度目の連翹の花が咲くのも程なくである。つゝましやかな品のいい黄ろい花である。私は今日も試驗がすんでから一人で花の廻りを往來してゐた。そして今日も一日あのことを思ひ迷つてみる。卒業してから何をしようかと云ふことであるが、迷へば迷ふ程色々な道が、私の體を圍んで放射狀に走り出す。それらの、どれをしつかり捕へて自分の力のありつたけを試みようかと考へてゐた時、何時の間に巣くつてゐたのであらう。今日は亦思ひがけないニィチエの言葉などを憶ひ出してゐた。（自己の名のために嘗て一度も自己自らを犧牲にしなかつた者があるであらうか。）と。現代の世の中には、政治者流は勿論のこと宗教團體の中にさへ、如何に夥しい虚僞が、虚名の柩の中に自己自らを葬つた人々によつて繰返されてゐることであらうか。あゝ併し、赤裸々な自己を忠實に生かすといふことは亦容易な問題ではない。

□

赤裸々な自己を表現するといふ意味を、本能の惰性と人類の長い因襲とに、赤くも黒くもまみれ染んだ自分の姿を、その儘、露出するといふ意味に解釋してゐる人が、ありはしないだらうか。

「私はどうせこんな性分なんだから」と、それによつて、自分のやうな者には、どうせ器用な虚飾や迂曲は出來ないのだからといふザツクバランな口調を、私は、これまでに幾度聞かされてきたか分らないが、眞の自分を表現するためには、先づ眞實の自分を、しつかり把握するために苦しまなくてはならぬ。

私の見る眼は餘りに隣人の眼と酷似してゐる、私の感情は

母親のを生寫しで、私の批評はある倫理の教科書と同一である。それでゐて、私は尚私であると言ひつのらうとする曖昧を自ら怪まないのであらうか。模倣は眞相ではない。一枚の青い樫の葉を見る、嬰兒をあやす、路を歩く、どんな小さな判斷や動作の中にも、まぎれもない自分の眞相をまざ〱と見出せる程、いつはらない自己の生活を始めることに努力をしたいと思ふ。それが、これからの私の生活の態度でありたい。

□

學校へ行けば學校、家へ歸れば家で、上に立つ人から色々な理論や、訓戒を聞かされる。その度に指導者の熱心と、鐵のやうな意志に敬服する。時には恐れをなすこともあるが、私達の考へるだけでもあそこからは水が洩れさうだと思はれる理論で強いられることは嫌ひだ。

私はこれから世の中へ出て、人を敎へる立場に立つにしても、双六の賽のやうに振り方によつてどうにでもなるやうな理窟はなるべく云はないやうに努めたい。理窟から理窟へくぐりぬけやうとあせつてゐると、大事な藝術的情調にも觸れられなくなる。頭が明晰であつても、概念の幽靈を離さないやうな人なら、寧ろ頭が惡くても、直感のきく冥想の出來るやうな人が懐しい。

「神の概念は神ではない。神の概念は自己のえらびに任せて自己の中に起すことも起さないことも出來る。それは余の求むるものではない。余の求むるものはそれなしには生きられないやうなものである。」とトルストイが言つたが、それなしには生きられないやうなものに何時私の心が行當るであらうか。それまでは私の心はいつも十字路の迷ひを繰返すかも知れない。

□

私はよつぽど疑ひ深い人間である。

世の中の路といふものはある程度までは、自分の素質や性格で選ばねばならないが、其の他は、自然の成行に任すより仕方のないものだといふことも知つてゐる癖に。それから、この道から行けば都合がいいとか惡いとかいふことも云へないもので、都合がいいとか、賑かだとか思つてゐた道が、却つて落寞として寂しさに、泣かされる場合もあらうし、寂しいと思つてゐた道で、案外よい友達に出逢ふこともあるもので

ある。それも知つてゐる癖に、どうしてかう心が定まらぬのであらうか。昨日の日誌に次のやうなことを書いておいた。自分の心とも思はれぬ。

――此世の中から、認識の假定を取去つたならば。あとには唯底なしの懐疑が残るばかりである。迷へば迷ふ程迷妄の霧は濃く、疑へば疑ふ程、懐疑の葛はしつこく手足にまとひつく。どれだけ疑ひ、どれだけ迷つてみたところで、つまりは、人並な認識の世界に目をつぶるのだと思ふ時、私は今更のやうに、早くから地に落着いて、静かに微笑でゐる信者の目を思ひ出す。

形の世界もこれと同じで、結果を疑ひ、失敗を恐れてゐては、決断の生れる時がない。百足蟲はどの足から歩き出したら、都合がいいかと思ひ迷つてゐるうちに、たうとう歩けなくなつたといふ話がある。（三月一日××寮にて）

人生と人間

×

朝に思ひ晝に働き夕に食ひ夜に眠れ（ブレエク）

×

眞に愛してゐる時人は過ちを犯しはせぬ（アナトールフランス）

×

靈魂の唯一の道は前進にある（メレディス）

×

不健全な善には健全な惡よりも害の多いことが屢々ある（メエテルリンク）

×

口だけで眞面目になるのは、口だけが眞面目になるので人間が眞面目になつたんぢやあない（漱石）

×

幸福の意味を知ることは幸福を味ふことよりも魂にとつて更に必要である（メレテルリンク）

×

貧乏のため、滅びると同じ位の多人数は、富のために亡びてゐる（ウェルス）

×

世の中は纒つたものではない、冗慢極つたものだといふ人がある。それは同意してもいい。しかし自已が世の中を觀　する態度がきまると世の中も案外締めくゝりのあるものである（漱石）

美術一夕話

テスト研究の權威者が「春信論」を書きかけてゐて、ボストンにもう一遍行つて見ねば、春信論がまとまらぬとこぼしてゐました)

松本亦太郎博士はブラッセルで開催される萬國學士院會議に、我國を代表して三月六日の白山丸で横濱を出發されました。□その出發前、本社のささやかな送別會席上で美術に關する大變面白い話がありましたから玆に抄錄することにしました□日本の浮世繪を研究する爲めに渡米すると云へば笑ふ人があるかも知れないが、その實そうではなくて全く日本で浮世繪を見たいと思つても一ケ所で五六千枚と纏まつて見られる所はないが、ボストンでは一ケ所に日本の浮世繪だけで五萬枚もあるさうだから驚くではありませんか。□そしてそのうち三萬五六千枚はチヤンとカードに載つてゐます。□この浮世繪を見るだけでも、二三日の日子を要するのですが歌麿や、春信の研究が日本では遂げられぬとは嘆かはしいことです。(現に日本で浮世繪研究の第一人者が「春信論」を書きかけてゐて、ボストンにもう一遍行つて見ねば、春信論がまとまらぬとこぼしてゐました)□博士は話を次いでこれはたゞ單に浮世繪ばかりではないので、支那の美術品、就中書畫、骨董は大抵は米國人が仕入れてしまひました。又、現在支那に殘つてゐる品物はもう富豪と官衙の手にある一部分だけで、これとても早晩、亞米利加人の所有に歸するのかと思へば何だか悲しいことです□今のうちに古い書畫なり骨董なを買ひ集めたらいいと思ひますが、何にしろ先だつものは金たりけりで困つたものです□晉に、支那一國の美術品ばかりでなく我國の美術品までが、大體はボストンやその他の亞米利加の都市で見られる狀態になつてをるのだからお互ひ日本人として考へなくてはいけない者ではないでせうか□政友會の山本悌二郎氏は見かけによらぬ不思議な人で、支那書畫の散失を恐れて十數年前からいろ〳〵蒐集してゐるのですが、現在では數萬部とかを集めてゐるさうです、そのうちには珍籍も多いとか傳へられてゐます□日本にゐては日本人の正當な研究も出來ないが、一旦ボストンの浮世繪館に行つて見れば、浮世繪を通じて日本人の輪廓が判然してくるとは全く燈臺もと暗しです。□私は日本の富豪たちが此邊に留意して、何とかまとまつた金を集め、そして支那の美術品を集めてもらひたいものだと思つてゐます□そうでなければ東洋のことはもう東洋で研究が出來ないみじめな運命に陷るのです。今でも、もうそう云ふ運命に陷つてはゐるのですが。□それから支那の陶器や、滋器の流出にたいしてもおもしろいお話がありましたが紙面の都合で今回はこれで擱筆します。□次號から「美術一夕話」を每號連載することにしませう。



すすきの蔭（童謡）

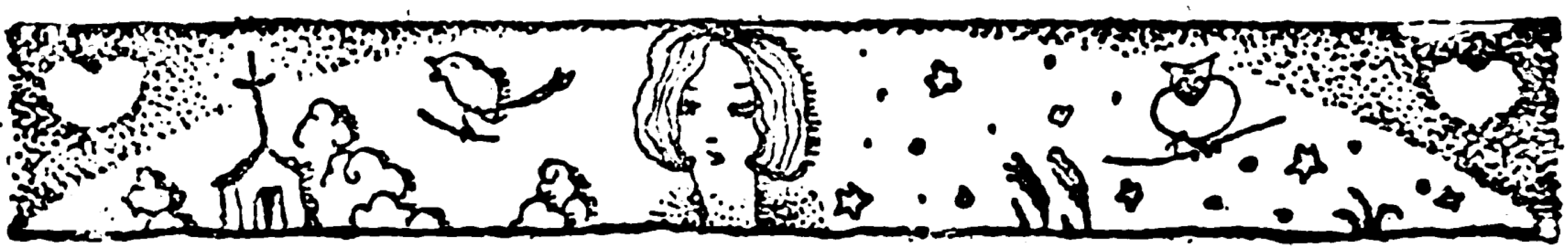
野口雨情

すすきの蔭で
ねんねこんぼ
産んだ

ねんねこんぼ
お月さんは
里にやつた

ねんねこんぼ
可愛い
わが兒は可愛い

お月さん
ねんねこんぼ
見に往つた



ねんねこんぼ
寝てた
泣き泣き寝てた

ねんねこんぼ
泣くな
里子にや遣らぬ

すすきの蔭へ
今日から
踊ろ

お月さん
ねんねこんぼ
抱いて言つた

（註、ねんねこんぼは赤ンぼのこと）



花どきの憂鬱

春碧

室生犀星

おとなりのお嬢さんは一鉢のシクラメンを持てゐる。けふで二週間も日が出ないので満目の雪は皚々としてゐる。が、一日のうちに五分か十分くらいの日がさすので、お嬢さんはそのシクラメンの鉢をあわてゝ日かげに當るのだ。唇のやうな色の、小さい花だ。大方こんなよはい花だから日南へ出さないと可哀想だと思ふのだらう、二階へ日があたると二階の手すりへ持て行き、階下へ日が廻ると縁の方へ出すのだ。そして温室ものゝ鉢はこのシクラメン一つだけだらうと思はれる。さういふ一日に五分か十分の日かげに當てやうとするのが、こちらの二階からも見える。

こちらの二階で、わたしはわたしで五分か十分、或ひはもつと長くて十五分くらゐの日かげが射すと、机のそばからいざり出て、湯泉瀧にでも打たれる湯治客のやうにその珍らしいお日さまの温かい中にうづくまるのだ。ひかりは有繋に

あつたかいが何處か水のやうにうつすりと冷つこい――。が、そのお日さまは間もなく消えてしまつて、そらの色が灰ばんで、ばらばらと霰が來るか、雪がちらほらし出すと、もう一分間のうちに暗澹たる吹雪になる。どこから吹く風かは知らないが、うづ巻いて吠え出す。それ故おとなりのお孃さんはすぐ二階の手すりへ走つて出て、シクラメンの鉢に雪をあてまいとする。よく見えないが寒さにあてられたシクラメンの花はいぢけてしまつて、近寄つて見たらその紅い色よりはお孃さんの唇の色の方が、もつと冴えてゐるだらうと思はれる……お孃さんは怨めしげに空の色を眺める。しかし今日はこれきりの日かげで、早くて二三日は見られないだらう。――――三月も近いのに何といふ氣まぐれなお天氣だらう。

が、わたしの空想の或る部分には、東京の四月ごろの濁つた曇天がよく思ひ起され、家ぢゆうのものが外出をしたあとで、ゆつくりと一人で留守をしたことなどを考へた。べつに讀み書きをするでもなければ又何も爲ることがなく、のんきに、空を眺めに庭へ出たり、菊の根分をする時分にはまだ早いと考へたりして、だらしない無爲の一日を送つたりした。そしてそのころ書いた文章の中には、上野の櫻を障子一重に閉め切り……などときづく風流がつたりしたものだが、それも何だが、むかしの事で、いまはそんな空想さへない。滿目の雪のなかで私のゆめ見たり樂しんだりするのは、おとなりのお孃さんと同じい五分か十分くらゐのお日さまの日かげを慕つてゐるばかりである。お孃さんはシクラメンの爲めだが、わたしは自分のからだに柔なお日さまの光がほしい、それだけ違つてゐる。たとへば二階へ鉢を持つてあがるまでに最う消えてしまふことのあるお日さまだから、實際、にくらしい程消え脚が早い――――。

花どきの憂鬱などといふ心もちは、わたしより詩人萩原□太郎の詩でも讀んだらその心持ちは何より早く感じるだらう。萩原は櫻の花がぱつと咲いてゐる木の下へ近よると、何とも云へない明るい哀しい氣がするさうである。わたしも萩原のおかげで櫻の花が好きで、ぱつと咲いて一日づつその色の褪せてゆくのを眺めるのが好きだ。散るのは汚ない。しかしあの褪色ある春花のかげには、全く日本的な、女の人の艶色がさめてゆくやうな冴えたいい色がある。女の人の艶がうせかからうとする年齢は全く鋭い。

が、今はこんな滿目蕭殺たる雪景のなかでは、何一つ春らしいものすらない。強いて言へばお日さまを浴びてゐる五分

と十分、あるひは十五分くらゐに過ぎない、それも裏の方が冷たく、しかも何處か沸かし立てのお湯のやうに上べだけが温かいのである。——…だが故郷で春を暮らすのは十二三年振りだから、東京のやうな少々病的な、あんなに重々しい春は感じないだらう、わたしの覺えてゐるだけでも故郷の春は明るく澄んでゐて、平明な海の上を眺めるやうな靜かさがあるやうに思ふ。さうして今年は十二三年ぶりであるために哀情切ないものがあらうし、又、愉快な、比類のない子供らしい氣もちにもなることだらう——。

老婆の踊

前田夕暮

起きて雨戸を繰りあけると海上滿目の日光である。空は言ふ迄もなく霽れてゐる。波のいろの紫がかつた濃さは「ああ春だな」と思はしめずにはおかぬ。朝食の膳に對つて、青い三つ葉のおしたしを箸のさきでつまみながら、今日は酒を持つて八景原に行き、そこから船で城ケ島に渡らうといふことになつた。同行はK君T君自分とそれから臨川閣の女中と四人である。

吾等一行は日陰の畦に消え殘つてゐる春の雪を踏んだり、時には枯芝の上に僅にしろく水ッぽいのを口に含んだりして、椿の花が風に吹かれてゐる八景原海岸に行つた。そして波がひたひたと寄せる岩の上に腰をおろして、青い海草を拯ひあげて肴にしながら、小さな、そして、簡素な酒宴を開いた。忽ちにして吾等はよい程度に醉つたので、酒の空壜に椿の花を挿して、用意してあつた小船に乗つた。風があつて波がしらが少しく白い。その上を吾等の船は傾いて去る。椿の花を挿した壜が幾度も倒れさうになる。その都度あわてて保護したのはM君である。船頭はそれを見て心持宜さゝうに笑つてゐる。よくみると空だと思つた壜の底の方にはまだ山吹

いろに殘つて、どぶりどぶりと搖れて居る。
「船頭さん、城ケ島に着いたら、君がそれを飲ることだね」と言ふと船頭はなほも心持宜ささうに笑つてゐる、吾等もまた聲をあげて笑つた。
沖の方には伊豆の大島が霞んでみえる、といふよりは小雨でも降つてゐさうな光景にみえる。
「沖の小島のちらちら雪はすぐに小糠の雨となる」といふころだねと、話して居るうちに、もう城ケ島に着いて仕舞つた。吾等は船頭と椿の花を挿した壜とを後に殘して、船からあがつた。船頭は矢ツ張り心持よささうに笑つてゐる。
「おい、ほんとにそれを飲つてもよいよ」と崖の上から呼ばると、一層彼は心持よささうだ。
吾等一行は暫らく貝類を拾つてゐたが、やがて枯すすきのなかの急斜面をのぼりはじめた。それも十分か十五分で上まで登れた。みわたす限り一面の枯すすき原である。日がぽつちりと空に赤い感じがする。吾等は何といふことなしに默つて薄のなかの小徑を辿つた。日がぽかぽかとあたたかい。いささか睡くなつた。
すると、どこかで、微かな音が、一種のリズムをもつて聞えてくる。少し行つてから頸をもたげてみると、一人の老婆が薄を刈つてゐるのだつた。
人一人居らぬと思つたこの島の薄野原に、ぽつねんとして老婆が一人後向きになつて薄を刈つてゐる光景は、ひろい空と、二月はじめの青い海とを背景にしてゐる丈に、吾等の心に一層觸れて來るのであつた。老婆の方でも吾等一行を氣がついたとみえて、薄を刈りさして、つくねんと動物園の猿がする樣な坐りかたをして、此方をみてゐる。吾等はそばに行つて、
「婆さん、こんなところに、一人で薄を刈つてゐて淋しかないか」と訊くと
「寂しいよ」と平氣で答へる。
「さうだらうね。」と言つたが、もう話す題材がなくなつて仕舞つた。そこで、老婆を驚かすつもりで、
「婆さん、お前さんにも美しい時が一度はあつただらうね」といふと、あたりまへだと言ふ顏をしてゐる。
「それならね、その若い頃の踊を一つ踊つてみせてくれないかね」
吃驚するか、それでなければ人を馬鹿にするなと怒るだらうと思ひの外、暫らく、眼を閉ぢて考へてゐた老婆は、突然、莞爾として

「踊らうよ」と言ふかと思ふと立ち上つた。そして、鳥渡媚態を作つて、
「つくばねのお、みねよりおつる……みなのがアはア…………」
と、みよ、日の光明くながれて、ひつそりとした島の眞晝間、一面の枯れすすき白く光るなかに、遠く去つた青春の幻想に惑はされて、甘く樂しかつた追憶に醉ひながら、恍惚として踊つて居る老婆の姿！
自分は枯草の上に腰をおろして、その姿を眺めてゐたが、言ひ知れぬ寂しさを感じたのであつた。

花偸人

柴山武矩

椽先の日向に出てゐると、とろとろと、といつて、睡くもないのだが、瞼が重かつた。氣壓の加減だと思つた。首筋から、双肩にかけて、絶えずけおもさが感じられた。
『けんと——おねがひ——』
澄み透つて明るくはあるが、ひゞきの、いかにも弱い、女の子の聲であつた。
此處に移り住んでから、私はよく、その言葉を、家の近くに聞いた。子供達の遊びの一つに違ひなかつた。隱れん坊に類するものではなからうか、と、私は思つてゐた。
『けんと——おねがひ——』
さう呼びながら、女の子は今、隣の生垣の要冬青の葉でも摘み摘み、私の家の方に來るらしかつた。優長な足どりであつた。
ほんの、眼隱しに過ぎない黑塀の下の方は、たゞ、細い横板が下を隙かして、二枚ほどわたしてあるだけで、前の露路の、こちらの端が見られた。
私はよく椽先で、膝頭を抱へて、塀の下を行交ふ下駄を見てゐた。日暮れ時になると、殊に、さまざまの下駄が、そこ

を行交ひした。此の裏の方の、百軒長屋の女房連のが、一番多いらしかつた。日和下駄と板の樣に摺り減らされた駒下駄とが、片ちんばにすたすたと、小刻みに通つて行つたりした。時たまには、杖が出て、下駄が片方出て、また杖が出て、ゆつくり通過するのもあつた。圓味のある白い足に、緋の燃ゆるやうな鼻緒の駒下駄を穿いて、心かろげに歩いてゆく娘のは、あまり見かけなかつた。

先刻から、人つ子ひとり通らなかつた。道路は、白く乾いてゐた。全てのものがまどろんでゐるやうな靜けさであつた。其處へ、塀に摺れ摺れに、子供の下駄が運ばれて來た。から、ころり、と。小さな足は、雛子のそれのやうに荒れてどす黑かつた。

私の家の玄關は、道路から一間ばかり引込んであつた。入口の格子戸の根方に並んで、ちらほらと、雛菊が咲いてゐた。「行つてらつしやいませ」とか、「お歸り遊ばせ」とか、云ふたぐひの、優しい言葉の送り迎へを受ける由もない獨居の、このごろの朝門出に、また、歸りに、心を惹かれる唯一の花であつた。

からり、ころり、と、小さな汚い下駄が、私の家の門口を過ぎかけて、ふと、玄關の方に運ばれて來た。こんな所に隱れる氣だな、と私は思つた。女の子は、格子戸の前に、森として、立つてゐた。その汚い足から、私は塀向ふのその子の容貌を描いてみた。唐黍の房のやうな髪の毛、赤くふくらんでてらてらした頰。それから、眞中の、青黑い鼻汁。他の子供が、探し尋ねて來るけはひもなかつた。其處でもう一つ、「けんとーおねがひー」をやるかな、と思つたが、やらなかつた。すると、綿の食み出た着物の袂が、地についた、と見ると、赤い、小さな手が出て、ひたと、雛菊の花莖をつまんだ。

『こらあツ！』。瞬間に、汚い小さな下駄が、大風にでも遭つたやうに、其の場から、吹飛んだ。思はず、大きな聲が出てしまつたに、違ひなかつた。自分の腹にも、こたえたやうに思へた。前の家にも、隣の家にも、裏の家にも、何事かと思はせたに違ひなかつた。獨居の主人が移り來て日數も經ないのに、と考へると、うら恥かしさと、淡い悔ひ心がおきてきて、人知れず顏のほてる思ひがした。頭でも抱へてゐたかつた。

暫く經つてみると、また、全ての具象が睡ろんでゐるやうな、眞晝の靜けさの中に瞼の怠るさを感じてゐる自分であつた。

『けんとーおねがひー』

何處か遠くから、また、あの聲が聞えて來はすまいか。それが俟たれるやうな氣持が、いつか、私のどこかに、深く、根ざしてゐた

春の頌

深尾須磨子

歡樂におごる人をのせて、
たつかげろふの道よ、小徑よ、
ゆゑ知らぬときめきに亂れた足もとが、
ともすれば雨をふむ、雨をたどる。

手ごたへも輕くぬひつぶした、
櫻ちらしの、帶もやうの、
うすむらさきの大とばりの、
このまぶしさといふものは。

夫人よ、お立ち下さい、
あかね色のろうぶの裾ながく、

織手の扇もさまよきほどに、
それ、やさ肩に蝶が舞ふ、舞ふ。

かすかにも蒼ざめた頰をそめて、
古巣をそとに
寂しさよ、
お前もたのしむのか、この春を。

とぼしいいのちの酒甕にも、
今こそ滿ちて香る美酒、
ああ、醉へよ、醉へよ、
ただ醉へよ。

懈いものにはまかせたさの手を、腕を、
高く高くさしのばせば、
波とゆらめく光にすけて、
うれしや、痛いほどにも生がをどる。

愁ひの宵

果したがねがひのうれしがなしさに、
わななく花、散りやまぬ花。

いだきもあへど、すがりもあへど、
なほ足らぬおもひを寂しみ。

ああ、
今宵天地に人二人！

死なうとて、生きやうとて
美はしきこの罪ゆゑに。

あれ、かぐはしいそよ風が、
つひのほろびをささやいて鳴る。

あねもねの部屋

みづから呼んで、みづから答へて
寂しさは一人遊びの子供心
重いかつぎをぬぎすてた今だのに。

汗ばんだ肌にうすぎぬの緋がにじんで
ほてつたうなじに戯むれる
いたづらな風の口づけ。

見つめてもかひない語らひの瞳に
味氣なや、赤銅の花瓶
またたきだにせぬ。

むなしさよ、高鳴る竪琴の音の
われとわが手が
奏でてはたてるそのしらべの。

ああ、晩秋のあねもねの部屋
おきどころもない身をこがして
紅蓮地獄の焰の恋がふりかかる。

櫻の花びら

荻原井泉水

春と云つてもまだ寒いものゝ、猫が赤子のやうな聲を出して、屋根から屋根を戀ひわたる頃から、一種の憂欝が暗い夜の隅に湧きはじめる。

戀猫の夜は惱ましく雪持つ木さへ

空には青い星がギラ〳〵と光つてをり、地には、所まだらに白い雪が柔かいぼかしの調子を作つて、版畫的の情趣を出してゐる夜は美しいが、餘寒がしん〳〵と身に泌みるやうで獨り灯火の更けた机に倚つて、原稿罫紙の一劃一劃に一字一字を嵌込んでゐると、頭の上の亞鉛屋根がペコ〳〵と猫の足音を傳へてゐるのも淋しいものである。

殘雪といふものも侘しい、近所の湯屋の煤烟などでぢきに汚れて其白さが薄鼠色になつたまゝ、又は二階から無頓着に捨てたらしい女のすき毛などを散らして、幾日も幾日も日陰の庇などに殘つてゐる。

雪がいつまでも殘る屋根の下で呟いてゐる。

それでも、少しづつは融けると見えてブリキ樋の下にジョンジョコ〳〵と憂欝な音を立てゝゐるやうな日、東京も私の住む場末の麻布あたりでは、人間生活の重たい息苦しいやうな氣分が春の低い曇り日の空から垂れかゝつてる。

田舍にあつても亦、春は淋しい。遠くの、山を燒く匂ひが、風に傳はつて、しみ〳〵と嗅がれ、古い袋に入れてある種の事が思ひ出される。結婚の吉日でも選ぶやうに、暦が取出され、爐邊の火がチロ〳〵と黑く光つた板敷に照りはえる。

肥くさき夜風に蛙めざめ鳴く

土の底に目を覺ました蛙がグツ／＼と鳴き出す。と何かじつとしてゐられないやうだが、さて田舍の人達のする事はきまつてゐる。誰もが朝になると、そは／＼としたやうに、鍬を擔いで野へ出てゆく。そんな所の座敷を借りて私と妻とは暫く住んでゐた事もあつたが、さうした家には東京をあこがれてゐる淋しい顏の十四五才の少年などが必ず居るものである。

地の底から春がぐんで來ると、若い草が萌えはじめる。初めて淡い髭の生える年頃の少年の美しさといふ事をプラトンが書いてゐるが、三月の野にはそのやうな人なつかしい美しさがある。

春風の野に出て君に語る事

此は私が二十年程前に作つた句である。僅かに青みかけた土の上に寢轉んで、遠い遠い夢のやうな世界にあこがれたり、親友にも話すことの出來ないやうな秘やかな心の事實に惱んでゐたりした少年時代の自分を懷ひ起こす。白い藥玉のやうな雲が一つ二つ、靜かに浮いてゐるのも麗かな中に淋しいものである。

木の芽がぞつくりと吹き揃ふと、私は殊に此頃でも、平生の憂鬱がだん／＼深くなることを感ずる、而して自分ばかりではなく、大抵の人が、物思はしげな顏をしてゐるやうに見える。

人に親しく芽ぶく木よ人は愛あり

いや木でも草でもが一種の惱ましい感情をもつて息づいてゐるやうにすら見える。此の草木の感情は一體何處から來るのであらうか——獨逸の作家の誰であつたか、早春の柳の枝を折ると、白い汁が垂れる、そのなま／＼しい命の匂ひを書いてゐた。此頃の植物にある憂鬱な心は、其もの丶內に生起する新しい生理作用の內的な分泌の爲めであるやうに思はれる。

櫻が吹き出すと、私は猶更、底の知れぬやうな淋しさに引きおとされる。昔の人は、花の散り易い事を感傷したものだつたが、私の心持は其とは違ふので、枯枝に薄赤い紙片を貼りつけた裝飾のやうな其花片の感じといひ、其を樂しんで浮かれてあるく人間達の物に憑かれたやうな心持といひ、私の心を外の光の中へ誘ひ出すよりも、寧ろ、內に深く隱れさせるやうな、或る刺戟を與へられるのである。

櫻まんかいに夜明けてくもれり

然し、私が櫻に對して持つ憂欝な感じは、私が子供を失つた時の追憶が潜在的な連想となつて其をたすけてゐる爲めかも知れない。妻のはいつてゐる産科の病院に叔父が小さな柩を買うて來た、妻は産室に横はつたまゝ身動きも出來ないまゝ、死兒が柩に納められ柩の蓋は蔽はれるのを見てゐた。私は病院の大きな門を暗い夜の中へ出た。東伏見宮邸の櫻がハラハラと顔に散りかゝるのを覺えながら、私は風呂敷に包んだ小荷物程の大きさの柩を提げて、電車道の方へ歩るいて行つた。それから二年、櫻が咲くと、妻も其頃の事を思ひ出してゐるらしいが、何とも其事は口に出して云はない。私も、其時の事を云ひ出して、妻の悲しみを新にしたくないと思ひながら、町に櫻が咲くのを見ると、暗い心に捉はれるのをどうする事も出來ない。而して花を見てあるく幸福な人々にまじるのも却つて或る辛さを覺えるので、書齋に引籠りがちになるのである。

我憂欝の窓から花びらにはいられる

蝶

西條八十

春になつたが、土手の櫻の蕾はまだ固い。それにばらばら氷雨がしてゐる。

私は牛込見附を神樂坂の方へ歩いて行つた。手套をして來なかつたので、傘の柄を持つ手さきがばかに冷たい。

氣がつくと自分の前を外套姿の男が歩いてゐる。中年の男だ。洋羮色に剝げた外套、その下に見える汚れた紺絣、白の綿入、踵に磨つた足駄、古い大きな蝙蝠傘、——どう見ても尾羽うち枯した姿だ。

力なく、よろめくやうに歩きながら、その男が時々寒い咳をするのを私は後から聞いて行つた。

と、電車道近く來た時、その男はいきなり何事かを、かなり大きな聲で呟いた。

「…………………」

私は最初何を云つたのか一向聽きとれなかつた。が、二度その男が繰返したので解つた。

“Papillon”

「なんて面白い言葉をこの男は呟くのだらう!」

と、その瞬間私は想つた。この尾羽うち枯した男が、だしぬけに『Papillon』(蝶)と獨語つなんて!

私はつと衝動に驅られて、その男がどんな人物だか前へ廻つて見ようとした。が、想つただけで斷行しなかつた。そのうちに彼は電車線路について右の方へ折て行つてしまつた。

私は氷雨の中のその男の蹌踉とした後姿を見送りながら、いま聞いた言葉を胸の中でぢつと噛みしめて歩いた。たしかに耳の誤りではなかつた。あの男は正しくフランス語でさう呟いたのだつた。だが一體どんな心持で彼はあんな言葉を口に出したのだらう?

私は疑ひながら、傍、春の蝶の光る翅の、あの粉に染んだ柔かい感觸を靜かに想ひ起してゐた。

「さうだ。あの男は冷たい雨の中で過ぎた昔の春を追懷してゐたのだ。おちぶれた姿で、衰へた心で。──ああ、それはどんなに寂しい氣持だつたらう!」

しばらくして私はかう思ひついて叫んだ。さうして、今向へ行つたその男を呼びとめたいやうな懷かしい氣持になつた。同時にまた氷雨の中を蹌踉と過ぎ去つたその黑い外套の姿が、私自身の影であつたやうな怪しい氣もされた。

病房にたわむ花

岡本かの子

春は私がともすれば神經衰弱になる季節であります。何となくいらいらと落付かなかつたり、黑くだまり込んで、半日も一日も考へこんだりします。櫻が、その上へ、薄明の花の帳をめぐらします。優雅な和やかな、しかし、やはりうち閉された重くるしさを感じます。日本の春の櫻は人の肩より上にみな咲きます。そして多くは高々と枝をかざして、そこにもここにもかしこにも人を待ちうけます――時にはあまりうるさく執拗に息づまるやうななやましさをして櫻は私の春の至るところに待ちうけます。こんな神經衰弱者の強迫觀念や憂鬱感は櫻にとつて唯迷惑でありませう。しかしこれらは却つて私が櫻を多くめでるのあまり櫻の美觀が私の深處に徹し過ぎての反動かもしれません。かりに櫻のない春の國を私は想像して見ます、いかに單調でありませふ。あまり單調で氣が狂はふ(!)そして日本の櫻花の屑が、程よく、ほどほどにあしらふ春のなま溫い風手は、徒に人の面にうちつけに觸り汚れやふ。櫻よ、咲け咲け、うるさきまでに咲き滿てよ。咲き枝垂よかし。

だが、まだ私は、櫻花に就いての憂鬱感や強迫觀念を語りやめやふとするのではありません。

十年前、私は或る出來事のために私の神經の一部分の破綻を招いたことがありました。私の神經がそのために隨分傷んでしまひました。その春、私が連れて行かれたその狂院に咲き滿ちて居た櫻の花のおびただしさ、渺か密雲に對するやふに始め私は茫漠として美感にうたれて居るだけでした。が、やがて可憐な精神病患者が遊歩するのを認めて一種奇嬌な美の反映をその滿庭の櫻から受け始めました。無意味ににやにや笑ふもの、天を仰いで合掌するもの　孺袢一つとなつて、脫いだ着物を、うちかへしうちかへしては眺むるもの、髮をといたり束ねたりして小さな手鏡にうつし見るもの、附き添ひに、おとなしく手をとられて常人のごとく安らかに芝生等の上を歩むもの、すべて老若の男女を合せて十人近い患者の群が、今しも、病房から晝餉ののちの暫時を玆へ遊歩に解放されて居るのだと分りました。櫻花が、しつきりなしにそれらの上へ散りかかります。患者のうちのあるものは、うるささふにそれを髮から拂ひのけ、あるものは手を振つてよけました。が多くは、細かい花びらが頰を掠めて胸に入つても、一向無關心でありました。無關心が一層あはれを誘ひました。私は、診察の順番を待つ間――一時間近く――うかうかとその場景に見入つて居りました。先刻から、殊に私の眼をひいた一人の四十前後の男の患者がありました。日露戰時の出征

軍歌を、くりかへしくりかへし歌つては、庭を巡廻して居ました、その一回の起點が丁度私達の立つて見て居る廊下の堅牢な硝子扉の前なのです。男は其處へ來る毎に直立して、硝子扉越の私達を見上げ莞爾としては擧手の禮をしました。私達もだまつて素直に禮を返してやりました。男はそれに滿足しまた身を返して廣い櫻庭を圓形に歩み出すのでありました。軍歌は、幅の廣いバスで、しかもところどころひどくかすれるのです、それは氣のふれたひとの聲の特長だとあとで聞きましたが、まことに悲痛に聞えました。男は日露戰爭中負傷の際に氣が狂つて以來づつと玆の病房の患者であるそふですが、病狀は慢性な代りに擧指は極めて温和で安全であると聞きました。その可憐な男が、私達の前の一回の起點へ來る度に、一度は一度より增して櫻の花片を多く身に着けて來るのでした。とりわけ男の頭へ澤山に散りかかつて居る花片の間からところどころ延びた散髮に交つて立つ太い銀色の白髮が午後の春陽に光つて見えるのでありました。私はそれを見つけて見る見る憂鬱になつてしまひました。私に附き添つて居た者が氣がついて私を診察室の方へ連れて這入ろふとした時に、廊下の突き當りの中庭を隔てた一棟の病房から、けたたましい狂女のあばれ狂ふ物音が聞え始めました。玆にもたわたわに咲きたわむだ櫻の枝の重なる下――その病房の一つの窓が眞黑く口を開けて居りました。そこからかすかに覗はれる井の中の様な病房の奥に二人三人の人間の着物の袖か裾かが白くちらちらと動いて見えました……私はあわてて眼を逸らしました。あわてた視線が途惑つて、窓邊の櫻に逃れました。私はぞつとしました。その櫻の色の悽愴なのに。

ずつと前の或夜、私は友の家の離れの茶室に泊りました。私は夜中にふと眼をさましました。戸の外を、櫻樹立がぐるりと圍む……櫻が……しんしんと咲き靜まつた櫻樹立が眞夜中に……棟を壓して櫻樹立が……櫻樹立がしんしんと……私は、ぞつとして夜具をかぶつた。

私はあくる日の朝日がたけて、その部屋のまわりの櫻樹立が明るくあたりにかがやくころ眼をさましました。私の體は夜具の底にかたく丸まり、じつくりと汗になつて居ました。

――一三、三、作――

後姿を美しくする運動

白井規矩郎

ここにお話するのは米國近刊の體育雜誌に見えました、バイルド、モック女史の「婦人の後姿を美しくする運動」といふのであります。

モック女史は其娘時代から、希臘の文藝修養建設などの研究に興味を持つてをられたのですが、希臘の彫刻物などに數多く接して居る間に、

古代希臘の體操は脊髄の矯正

といふ事に重きをおいて、人體解剖學の原則を基として行つた爲めに、希臘には姿勢のよい人が多いのであるといふ事を發見されたのであります。それから思ひおこして二三脊柱治療專門の大家にたづねられました處、現今の婦人には完全な脊骨を有つて居るものは殆ど見出し得ないといふ事であります。

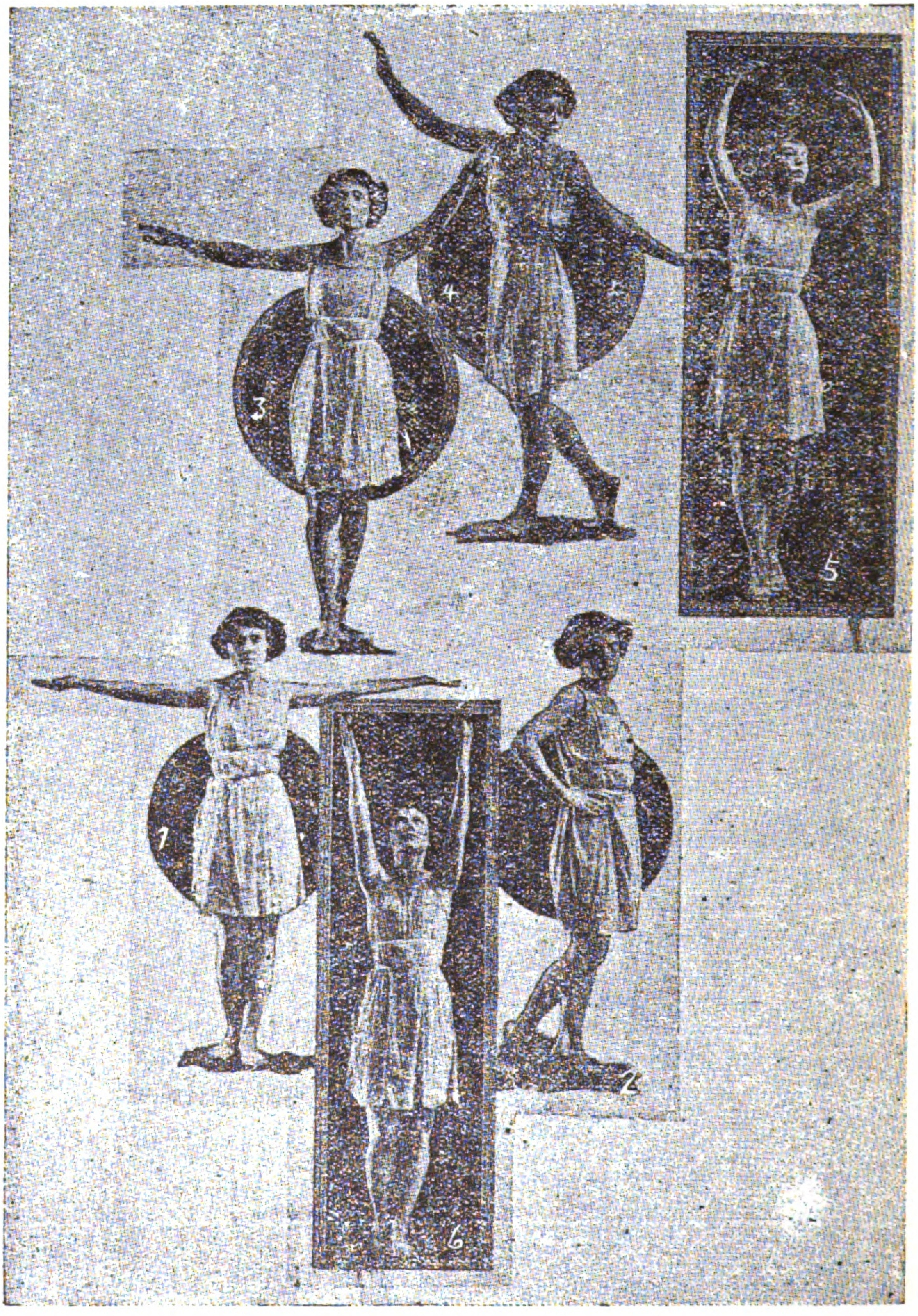
ソコデ脊骨を完全に矯正發育させさへすれば、全身の健康は勿論美容の上にも、希臘式の彫刻に見られる樣な、優雅なものを得られると考定されたのであります。

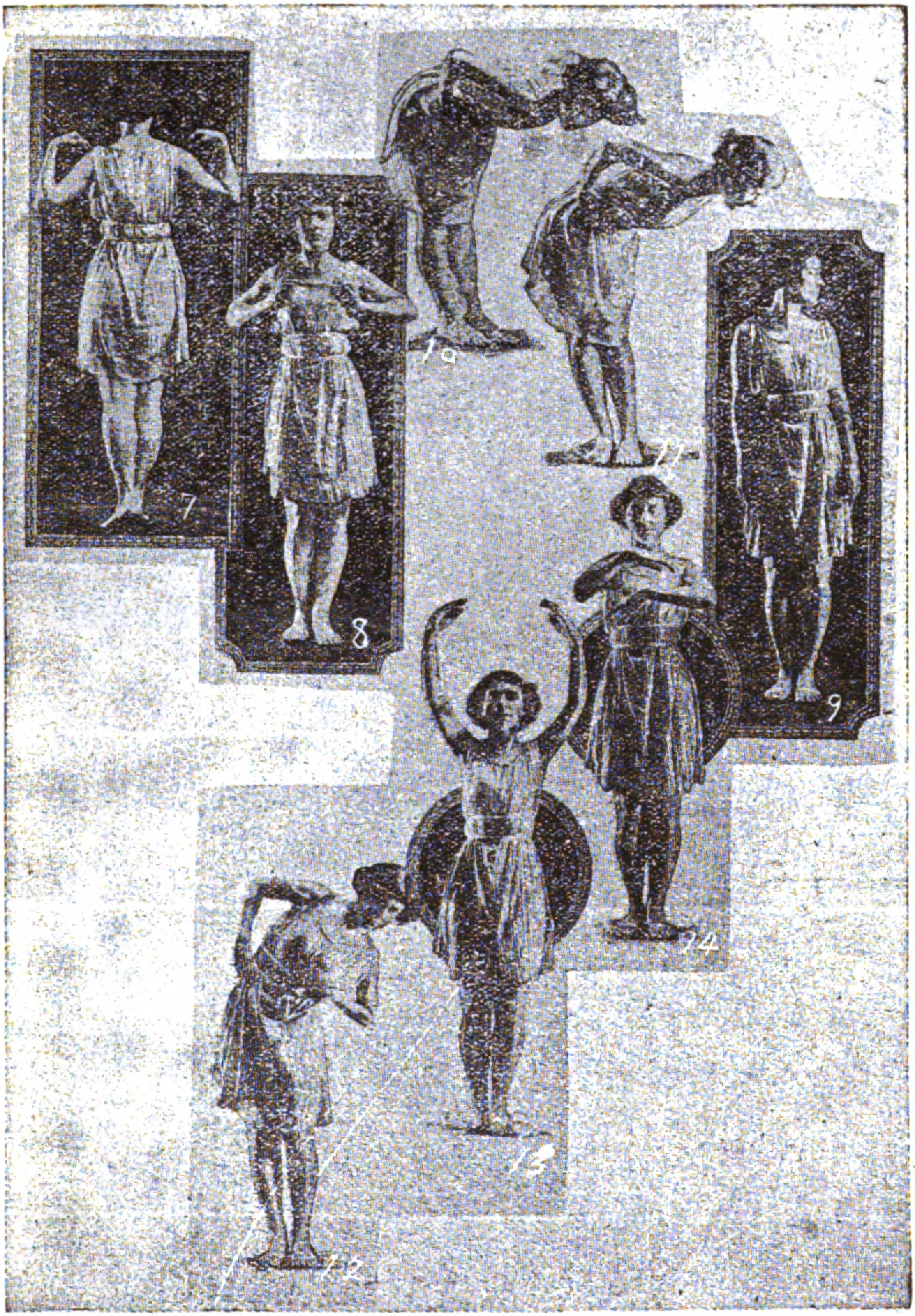
此の目的で組立られたのが、則ち次に掲げる運動でして、之れは

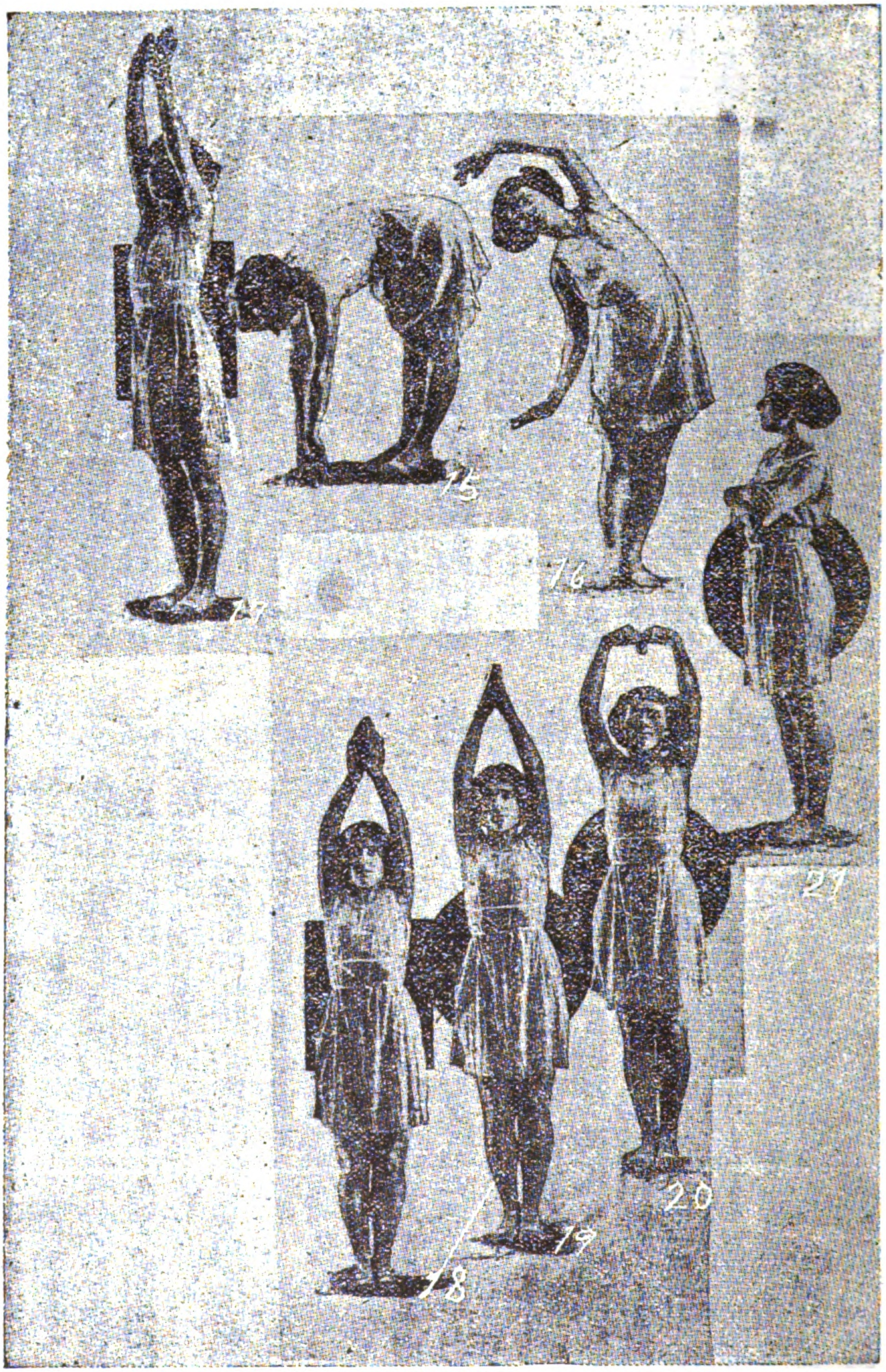
ロイス、チヤリフ氏の希臘舞踏

を基として、猶ほ此目的に適ふ樣に按排されたものであります。

モック女史が、對位法と稱して運動の上に注意せらるゝ點は、腕の旋回運動や美的ダンスが脊骨を屈曲する際などに於て、足の姿勢と正しく美しく對位する處にありますので、之れは次の圖を御覧になれば能く分ることゝ思ひます。


1
2
3
4
5
6


7
8
10
11
9
14
13
12


14
15
16
17
18
19
20
21

圖の說明

一 は胸膈を擴くするための運動で、先づ兩腕を肩と平らに兩側へ揭げて、何にか彈力性のものを引張る樣な心持で十分に指尖まで伸ばして、次に徐かに力を弛め掌を下向に回はして元の姿勢の樣に垂れる、（第一圖參照）

次に兩腕を前へ揭げて（掌を下向にして）踵を上げ、兩手を十分に前へ伸ばして恰も今少しで前にある物に手が屆くといふ樣な工合にして、次に徐かに力を弛めて踵を下ろし、手を兩側へ垂れる。

此運動は何んでもない樣に考へられるが、身體の釣合を平均に發育させ、又た生活機關を向上させるにも効果がある。

二 兩手を腰骨において、趾尖で旋回して、體を左足で支へ、右足を床から上げて動搖なしに保つ、次に徐かに元の位置へ復して、又た左足で繰返し、其次には右足で同じ方法を繰返へす。（第二圖參照）

此運動は釣合を正しくするのに最良の方法である。

三 は第三圖の樣に左手をやゝ斜に揭げ、左足を後とへ引いて踵を上げ、右手は側へ平らに伸ばす。（第三圖參照）

次に右足を後とへ引いて其踵を上げ、右手を斜に上へ揭げ、左手を下へ斜めに伸ばして、左手を見る樣に頭を向はす。（第四圖參照）

徐かに元の位置に復して、次に第三圖第四圖の運動を左右反對にして繰返す。

四 兩腕を兩側から頭の上へ圓形に揭げて、左足を一歩後とへ引いて、其踵を上げる。（第五圖參照）

次に踵を元へそろへながら、此兩腕を前へ下ろして直ぐに後から頭の上へ眞直に伸ばして、十分に上を見る樣にする。（第六圖參照）

次に徐かに元の位置に復して、又た繰返す。（足は左右を交互に後とへ引く樣にして）

五 は腰骨及び腹部の筋肉を調整するためなので、兩方の指尖を肩の上に置て、踵を上げ趾尖で高く起つ、肩を平らにして左の踵を十分高く上げて、右の脚を出來るだけ伸ばすので言ひ換へれば先づ兩方の踵を上げ、其中でも左の踵は一段と高くして置て、左の踵は出來るだけ上へ、右の踵は下へ伸ばすといふ樣な考ですれば宜いのである。（第七圖參照）

徐かに元へ復したら、右左反對にして行ふ。

六 は胸膈を强壯にするための運動で、兩手で胸の上部を

輕く抑へ深呼吸して、次に掌の末端（丁度足なれば踵といふべき處）のみを胸に觸れて、各指を上向に開いて、肺へ自由運動を與へる。（第八圖參照）

七 は頭を出來るだけ左なり右なりへ廻はして、顎を出來るだけ後へ引く。（第九圖參照）

此れもツマラヌ運動の樣に考へられるが、マックファデン氏は是れを活力運動と言つて最も重く見て居る、夫れには顎を後へ引く斗りでなく、出來るだけ前へ出したり、又た上へ揚げたりする方法をも附加へて行ふのである。

八 は脊骨の回轉運動で、先づ上體を前へ屈げ次に右の方へ圓を描く樣にして、後から左の方へと廻はして起き上る。（第十圖參照）

（第十一圖參照）

次には左の方へ圓を描く樣にして行ふのである。

此運動は上體を後ろへ屈けて行ふといふ事は絶對に爲さない樣に注意するのである。

九 は極めて簡單な側屈運動であるが、脊骨の神經に對して氣孔を開かしめ、且つ脊骨全體を柔軟にする効があるので上體を左へ屈げ又た右へ屈げるのであるが、膝を眞直にして行ふことに注意を要する。（第十二圖參照）

一〇 は腕の内形運動で、第十三圖は兩腕で頭上に圓形を次にそれを兩側に下ろし、次に前へ圓を作る樣（大樹を抱へる樣な考）にする。

次には第十四圖の樣に、兩腕を胸の前に上下に置て、交互に内方へ向て恰も糸を繰る樣に渦狀を描くのである。

一一 は兩臂を頭の上へ伸ばし、掌を前向にして、上體を腰から徐かに前へ屈げ、頭を腕の間へ眞直に保つのであるが兩手の尖は必ずしも床に觸れなければならぬと云ふのではない、夫れで徐かに元の位置に復したら、之れを右の前に、又た左の前に屈む樣にして試みる。（第十五圖參照）

一二 一方の腕を頭上に屈げ（始めは左で、次には右）上體をそれに伴ひ反對の側（左手が上のときは右側）へ屈げ、下の腕は圖の樣に揚げて、膝は屈げぬ樣にして。

徐かにそれを反對の側へとつゞけて行ひ數回繰り返へす。（第十六圖參照）

一三 （イ）兩腕を前から頭の上へ揚げて掌を前向に。（第十七圖參照）

（ロ）兩掌を外側へ向け、手の甲と甲とを合はす樣にして（第十八圖參照）

（ハ）兩掌を合はす樣にして。（第十九圖參照）

（二）手首を曲げて指尖を頭上へ向ける樣にする。（第二十圖參照）

此の四つの運動は、何にか簡單な四拍子か二拍子の歌に合はせて、イロハニの動作を行つたら、直ぐにニハロイと逆に行つて元の位置に復したら、又たイから始めるといふ樣につゞけて行ふのがよい。

一四　は呼吸運動である。特に骨を折らないで樂に肺が十分膨脹するまで、徐かに鼻孔から吸息して、徐かに呼出する。又た十分吸息したら暫時其まゝ堪へて、次に徐かに呼出することも良い方法である。

呼吸運動の際には恰も鋭い釘の樣なものを腰骨からと上胸骨からと打込む樣な心持で吸息して、次に全身を弛緩して呼息する樣に五六回繰り返す。（第二十一圖參照）

此は凡て軀幹の内臟筋肉に有効な練習で、脊骨に纏綿する硬強な軀幹の機關を活動せしめ、背部、腰、椎骨などを融解するの基となり、且つ凡ての機關に抑壓と放散とを行つて新鮮な血液を以て滿さしめるので、其結果外部からでは如何にしても與へ得られない處の、美容を呈出する樣になるのです。

以上説明しました各種運動を適宜に實行して居りますれば何時の間にか腕の後部にある三頭筋が良い工合に收縮する樣に感じ、又た同時に大腿骨の頭や髖骨に湊簇る無名骨を覆ふ大筋肉の收縮するのを感じて參る樣になります。それは全く此練習の結果でして、美容と健康とを得られる樣になつた證據であります。世界の婦人の中でも最も姿勢が惡いと云はれる日本の婦人がこれから洋服でもお召しにならうとするならこれ位の努力をお拂ひになる必要があると思ひます。

（注意）各運動を繰返へす回數は別段に示してありませんが、之れは各自の適宜でよろしからうと思ひます。

若き經濟學者の手帳から

京大講師　山口正太郎

一

梅日和のうらゝかな日光が研究室の窓越しに、さしこんで机の上の塵埃まで、はつきり眼にうつります、こんな日に書物の虫でもあるまいと外に出ますと紺青の空に比叡の山が、くつきりと浮び出てゐます。

御存じの如く、此處から比叡山に登るのには道は嶮しいけれども短時間に頂上に着く雲母坂越と、水車や百姓家の風趣を味ひつつ、悠々と杖を惹くによい、なだらかな白川途とが御座います。山に登らうと決意しますと直ぐにどちらの途をと考へます。時間の節約から云ふと前者が一番よいやうです。と思ふ時間に、何の拘束もない散策と云ふことに經濟と云ふ考へが這入つて參りました、嫌なことだと思ひますが、仕方がありません。現代人の一擧手一投足には經濟と云ふ觀念は離れることが出來ないので御座います。

普通に學者は最少の勞力と費用とをもつて最大の効果を擧げることを經濟主義と申して居ります。然し之は主義とか何とか命名する程、難かしい事ではないので御座いまして、殆んど今日では人間の本能と云つてよからうと存じます。さう考へますと、經濟學者なんかは誠につまらないもので經濟が人間の本能であれば、人々の勝手に放任して置いても經濟の眞義が達せられるので、之に理智的に説明を加へ、之を拘束して行くのは誠に餘計な仕事に見えるので御座います。

經濟と云ふ事は皆樣方が常に口にして居られるので御座いますが　さて、あらたまつて經濟とは何う云ふ事を意味しますかとお尋ねすると其お答は千差萬別で御座います。或る方は經濟とは節約することだとお答になります、經濟が節約と同じことであれば經濟學なんか無くてもよいので學校の倫理

や修身の時間の終りに先生から一言「時節柄、我國は物價が騰貴し、輸入超過で外國から借金せなければ立行きませんから皆樣はお互に節約せなければなりませぬ」と仰しやればそれで經濟學の根本義が喝破された事になるので御座います。又皆樣は毎日お宅で成るべく滋養になつて然も安價な御料理を御研究になつてゐるのですから、皆樣こそ却て經濟學の大家で御座います。然し經濟とはこんな簡單なことではないので御座います。或る方は經濟とは金儲けをすることだとお答になりますがさうすると經濟學者よりも株屋の小僧さんの方が經濟の眞義に徹してゐることになるのであります。經濟學が金儲けの學問でありますなら日夜、經濟學を研究してゐる大學の先生方は巨萬の富豪とならねばなりませぬ。經濟の意義如何との問に對しては實に種々の御答が出るのであります。然し此事は不思議な事ではなく、何事も定義を與へることは甚だ困難であります。聞く處によりますとお醫者樣の方でも病氣の定義は成立してゐないさうであります、皆樣が御病氣の時、お醫者樣に一體病氣とは何を云ふのですかとお尋ねになれば大抵のお醫者樣は明瞭にお答にならないと思ひます。恐らく健康の反對が病氣だとお答になるでせうが之は答にはなりません。それは健康とは何ぞやと云ふことを明にせなければ問題はまだ殘つて居る譯ですから。處が健康とは達者で元氣なことでありますが、元氣でも病氣である人もあります。苦痛を伴ふ時は病氣で、然らざる時は健康であるとも云へないのであります。苦痛を伴はない病氣もあるのであります。お醫者樣の研究對象たる病氣の定義も未定であると同じく經濟學者の研究對象たる經濟と云ふ觀念も、まだ確定して居りません。年々歳々出版される經濟原論は大抵異つた定義を與へて居ります。近頃獨逸のリーフマンと云ふ學者が大きな經濟原論を出しましたが、此人の考へでは目的に對して執るべき多くの手段を比較考量することだと云ふのであります。

二

研究室から京都驛迄行きますのには五六丁歩いて、熊野神社前から市電に乘つて約四十分位かゝります。京都驛に達する方法は電車以外種々ありませう。自動車もあれば人力車もあり、或は徒歩で行くことも出來ます。徒歩で行くのは一等經濟的でありませうが時間がかゝります。それ等を比較して日常生活の一方法として電車に乘りますが、然し目的によりましては手段をも變じなければならぬので御座います。例へ

ば親の臨終に間に合ふために一列車でも早くと思ふ時には金錢上では高くても自動車を探ぶことになりませう。要するに目的に對して手段を選擇するため比較考量することが經濟であります。

茲に注意せねばならぬことは經濟と云ふ觀念の前程には人間の物質生活に於ては人間の慾望よりもそれを充すべき物質の存在が乏しいと云ふことが横はつて居なければならぬと云ふことであります。熱帶諸國に於て果實が枝もたわゝに實つて居り、空腹の時は何時でも、それを採集して口腹の慾を充し得る原始人の生活では經濟と云ふ觀念は起り得ないのであります。現代の文明人は大抵、慾望に對して物質の稀少なことに惱んでゐるのであつて如何なる人でも經濟生活に無關係とは云へないのであります。

處が慾望と物質との量的比較に就いては宗教家は、現代人が慾望の量を餘り多量に有するからそれを充す物質の不足に常に苦しむので、此苦惱を脱するためには慾望の量を成るべく少くせねばならぬと說きます、慾望と物質とは相對的關係に置かれてゐますから慾望を成るべく少くすれば物質は其存在量を相對的意味で豊富にすることになります、何不足なき生活が營めることになります。然し斯くの如き注文は現代の文明人にとつては無理であります。現實に於て人智の進步は日夜、人間の慾望を其質に於ても量に於ても向上せしめつゝあります。その向上しつゝある慾望を充すため物質は盛んに生産せられなければなりません。然し經濟學者の留意する處は物質の生産よりも寧ろ物質の分配にあります。或る場所、或る人々の手に物質が集積して他の人々に不足する狀態を矯正しようとする事にあります。確かに人間の物質生活に於ては慾望に比して物質は乏しいでありませう　然し少數の人々の手に集中する處を分配の正當な方法によれば此不足狀態は非常に緩和されることゝ思ひます。物質の生産は確かに必要でありますが　それは技術家の領域の事で私等の專門外の事で御座います。

三

經濟學の父と申しますのは今から約二百年前に生れたアダム・スミスで御座います、昨年我國の各大學でスミス生誕二百年の記念祭を行つたのは皆樣の御記臆に新たなことゝ存じます。スミスが四歳の時、郷里レーヴン河の畔で、輕業師の群ジプシーの一隊に捕はれたのですが、やつと森の中で近所の人々の追手によつて取り戻されました。もしその儘であつ

たとしたら、あの大學者も輕業師で世を終つた事でありませう、運命の惡戲が殘酷の手を振ひ得なかつた事が何よりであります。其の後彼はグラスゴー大學の教授となり總長となり其著富國論は近代經濟學の礎石となつたのであります。彼は晩年關稅委員として年收六　磅、其公爵家からの年金參百磅合計九百磅、我國に換算して年九千圓の收入で、殊に百年餘も前の事でありますから豐富な生活をしてゐたものと思はれます。之に反して社會主義經濟學の鼻祖として知られて居りますカール・マルクスの晩年は、各處を流浪して無一物となり、ロンドンの寓舍で、痼疾と戰ひながら資本論の執筆をしたので甚だ憐れな狀態にあつたのであります。近代經濟學の二大巨頭は其晩年の物質生活に於て斯樣な好對照を呈して居ります。今一つの對照を述べることを許されますならば、それはアダム・スミスが若き時分に、或婦人を戀し、その戀が成就せずして一生を獨身に送り、老いたる母と共に故鄉で靜かな執筆生活を營んだのに對して、カール・マルクスは若く華やかな大學生の頃、美しい娘エンニーと相愛の仲となり主義のための流浪の旅路にも二人は手を携へたのであります、一は物質生活に幸福に、一は貧窮に、一つは戀を失ひ、一は之を得、一は資本主義經濟學の鼻祖となり一は社會主義經濟學の大權威となりました。

　話は少し横路にそれました、元、來た途へ引返します。さてアダム・スミスは其名著富國論を書き上げた時は心身ともに疲勞の極にありましたので、其原稿をもつて蘇國から倫敦へ、出版のための旅に上る時、もう命はないものと思つたのでせう、後事を友人ヒュームに托して出發したのであります。幸にも倫敦着後、大した異狀もなく此處で更に三ケ年間原稿を訂正致しまして、最初の執筆から十二年目、出版を世間に豫告しましてから十八年目に初めて大著述富國論を世に出したのであります。アダム・スミスと云ふ人は著述に對する良心の鋭い人でありまして、彼は死ぬ前に友人を呼んで未定稿の原稿類を一切火に燒かしめ、その灰になるのを見て安心して死んだと云ふ事であります。

四

　さてアダム・スミスの學說の要點は、之は皆樣の御存じの事と思ひますが、一言で申しますと個人中心主義で利己心を是認し、各人が利己心に從つて行動する時、各人は最もよく富み繁榮し、それ等の個人の總計から成立する國家も亦、從つて繁榮すると云ふので社會の前途に就いて樂觀的態度を採

つたことであります。此利己心を是認し、各人の繁榮を第一の目標とする結果當然その思想は資本主義を鼓吹し、提唱することゝなるのでありますが、普通世間には資本主義と社會主義とが對立すると考へられて居ります。然し社會主義即ち社會を中心とする思想と對立するのは實は個人を中心とする思想、卽ち個人主義であります、それですから對立を擧ぐならば個人主義對社會主義でなければならぬのです。斯樣な些細な誤謬は隨分行はれて居るのでありまして例へば自由平等と一口に申しますが、之も實は矛盾した言葉で、自由を發揮しようとすれば必ず他人との平等關係は破られるのであります。自分が勝手氣儘に振舞つて他人の權利を害せないことは中々出來ない事であります。氣儘に振舞ふことは他人を自己の手段として使用することになつて此間に平等と云ふ事が認められなくなります。丁度之と反對に各人が平等を重んじますと各人は自由を犧牲にしなければならぬのであります、眞實に平等を愛する人は自己の我儘を抑へねばなりません、其處で自由平等と一口に申しますが實は此二つは矛盾するのであります。

アダム・スミスは申しまするに野蠻原始の時代では物の價値は、その物を獲得するに要したる勞働の分量によつて定まる、例へば一匹の海獺を捕獲するに要する勞働の分量は二匹の鹿を殺すに要する勞働の分量と同じであれば一匹の海獺の價値は二匹の鹿に當ると申して居ります。之は勞働價値論と申しまして、物の價値を、その物を獲得するに要する勞働の分量によつて測定するのであります。これ迄の議論ではアダム・スミスは社會主義に進むのか資本主義を辯護するのか未定であります、然るに彼は次に、世の中が進むに從つて土地の私有、資本の蓄積と云ふことが行はれ、一つの物の生産にも若干の資本なり土地なりを使用することになるから、物の價値は資本、土地、勞働の三者の構成する處であつて、從つて資本家なり地主なりは當然其報酬を受ける權利があると云つて居ります。卽ち地主なり資本家なりが、單に土地や資本を所有してゐる結果、彼等は勞働をせなくても懷手をしてゐて當然報酬を受けることを是認したのであります。原始野蠻の時代では總ての人が勞働し、その勞働の結果を全部自己のものとしたので所謂社會主義の唱ふる勞働全收權が行はれてゐたのでありますが、世が進むにつれて、勞働の結果は勞働した人の手にのみ入らないで地主なり資本家なりの不勞階級の手にも入るのだと云ふのであります。此處に於てアダム・スミスは不勞階級の存在を是認したのでありまして社會主義と全

く正反對の結論に達したわけであります。

アダム・スミスの今一つの特徴は自由放任主義であります。個人の利己心を是認しました結果、此利己心を充分發揮せしめますためには當然各人の行爲の自由を認め、國家が之に對して干涉することを避けねばなりません。經濟上に於ては各個人は何を生産し、何を消費するかは全く自由であります、又金の儲かる事業は如何なるものでも資本家が之を企てる事は自由であります、此産業の自由を認めることによつて資本家は益々富む譯であります。

五

以上アダム・スミスの學説の概要を述べたので御座いますが、此スミスの經濟學の思想はマルサス、リカードー等によつて繼承されて資本主義經濟學と云ふ堂々たる體系が建設されたのであります。マルサスの名は有名な人口論によつて充分御承知の事と存じますから此處には申し述べません。リカードーと云ふ人はロンドンの株式仲買人の子でありまして自分も亦少い時から此仕事に從事しまして三十歳の時には澤山な財産を造つたのであります。彼はある温泉に居た時、徒然のまゝ巡回文庫の中からアダム・スミスの富國論を發見して、それを讀み行く中に經濟學に對する興味を得たのであります。彼は後に英國有數の金融業者となり、又下院議員となつたのでありますが其の間には多くの經濟學者の意見を發表しました。彼の名聲を不朽に傳へたのは其著「經濟原論」であります。

斯くて英國の經濟學は益々發達して來たのでありますが、又それと共に一方實際の經濟社會も資本主義的に益々發達したのでありますが、リカードーを經てジョン・スチユアート・ミルに至つて初めて資本主義組織の世の中に疑問を向けて此主義の缺陷に目覺めて來かゝつたのであります、此ミルの父も亦經濟學者でありますが子供のミルには少さい時から早教育を實行いたしまして、貧乏の中にあつても中々氣をつけたので、父が原稿を書いてゐる同じ机でミルは希臘語を三歳の時から教へられたのであります。ミルが意味の解らぬ字に逢ふと一々、執筆中の父に尋ねたが父は面倒とも思はないで一々丁寧に教へたのであります。父は斯樣な邪魔を意とせないで英領印度史數卷を書き上げたのであります、ミルは十三の時からリカードの經濟學論を讀まされました、そうして其要領を書く事を强いられました。之は頭の固まらない少年にとつては餘程難かしかつた事と思はれます、次にアダム・スミスを讀まされました、然も一日も休日を貰へなかつたさうであります。斯樣な教育を受けました彼は十七歳の時に父の關係してゐる東印度會社へ入社しまして書記として働き其餘暇に勉强しました。處が勉强が過ぎたものか二十歳の時分

に強度の神經衰弱にかゝつて前途の光明を失つたのであります、此時に彼は今迄の資本主義的な考へ方に疑問を抱くに至つたのであります。ミル自身は此時期を心上の危機と申して居りますが、此時期を通過することによつてミルの考へに變化が起つたのであります。

ミルが二十五歳の時、當時二十三歳のテイラア夫人と戀愛關係に陷つたのであります。彼は二人の間の關係の清いことを述べて居りますが彼の父や友人は此關係には反對したのであります。そのうちにテイラア氏が死ましたのでミルはテイラア未亡人と結婚したのでありますが、其時既にテイラア未亡人は肺病が重かつたそうであります。ミルは夫人と共に暖かい南歐の天地に冬を迎へるため出發いたしましたが、不幸にもマルセイユの北方で夫人は肺出血で死んだのであります。ミルは遺骸を其地に葬つて、其近邊に家を求めて、死ぬ迄愛する夫人の墓碑を守つて、其晩年を靜かに送つたのであります。

此テイラア未亡人のミルに及ぼした影響は大なるものでありまして、殊に其最もよく顯はれてゐるのはミルの經濟原論の中の勞働者階級の將來の豫想と題する章でありますが、單行本としてはミルの自由論は夫人との共著であります、ミルはテイラア未亡人の刺戟によつて社會主義的思想に目覺め、社會主義に同情を寄せるやうになつたのでありまして、テイラア未亡人のミルの思想に及ぼした影響は誠に大なるものでありました。ミル自身も私の著作の科學的部分は私の思想が齎かしめたものであるけれども、著作の全體を通じた人間的要素は彼女から出てゐる、社會の將來に關する豫想の如きは彼女がなければ到底書き得なかつただらうと云つて居ります。

思ふにミルの如き大學者をして、其晩年墓碑を守つて濃かな夫人に對する敬愛の情を表現せしめましたテイラア夫人は誠に偉大な婦人であつたのでせう。男子の頭腦に自己の思想を吹き込み自己に傾倒せしめて、あの立派な思想を後世に殘さしめたのは夫人の餘程優れてゐたことを思はしめるのであります。

ズミス、マルサス、リカードーを經てミルに至りまして所謂古典學派な思想の建築となりましたが、其裏面には其形式美に對して反逆の念が釀されて來ました。ミルは丁度其過渡期に立つた學者であります、ミルの思想は此過渡期の苦悶を表現して居ります。マルクスはミルを半ば覺醒したる經濟學者と申して居りますが舊思想との中間に、右に傾き、左に進み、苦悶懊惱したミルの一生は現代の我國の婦人方が舊思想の殼を脫却し得ないで、さりとて新思想にも沒頭し得ないで、過渡の苦しみを嘗めて居られるのと似てゐるではありませんか。

家庭のページ

木炭に就いて知らねばならぬ知識

女高師教授　近藤耕藏

はしがき

木炭は吾國の家庭内に於ける主要燃料の一であるが、之に就ての理化學の智識が、吾々の家庭の間に普及して居らないことは實に驚くばかりである。之が爲にどこの臺所にも幾多の不合理不經濟が朝な夕なに行はれて居る。

木炭の種類

木炭の種類には色々あり、其種類の名稱もちよつと數へ上げられぬ程に澤山ある。併しながら之を其の化學成分の上から見れば、各種の間に差異と呼ぶべき程の差異は無いものである。只其の物理的性質が互に異つて居るに過ぎぬ。而して其の物理的性質の差異と申しても、主要なるものは、木炭の質が粗であるか密であるかと云ふ點に歸するのである。尤も此粗密と云ふ言葉は、委しく考へて見れば、例へば裂け目割目等の多きが爲に、木炭其物の實質はかなりに密なるものでありながらも、之を全體として見たるとき、體積の割合に目方が輕い即ち之も一種の粗であると云ふことも出來るのであつて、必ずしも其言葉の意味は同一ではないが、兎に角、粗か密かと云ふことが、木炭の種類又は品質を決定する基本の

條件であるのである。其の色澤とか、打つて見た時の音色とか、折つて見た時の割れ方とかによりて其の品質を見分ける方法もあるが、要するに之は粗か密かを判定せんが爲の手段に外ならぬのである。若しそうでないとすれば、其の見分け方には意味はないと申してもよろしいのである。

序でながら玆に一言するが、世に堅炭、軟炭と云ふ言葉があるが、大體に云へば其堅炭と云ふのは密なる炭で、軟炭と云ふは粗なる炭である。

粗密の差が與ふる影響

各種木炭の相違は要するに其の粗密の差に過ぎないとして、さて其の粗密は如何なる點に如何樣なる影響を及ぼすかと云ふに、之は案外に重大なるものである。一體木炭の質が粗なりと云ふことは、木炭の實質の間に孔とか空隙とか切れ目とか云ふべきものが多いと云ふことに外ならぬのであるから、之が爲に招來する結果を列擧して見れば、

質の粗なる炭即ち軟炭は、

第一　に、熱の傳導がよろしくない、

第二　に、火のつき方が速い、即ち火のつきがよろしい。と云ふわけは「第一」の性質があるから木炭の或部分と其鄰りの部分との間に大なる温度の差が成り立ち易いから、火種に觸れたる部分のみ容易に其の發火温度以上に昇り得るからである。

第三　に、燃え方が活潑である。空氣に觸れる表面が比較的廣いから左もあるべきは當然である。

第四　に、炭の消耗は速かである。之は活潑に燃ゆると云ふ結果であるは申す迄もない。

第五　に、立ち消えがない。之は「第一」「第三」の結果である。

第六　に、高き温度が得られる、通俗の言ひ方にすれば火力が強い。

堅炭は火力が強しと云ふは迷信なり

堅炭は火力が強いと考へて居る人は世間に澤山ある。この考へが、堅炭の火持ちがよいと云ふ性質に組み合されるものであるから、いよ／＼堅炭は貴いものに見做されて來る。併しながら之は迷信である、世人の誤解である、實際には軟炭の方が火力が強いのである。手早い話しが、鍛冶屋は鐵をとかすに決して堅炭を用ゐて居らぬ。理論上から考へて見ても然るべきである。何となれば、元

來、堅炭でも軟炭でも化學上には、共に無定形の炭素と呼ばるる物質であつて、其の一定量が燃えたるときは、何れも同一量の熱……木炭一瓦につき約七大カロリー……を發生するものである。即ち其の何れかゞ、他に勝れて多量の熱を出すと云ふやうな事はないものである。只軟炭に於ては比較的に空氣に觸れる表面が廣いから、燃ゆるに際しては其燃え方が完全に又活潑に行はれる。言ひ換ふれば短時間に多量の木炭が燃え盡すのである。夫れが爲に當然高き溫度が得られる。即ち火力は強いのである。若し此の論に疑を挾む人があるならば、同じ目方の堅炭と軟炭とを別々にコンロに入れ、其火勢最も盛んなる時を見はからひ、硝子管の如きものを各炭火の間に挿入して硝子の軟くなる遲速の程度を比べ見るがよい。

堅炭と軟炭との長所短所

堅炭と軟炭とは何れが優るか、堅炭の市價が通例軟炭に勝り、種類によつては二倍も三倍もするものすらあることを思へば、疑もなく大なる優點が堅炭にあるものと考へるのは無理のない事であるが、よく〳〵考へて見れば、之れは世人の誤解若しくは迷信から來て居ることであつて、多くの場合、軟炭の方が寧ろよく各種の目的に應ずることが出來るものである。何故かと云ふに、前に述べたるが如き粗密の差の與ふる諸影響の中で、

(二)の火つきの良いと云ふ點は明かに軟炭の長所である。

(五)の立ち消えのないこと

(六)の火力の強きこと

何れも皆軟炭の誇である。

只一つ(四)の消耗の速かなること、即ち火持ちが悪いと云ふ點は如何にも軟炭の短所であるが、之は燃燒が活潑に行はるゝ結果であつて、同時に強い火力が得らるると云ふのであるから、純然たる缺點ではなくして、長所を伴うての缺點である。加之、左程に火力の強きを必要とせぬ場合に於ては、コンロの下口を大部分閉塞するとか、又は程よく灰をかけるとかの如き簡單なる手段に依つて、其の燃燒作用を緩漫ならしめ、從つて其の消耗を遲くすると云ふことが出來るのであるから、之は純然たる缺點短所でないばかりか、之を使用する人の頭如何に依りては、寧ろ軟炭の長所であると見るべき理由もあるのである。

軟炭を尊重せよ

右の如き理由であるから、世人は軟炭に對して、もつと大なる尊敬を拂はなくてはならぬ。火つきの速きを望むならば軟炭を用ふべしである。湯の速く沸くことを望むならば又軟炭を用ふべしである。而して其消耗の速きを防がんが爲には、コンロの下口の蓋又は火鉢の灰を適當に利用して、其の目的を遂すべしである、豆を煮る如き長時間弱き火力を望む場合に於ても上の如くすれば軟炭必ずしも不可ならずである。それに市價の低廉と云ふ點をも考へに入れて大に軟炭を用ふべしである。

木炭の大さと其の影響

大抵の婦人は木炭の大さと云ふことに就ては一向に無頓着である。コンロに入りきらぬ程の大きい木炭は已むなく之を割りもし折りもしやうが、左程でもないものならば、團子の大さであつても、握り拳しの大さであつても、若しくはそれ以上のものであつても、皆同一のものと見て之を用ゐて居る。併し之は不合理な仕方である。何となれば小さい木炭は大きい木炭に比べて、空氣に觸れる表面が割合に廣いものであるから、其燃え方が大きいのに比べては活潑であるのである。從つて消耗の速さは増し、從つて火力が強い。されば堅炭は、之を小さくすることに依つて幾分軟炭の性質に近づき、軟炭は之を小さくすることに依つて層一層軟炭の特色を發揮するに至るのである。

右の反對に大きい儘で木炭を使用するときは、全部が赤くなる迄に長い時間を要し、消耗は遲く、火力は弱い、堅炭の大なるものに於て層一層此傾向が著しい。夫れ故に客の前に持ち出す火鉢とか、コト〳〵と長時間煮ねばならぬ煮物とかの如き、炭火の壽命が長いのが第一要件と云ふ場合に於てのみ其使用が適法であると評すべきである。成るべく短時間に臺所の用事を辨じたいと云ふやうな場合には軟炭で、しかも其大さは小さい方がよく目的に適するのである。但し之に就ては次の題目の事も併せ考ふる必要がある。

木炭の量と其の影響

細かい木炭は燃燒表面の廣きが爲に比較的活潑に燃ゆると云ふても、其量を適當にせず無暗に厚く積み重ねては却ていけない。其の理由は餘りに厚く積み重ねては、第一に空氣の流通を惡くする。第二には折角流通せる空氣も其木炭の下層を通り抜ける際に、活潑なる燃燒作用に依つて酸素を奪はれ、大に炭酸瓦斯に富んだるものになから、上層の木炭は、

いくら表面が廣いにしても、活潑に燃ゆることが出來ない。從つて上層迄赤くなるには、他より與へられたる熱によりて赤くなるのを待つのであるから、比較的に手間どれ、且つ最上層の火力は割合に弱いものである。

右に述べたる缺點は大きい木炭でも屑が厚くなれば同樣に見られるのであるが、普通に用ゐらるるコンロなどでは、器の深さが、おのづから木炭の厚さを制限するから木炭の大なる時に此缺點に陷ることは稀れである。但し木炭を細かくして使用するときには、木炭の量は左程に多くなくとも層の數は澤山になるわけであるから、かなりに注意を拂はなければ、忽ちに上記の失敗に陷るのである。されば臺所等にて料理の目的で木炭を使用するとして、極めて大體の標準を立てゝ見れば、木炭は三層位に積み重なる程度にて用ふるがよいと私は見て居る。之れよりも木炭屑が薄くなれば、コンロ自身が十分熱くなつて居る場合の外、熱の放散面が割合に廣い結果として、木炭が立ち消えになる虞そがある。之れよりも厚くすれば動もすれば前述の不結果を招くものである。而して此三層倍と云ふ標準は木炭の大なる時にも小なる時にも一樣にあてはまるものと見てよろしい。

木炭に水又は食鹽水を注ぐの是

木炭の火持ちをよくする爲に、一旦之に水を注ぎかけ、乾して之を用ふる人がある。併しよく〳〵調べて見れば、之は乾いたと思つた木炭が實は乾いて居らぬが爲めに起る現象である。而して其火持ちがよい卽ち長命であると云ふのも、コンロなり火鉢なりに投入してから、赤き木炭になり上る迄の時間の延長に過ぎないものである。卽ちかかる木炭の長命は、人間に就て云へば役に立たぬ子供である期間が增したのであつて、一人前の人間に成り上つて後の命が延びたのではないのである。かゝる長命は人間としてなら幾分望ましいと云ふこともあるが、木炭としては極めて望ましからぬ長命であるのである。

食鹽水を注ぐとすれば單に水を注ぎたる場合よりは、乾燥も幾分遲くなるし、全く水分が去りて後も、熱の爲に融けたる食鹽が、木炭の表面を蔽ふて空氣との接觸を妨げるから（食鹽の量餘りに少なからぬ限り）木炭は確かに長命にはなるが、前にも述べし如く、燃燒を妨げて長命ならしむる手段は、必ずしも食鹽を用ゐずともよろしい、コンロの下口をせまくするとか、灰を適當に使用するとかの如き簡單なる物理

的手段に依つて其目的を達し得るのであるから、手数と費用とを要する如上の方法を採ることは愚の骨頂と云ふべしである。

木炭のはねるのと食鹽の一撮

木炭がピチ〳〵とはねて困る、かかる際には食鹽の一撮を投入すればよいと云ふ人がある。理論上から考へて有り得べからざることである。一撮であるならば火勢を弱めてと云ふ解釋もつくが、一撮ではかかる考へも不當である。之に對する私の解釋を云へば、元來木炭がはねると云ふ現象は、温度の頗る高き場所に閉ぢられたる氣孔を有する木炭が投入せられたる時に起る爆破である。而して木炭があとから〳〵と火中に投入せられるでない限り、爆破は一時的ですむ、之れは木炭の一部……多くは皮の部分……が火中に投入せられてより爆破するに至る迄の時間は大體に等しいものであるからである。夫れ故に食鹽を取り寄せて一撮を振りかけ終る位の時間を經過すれば、最早自然的に爆破は終りを告げる頃となるのである。

最も効有なる消火藥の製造法

凡て消火藥の効能は、先づその火力の熱を奪つて消火せしめるのと、又その燃焼力を減少せしめる性質を有する藥品を以て施用するものですが、次に述べます消火劑は、各種の消火劑の中、最も有効だと云はれるもので、その藥品の分量と調合法は左の通りであります。

硼砂末	五〇分
無水ソーダ	一〇〇分
炭酸アムモニヤ	二五〇分
苛性ソーダ	一八〇分
水	一〇〇分

右の五品をよく混合して、なるべく薄手のガラス壜に詰め、固く密閉して常に貯へおき、火災の起つた場合に手早く壜のまゝ火焔に投げつけますと、壜は忽ち割れて、消火液は散亂しますから、火力は直ちに消滅します。

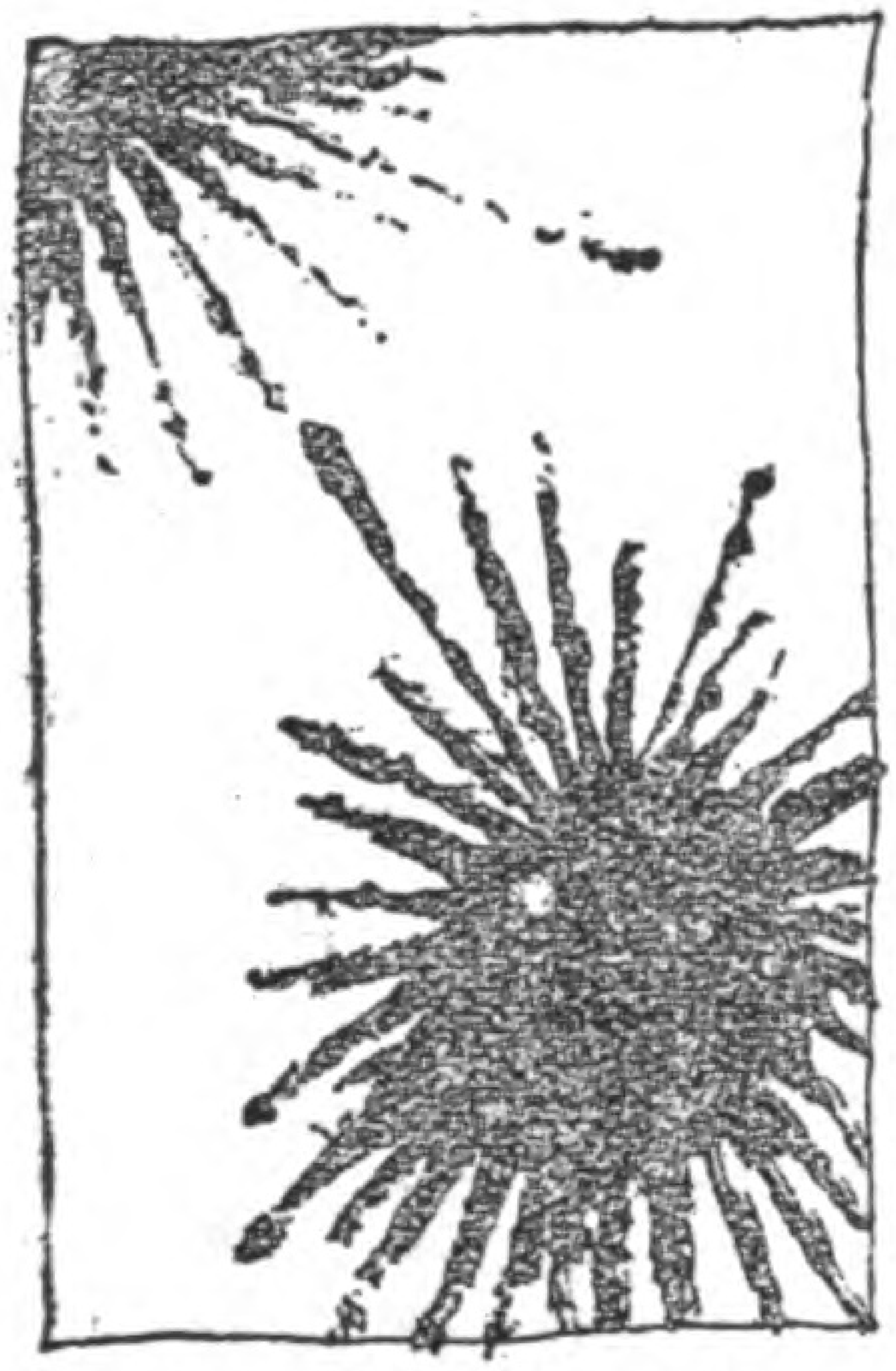
レデーメードとあつらへ

宇田川そめ

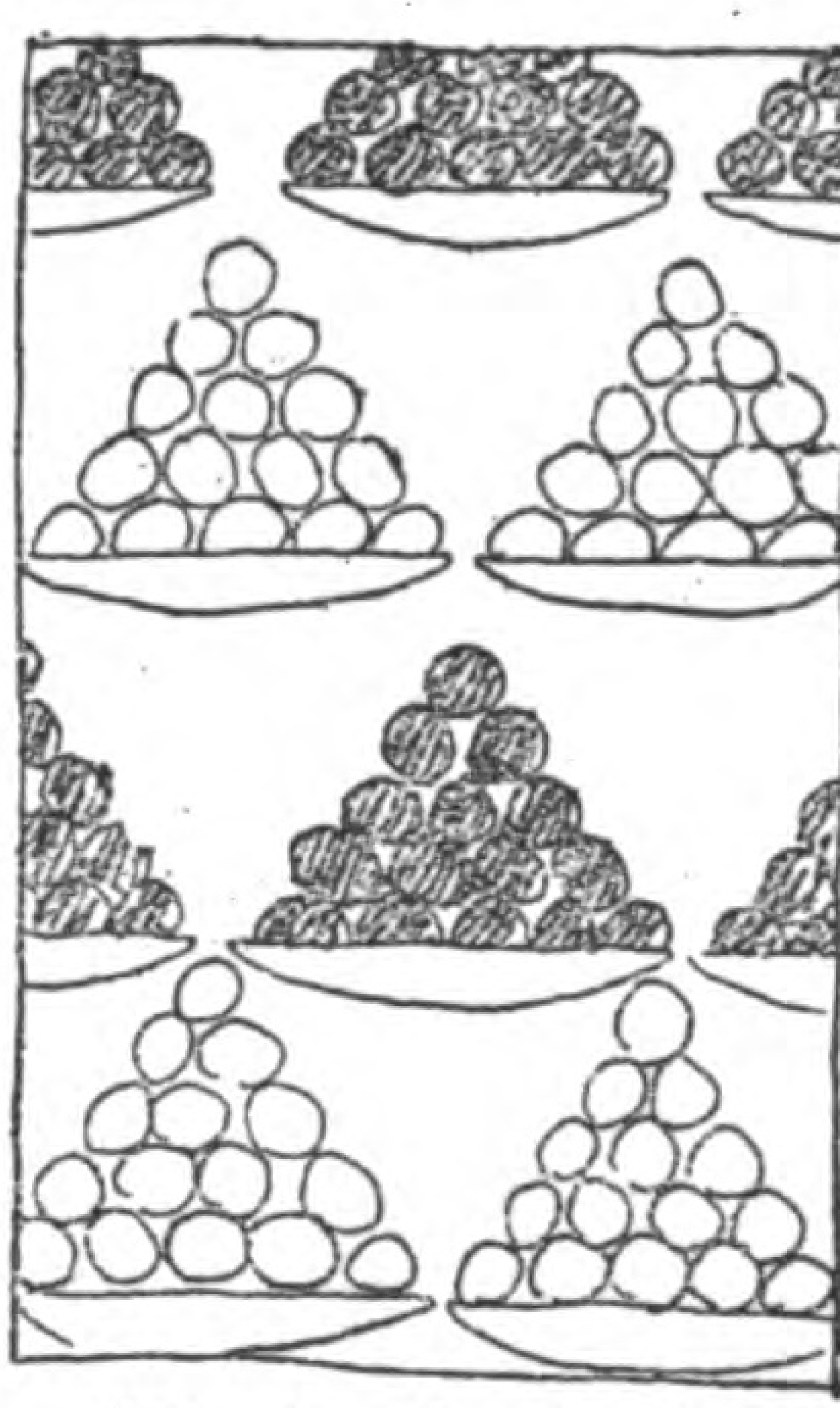
非倫なレデーメード一つを除けば、帽子も、靴も、おしめほしも、洋服も、さては住宅も、食事も、レデーメードで濟せるやうになり、またそれで事足りる時代になりました。

お祖母樣のであつた、加賀友禪や、緋の子の小布で作つた素朴で優雅な押繪の巾着をさげて、お彼岸詣をするやうな好もしい在方の娘さんも、當節では、輸出絹で機械が造つた西洋花の染のついた三越製のオペラバッグを持つて、リリアン、ギッシュのフキルムを觀にゆくやうな時代になりましたもの。男も女も巷へ出るやうになつてから、もうそんな心のゆとりがなくなつたのでせうね。

昔、利休は、海が見えては風情に過ぎる



(2)　ぶつつけしぼり



(1)　かさもり

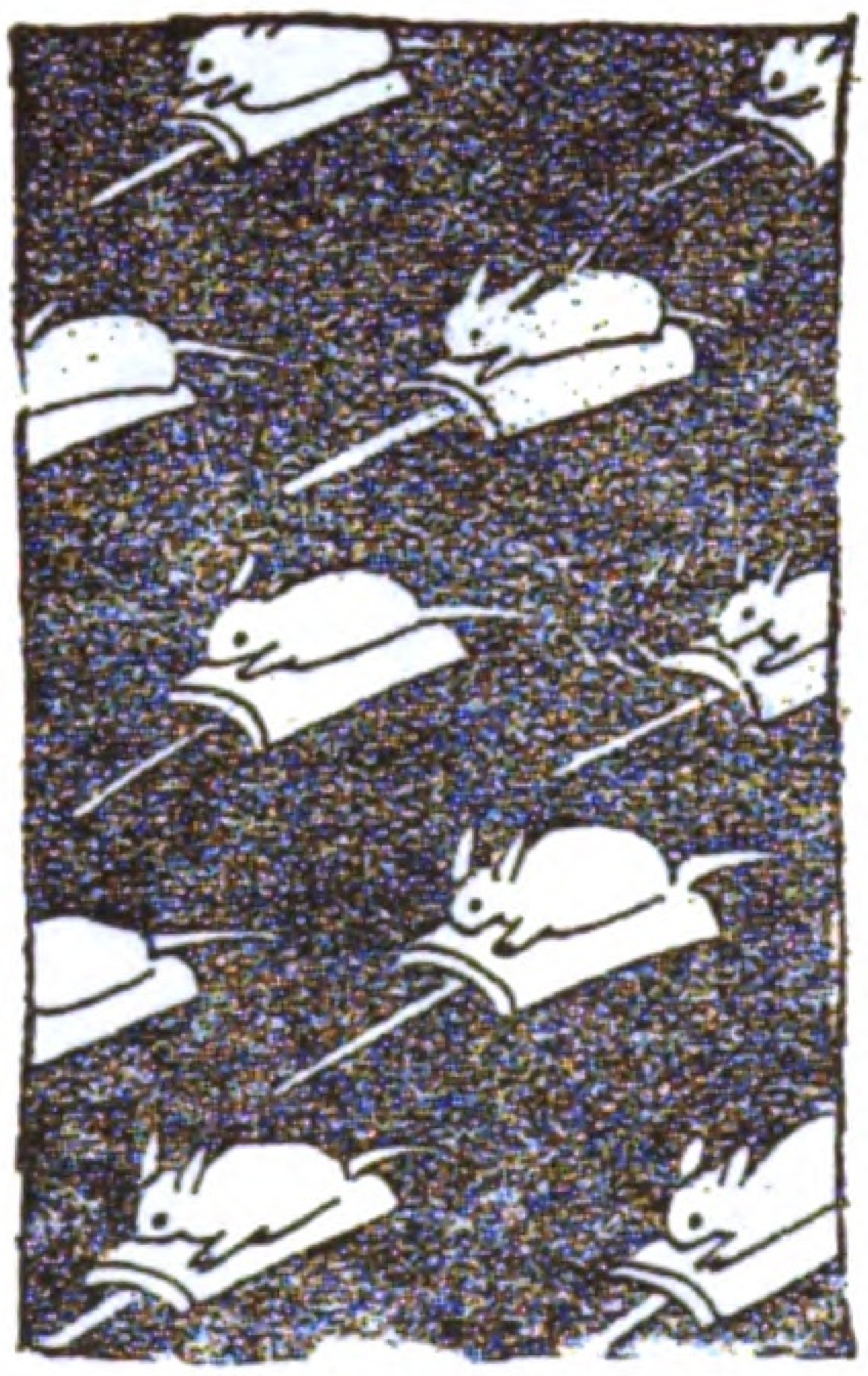
と言つて、庭に松を植ゑ、木の間がくれに、ほのかな海を茶室へとりいれて茶らけにしたと申します。それでこそ自然をあつらへむきに我物にしたと言へませう。

この程、箱根で宿の亭主に「おいあの山が眼ざはりだ、取拂つてくれ、金は何萬兩でも出してやる」と、剛勢なことを仰せられたいづれは何男爵があつたと申します。

昔は、ほんの實用向きの臺所の具一つさへその道の名工が銘を入れて造つてゐます。當今の品物では、メードインジャツパンと銘があるのさへ、晴がましい氣がするでは御座いませんか。

せめて私どもも、藍から染めて、絲を紡ぐ手數まではかけないでも、着物の柄や小紋ぐらゐは、自分で考へて、自由に着たいではありませんか。

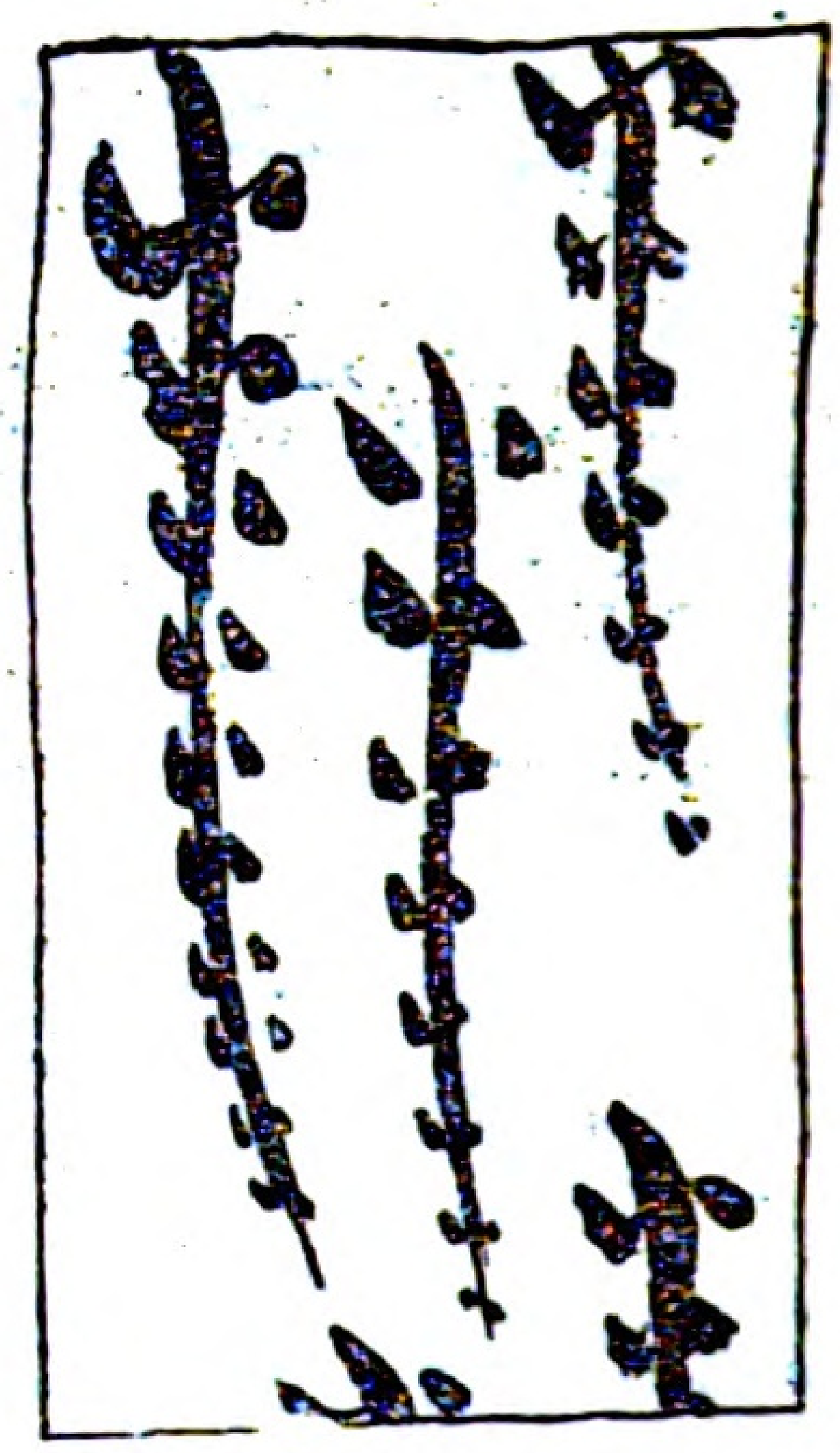
蟲干の折見つけ出した古い小紋帳にこんなのがあります。應用圖案の參考にでもならうかと、二つ三つ描きぬいて見ませう。この作者は旅行嫁ひな江戸の人ですから、自然の



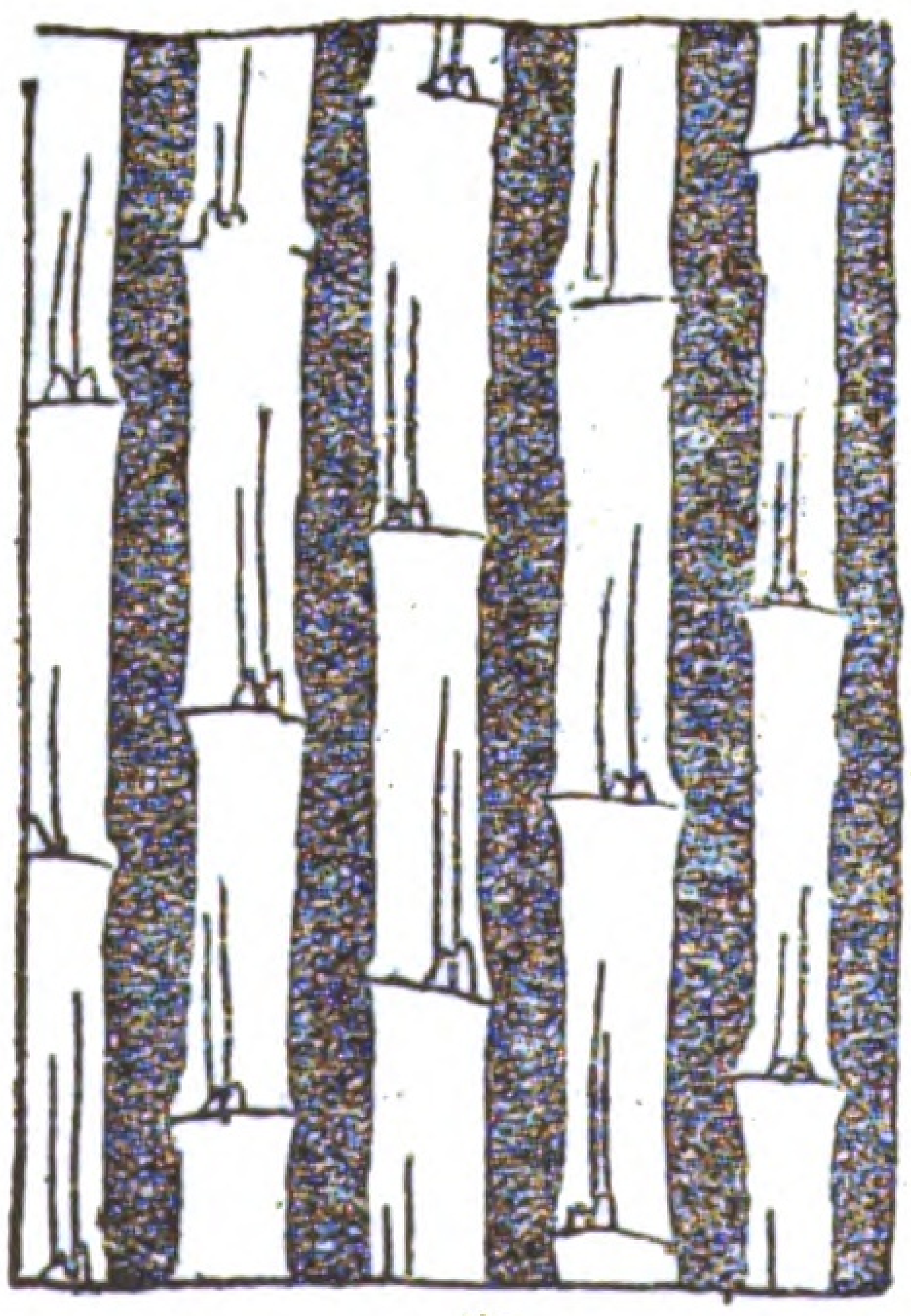
(5) ねずみ小紋



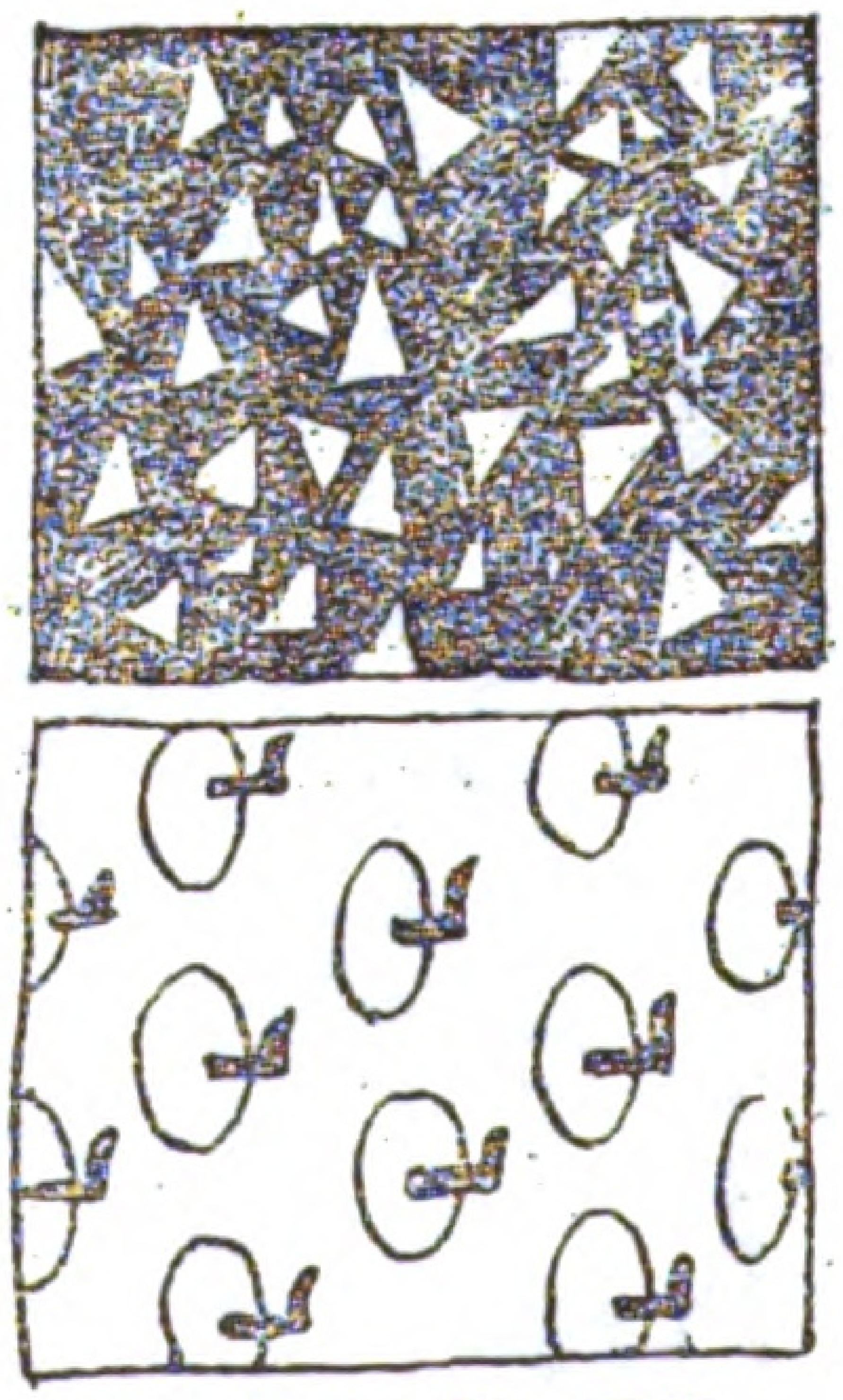
(4) 三くだり半



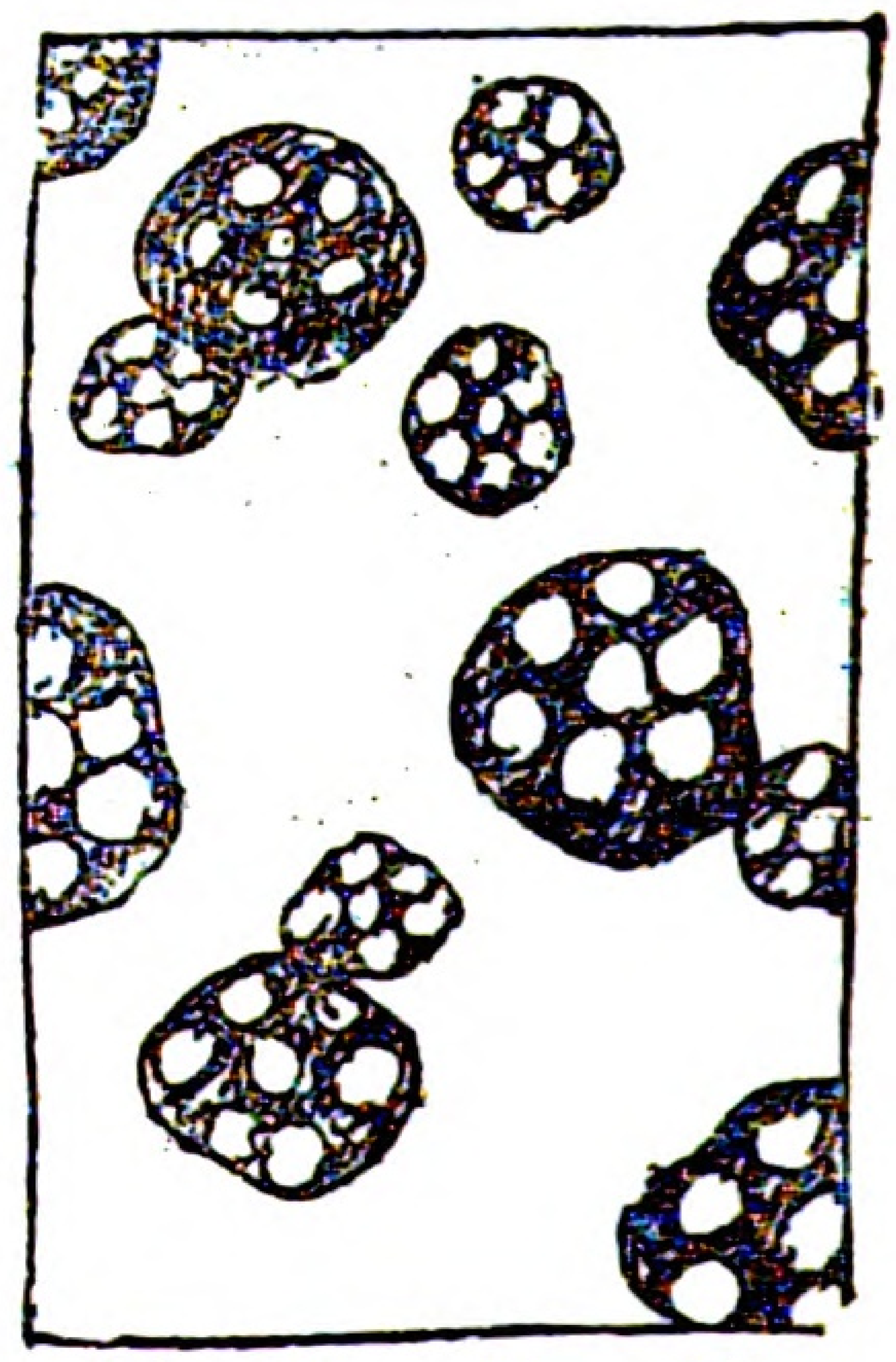
(3) いとし藤



(8)



(7) 芝居の雪と折釘



(6) 不忍染

風物には眼を背けて、專ら市井人事の中から、材料を取つてゐるのが特色のやうです。そして圖按そのものよりも思ひつきの洒落の方に興味を持つて、描いてゐます、

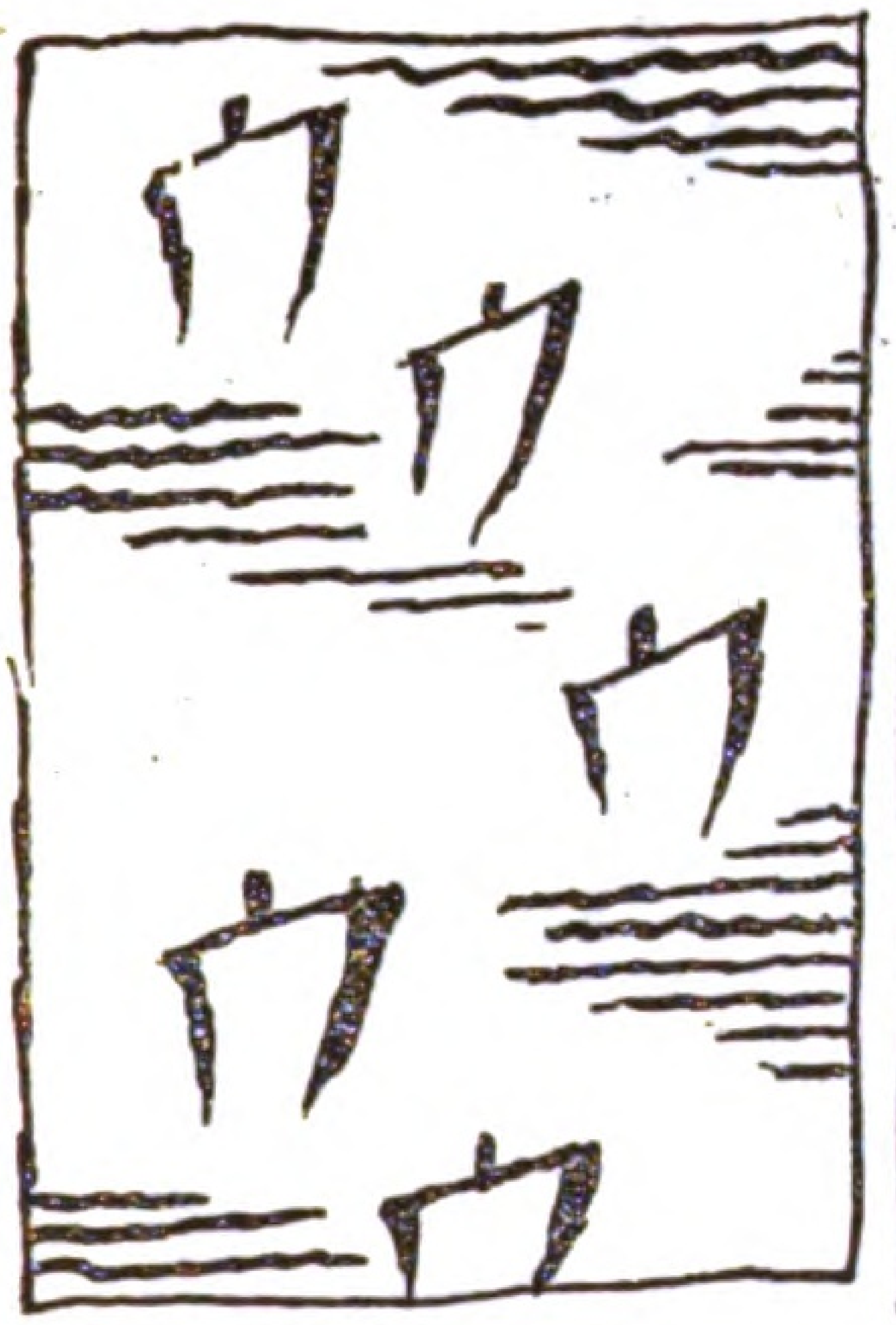
(1)は笠森稻荷の團子の模樣で「お仙が前垂に染めしとぞ」と添書きしてゐます。(2)は、ぶつつけ紋で、おさなどの惡戯に泥を掴んでぶつつけた形なりとあります。(3)は、いの字として出來た『いとし藤』です。こんなやさしい模樣を染め出す吳服屋はないものでせうか。(4)は三くだり半。これは御婦人方の小紋にはよろしかるまじ、と斷つてあります。(5)は、鼠をわざ〳〵描いたわるい洒落。(6)は、蓮根の捺染か何かでせう、そして不忍染。(7)芝居の雪などは、この頃上方から京橋あたりへくる最新表現模樣とやら外國風な圖按よりもつと新しいではありませんか。(釘)にしても(雪の山)にしても、どこの國のペザントアートに比べても優美なばかりでなく、どこの國の新しい圖按より新しいかと思はれます。　光琳模樣



(9)



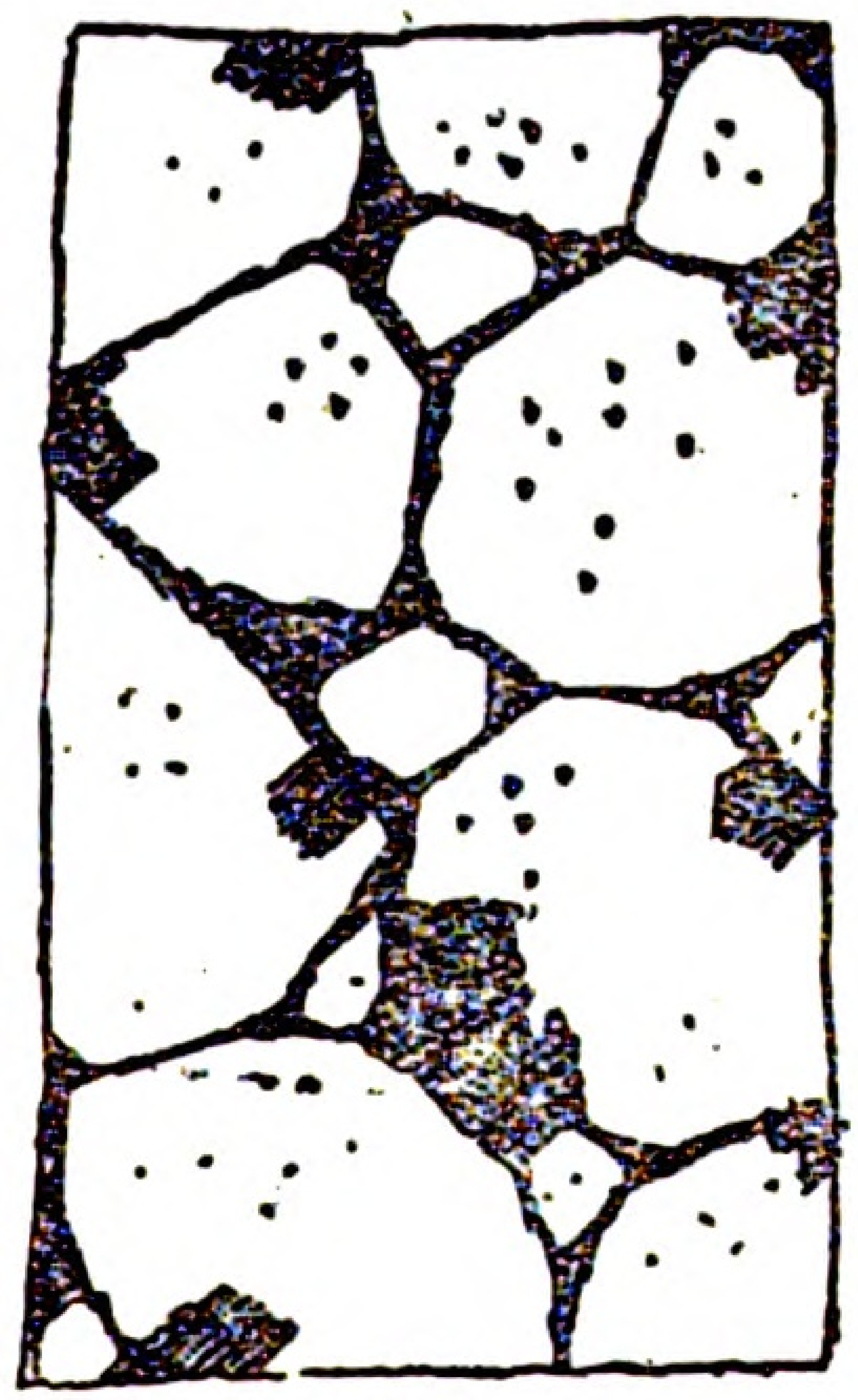
(10)



(11)



(12)



(13)



(14

などは、私どもにはあんまり、深い傳統になりきつてゐますが、外國のものを見馴れた新しい眼で見直すと、作者のものを以るフレッシュな感覺と、表現の鮮さを見ないわけにゆきません。石垣をデザインにするなどは、さすが東洋人だとおもはせます。アメリカの娘が日本の繪日傘や、振袖を、珍重する程度より、もつと西洋の好いものは解つてゐるつもりですが、たとへば草花にしても、西洋のものは人工的な地上のものだといふ感じがします。

毛絲で造つた羽織も、お安くて結構でせうが、私どもは、私ども祖先の殘した、藝術品や、調度や生活用式を、いま一度、振返つて見る必要はないでせうか。

(9) 釘　(10) 雪の山

(11) うみ　(12) 秋の川

(13) 石垣　(14) 光琳松

內地にも應用出來る　琉球料理十種

新城みや子

琉球料理の特長としては材料の取扱ひや料理法が粗野で油濃くコッテリして一口に云へば支那料理に最も近いところだらうと思ひます。是れは琉球が、古來支那と通商して、支那文明の影響を多大にうけてゐるところから自然と料理法にも支那料理の影響が多いのでせうと思ひます。

氣候風土も他府縣とは違ひますから材料にも琉球特殊の物を使つたのが多いのですが、なるべく內地でも應用出來る樣な物を書いて見ます。琉球は豚の本場ですから先づ豚料理で變つたものをあげたいと思ひますが、先にお斷りしておきますが、琉球では別に料理に特別の名前のついてゐるのは少なく、自分で勝手につけたり、土地の言葉をそのまゝ使ひますから多少はともかくその料理法丈を見て應用して戴き度いと思ひます。又どうしても琉球以外には求められない材料が二三あるかもしれませんから、それは外の物で適宜に間に合せられると思ひます。

一、ナカミの吸物

これ琉球でも珍重がる料理ですが、中々手數がかゝりますからいつでも勝手に食べるといふわけには行きません。材料としては豚の腸を用ひます。初めに腸を目の細かい大きい笊に入れてざつと一通り水で洗つてから、お鹽をうんとふつてゴシゴシ洗ひますと汚ない泡が出ますから何遍も洗ひます。三度も四度も洗ひましたら細い竹で手際よく腸を裏かへします。裏返したら又前と同樣に鹽をふつて洗ひます。

洗つてしまつたら一寸位の長さにきつて細かい管の樣になつたのを更にたてに線切りにして水を切つておきます。外に鍋に胡麻油を煮たゝせて前の腸をこげつかぬ樣にいためます。それがすんだらそのまゝ鍋と一緒に水煮をして二時間位たつたらおろしてきれいになるまで洗ひます。(これをいゝ加減にしますと匂ひが殘つていけません)それから笊にあけて水を切つておきます。別に煮汁を作り(お醬油は心持辛い加減にします)腸を(氣持が惡いからこれからナカミと書きます)ナカミをその中に入れてしばらく煮て、お椀に盛る時にはヒハチ、(胡椒の樣な辛い、匂ひの高い粉、(七色唐がらしでもいゝでせう)をふつてすゝめます。

二、油味噌

材料。豚油　お味噌、豚肉　砂糖

お味噌を擂鉢に入れてあたつたら、豚肉を賽の目に切つたのを入れてまぜお砂糖で好みのまゝに味をつけておきます。別に鍋にラードを入れて煮立たない前に前の品を入れてこげつかぬ樣とろ火で煮ます。お味噌と豚肉が煮えまして、油が多すぎます時には、靜かに油を別の器に流すと宜しうございます。この油味噌はお辨當のお菜や殊に罐に入れますと

旅行用にも結構です。それに油で煮る時らんと致ますから腐るといふ事はなく二ケ月位は大丈夫持ちます。お味噌はなるべくいゝのを用ゐます。豚肉は日がたつに從つて小さく固くなりますから、なるべく大きく切つておくと宜しうございます。少し油のまじつた所がいゝ様です。

三　ミヌダル

材料。豚肉、胡麻　砂糖　醤油　墨汁

これは琉球で特に御祝禮の料理に使ひます。先づ初に上等の墨を硯にすつて墨汁を器にとつておきます。それから胡麻を程よく炒つて、擂鉢であたり、先きの墨汁を少しづつ注いでお醤油とお砂糖で味をつけドロ〳〵にします。豚肉は大てい巾一寸長さ一寸五分位の長方形にうすく切つて茹でたのを用ゐますが、琉球では總てお肉は一斤なら一斤と大切りのまゝ煮てから、うすくも厚くも適宜に切りますが、その方が、やはらかで美味しい様です。さて今のミヌダルに使ふ豚肉も大切りのまゝ煮てから、前記の様に切つて墨汁、胡麻を一處にした物の中にすり込む様にして二三日漬けておきます。

二三日たつて出しますと眞黒に染つてゐます。どういふわけで墨を使ふのか分りませんが、私達も小さい時には氣味が惡くて食べませんでしたが、中々おいしいものです。琉球では唐ジミ（唐の墨といふ意）のいゝのを用ゐてゐます。三四十年も前の唐墨等は隨分尊ばれてゐる様です。

尚ほ豚料理では豚の脚をゆでてからお醤油で甘からく煮しめたり、三杯酢に御生姜をそへて戴きますのも變つた味がございます。又クマーミ（豚の腎臓）と、甘藷の根の付い所と、豚のあばら骨、少し肉のついた所など一緒にして長時間煮たものは咳にいゝと申します。琉球豚のヤンワリしたのを食べつけてゐた私共には高いお金を出していやに固いロースなどを買ふよりもバラの安い所を五十錢も買ひましたら柔かで、味もよろしい様に思ひます。東京ではこの豚のバラのところは大變お安いのですから應用して召し上つて頂きたいのでございます。なるべく骨のついた所を長い間ぐつ〳〵煮るとお汁もおいしいものになります。私共はその中へお大根や小松菜等をたつぷり入れて戴いて居ります。

豚料理はこれ位にして次に外の變つたのを少し並べて見ませう。

四、れいしのおいしい食べ方（ゴーヤーチャンプルー）

れいしは一般にあまり廣く用ゐられない様ですが、苦いといふ丈で見向きもされないのでせうが。琉球では夏になりますとどの家にも青い水々したれいしの實や、糸瓜が庭一ぱいに廣がつた棚になつて居ります。あれはどこまでも蔓がのびますから垣棚にもはひますし、棚を作つておきましたら夏の頃はしげりあつた葉が、日よけにもなりますし、栽培方も簡單で、捨てておいても自然に生える位のものです。さてそのれいしは琉球ではどうして食べてゐるかと申しますと少し油つこい嫌ひはありますが、これも慣れると美味しく頂けます。

初めに縦に四つ切りして、中の實をとり去り薄く刻んでから、お鹽でもんで水に放ち、

暫らく漬けておいてから絞りますと苦みが大方とれます。（又茹でても宜しうございます。）一方鍋に油をしいて焼豆腐をうす赤くなるまでからつといためて、先のれいしを入れ砂糖醤油、味の素でお味をつけます。少し油濃い方が宜しうございます。

それをさつぱりしていたゞきますには初めに卸金でれいしの外のブツ／＼の所丈おろして水につけておき、絞つて酢と砂糖で甘酢つぱくしていたゞきます。ブツカキでも浮かせますと、夏むきの即席料理には殊によろしいでせう。

序に今一つ胡瓜の料理を申上げますと、先づ胡瓜を前の様にうすくおろしておき、一方寒天を（胡瓜の中位なのに寒天一本の割合で）水につけておき、十五分ばかりしてから取出しますと。水をふくんでジツトりしてゐますから、絞つて小さくちぎり、前の胡瓜とまぜて酢砂糖に水を少し入れてかけていただきますと淡泊で美味しいものが出來ます。

五、へちまの料理（ナーベーラーチヤンプルー）

糸瓜も處によつては「何のへちまぞ」「へちまもくそも……」などと捨てられてしまつてゐる様ですが、これも琉球ではよく食べます。

どうしてあんなおいしいお野菜が見向きもされないのだらうと琉球人から見れば不思議に思はれます。

これはまだ若い中にいたゞきますので筋立つてしまつては駄目です。これもれいしの様に料理法は極めて簡單で、その根に灌水位かけたらぐん／＼育つもので琉球では老人たちがひまつぶしにやつてゐます。

初めに皮を去り、それを斜めにきつて洗ひ水をきつておきます。そして前のれいしの様にお豆腐と一處に油でいためてお味をつけますと美味しくいたゞけます。總て油でいためて味をつけるのを琉球ではチヤンプルーと申します。へちまはこの外に繊切りにしておみおつけの實にしてもおいしうございますし殊に茹でて、細く切り、ぬたにして白い茹で鷄卵など添へますと、色の取合せもよく自然の甘味があつて結構なものです。糸瓜は又中五分長さ一寸五分位に切つて、日當に干し、したびた時熱氣をさましてから氷砂糖一斤、砂糖半斤、お酒（泡盛）少々の割につけて大きなガラスの瓶につけておきますと四五日してから少し發酵します。これはなるべく時日がたつてからいたゞいた方がよろしうございます。れいしも又かういふ風にして漬けることができます。殊に梅干や甘草花などと一緒に漬けたのは一層味が引たちます。時々味が惡くなつたら少しづつお酒をふつて氷砂糖を少しづつ入れるといつまでも同じ汁においしく色々なものを漬けていたゞけます。

六、ドルワカシ

材料。ズキヤ　蒲鉾　里芋　椎茸　豚肉
醤油、砂糖、味の素、豚油。

ズキヤはなるべく根元から一尺二三寸位の所を用ゐます。カマボコ、里芋、椎茸、豚肉は賽の目に切つて醤油砂糖味の素で味をつけ煮ておきます。先づ初めにズキヤを洗つてみぢんにきつて大きな鍋に入れ、二時間位に煮ますとやはらかくドロ／＼になります。この時には焦げつき易うございますから、こが

さない樣にして大きなおしやもじで絶えずかきまはし水氣が全くなくなる程度になつたら火からおろし前の豚肉、里芋、蒲鉾、椎茸を一緒にまぜて改めて味をつけておきます。別に鍋に油を右の品が大丈夫とけつかず煮える程度に入れ少し煮たゝせて前記の品を入れ全體に油を行き渡らせて絶えずまぜながら、こげぬ樣注意して煮ます。これは全くおいしいものですからズキヤの出る頃には是非……とおすゝめしておきます。

七、サーダーアンダギー

材料。メリケン粉五合　砂糖　落花生一合　卵二十　鹽少々

今度は少し甘い所を二三種申し上げませう最初に卵を割つてお丼の中に入れ黄味と白味をよくかきまぜておきます。それに砂糖と鹽少々で好みの味をつけ、メリケン粉を入れてお箸で絶えずかきまはしながら落花生のくだいたのを入れ少し固い位にまぜておきます。

別に底の深い鐵のお鍋（フライパンでもいいのですが小さく淺いから一度に揚げることが出來ません。無ければフライパンでも結構です）にラード（豚油）を八分目程入れ、少し油が煮出したら指先きに水をぬらし先のメリケン粉をといたものを手際よく丸めながら入れて揚げます。火はよわい加減にし鍋の中でくつつか無い樣にお箸でソロ〳〵かきまぜる樣にします。

上手に出來たものはパチリとはちきれて見てもおいしさうです。狐色になりましたら出して新聞紙の樣なよく油を吸ふ紙にのせて油をとり、鑵の中にでも入れておくと濕らないでお小さい方のお八つにも大變喜ばれませうし、お客樣に出しましても結構な手製菓子でせう。一寸ドーナツの樣な味がいたします。

八、カステラ

材料。飛魚三十尾　卵四十個　鹽　砂糖

魚は琉球に多い飛魚を用ゐます。小骨を拔き去つた魚肉を小さい臼の樣なものに入れてつくと、すつかりねと〳〵になりますからその時に卵を一つづつ割つて流し、靜かにかきまぜ、鹽とお砂糖で味をつけておきます。別に銅板かブリキで作つた蓋のある四角いお鍋に油を少し入れて煮立つた油にさつと入れて引き上げ、半紙を二枚位（これは別に揃へておく）底の方にしきます。きれいにしきましたら、前の魚肉をお鍋の七分目位にギツシリつめます。そして上にも（魚肉と鍋蓋の間）にも油のついた紙をそつとおいて鍋の上下から弱火で殆ど蒸すやうに氣長に燒きます。火力は鍋の下よりも蓋の上に乘せた火の方を强くしますとよろしうございます。

九、冬瓜漬

材料。冬瓜　砂糖　灰汁水

冬瓜を巾一寸五分長さ二寸五分位に切つて針のやうな物で方々つきさしてから、それを灰汁水で四五時間位漬けておきます。石灰水は石灰と水をまぜてしばらくおき上の澄んだ水をとつて用ゐます。すつかりつかつてしまひましたら取出して水で洗ひます。この時は冬瓜はもう固くなつて居ります別にお鍋（なるべく銅か鐵の部厚なのが宜しい）にお砂糖一斤水一升五合の割合でまぜ、冬瓜を入れて汁の無くなるまで煮つめますこの時もこげ

ぬ樣たえずかきまはします。扨てすつかり煮つまりましたら平たい臺の上にお砂糖を一面にしいたものゝ上で冬瓜を一つ〳〵まぶしながら兩手で形をなほす樣にして冷します。

　これと次に申し上げる橘餅は琉球名物の中でも大變自慢をしたいお菓子です。

十、橘餅の作り方

熟しない蜜柑（なる丈皮の厚い物琉球では唐九年母を用ゐます）の薄皮を所々殘して小刀でけづる程度にむきます。それがすんだら手で押しつぶして種子をとつてしまひます汁が出てもかまひません、それを銅鍋に八分目位砂糖を水で溶いたものゝ中に入れて汁がなくなるまでこがさせない樣にかきまはして煮つめますと大變いゝ匂ひがいたします。それを臼に入れてつき、程よい大きさに少しひらたく形を作つて臺の上に竝べて翌日まで冷しておきます。

　冷えて固くなりましたら刷毛で裏表にジ°ン°を何べんもぬります。ジ°ン°の作り方は初めに鍋に水をほんの少々入れ砂糖水飴（これは各々御好みのまゝの甘さにこしらへたらいゝでせう）を入れてすつかりまぜますと次第にねばつてきます。それが一寸指先きでさはつて見てネチ〳〵絲を引く時に鍋をおろし擂鉢に入れてあたります。この時あまり長い間あたりますとすつかり固くなりますからこれもネツチリとした所でやめます。それをジ°ン°と申しまして、そのジ°ン°を先きの蜜柑にぬるのですが冷えてしまつたら白く固くなりますからそれをお砂糖の中にまぶしておきます。（若しジ°ン°を餘んまりあたりすぎて固くなりました時には一寸火にかけますとやはらかになります。）この方法でキンカンでも出來るでせうしネーブルもいゝだらうと思ひます。

十一、ナントー味噌

材料。甘味噌　糯米　砂糖　ヒハチ
　落花生

糯米を一晩水につけて翌日は笊にあけて水をきつておきます。それを臼に入れてつき篩でこしますと、細かい粉になりますからそれを又臼に入れ甘味噌砂糖で味をつけ一緒についてすつかり交ぜます。その中にヒハチ（これは琉球八重山島に出來る草の實で辛いそして大變に香ひの高いものです）を入れて又つきます。それを水に手をぬらして長さ五寸巾三寸位、厚さ六分位の長方形の板の樣につくりサンニンの葉（これも琉球獨特の細長い香ひのいゝ葉です。内地には無いでせうと思ひますからもしお作りになる方は何かその土地でこれに適當なのをお用ゐ下さい）にのせ、上の方には落花生を花びらの形に押して、蒸籠に入れてむします。

　これは琉球ではお清明祭につかひ重に花柳界で作つて居ります。日が經つと固くなりますが冬の寒い晩など、餅網で燒きながらいただきますと又格別で、ヒハチの香や、サンニンの高い香りが遠く離れた故郷を思ひ出させます。まだ色々面白いもの珍らしいものがありますが餘り長くなりますから、又機會がありましたら申上げませう。

居間と食事室の間取設備

木檜恕一

近時臺所應接間又は子供室といふ樣に段々と研究なさる方が多くなつて參りました、だが居間や食事室に就て考へて居らるゝ方は未だ尠ない樣に思はれます、住宅を改良して經濟生活の機能を完全にし樣とお互に努めるのも、矢張りそうして節約して得た時と力を積極運動修養などの精神生活の方面に消費したいからで御座いませう、此の點から考へても家族團欒の中心となる居間と食事室を全く考への外に置くことは出來ますまい、改良さるべき住宅の居間と食事室は何う取扱つたら宜ろしいか、茲に私の平素考へて居る此の二室の間取や設備に就いて卑見を述べて見たいと思ひます。

間取設備に對する私の希望

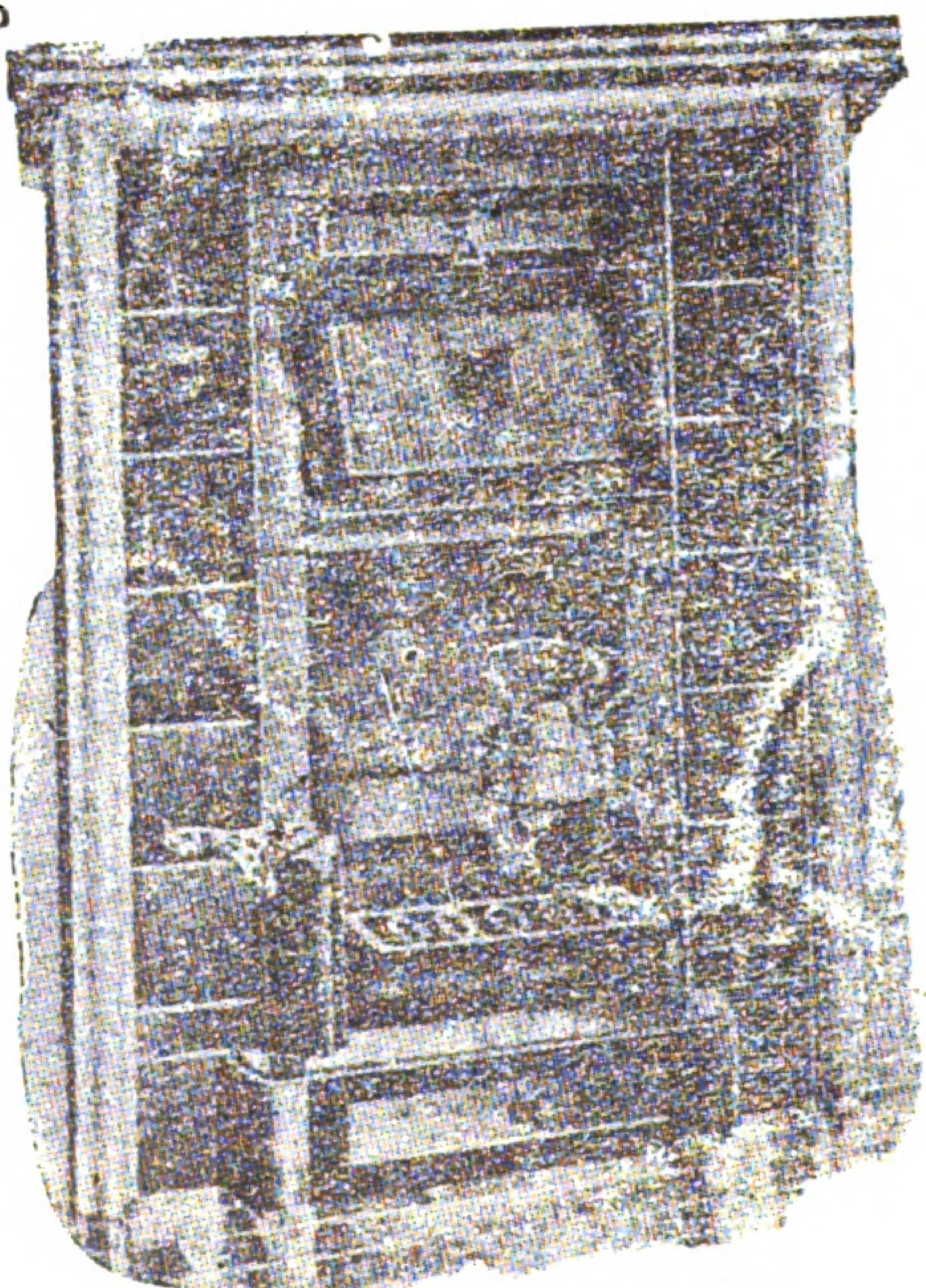
此の二室を考へる前に一般の間取に就て申上げたいことがあります、今迄私共が洋風の家の間取を考へる時に大方應接間客間居間食事室配膳室臺所書齋寢間子供室といふ風に、最初から各室の用途を限定して唯だ夫等の室の配置にのみ苦心して居つた傾きが御座います、此の結果として洋風の家は今迄の和風の家に比較して多くの間取が必要となります、それのみならず日本座敷に較べて多くの家具も要しますし、坪當りの建築費も多くなつて參りますから、そこで差當り經濟上の問題で折角希望した家も建てることを見合せて、空しく在來の家で我慢なさる方も多い樣に思はれます、誠に殘念なことではありませんか。

私の前々から考へて居りましたのは此の點の改良で御座ります、勿論建築費を廉くしたりその支拂ひを容易くするには、他にもいろ／＼な方法も御座いませう、だが家そのものを根本から安く建てることを研究するのが極めて大切なことであると思ひます、此の點に就いて私は從來考へて居つた各室の夫々與へられた用途を擴張して、丁度今迄日本の家屋で六疊八疊又は四疊半とその大きさに依つて區別を立て、用途に依つた名稱を除り嚴格に用ひなかつた、その筆法を之に寫し、差し支への無い限りは一つの部屋を二つ又は

三つの用途に之を用ひて見たいと思ひます、そして此の考へは家屋の造作。又は家具の工風によつて或る程度迄でその目的を達し得らるゝことゝ信じます然らば居間と食事室は何う設計いたしますか、勿論双方獨立して設けるといふことが必ずしも惡いといふことではありません、だが我國の中流以下の住宅として考へて、其處に二室を合せて一室となすか、若しくは他の方法で經濟的に之を取扱はねばならぬことは誰しも肯かるゝことと思ひます、居間は家族が團欒して快談する部屋、食事室は家族が集合して愉快に食事する部屋、其の目的が家族の團欒にある以上は此の二室を併せて一室とすることは寧ろ合理的のことでありませう、食事のみの爲に廣き一室を當てることは餘りに經濟を顧みぬやり方の樣に考へられます。

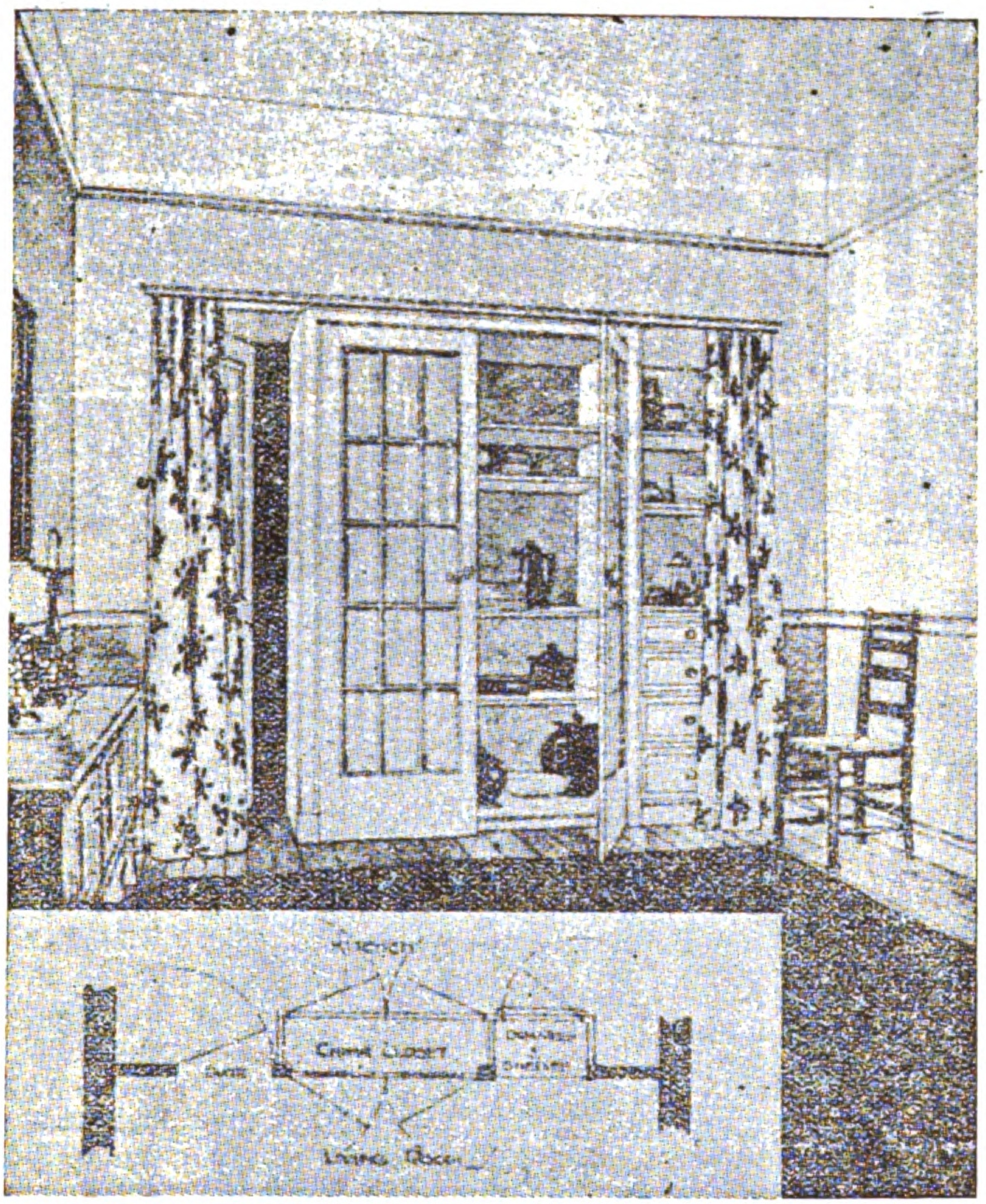
臺所を兼ねる食事室と居間

英國で極く小さい家の間數を見ると居間臺所と二つの寢室からなるものを最小とし、その次になると居間と客間と二つ若しくは三つの寢室から出來て居ります、此の場合の居間は食事室を兼帶し、且つ臺所の仕事を洗ひ場と煮炊場とに分けて、後者は此の居間



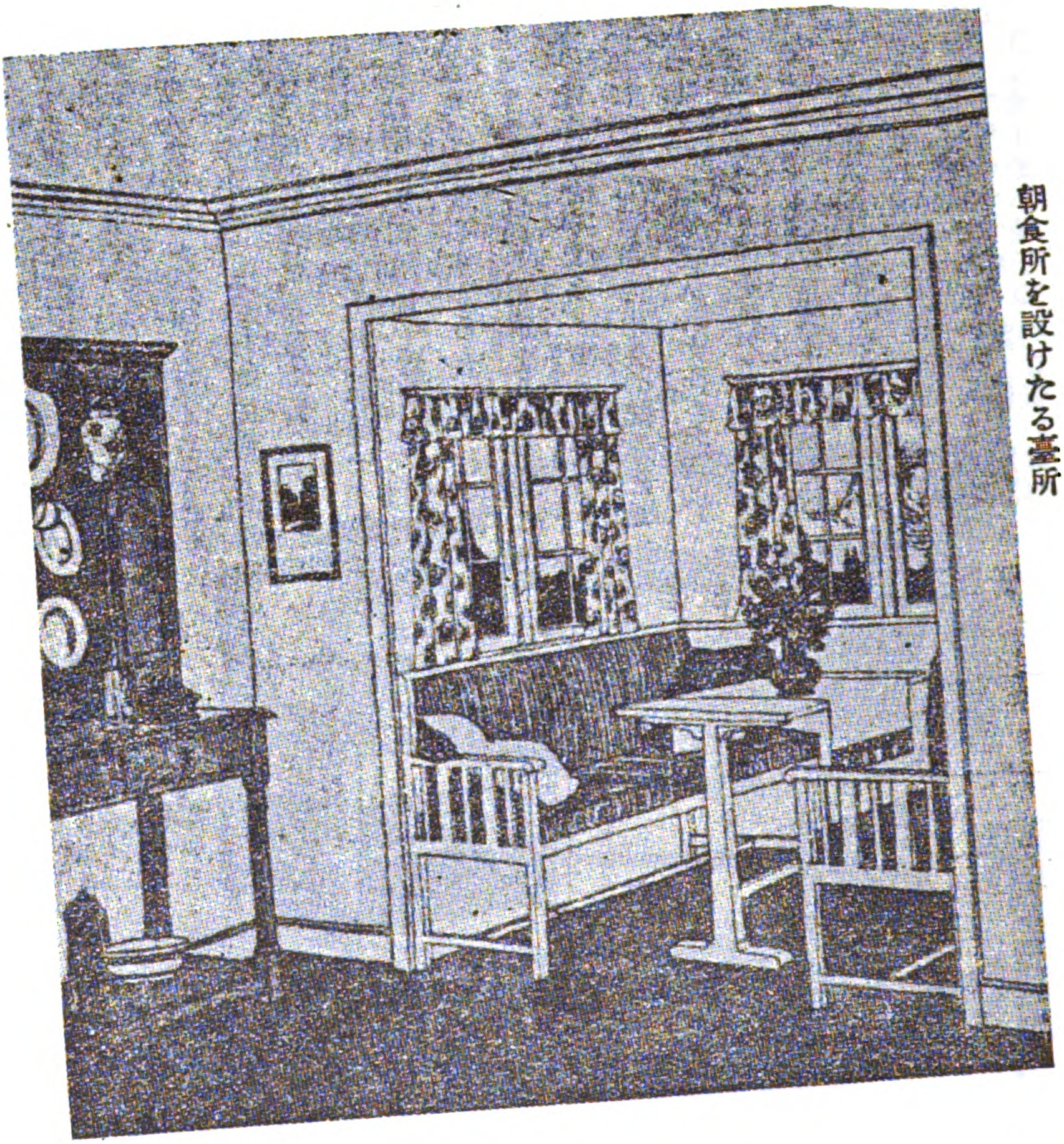
煮炊を兼ねる居間の暖爐

で兼ねしむることになつて居りますモット細かに申上げると流場は極く狹い場所で、そこに流し臺と瓦斯竈とその上に棚があります、更に一隅に洗濯竈といふて洗濯物を煮る大きな竈がある、それから野菜類や酒類を入れる爲にラダーと稱する押入があつて、内に二三段の棚板と空氣の出入を自由にする換氣孔が設けてあります、尚ほ別に薪炭を入るゝ押入が此室又はその近くに設けらるゝのが常であります、それから煮炊場の方には料理兼用の暖爐と直接壁面に作り付けた食器棚と食器食料品などを入れて置く高さ六尺長さ二三尺で内に三四段の棚を備へた押入式の戸棚があります。斯うして料理と食事を兼ねた居間として最も經濟に用ひられるのは誠に良い考へではありませんか。就中料理に用ひる火熱が直ぐ



臺所と食事室の間仕切に取付けたる配膳棚

に食事や居間の煖爐ともなり、或は餘熱を利用して湯を沸かし、それを流場や浴室に送ることの出來る所に更に妙味があると思ひます。といふて之が英國のみの專有でも御座いません、我が國にも古くから之と殆ど同じ工風が施されて今も尚ほ便利なものとして用ひられて居ることに御注意して戴きたいと思ひます、私の故郷では臺所といふのは割合に太きな室で、その一隅に流臺と大竈があり、薪炭もその側近くにあります、他の一方に四尺角位の爐を設けて此處で食物の煮焚をして暖を採りつゝ食事もしたり又は快談したり所謂家族團欒の中心となつて居ります、彼我の間に多少進歩の相違はありませう、だが臺所を擴く利用する精神には變りはありません、斯うした設備は必ずしも田舍に限らるゝ譯でもありますまい、生活の程度に依つては之に適當



朝食所を設けたる臺所

の改良を加へて都會の新らしい家に試むることも決して排すべきことでは無からうと思ひます。

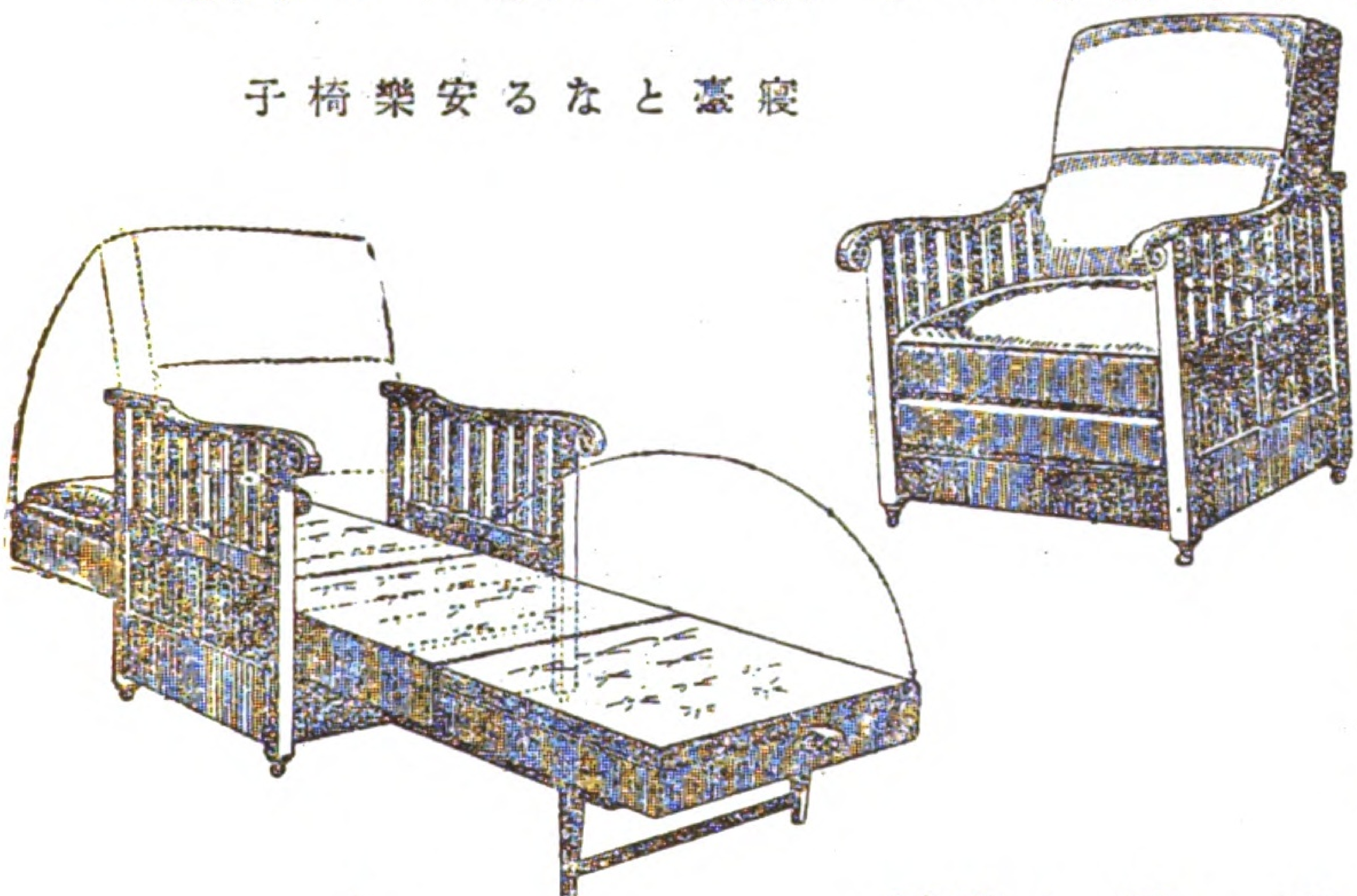
食事室を兼用した居間

次に食事室と居間とを兼帶にして臺所から之を離した場合を考へて見たいと思ひます、食事室が臺所から分離さるゝと二つの部屋を要することになります、從つて料理を臺所から食事室に運ばねばならぬ一つの手數が殖えて參ります、之が爲めに此の二つの室は出來る丈け相近づけて直接の出入口を設くることが必要です、それのみか食事車といふ樣な特種な家具を作つて食器食物を一時に澤山之に載せて持運ぶことも便利なことゝして歐米では今日も尚ほ用ひられて居ります。

少し大きな家になると臺所と食事室

の間に配膳室を設けて此處で食事を準備して其處から食事室に持運ぶのが一般の例であります、所が小さな家になると斯んな餘計な部屋を設くることも出來ませぬから、その代りに食事室の食器臺と配膳棚とを兼帶にして臺所との間仕切に食器戸棚を取附けます、此の戸棚は兩側を利用して臺所から料理を入れて之を食事室から取ることにいたしますから前の食事車よりも遙かに便利となると思ひます、或は又此の戸棚は更に工風してその中央の部分を廻轉式として、臺所で入れて之を廻轉すれば食事室の方からそれを取れる樣にすることも出來ます。そして場所を節約して且つ室の體裁がよいから、慥かにお勸めしてよい事と思ひます、何にしても居間と兼帶であるからには食事に用ふる卓子や小椅子の外に低い圓形の茶卓子や大小の安樂椅子なども備へ付けねばなりません。

食事室兼用と申しましても朝と晝は家族全體卓子を圍むで食事する場合は何れの家庭でも尠いことゝ思ひます、從つて食事室として用ふる場合は大方晩食の一回に限らるゝことに自然になつて參ります、そこで朝食の爲めには他の場所を選ぶ必要が起つて參ります、大きな家になると朝食室を別に設くることも出來ませう、玆に米國の最近の新しい家に見る臺所の一隅に朝日の射し込む窓前の凹まりたる所を選んで食事卓と腰掛を取附けて極めて手輕に朝食所を設くることは慥に良い思ひ付と思ひます、そして其の卓子は窓臺下に其の一端を取附けて、その下に折込として置くことも出來ます、斯うした設備があれば唯だに食事計りでなく女中は此處で針仕事などをすることも出來て至極便利であると思ひます。

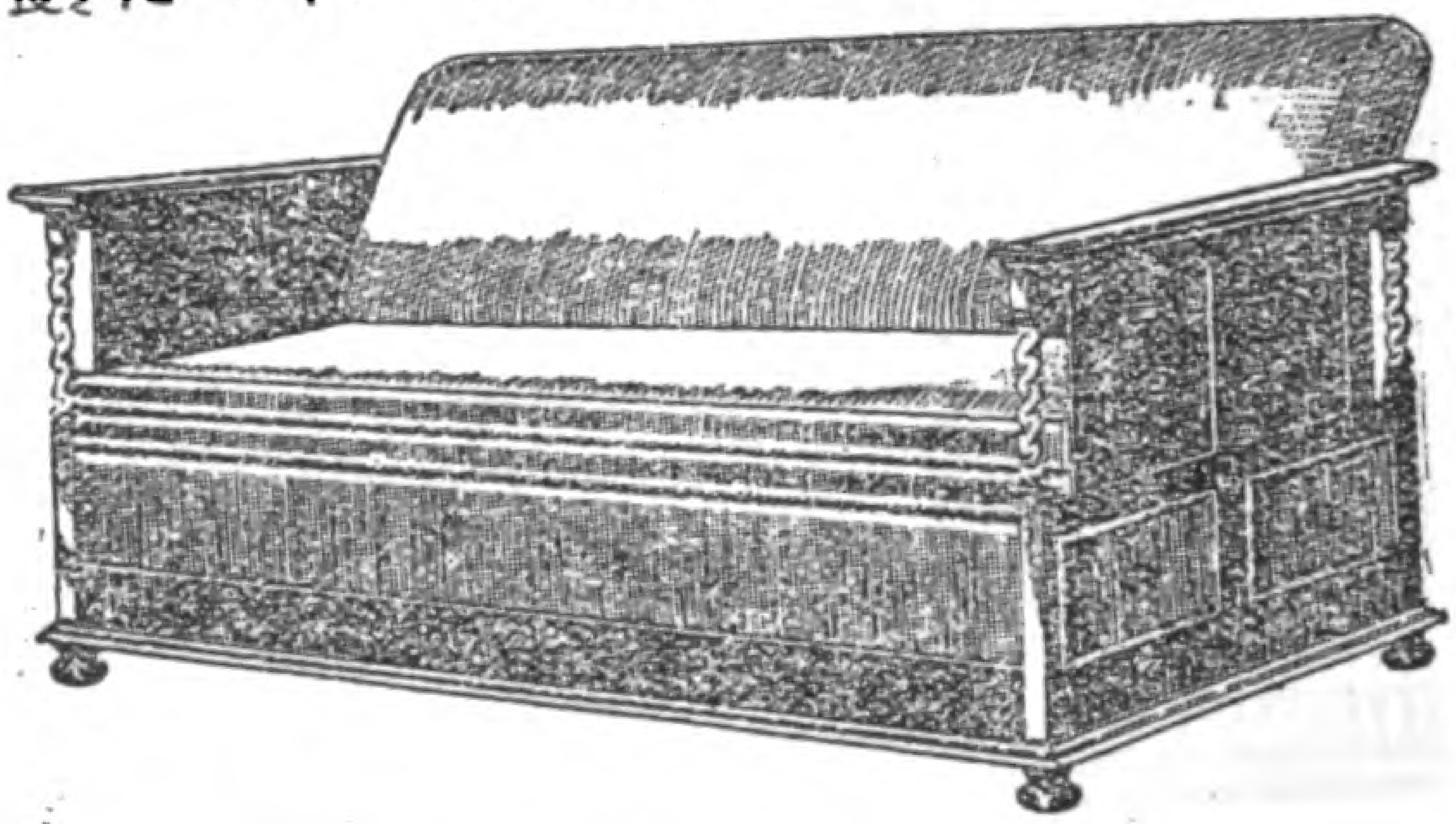


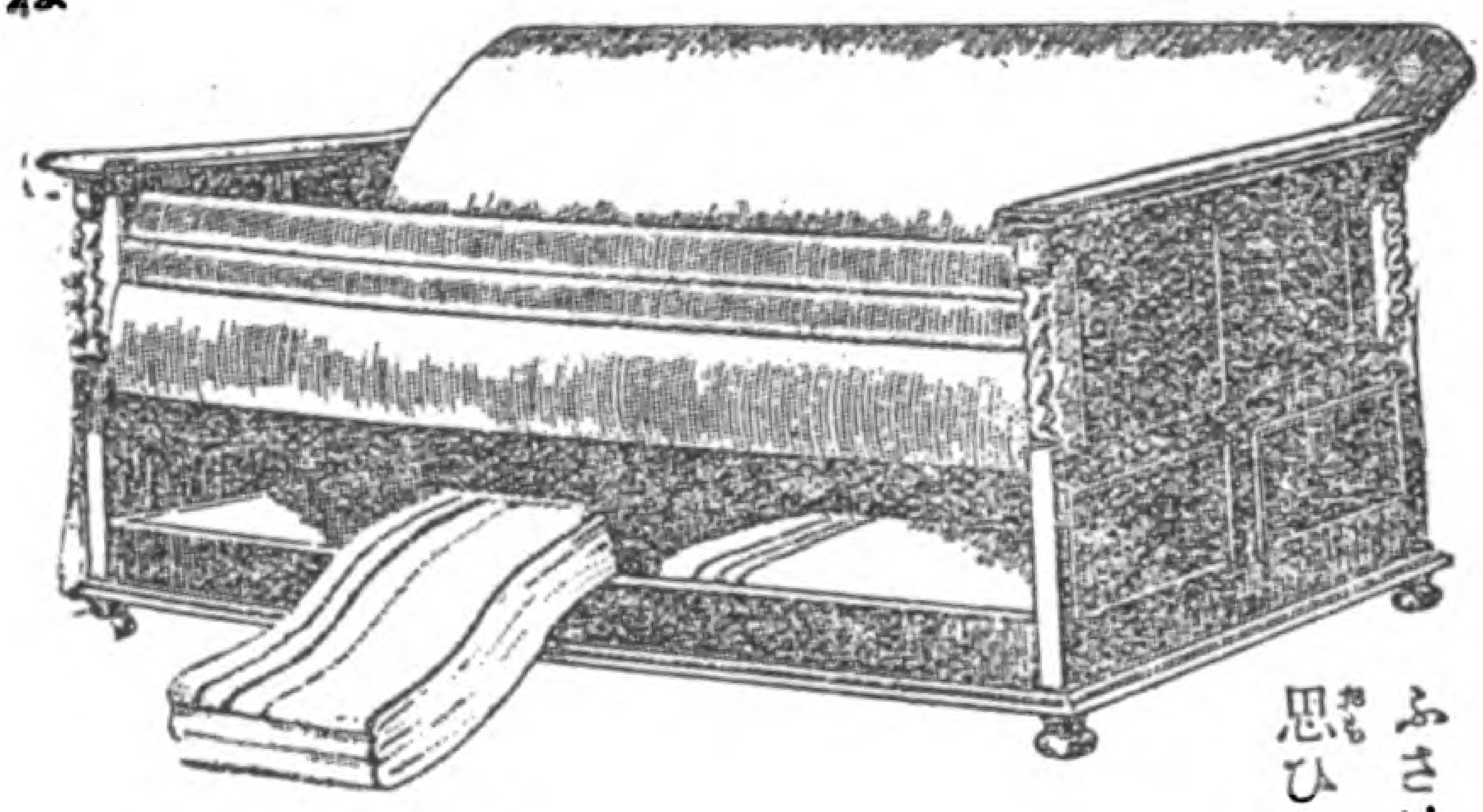
寢臺となる安樂椅子

寢間を兼ぬる居間と食事室

最後に食事室を居間と離して設くる時は何ういたしますか、臺所と合せて三つの部屋となります。私は此の場合には居間と食事室の爲めに先づ大きな長い室を作つて、その一端を居間に他端を食事室に使ひたいと思ひます、此の二室の仕切は中央に大きな入口を設けその左右に一面が書棚で他面が食器棚の兩面が使用し得る高さ約四尺位の戸棚を作り附け、その殘りの部分をカーテンとして平生は之を開いて廣々とした一室の外觀を味はしめたいと思ひます、何れにしても食事室は居間に比べて稍小さくいたします。

斯うして作つた居間には低い圓形の茶卓子と夫れを圍んで二三の安樂椅子を置きます、壁際の一方に長椅子や寢椅子を配するのも良いたと思ひます、或は新聞雜誌を讀むだり書信を認めたり、時に樂器を奏し蓄音機に耳を樂しましめる設備なども必要となつて參ります、斯くして家族團欒の目的にふさはしい、種々な設備を施したいと思ひます。

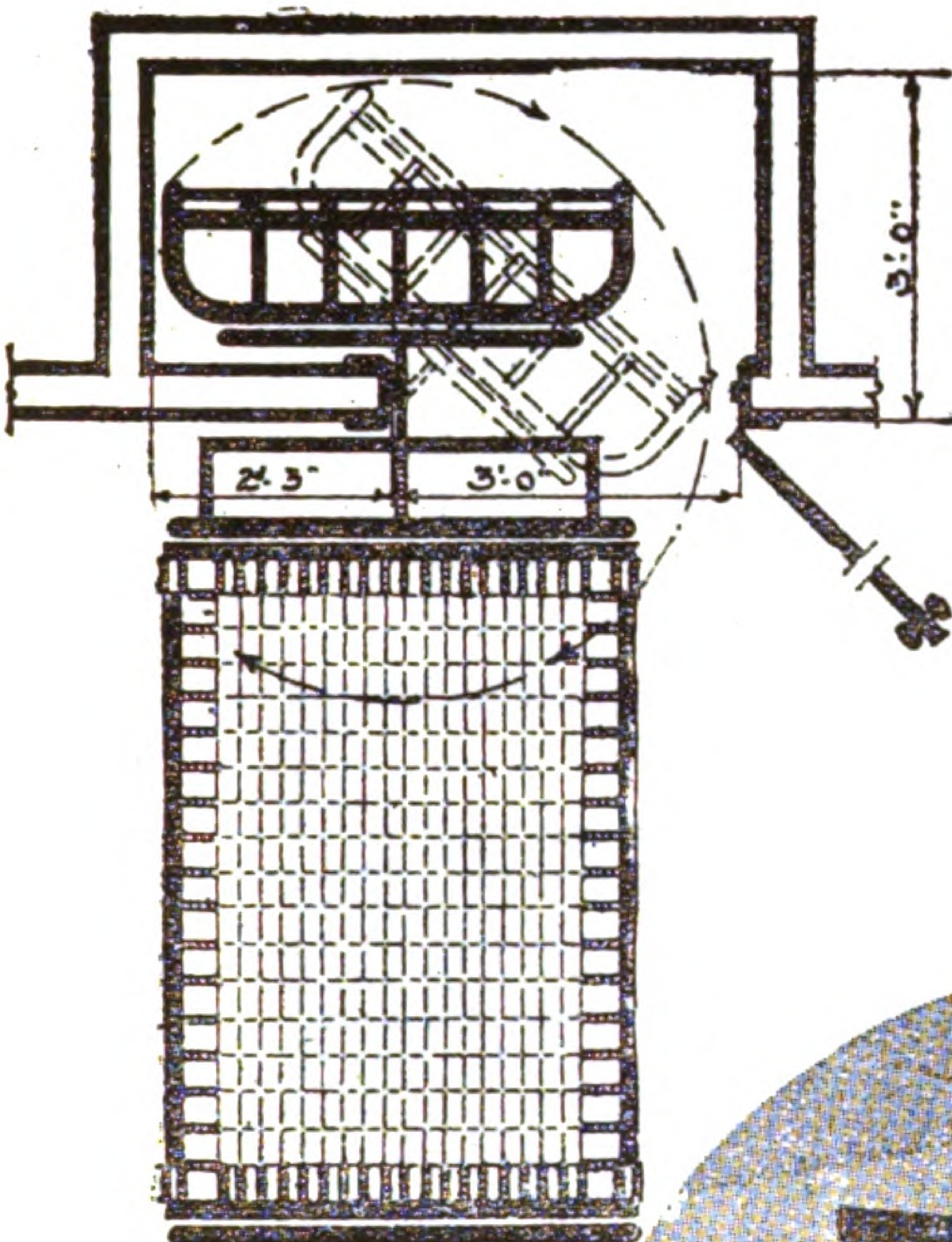




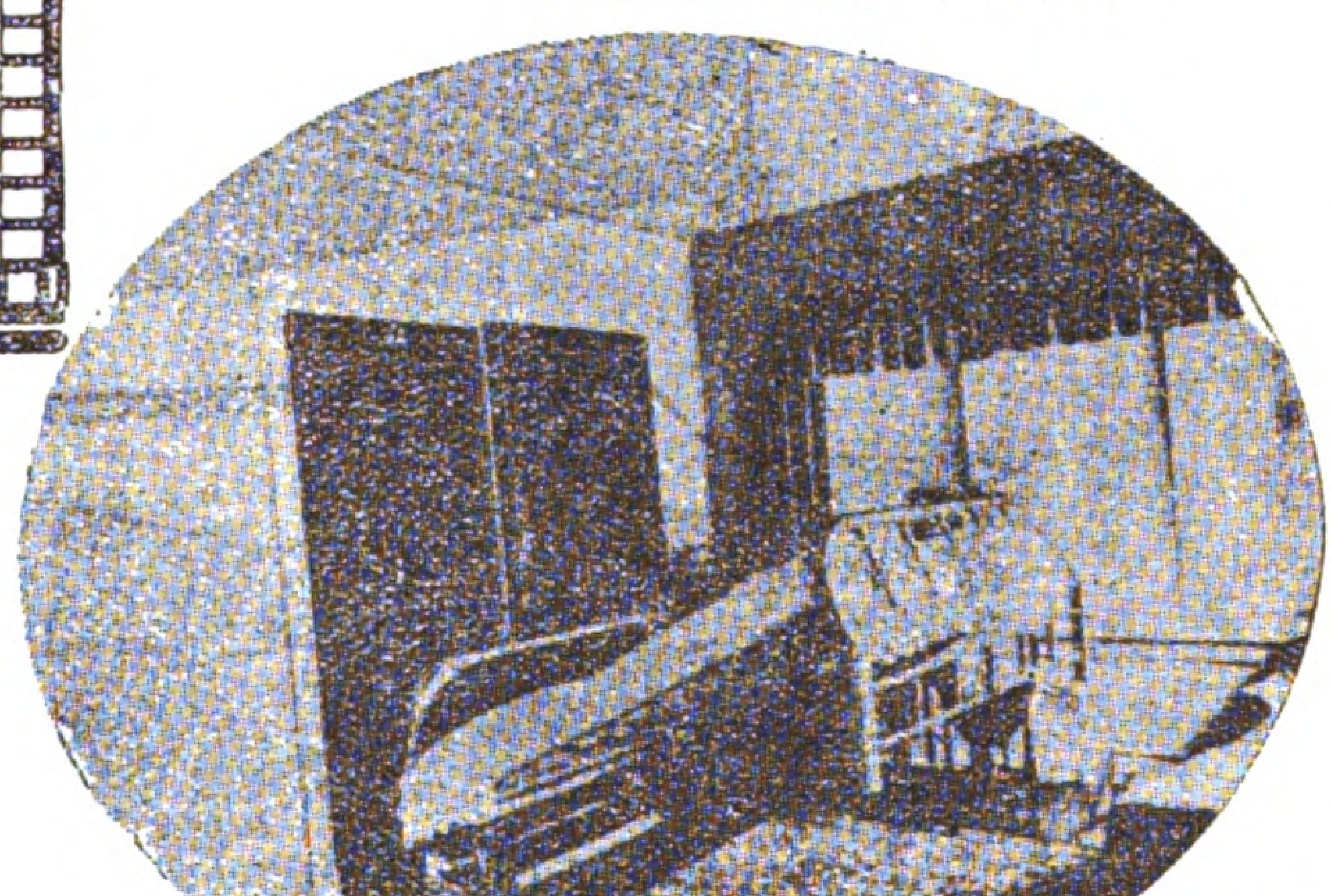
寢臺と服函を兼ねたる椅子

扨て以上の居間と食事室は何れも之に寢間を兼ねしむることの十分な可能性のあることに特に御注意して戴きたいと思ひます、但し此の場合の間仕切は中央を引分け戸とするのが便利です安樂椅子や長椅子を寢臺の形に變へるのは最も輕便な方法で、之れには色々な方法があります、又寢椅子なら直ぐに寢臺として用ふることが出來ます、之を來客に用ふることも出來ませ

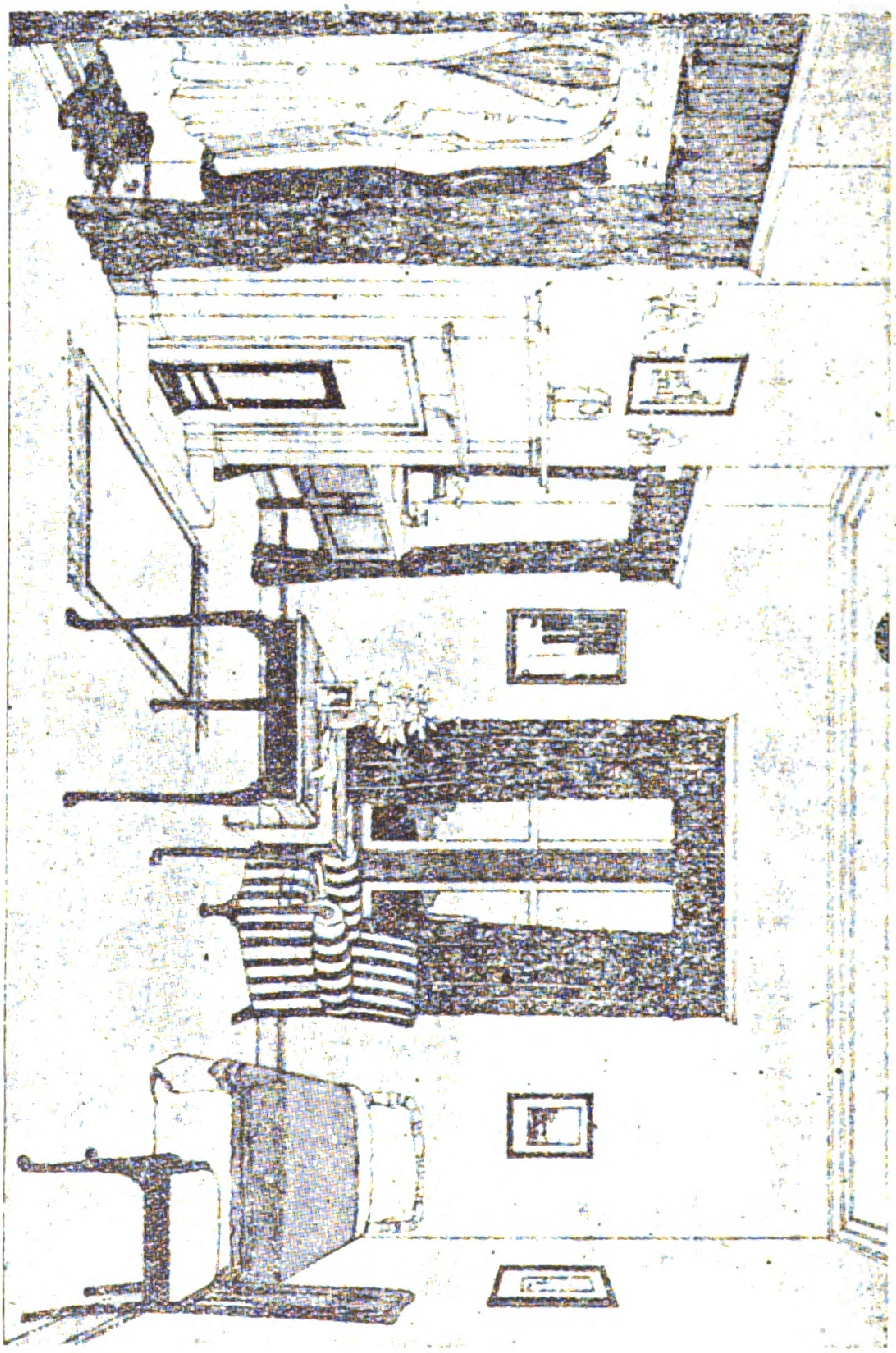
う。若し常用の寝間に當てるとしたら更に専用の寝臺を装置することも不可能ではありません、夫れに對しては誠に工合の良いものがあります、卽ち押入の中に一つ又は二つの寝臺を竪に取附けて之を引き出し、前に倒して使用するので御座います、若し此の押入を少し大きく取る時は、その中に簞笥や



押入より引出した寝臺



化粧鏡迄も装置して御化粧又は着衣室とすることも出來ます、勿論この場合には室内に電燈を装置して置かねばなりません、此食事室に取附けた食器棚の下方の開戸の内へ寝臺を押し込んだり、又は普通の食器臺の下方に之を疊み込んだりすることも出來ます、だが實用としては前記の方をお勸めします。其他寝臺許りでなく服簞笥、洗面臺なども簡單に押入の中に収め外面をカーテンなどにて體裁良く装ふことなども出來ます。



寝室を兼ねる居間

時評

千葉龜雄

總選擧と婦人問題

結論から先きに言ふ。それは現代の女性達は、今度の總選擧について、どれほどの興味を持つであらうか、非常に疑問だといふことである。

先づ婦人參政權は、普通選擧の審査會その他において、すでにいくたびか否決された。けれども參政權問題は、決してこのために挫折しなかつた。いな、全民衆の參政を、あくまでも當然な合理として、確信しつゝある目覺めた全國の女性達は、表立つて働く參政權運動の女性達を中心として、この否決に刺激されて、ますますその熱情を高めるであらう。殊に昨今の新聞に傳へるやうに、イギリスにおける婦人選擧權の擴張を耳にしては、なるほどその興奮は止み得ないものになるであらう。そこでこれ等の人々には、この總選擧に對してどういふ態度を採るかとなれば、それは卽ち、婦人參政に理解のある議員、婦人參政に贊同する議員を、より多數に選出させる爲に、推薦運動を試みることになるであらう。もちろんそれが有るにしても、それは少數の都會地に限られるのであるが、それに拘らず、それはたしかに婦人運動の一新記錄とはいへる。そして目ざましい一記錄でなければならぬ。しかもその運動が漸く着手されやうとして居る。

思ふに今日までの選擧婦人運動者は、候補者自身の親族もしくは家族に限られて居た。それは賢母良妻の模範として、わが國道德の傳統から讃美されて居たのではあるけれども、有りやうは常識道德と合理とは或る場合に全く正反する。卽ち母であり、妻であるが故に、子や夫の被選に努力することは、一向不思議でないやうに思はれるのである

が、かゝる私情に殉ずる讃美は、時に公的利害を沒却することを免れない。卽ち斯る場合の母や妻は、子たり、夫たる私情に忠實であることはあり得るが、多くの場合、公人たる立場の子たり、夫たるものの主義、理想、人格に全く盲目であり、全くそれを無視することさへも少なくない。もとより、その子、その夫を、平生に、かく非人格、無主義にして置くならば、それにつけては、妻や母の義務もあるであらうが、それは別として、もしその母にして、妻にして、眞に民衆の利福や、社會の公義を知つて居るならば、その子、その夫の人格、地位主義を考へて、その候補の希求を、全く抑止する場合があつても然るべき現實が、隨分と事實に存在する。なぜなら、議員は、家庭の個人ではない。民衆を代表する公人だからである。然るに、わが國では、この點が今まであまり考へられなかつた。然るにそれと反對に女性參政權の爲に、女性が推薦運動をするといふことは、少くとも民衆の共同利害を代表し、いさゝかも個人の意志を含まないところに、前者のやうな形式觀念を抹殺する全價値が有る。普通選擧が、十八年から實行されるか否かはたとへわからぬにしても、普選の最近接は何にしても爭へない機運である。女子參政の運動は、ますます劇しさを加へるであらう。

けれども今回の總選擧に對しての、全體の女性の興味は、前者を除いては可なり稀薄のやうに見える。といふのは、今回の總選擧は、何んといつても、職業政黨の權力爭ひの外に、何等の光明をも意味をも認むべきものがないからである。氣の利いた馬鹿は引込む時代である。いくら、三派が護憲運動などと高唱したところが、內容が、政權の腐肉を爭ふ一線において、政友本黨や現內閣と何の違ひもない、醜惡性極まつた欺かしに過ぎないことは、民衆には百も二百もわかり切つて居るからである。さればとて、その醜惡に對してすらも、大した注意を拂はぬのは、かかる醜惡な、既成政治家の生命も、多寡々々この一期ぐらゐのもので、やがてはすべての生活權が、默つて居ても、民衆の手に還つて來ることを確信するからである。腐れ木は、手を加へずに斃れる。少し强い風を待ちさへすればよい。たゞ毒と毒と相內訌して自滅せしめよ。民衆は高見の見物である。民衆にとつては、そういふものの爲に、抛うつ石さへも惜いのである。そしてそれを抛げる隙に、新しい建設に努力して居るのである。だから現代の女性が、來るべき總選擧に冷淡なのは、冷淡であればあるほど、なほ民衆政治の新建立に、强烈な熱意を持つ證據になるのである。そして現代の女性達は、その新建立の大黑柱を建てる

使命のために、社會や、敎育や、經濟や、その他の局部社會の討檢に、家庭をも忘れて忙殺されて居るのである。それは正しい。

女學校から實社會へ

三月四月は、諸學校の卒業期である。わけても、女學校の卒業期である。そこにはもとより諸種の專門學校、もしくは普通の女學校と、いろいろの差別があるであらう。けれども今日を限りにこゝと分れる學生が、そのペンキ塗りの校舍をふりかへつて、夕日に彩られた玻璃窓を眺める刹那に、誰れか一味の情緒に搏たれないものがあらう。そこには悲しい、また樂しい、數多の數へ切れぬ思出がある。また靑春の熱い炎を、幾年の間そこに閉ぢ込めて居たことの、濃い或は淡い哀愁もそこにある。思へば敎育といふものこそまことに不思議なものであつた。そこには、ノオトと機械的記憶の堆積のみがあつた、そしてそこに返らぬ靑春の幾年を埋めた。今まその殘虐な足枷から解放された一瞬間に、何ともいへない解放の享樂を誰しもが、感ずるのは、何よりも無理の無い話なのであらう。

諸子よ、おもふさまに、出來るだけ長く、その享樂に浸るがよい。なぜなら諸子がその享樂から覺めた刹那こそは、諸子の美くしい足元を、實社會の波頭が、何の容捨もなく、ひたひたと嘗めて居る刹那なのだから……

學舍にあつては、何と云つても、親切な敎師といふ導き手があつた。實社會は奈何、東西南北を顧みて、茫として一人の賴るべきものがないのである。家庭に入るか、職業を撰るか、或は正確な將來を約束するために、ある特種の修養に入らうか。それとも直接の實社會に奉仕して、女性としての人格を完全に表現する途に努力しやうか。すべては未知の世界なのである。そこに大きな惱みと不安とがある。しかもその惱みと不安とを解決すべき鍵は、自己を措いて他に何ものもないのである。自己のみがただ凡ての對象になる。規範になる。

そこで諸子は當面に、端的に二つの疑問につき當るであらう。それはかうだ。われ等は靑春の幾年をそこに埋めて、知識の壺をしきりに探り求めた。その壺を探り得てこそは、始めて何等のまどひもなく、われ等が實社會に濶步し得るのだと人は説く。われ等は果して、そうした理想の知識の壺をよく探しあてたであらうか。それが第一である。

次に、われらがこれから棲むべき實社會とは何か。そこで

は、すべての統制なり、組織なり、傳統なり、思想なりが、われらの棲息を、親切に導き、擁まして呉れるやうな安全地帶であらうか。平和の國であらうか。なぜならわれ等は、やうやく巣立つた許りの雛である。もし實社會が、われ等が前に希求する狀態のものと正反するやうな息苦しいものならば、われ等の棲息は、いかにしてそこに安立し得られやう。もとよりわれ等は、より良い社會を準備するために、努力しやうとするものではあるけれども、それですらもなを現前が、より好い社會であることが唯一に望ましい、それがどうであらうか。これが第二である。

そこで潜越ながら許されるならば、私が諸子の二つの疑問に答へるであらう。第一に、諸子が現代の教育に求めた知識の源は、決して完全に滿たされて居るものではなかつたと。さらば實社會とは何か、そこでは、内的にも、外的にも、ただ第一義に、正しく生活することのそれが理想である。そして學校とは、教育とは、ただその生活原理を、より正しく生活に適應するやうな規範を與へることのみにその意義がある。決してその以上でも以下でもあつてはならない。然るにわが國の諸子の教育は、決して斯る標準に合致するものではなかつた。數へられたものは、實際に用ゆべきものではなかつた。然るに諸子は、かくも行違つた準備をもつて、實社會に立たざるを得ないのだ。諸子の悔恨と苦惱が、更に深刻でなければならない。

第二はいかん。諸子が、かく行違つた知識をもつて實社會に臨むとしても、なほ實社會の現實が、諸子を親切に案内する狀態であればまだ好ましい。けれども現代は、決してさういふ狀態に措かれてはない、それは却つてわが國のいかなる時代よりも、より多くの混亂と、矛盾を極めた時代なのである。前の規範がほろびた、しかし、後の規範がまだ起らない。性、道徳、社會組織の一切が、ただ混沌の中に目まぐろしく急轉して居る。こゝで諸子は二重のハンデキヤツプに遭つたのである、まるで、足場の立てどころが無い。全く救はれないのである。

かくしてわれ等はもとよりかゝる教育を呪ふ、かくある社會を悲しむ。けれども差當つてはそれもどうしようもないのである。そこで諸子は日本の女性歴史にあつて、稀有の犧牲の地位に立たせられたものである。けれども凡ての理想の完成は、昔から犧牲者の死體の上に建てられないものがない。それでもう一層深刻に考へて見れば、一體社會人がこの世に生れて來て、一つの新時代を作り上げ得られるやうな、さう

した時代に居るといふことも、そう滅多に恵まれる筈のものではない。さらば人が新時代建設の下積みとして、人身御供に上ることも、またより幸福な運命でないとは必ずしも云へないのであらう。要はその犠牲をして、最大限度能率の下に犠牲させることにある。矢は弦上にある。放たざるを得ない。諸子はもう乗りかゝつた船である。いかに實社會が苦しいとて、教育が無效だとて、もう逆もどりする譯にはどうしてもいかない。たゞ突進して、最大限の犠牲の效率を發揮する外はないのだ。それがどんな方面に奉仕さるべきか。それは箇々の環境でちがふので、むしろ枝葉の問題である。たゞ諸子が當面の仕事は、先づ自己を凝視することであり、次に時代を凝視することである。そして自己によつて自己の運命を決定する外はないのだ、教育もあてにならぬ、社會もあてにならぬ、たゞ自己である。諸子の實社會出立の白線は、くりかへして云ふ、たゞそこに置かれる外は無いと。

カントの二百年祭

少なくとも、文化主義の名を採り上げるだけでも、カントの連想が直ぐ復活される。近世哲學は、カント以前と、以後とに區別されるほどに、それほどカントの哲學史上の地位の偉大なことも、改めて言ふには及ぶまい。たゞ私は、大哲カントの、私的生活についての一つの興味を語る。それはカントが一生の間、彼の作つた日課表通りをきちやうめんに行動して、決して變へた事がなかつたといふことだ。所が、彼の八十歳の生涯に、たゞ一日だけ珍らしくもその日課表を變更したことがある。それはルツソオの「エミイル」を讀んだところが、面白くてたまらない。そこで、夜十時就褥の不文律を、一生にたゞ一度だけ破つて、徹夜して讀み耽つたといふのである。かれはそれほどに自由を愛した。また眞理を愛した。

然るに彼が一八九三年に、「理性の範圍内における宗教」を著したが、その議論が政府と衝突した。そして、帝王ウイルヘルムが、カントに對して、以後宗教の言論を試みないやうに勸めた。ところが彼は從順にその命令に從つて、ウイルヘルムの在世中は、一切宗教論のペンを採ることがなかつた。その折の手紙に「自分の信ずる所を捨てゝ、心ならぬ意見を發表するのは極めて卑屈なことである。が、このたびの王の勸告のやうな場合には、國民の義務として沈默を守らなければならぬ。その上われ等が言論する事柄は、皆な眞理でなければならないけれども、自分の知つて居るあらゆる眞理をみんな公言して了はなければならぬといふ義務はない」とある。

あのフランスのルウソオの、狂熱的自由にかつて陶酔を許

したカントが、今まこういふ不法な、自由の拘束を甘んずるといふことは、われ等には一切合點がいかない。それも或はドイツ帝國國民性の一片の現はれではあらうが。なれどももともと國民としての從順と、眞理の自由とは、全く別種の問題である。彼があの場合、むしろ王と論戰し、またその持つあらゆる眞理を、ぬけそぎ「公言して」、眞理の眼を王と民衆にみひらかせることこそ、眞に眞理に奉仕する者の義務ではなかつたか。なぜなら眞理は國家を超越した世界的公理だから。だから、たとへば文化主義が、根を遠くカントに下したにしても、現代の文化主義者には、決してカントが宗教に採つた態度を學ぶものはないであらう、又學ぶべきではないであらう。時代はあの偉大なカントの人生哲學をすらも斯く修正する。

日露問題の險惡化

後藤子が開いた日露交渉は、ラシアをして、日本の政府や、或る一部階級がラシアに持つ嫌惡の態度や、日本そのものの現情の智識を、より明らかに覺知された點において、好いものよりも、むしろ惡い種を蒔いたやうに思はれた。それはロシアをして好感を持たしめるよりも、むしろ日本に對する嫌惡とひがみの信念を多分に助成せしめると共に、いくらか日本の足許を見すかしめる足代となつたらしいからである。一體日本が歴史的に、外交の經驗が少ない爲に、外交手腕の下手なことは事實が明らかに示して居る。そこで春秋戰國以來の、支那人心理と、メッテルニッヒやタレエランあたりの、自尊と權謀の合の子を外交の秘訣として信ずるやうに、どうしても、この模範を、外交的先進國から學んで來ない譯にはいかなかつたであらう。が、學ぶことはよいとして、撰擇の方式が惡かつた。心理が、眼の着け所が間違つて居た。そして一方に、外交が下手なら下手なりに、素手で、赤心で打つつかつて行く卒直はもとより持ち合せがない。現代までの我國官僚心理は、即ちその外交心理を、國內政治に示した最もふさわしい日本である。陰鬱だ。秘密主義だ。さつくばらんがない。赤心をひらいて人にあたる快さが少しも見えない。所がそれが、現代ラシアに衝き當つたからなほ骨である。

ラシアの國民性は、單純で、公開性であるかも知れない。しかしラシアの帝國政府は、最も權謀術數を得意とした。それは西歐諸國の政權の所在が、絕えず變化するために、それに適應しながら、一方その帝國的貪慾を擴充する爲であつたらしい。ところがレエニンの勞農政府となつた。これは政策としては極めて單純で、公開的なものではあるけれども、主義としては最も國際的の嫌惡と、猜疑を求むるべき先天的の約束を持つたものであつた。そこで彼等も國際の交渉におい

ては、その嫌惡されることに對する極度な反感と、深刻な秘密主義を充分に利用せざるを得なくなつた。それはたとへ止み得ない自衛作用であつたにしても、彼の採つた政策とその心理が、極めて猜疑深いもので、不愉快で、陰欝なものであつたことは爭へない。縦令は遂にひねくれさるを得ない。それにラシア國民性に宿ろ所の、强い執着性と、殘忍性と、これもラシアの傳統であるところの、權謀政策が依然として加味されて居た。

かくしてヨツフエ氏が、日本の承認交渉に敗れて歸國した以來、ラシア政府の日本に對する交情は、惡より惡におもむくとも、決して好い方に救はれる譯のものでは無かつた。しかも日本政府の態度は、いつ承認に傾くか目當がつかない。むしろ後藤子の失脚と、國內思想の急變のために、承認などいつの事かますます解らなくなつたのである。そこへ天來の福音として飛來したのが、例の英國勞働內閣の成立と、イギリス、イタリイ、オオスタリイ三國のラシア承認問題である。そこで得意になつたラシアが、その反動力を利用して、日本を高壓し、最も利害の多い極東方面において、國家的地位を强めようとするやうになつた心理はよくわかる。けれども、よくわかるといふのは、それが正しいといふ意味では決してない。もとよりわが國政府が、大して故障も無い筈のラシア承認を、妙な理由のために躊躇して居る現情はどこから見ても感服されない。そしてそれがために徒らにラシアの感情を刺激して居るのは、少くともあまりに小心過ぎ、臆病過ぎる。またあまりに卓見がなさ過ぎる。さればとて、ラシアが今度採り上げたやうな態度も、たとへいくら贔負目に見ても決して是認されない、それはあまりに權謀的であり、ヒステリイ式であり、高壓的であり、それらがあまりに見え透いて居るので非常に不愉快である。たとへばウラジオ領事館の閉鎖、新聞通信員の退去强要、郵便交換の停止から松井大尉、群司副領事の拘引などと、矢つぎ早にやる手段が大國の態度としてはやり方があまりにせゝこましい。もちろんそれには、日本が自ら擇んだ因果關係も多分にあると云ひ條、少くとも一國の體面を維持する日本が、たとへ萬承認する意志を持つて居たにしても、そうした挑戰的な遣り方に對して後に、快く承認が出來る筈のものであるかどうか。それ位はわかりさうなものだ。しかもそれがどこまでも承認させる餘の政策であり、手段であるといふならばなほまづい。斷じて目的を達成する手段ではない。けれどもそれを解決する役目は、ひとりラシアにばかりあるわけではない。元より日本にもある。それには政府が國民的立場から消極的に抗議するばかりを能とせず、この場合、先づ大局から世界の趨勢を達觀する必要に迫られて居る。それはまた同時に日本國民すべての必要でもある。

人とその著作

正宗白鳥

片山潛の「自傳」

かねて讀みたいと思つてゐた片山潛氏の自傳を、昨夕通讀した。世界を流浪して、貧苦艱難孤獨迫害の經驗に富んでゐる氏が、牢獄の暗室や潛伏してゐる密室の中で、過去を追懷して書いたのだから、さぞ、辭句に悲憤の調を帶び、血や涙が紙の上に落ちてゐるであらうと思ふ者があつたら大當てちがひで、平々凡々何の奇もなかつたやうに、凡人の凡生涯が記述されてゐるに留まるのである。これは、獄吏の檢閱を經なければならぬので、筆が拘束されたゝめでもあらうし、氏が少時漢文を學んだのにかゝはらず、多年海外に住して故國の文章を書馴れなかつたゝめでもあらうが、氏の人となりが鈍重で衒氣や誇張癖がなかつたに原因してゐる。私も、歐米古今の知名の人士の自傳を幾つも讀んでゐる。日本の名士の自傳も幾つも讀んでゐる。今日の日本の多くの文學者は、若くして自傳小說見たいなものばかり書いてゐる。そして、私は衒氣のない覇氣のない色氣のない自傳といふものを、未だかつて一度も見たことがない。私は有名なジヨン、スチユアルド、ミルの自傳にも敬意を拂へなかつた。大杉榮の自叙傳の如きは、私には讀むに堪へないものであつた。

そして、私は片山潛氏の乾燥無味の自傳は、兎に角通讀して、「自傳」中の珍本であると思つたのである。あれほどの

波瀾ある生涯を經てゐながら、これほど自己を平凡に書くことは、自傳でも書かうと思立つほどの人には、容易に出來ない藝當である。誰れしも廻らぬ筆を、危かしく廻してでも、もつと色艶をつけたがるものなのだ。

私はこの自傳に對して、特別に興味をもつたのには、多少の因緣がある。氏は岡山縣人であつて、作州久米南條郡弓削村近在の氏の出生地は、備前とは大川を一つ隔てたくらゐで接してゐるので、氏の幼少時代の追懷には、私の幼年の頃の故郷の風俗を鮮かに思出させるものがある。氏は私よりも二十歲ほどの年長者であつて、維新以前の記憶を有してゐるので、世の風俗はその時分から急速に變化した譯であるが、しかし、私が十歲以下の頃には、農家の生活は、この自傳にあるのとさして違つてゐなかつた。行燈やカンテラの薄い明りの下でヨナベをしてゐたこと、男は藁仕事をし、女は綿をつむいでゐたこと、その際にいろ／＼な昔話の語られたこと、伊勢詣り金毘羅詣りのこと、正月や節句のことなど、私の幼時の見聞が、この自傳によつて思當ることが多い。私自身も面白半分で、ネヂワクといふ者をよく廻してゐた。（この器械は綿の實を取去るために用ふ）

人間、幼時を追懷するぐらゐ懷かしいことはない。片山氏の如き、文辭に拙にして、詩人的情操の乏しい人でさへ、その生立ちの記にはおのづから、素朴な田園詩をつくつてゐるところがある。また、氏でさへ、少年時代に自己に對して好意を持つてゐた女のあつたことを、ちよつと書いてゐる。今の文學者なら、これをこそ得意の空想を逞うして筆の上で自己陶醉に陷るところなのだが、平凡にして衒氣のない氏は、簡單に通り過ぎた。

私は、氏の政治思想についてはよく知らない。自傳の中には無論書かれてゐない。ロシアに於ては、氏は優遇されて大臣待遇になつてゐるさうであるが、氏が大臣の待遇をされてゐようとも、大革命家であらうとも、氏が古來人類の崇拜して來た英雄型の人でないことは明かである。東洋風の豪傑でないことは云ふまでもなく、西洋風の傑人でないこと

も明かである。この自傳を讀んで見ても分るが、氏は、自分の生活を妨げた人を、いつまでも記憶してゐて、よく怨んでゐる。氣の小さい凡人であることが、自傳中至るところに現はれてゐる。しかし、氣の小さい凡人であるに關らず、正直で辛抱强く虚榮心の乏しいところは、日本の社會改革家や思想家中では類が無いやうである。

そこで、私が、この乾燥無味な自傳について感想を述べたくなつた動機が、何であるかと云ふと、「自傳」中の終りに近い所、氏が十數年の海外放浪からはじめて故國へ歸つたところに、かういふ記事があつたゝめであつた。

「さていよ〱、予もパンの道を求めねばならぬ事となり、專門の牧師とか傳道師として賴んで見たが、なか〱同志社連中が跋扈して、組合敎會では働けない、のみならず 働き口を與れない。……その中に、××の周旋で早稻田專門學校の英語科を敎へることになつた。隨分突飛な譯であるが、これも云はゞ無我夢中で雇はれて行つたが、半年で見事に失敗し、古草履の如く解雇されて投げ出された。そのやり方が不埒千萬なので、予も少しは不滿であつたが、何分雇人と雇主との關係で致し方がなかつた。

英語を敎へると云つても、その實は社會學を敎へるのであつた。數人の生徒のうち二三を除いての外は、ＡＢＣさへ解らぬやうな者があつたゝめか、毎日彼等は昨夜の經驗話をして英語などは其處のけであつた。その昨夜の經驗話とは、吉原新宿などで登樓の經驗話であつた。當時の早稻田學生はのんきなものであつた。その處に、二木千年といふ靑年は、その英語が解つて、みんなに知られてゐた。幹事の田中唯一郎は、妾に熱中し、高田早苗、彼れも妾宅へ通つてゐるとのことを生徒等が話してゐた。」

ここに記述された氏の專門學校敎師時代に、氏から敎へを受けた生徒の一人は私である。社會學のことは知らないが私は專修英語科（豫科）の學生として、氏から、英作文などを學んだのであつた。岸本能武太氏を主任敎師として、生

徒は僅かに六人であつた。坪内博士が、文科學生などの語學の知識の極めて乏しいのを慨歎されて、特に創設されたのであつたが、經費の不足から、この英語科は一年で廢止になつた。しかし、岸本氏は我々のために熱心に英語研究の道を開いて呉れた。私は、小學卒業以來早稻田文科卒業までに、學校に於ける教師としては、岸本氏ほど生徒の爲めを計つて忠實であつた人を、他には知らないのである。生徒が僅か六人であつたのだから、師弟の關係も自から親しくなつたのであつたが、私が今でも思ひ出して氏に感心するのは、氏に日本の舊時代から傳統的に存してゐたいやな師匠氣取りのなかつたことである。

その頃、殆んど同時に、新歸朝者として、我々の教師となつた人は、片山潜氏と田中王堂氏とであつた。二人とも十年も米國に學んでゐたといふことであつたが、風采や態度は極端に異つてゐた。田中氏は日本人としては珍らしいほどに色の白い肌理（きめ）のこまかい人で、態度もしとやかで、教壇に立つてゐても、冥想的で世間離れがしてゐて、私は生れてはじめて、哲學者といふ者を見たやうな氣がしたが、片山氏は、色の赭黒い目の小さい、所謂土百姓面をしてゐた。二氏ともに、日本語が自由に使ひこなせなかつた。田中氏は、教課目が心理學であつて氏としてははじめての講義であつたゝめでもあらうが、含羞んだ處女が、うつむいて疊の目をむしり〳〵話をするやうに、チョークを持つて黒板をなすりながら、止切れ〳〵に獨言みたやうなことを云つてゐた。私はいた〳〵しい感じがした。しかし、氏の講義は分つても分らなくつても、人となりに愛嬌があるので、學生に反感を抱かれなかつたが、片山氏は無愛嬌で陰氣なので、學生に喜ばれなかつた。「アメリカで皿洗ひをやつて來た人だ」「コックをやつて來た人だ」と、噂をして、むしろ輕蔑してゐた。日本語が片言（かたこと）で、アクセントが外人染みてゐるのが可笑しかつた。

「數人の生徒のうち二三を除いての外は、ＡＢＣさへ解らなかつた」と、氏は云つてゐるが、これは氏の思ひちがひで

ある。我々六人は本科へ入學資格があつたのを、一年延ばして英語をみつしり學ばうとしたほどに研究心があつたのでその頃の學生としては、英語はよく出來た方であつた。私としても、夜は外人の私塾へ通ひ、日曜には聖書研究をかねて宣教師の所へ通ひ、時としては宣教師の說敎の通譯をもして一通り爲了せたほどなので、氏の酷評は當つてゐなかつたのである。氏が特に名を差してゐる二木千年（滋賀縣の警察部長になつて、時の內相後藤新平氏に反抗して免職された男）の如きは、非凡なる語學の才を有してゐて、つねに首席を占め、次席であつた私との間の成績の差はひどかつた。私は小學校時代から同輩に對して競爭心を起したことは一度もなかつたので、ただ自分の好むところを學んで來たのに過ぎなかつたのが、二木の學才に對しては、心中つねに畏れを抱いてゐた。二木と同級であるために、私の能力の劣つてゐることにいつも氣づかされるのが苦しかつた。英語科を出ると、二木はタイムスかメールかの外字新聞記者となり、私は本科へ入つたのだが、あの自分の早稻田の文科には、數十人の學生中、頭のいゝ者は一人もゐなかつたやうである。私は氣が樂になつた。

片山氏は古草履の如く解雇されたと、學校に對して恨みを抱いてゐるやうであるが、氏の解雇されたのは、我々學生が氏の教授振りに對して不滿であつたのが、重なる原因であつたのだらうと思はれる。我々が每日遊廓の話をしてゐたなどゝは、大嘘である。政治科の連中には新宿通ひをしてゐたものがあつたやうだが、私などは、學校では女の話をさへしたことはなかつた。かういふ誤解をするやうでは、氏の社會問題に對する觀察もうつかり信じられなくなる。

私は同級の誰かに誘はれて、片山氏を一度、三崎町のキングスレー館に訪ねたことがあつた。その家は耐震家屋として建てられてゐた。二階の氏の居室へ入つて見ると、そこの設備は西洋風になつてゐて、住心地のいゝやうに調つてゐたので、當時の私の目には贅澤にさへ思はれた。裝りのある笠を垂れた大きなランプが卓上に置かれてあつた。學校へはいつも質素な洋服を着けて通つてゐた氏も、その夜は柔かい日本服を着て羽織をも着けてゐたが、それが不似合に思はれた。氏は、私だちを快く迎へて吳れた。問ひに應じて柔しい聲でボツリ〳〵と話をして吳れたが、相變らず陰氣で

あつた。椅子に腰掛けてゐた氏の容貌態度がコチ〳〵してゐて、活氣も生彩もなかつたことを、二十五六年後の今日でも、私はよく覺えてゐるので、氏が現在露國のどこかで、椅子に腰掛けてゐる有樣をも想像し得られるのである。どういふ譯であつたか氏は、シェークスピアの「シーザー」を持つて來て、最初のページを私だちの前で披いて、「これを讀んで御覽なさい」と云つた。氏は自分の指で行から行を追つた。私は氏の指差すところを讀んで行つた。

「意味が分りますか。分るでせう」と、氏は外人の日本語らしいアクセントをつけて云つた。

「えゝ、分ります」

私は二ページほど讀まさゝれた。

「坪内さんの講義を聽かなくても、シェークスピアは讀めます。英語さへよく分ればシェークスピアも譯なく讀めます」

氏がかう云つた言葉だけは、今もハツキリ覺えてゐる。氏は、當時の早稻田の學生が坪内氏のシェークスピアの講義に對して徒らに隨喜してゐたのを苦々しく思つてゐたゝめに、さう云つたのであらう。

氏が早稻田の教職を抛つてから間もなく天然痘に罹つたことを、私は岸本氏から聞いたので、「あの人は貧乏ばかりして來て、種痘さへしなかつたのだらう」と思つた。今の時世に天然痘に罹るなんて、間が拔けてゐると思つたが、さらでも陰氣な印象を與へられてゐた私は、それによつて、ます〳〵陰鬱な人として、片山潜氏を思浮べるやうになつた。

「片山君は仲間のものが病氣見舞に行かないので氣を惡くしてゐるさうだが、僕はまだ天然痘をやつたことがないので傳染しちや困るから」と、いふ意味のことを岸本氏は私に向つて云つた。

片山氏は、いかなる場合にも、人世に於て得意になり得ない素質を備へて生れて來てゐるやうに、私には思はれる。すべての點に於て氏は華々しいことは出來ない人らしい。革命家としても英雄としても、氏の如きは日本には珍らしい陰性な人で、わが國民の盲目的崇拜を得るに相應しくないのである。



僻見

芥川龍之介

二 岩見重太郎

岩見重太郎と云ふ豪傑は後に薄田隼人の正兼相と名乘つたさうである。尤もこれは講談師以外に保證する學者もない所を見ると、或は事實でないのかも知れない。しかし事實ではないにもせよ、岩見重太郎を輕蔑するのは甚だ輕重を失したものである。

第一に岩見重太郎は歴史に實在した人物よりもより生命に富んだ人間である。その證據には同時代の人物――たとへば大阪五奉行の一人、長束大藏の少輔正家を岩見重太郎と比べて見るが好い。武者修業の出立ちをした重太郎の姿はありありと眼の前に浮んで來る。が、正家は大男か小男か、それさへも我々にははつきりしない。且又かういふ關係上、重

太郎は正家に十倍するほど、我々の感情を支配してゐる。我々は新聞紙の一隅に「長束正家儀、永々病氣の處、藥石効無く」と云ふ廣告を見ても、格別氣の毒とは思ひさうもない。しかし重太郎の長逝を報ずる號外か何か出たとすれば、戲曲「岩見重太郎」の中にこの豪傑を飜弄した、無情なる菊池寛と雖も、憮然たらざるを得ないことであらう。のみならず重太郎は感情以上に我々の意志をも支配してゐる。戰ごつこをする小學生の重太郎を眞似るのは云ふを待たない。僕さへ論戰する時などには忽ち大蛇を退治する重太郎の意氣ごみになりさうである。

第二に岩見重太郎は現代の空氣を呼吸してゐる人物――たとへば後藤子爵よりもより生命に富んだ人間である。成程子爵は日本の生んだ政治的豪傑の一人かも知れない。が、如何なる豪傑にもせよ、子爵後藤新平なるものは恰幅の好い、鼻眼鏡をかけた、時々哄然と笑ひ聲を發する、――兎に角或制限の中にちやんとおさまつてゐる人物である。甲の見た子爵は乙の見た子爵よりも眼が一つ多かつたなどと云ふことはない。それだけに頗る正確である。同時に又頗る窮屈である。もし甲は象の體重を理想的の體重としてゐるならば、象よりも體重の輕い子爵は當然甲の要求に十分の滿足を與へることは出來ぬ。もし又乙は麒麟の身長を理想的の身長としてゐるならば、麒麟よりも身長の短かい子爵はやはり乙の不贊成を覺悟しなければならぬ筈である。けれども岩見重太郎は、――――岩見重太郎もをのづから武者修業の出立をした豪傑と云ふ制限を受けてゐないことはない。が、この制限はゴム紐のやうに伸びたり縮んだりするものである。甲乙二人の見る重太郎は必しも同一と云ふ譯には行かぬ。それだけに頗る不正確である。同時に又頗る自由である。象の體重を憧憬する甲は必ず重太郎の體重の象につり合ふことを承認するであらう。麒麟の身長を謳歌する乙もやはり重太郎の身長の麒麟にひとしいことを發見する筈である。これは肉體上の制限ばかりではない。精神上の制限でも同じことがある。たとへば勇氣と云ふ美德にしても、後藤子爵は我々と共にどの位勇士になり得るかを一生の問題としなければならぬ。しかし天下の勇士なるものはどの位重太郎になり得るかを一生の問題にしてゐるのである。この故に重太郎は後藤子爵よりも一層我我の

情意の上に大いなる影響を及ぼし易い。我々は天の橋立に大敵と戰ふ重太郎には衷心の不安を禁ずることは出來ぬ。けれども衆議院の演壇に大敵と戰ふ後藤子爵には至極に冷淡に構へられるのである。

　岩見重太郎の輕蔑出來ぬ所以はあらゆる架空の人物の輕蔑出來ぬ所以である。架空の人物と云ふ意味は傳說的人物を指すばかりではない。俗に藝術家と稱へられる近代的傳說製造業者の造つた架空の人物をも加へるのである。カイゼル・ウイルヘルムを輕蔑するのは好い。が、一穗のともし火のもとに錬金の書を讀むフアウストを輕蔑するのは誤りである。フアウストの書いた借金證文などは何處の圖書館にもあつたことはない。しかしフアウストは今日もなほベルリンのカフエの一隅に麥酒を飮んでゐるのである。ロイド・ヂヨオヂを輕蔑するのは好い。が、三人の妖婆の前に運命を尋ねるマクベスを輕蔑するのは誤りである。マクベスの帶びた短刀などは何處の博物館にもあつたことはない。しかしマクベスは相不變ロンドンのクラブの一室に葉卷を薰ゆらせてゐるのである。彼等は過去の人物は勿論、現在の人物よりも油斷はならぬ。いや彼等は彼等を造つた天才よりも長命である。耶蘇紀元三千年の歐羅巴はイプセンの大名をも忘却するであらう。けれども勇敢なるピイア・ギユントはやはり黎明の峽灣を見下してゐるのに違ひない。現に古怪なる寒山拾得は薄暮の山巒をさまよつてゐる。が、彼等を造つた天才は——豐干の乘つた虎の足跡も天台山の落葉の中にはとうの昔に消えてゐるであらう。

　僕は上海のフランス町に章太炎先生を訪問した時、剝製の鰐をぶら下げた書齋に先生と日支の關係を論じた。その時先生の云つた言葉は未だに僕の耳に鳴り渡つてゐる。——「予の最も嫌惡する日本人は鬼が島を征伐した桃太郎である。桃太郎を愛する日本國民にも多少の反感を抱かざるを得ない。」先生はまことに賢人である。僕は度たび外國人の山縣公爵を嘲笑し、葛飾北齋を賞揚し、澁澤子爵を罵倒するのを聞いた。しかしまだ如何なる日本通もわが章太炎先生のやうに、桃から生れた桃太郎へ一矢を加へるのを聞いたことはない。のみならずこの先生の一矢はあらゆる日本通の雄辯よりもは

るかに眞理を含んでゐる。桃太郎もやはり長命であらう。もし長命であるとすれば、暮色蒼茫たる鬼が島の渚に寂しい鬼の五六匹、隱れ簑や隱れ笠のあつた祖國の昔を嘆ずるものも、——しかし僕は日本政府の植民政策を論ずる前に岩見重太郎を論じなければならぬ。

前に述べた所を繰り返せば、岩見重太郎は古人はもとより、今人よりも生命に富んだ、輕蔑すべからざる人間である。成程豐臣秀吉は岩見重太郎に比べても、少しも遜色はないかも知れない。けれどもそれは明らかに繪本太閤記の主人公る傳說的人物の力である。さもなければ同じ歷史の舞臺に大芝居を打つた德川家康もやはり豐臣秀吉のやうに光彩を放つてゐなければならぬ。且又今人も無邪氣なる英雄崇拜の的になるものは大抵彼等の頭の上に架空の圓光を頂いてゐる。假い世の中には古往今來、かう云ふ圓光の製造業者も少からぬことは云ふを待たない。たとへばロマン・ロオラン傳を書た、善良なるステフアン・ツワイグは正に彼等を代表するものである。

僕の岩見重太郎に輕蔑を感ずるのは事實である。重太郎も國粹會の壯士のやうに思索などは餘りしなかつたらしい。たとへば可憐なる妹お辻の牢内に命を落した後、やつと破牢にとりかかつたり、妙に夢知らせを信用したり、大事の讐打ちを控へてゐる癖に、狒々退治や大蛇退治に力瘤を入れたり、いつも無分別の眞似ばかりしてゐる。その點は菊池寛の爲に嘲弄されるのもやむを得ない。けれども岩見重太郎は如何なる惡德をも償ふ位、大いなる美德を持ち合せてゐる。いや、必しも美德ではない。寧ろ善惡の彼岸に立つた唯一無二の特色である。岩見重太郎は人間以上に強い。（勿論重太郎の同類たる一群の豪傑は例外である。）重太郎の憤怒を發するや、太い牢格子も苧殼のやうに忽ち二つにへし折れてしまふ。狒々や大蛇も一擊のもとにあへない最期を遂げる外はない。千曳の大岩を轉がすなどは朝飯前の仕事である。由良が濱の沖の海賊は千人ばかり一時に俘になつた。天の橋立の讐打ちの時には二千五百人の大軍を斬り崩してゐる。兎に角重太郎の強いことは天下無敵と云はなければならぬ。かう云ふ強勇はそれ自身我々末世の衆生の心に大歡喜を與へる特色である。

少心なる精神的官能は何とでも非難を加へるが好い。天つ神の鋒から滴る潮の大和島根を凝り成した以來、我々の眞に愛するものは常にこの強勇の持ち主である。常にこの善惡の觀念を脚下に蹂躪する豪傑である　我々の心は未だ嘗て罪惡の意識を逃れたことはない。青丹よし奈良の都の市民は卵を食ふことを罪惡とした。と思へば現代の東京の市民は卵を食はないことを罪惡としてゐる。これは勿論卵ばかりではない。「我」に對する信仰の薄い、永久に臆病なる我々は我々の中にある自然にさへ罪惡の意識を抱いてゐる。が、豪傑は我々のやうに罪惡の意識に煩はされない。實踐倫理の敎科書はもとより、神明佛陀の照覽さへ平然と一笑に附してしまふ。一笑に附してしまふのは「我」に對する信仰のをのづから強い結果である。たとへば神代の豪傑たる素戔嗚の尊に徵すれば、尊は正に千位置戸の刑罰を受けたのに相違ない。しかし刑罰を受けたにしろ、罪惡の意識は寸毫も尊の心を煩はさなかつた。さもなければ尊は高天が原の外に刑餘の姿を現はすが早いか、あのやうに恬然と保食の神を斬り殺す勇氣はなかつたであらう。我々はかう云ふ旺盛なる「我」に我々の心を暖める生命の炎を感ずるのである。或は我々の到達せんとする超人の面輪を感ずるのである。

まことに我々は熱烈に岩見重太郎を愛してゐる。のみならず愛するのに不思議はない。しかしかう云ふ我々の愛を唯所謂強者に對する愛とばかり解釋するならば、それは我々を誣ひるものである。如何にも何人かの政治家や富豪は善惡の彼岸に立つてゐるかも知れない。が、彼岸に立つてゐることは常に彼等の秘密である。おまけに又彼等はその秘密に對する罪惡の意識を逃れたことはない。秘密は必しも咎めるに足らぬ。現に古來の豪傑も家畜に似た我々を驅使する爲には屢々假面を用ひたやうである。けれども罪惡の意識に煩はされるのは明らかに豪傑の所業ではない。彼等は強いと云ふよりも寧ろ病的なる欲望に支配されるほど弱いのである。もし噓だと思ふならば、試みに彼等を三年ばかり監獄の中に住ませて見るが好い。彼等は必ずニイチエの代りに親鸞上人を發見するであらう。我々の愛する豪傑は最も彼等に遠いものである。もし彼等に比べるとすれば、活動寫眞の豪傑さへ數等超人の面影を具へてゐると云はなければならぬ。現に我々は彼

等よりも活動寫眞の豪傑を愛してゐる。ハリケエン・ハッチの近代的冨豪にはり倒される光景は見るに堪へない。しかし近代的冨豪のハリケエン・ハッチに、——ハリケン・ハッチもはり倒すほど、臆病なる彼等の一團に興味を持つかどうかは疑問である。

岩見重太郎の武勇傳の我々に意味のあることは既に述べた通りである。が、重太郎の冒險はいづれも末世の我々に同じ興味を與へる譯ではない。その最も興味のあるものは牢破りと狒退治との二つである。一國の牢獄を破るのは國法を破るのと變りはない。狒も單に狒と云ふよりは、年年人身御供を受けてゐた、牛頭明神と稱する妖神である。すると重太郎は牢破りと共に人間の法律を蹂躪し、更に又次の狒退治と共に神と云ふ偶像の法律をも蹂躪したと云はなければならぬ。これは重太郎一人に限らず、上は素戔嗚の尊から下はミカエル、バクウニンに至る豪傑の生涯を象徴するものである。いや、更に一歩を進めれば、あらゆる單行獨歩の人の思想的生涯をも象徴するものである。彼等は皆人間の虚僞と神の虚僞とを蹂躪して來た。將來も亦あらゆる虚僞を蹂躪することを辭せぬであらう。重太郎の退治した狒の子孫は未だに人身御供を貪つてゐる。牢獄も、——牢獄は市が谷にあるばかりではない。囚人たることにさへ氣のつかない、新時代の服裝をした囚人の夫婦は絡繹と銀座通りを歩いてゐる。

人間の進歩は遲いものである。或は蝸牛の歩みよりも更に遲いものかも知れない。が、如何に遲いにもせよ、アナトオル・フランスの云つたやうに、「徐ろに賢人の夢みた跡を實現する」ことは事實である。いにしへの支那の賢人は車裂の刑を眺めたり、牛鬼蛇神の像を眺めたりしながら、堯舜の治世を夢みてゐた。（將來を過去に求めるのは常に我々のする所である。我々の心の眼なるものはお伽噺の蛙の眼と多少同一に出來てゐるらしい。）堯舜の治世は今日もなほ雲煙のかなたに横はつてゐる。しかし車はいにしへのやうに車裂の刑には使はれてゐない。牛鬼蛇神の像なども骨董屋の店か博物館に陳列されてゐるばかりである。よし又かう云ふ變化位を進歩と呼ぶことは出來ないにしろ、人間の文明は有史以來僅々數千

年を閲したのに過ぎない。けれども地球の氷雪の下に人間の文明を葬るのは六百萬年の後ださうである。人間も悠久なる六百萬年の間には著しい進歩をするかも知れない。少くともその可能性を信ずることは痴人の談とばかりも云はれぬであらう。もしこの確信を事實とすれば、人間の將來は我々の愛する岩見重太郎の手に落ちなければならぬ。術を破り狒を殺した超人の手に落ちなければならぬ。

僕の岩見重太郎を知つたのは本所御竹倉の貸本屋である。いや、岩見重太郎ばかりではない。羽賀井一心齋を知つたのも、妲妃のお百を知つたのも、國定忠次を知つたのも、祐天上人を知つたのも、八百屋お七を知つたのも、髪結新三を知つたのも、原田甲斐を知つたのも、佐野次郎左衞門を知つたのも、――閭巷無名の天才の造つた傳説的人物を知つたのは悉くこの貸本屋である。僕はかう云ふ間にも、夏の西日のさしこんだ、狹苦しい店を忘れることは出來ぬ。軒先には硝子の風鈴が一つ、だらりと短冊をぶら下げてゐる。それから壁には何十とも知れぬ講談の速記本がつまつてゐる。最後に古い葭戸のかげには梅干を貼つた婆さんが一人、内職の花簪を拵へてゐる。――ああ、僕はあの貸本屋に何と云ふ懷かしさを感じるのであらう。僕に文藝を教へたものは大學でもなければ圖書館でもない。正にあの蕭條たる貸本屋である。僕は其處に並んでゐた本から、恐らくは一生受用しても盡きることを知らぬ教訓を學んだ。超人と稱するアナアキストの尊嚴を學んだのもその一つである。成程超人と言ふ言葉はニイチエの本を讀んだ後、やつと僕の語彙になつたかも知れない。しかし超人そのものは――大いなる岩見重太郎よ、傳家の寶刀を腰にしたまま、天下を睨んでゐる君の姿は夙に僕の幼な心に、敢然と山から下つて來たツアラトストラの大業を教へてくれたのである。あの貸本屋はとうの昔に影も形も失つたであらう。が、岩見重太郎は今日もなほ僕の中に潑剌と命を保つてゐる。いつも人生の十字街頭に悠々と扇を使ひながら。

（つゞく）

法學博士 末弘嚴太郎著

嘘の効用

定價貳圓六拾錢
送料十九錢
四六判上製

第三十版

燎原の火の如く讀書界を風靡しつゝある本書を見よ。本書は實に新社會の要求もだし難くして誕生した一書です。若き人々は皆本書を稱して「國民讀本」と賞讃しておる。本書は現代社會相を批判する基本知識であり、尚一歩進んだ立場に於て社會へ乘り出す人々の羅針盤である。紛糾せる政局に當面せる國民の必讀の書です。

東京芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

近代の戀愛觀

文學博士 廚川白村著

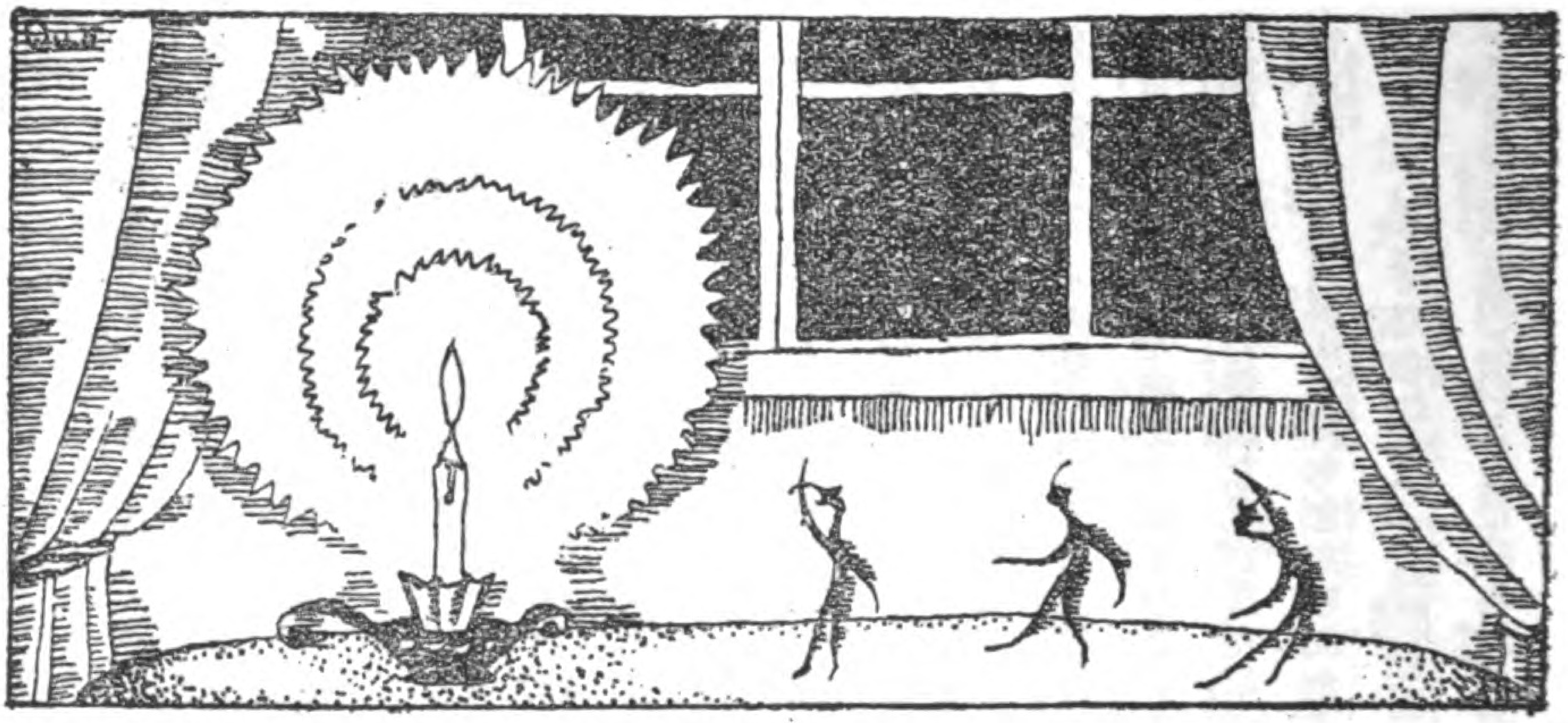
戀愛は人間の最高善であり、人生の最高理想であると高く標置して、因襲的結婚、非戀愛的生活に勇敢なる痛撃を加へたる本書は、玆に百版を突破す。新時代の青年士女に新戀愛の經典の如く歡呼されたる熱情火の如き新戀愛觀の陣容を見よ。戀愛を遊戲視する國民は一書を購つて一生の禍福を名鏡に照せ。

百●拾●版●發●行●！

◇定價貳圓五拾錢◇

四六判上製◇送料十七錢◇

東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二



鳳凰天に搏つ

柳原白蓮

□

帝は手持ち不沙汰をまぎらすやうに、

「蜀が柳華苑を舞ふてくれたならその後で、そち達に珍らしい異國の人の歌を聞かせようぞ」

と云ひながら邊りを見廻して居られたが、やがて間近かなる多くの若い人々の中にたち雜つてゐる一人の若者に目を留めて、

「おゝあそこに居る」

と獨りごちながら其の人を蜀女に指さし示して、

「あの人を蜀は知るまい。先年遣唐使に從つて犬上の御田鍬などと共にこの唐土に來て今日まで一人居殘つてゐる土部の道麿といふ人ぢや」

こちらへと其の人を目振りでさし招かるゝまゝに進み出でた若い異國の貴公子は叮嚀に手をつかへると、帝は物優しく近侍をとほして其の意を傳へしめるのであつ

た。

「どうか皇后を始め嬰女達のために珍らしい異國の歌と舞とを所望したいものぢやが……。そなたの御國振りの姿そのまゝが却つてよろしい。あの優美な装束は定めし女共も氣に入るであらうから」

思ひがけぬ仰せに彼の若者は、いさゝか躊躇ふ樣子に見えたが、側の友達の一人二人が何やら袖ひき囁やいたので、

「心得ました」

と素直に立つて装束を改めに別席した。その間に嬰女は帝の御望みと皇后の御すゝめとに否みかねて、柳花苑を舞ふべく再び舞の臺に上るのであつた。物の音もゆかしい雅樂につれて彼女が舞の袂を飜すとき、蜀の國第一の名工が丹精に織り成した錦は、數多い灯を受けて光りを散らした。その影に流水の如くまた落花の如く運ばるゝ彼女の婉なる手振りを帝は吸ひよせられたように恍惚と見入つてゐられた。舞が終つてやうやく酔から醒めたような帝は、

「おゝ目出度い〱今日は凱戰の祝ひによくぞ舞つてくれた。さあ嬰！ こゝに來てこのわしの盃を滿してくれ！」

帝の悦び皇后の滿足は非常なものであつた。座にある悉くのどよめく聲、賑はしく、銀燭のほのほのゆらめく中を歡樂は夢のように流れて宴はいよ〱酣となつた。百和の香はあたりに薫じ、九光の燈火はまばゆいばかりに雲錦の帳に輝り映えて、その艶麗なことは實に未曾有とでもいふべきであつた。此宵こゝに居並ぶ卿相雲客の中には李勣を初め、先年印度から歸來した識德世に並びない玄弉や懐毅などの高僧たちも居た。又名將軍として大經世家として先帝の頃から帝の恩寵ことに深き褚遂良などが居た。玉盃に滿された美酒は帝と后との間を縫ひ、また之等數多の群臣の間を廻つた。遠く幾百里の山河を越えて持ちきたされた玉門の棗はうづ高く玉盤に盛られてあつた。その他實珍の上果や芳華の百ゝは數限りなく卓の上に列られて、其の間を美女美童たちが酌んで廻る盃に歡樂の酔はいつ醒めるともわからぬ程であつた。そして帝と皇后とがこのように睦み和らがれる樣を見て、年老いた臣下の中にはいと珍らしく有難いものに思ふて涙を浮べて

ゐるものさへあつたのである。やがて舞樂の臺の上にあがつたものは、彼の異國の貴公子であつたが、この人の御國忘れぬ姿とは、濃紫の袴に綾の下垂、兩耳の脇を長く垂れた緋房の日蔭のかつらまたなく艶に、そのかざしにさした挿頭花には思出なつかしい花橘の折枝が付けられて居た。その異國の貴公子の故郷は奈良の都であつたと見え、彼はいま幼い頃習ひ覺えた今樣といふものを歌ひかつ舞ふのであつた。

「天の原、ふりさけ見れば、
　春日野の、牡鹿鳴くらし
　こよひも、
　三笠山に月冴えて、
　雲の上に、そのみ笛の音は、
　きこゆる」

一節を歌ひおへてその人は改めて次のを歌ひ出した。その聲はいくらか哀調を含んでゐるようであつた。

「大海原、ふりさけ見れば、
　あをによし、奈良の都の、
　なほこそ、
　故郷のかたは見やられ、
　わが父母、ありとしおもへば、
　かへらや」

彼は自らの舞と歌とに遙かに故郷を思ひ出でたのであろう。この異國風の歌舞はわかい宮女達をひどく喜ばせた。皇后

がそのかざしにつけた折枝の花を手に取つて見度いとの御所望から、彼の巻纓の冠はやがて御手許に献ぜられた。またそれは嬰女の手にも渡された。冠の珍らしがられほめられて次から次へと宮女達の間を手渡しされるのを見て、帝はふとした自分の計らいが斯くも女達を珍らしがらせた事を此上もなく悦ばれた。そしてこの異國の貴公子に何か引出ものを與へよとあつて、遠く南越から貢した世にも貴い雲英の錦袍を賜つたのである。

宴たけ席はやがて無禮講となり、欄干によつて詩を賦する者、庭に下りて逍遥するもの、しきりと相手を見付けて談笑する者など様々であつた。折しも月は斜に廻廊を照らして中に幾人かの人影をはつきりと見せてゐた。

「いやそれよりも今日の帝の御機嫌のよかつたこと、いつにない我々にまであんな御戯談を仰せになつて……」

と一人が云つた。するとまた一人のが

「全くでしたね。貴方の戰勝の功名の中に美しい嬰女と再見のよろこびを加へようなんて」

「私も何とお答へのしようもありませんでしたよ」

と李勣は答へるのであつた。

「それに私共もあゝゆう御席だから少しは御冷かし申上ようかとも思ひましたけど……。何しろあのお側に例の氣むづかしやの褚遂良でも居ませんでしたらね」

「全くでした、あの爺さんと來たらまるで苦虫を噛み潰したような顔をしてゐましたね」

「それに不思議でならなかつたのは、あの時の嬰女の態度ですよ」

「あれはまた馬鹿に厳格なものであつた……」

これ等一群の人々の姿はその談笑の聲と共にやがて木立の向ふへ消え去つてしまつた。池と築山に面して建てられた休息所はさつきから空席もなく人で満ちてゐた。そして其處に列べてあつた澤山の榻は皆先客に占められてゐるので後から

來た人々はその間に立ち雜りながら賑ひ合つてゐた。

「何にしてもあの女は一通りの者ではありませんよ。皇后樣はまた何だつてあんな者をお入れになつたのでせうね」

「それには理由があるでせうよ。まだ先帝御在世の時のことでした。ひどく惡癖の馬があつて誰もそれをよく手を付け得なかつたのです。それを見て太宗皇帝は「誰かあの馬をよく御する者があるか」と仰せになつたら、御側に居た一人の女官が進み出て「それこそ何でもありは致しません、さういふ馬はまづ鐵の鞭で打ち、それでいけなければ鐵の槌で打つてやります。それでも猶いふことを聞かぬ時は匕口で頸を切つて了ひます」と御答へしたのです。するとあの武勇偉れた帝のことゝてその返答がすつかり御氣に入つて、大層御機嫌のよかつた事を覺えてゐます。その女がたしかにあの曌女でした」

「へえ、あんなおとなしさうな顏をしてゐてそんな事を云つたのですか。皇后樣の御目鑑も或はその邊から出たものかもしれません」

「私はさつきね、玄奘和尚たの懷義法師だのゝ側に居たのでしたがね、あの人達はまるで竹林の七賢人見たいに、丁度叉あんな仙人のやうな人達ばかりで詩作をしたり朗詠をしたりしてゐました。そこでこんな話がありましたよ。此頃屢々太白星が晝間見えるのは何の前兆でせうと誰かが聞いたら、太史の李淳が天象を仰ぎ見、また俯して曆數を考へて見るのにどうも昔の秘記傳に出て居る「女主昌ならん」といふのに當ると云つたさうで、或は近い將來に唐室には女公の盛になる時が來るのだらうとのことでしたよ」

「まさか褒姒が生れ變つて出てくるのぢやありますまいな」

「今上に於かせられては、周の幽王のやうな暗愚な方とは異ふ。よしんば何十人の褒姒が現れようと、どうして周の末路のやうなことがあらうか。そんな不吉な話は曖氣にも出すまい。殊に今日は目出度い重陽の節句だ。その上李勣將軍の

凱戦の日だ……」

としかつめらしく云ふものがあつた。すると、

「殊に美しい織女と再會の日だ」

と小さいやんちやらしい聲で誰か雜ぜつかへした。一座はどつと笑ひどよめいたが、それ等の談笑をさも苦々しいといふ風に詩を吟じ出したのがあつた。一同は急に話を止めて其の方に聞き入つた。

「秋風何ぞ冽々たる、白露朝霜をなす。柔條旦夕に勁く、緑葉日夜に黄なり。明月雲崖を出で、皦々として素光を流す。軒を披いて前庭に臨めば、嗷々として晨鴈翔る。高志四海を局とし。塊然として空堂を守る。壯齒恒に居らず、歳暮常に慷慨す。」

その朗々たる吟聲には、大望を抱いて天下の事に志す壯士の風格が窺はれた。また高樓の欄干近くには美しい多くの宮女達が色々の話に打ち耽けつて居た。そして話題は今日の御宴の珍らしく面白かつたことや、それからそれへと遂に新らしく來た織女の噂にまで及んでゐるのであつた。

「あの人はまた何うしてあんなに御上を御ぢらせするのでせうね。私なんかはもう何遍はら〳〵する思ひをさせられました事やら」

「織女が何うしたといふので御座います？」

「いゝえね、今夜は珍らしく淑妃殿が早く御前を退つてしまつたでせう」

「あゝそうでした。あの人きつと妬を起してゐたのですよ。私共でも御上はずゐ分なことを織女に仰せになるので御側に見てゐるとこちらが氣まりの惡いようなことさへありましたもの」

「淑妃殿がいつの間にか姿を見せられなくなつた後、皇后様はとり分け御上の御機嫌をそらすまいとの思召から、それは

〲一生懸命になつて御機嫌を取ておいで遊ばすのに、かんじんの嬰女も間もなくどこかへ行つてしまつたのですよ。初めは一寸の間お席をはづしたものとばかり思召てゐらしつたら、いつ迄たつてもあの人は御側に戻つて來ないではありませんか。皇后樣は御妃殿のいつになく早く御前を退いたのもみんな嬰女の爲めだと察してお出で遊ばすものですから、猶更お氣をもんでお出遊ばしたのです」

「ほんにそんな時は御氣の弱いあの御方樣は御可愛想なほどはら〲遊ばしますのね」

「御上はしどうあの人を探すような御目であちらこちらを御覽遊ばして御出になりましたが、ふと前栽の方を御覽になると、まあ折の悪い、丁度御上の御目につく處で、せめて暗がりにでも身を隠してならまだしも、このまぶしいような月明りをまともに浴びながら其所にはつきりと立つてゐるではありませんか」

「そんな所に一人して何をして居たのです？」

「一人なら何事もありはしませんけどね。張兄弟とさも面白さうに話をしてゐたのです」

「まあもうあの人達と心易くしてゐるのですか？」

「あの美男で聞えた張易之、張昌宗の二人とですか？」

「あんまりよく知り合つてゐるようでは無さそうでしたがね」

「察しる所わざとあゝやつてゐたのかもしれません」

「それはまた何の爲めにでせうね」

「それから皇后樣がそれとなく御目で御命じになつた事を、私はすぐそれと御察しして、彼女の側へ行つてそう云つてやりました。「貴女もちつと氣をお付けなさいまし、第一御方樣の御心持ちも御察しして御心配かけるような事はなさるなつで。そしたら「私は御方樣の御心持ちをようく御察ししてゐる、おそらく貴女よりも私にはよく解つてゐます」つて斯

うあの人はいふのです」

「エヽそれから？」

「それで私は「それ程御解りならこんな所でよけいな暇つぶしなどなさらないで貴女も御上の側で御機嫌をとつて上げなくては、御方様お一人で御困りになります。貴女も知つての通り此宵は淑妃殿が早く部屋に退つてしまつてゐるのに、ひよつとまた御上の御機嫌が變つて、またしても淑を呼べとでも仰せられたら御方様も御口惜しからうではありますまいか」と云ひましたらね、「だから私がこゝで斯うしてゐればそんな氣遣ひは無いのですよ」つて云ひながら又何だかあの人達にさも面白さうに話かけたのですよ。その時です御上がつか／＼と階を下りかけようと遊ばしたのは、それにあの人はちらりと御上の御姿をふりかへつて見るなりさつさとどこかへ行つてしまいました」

「まあずい分思ひ切つた失禮なことをするのね」

「……御上はあの人によほど御執心なのね」

「そりやもうあなた、今更のことではないのですよ」

「だけど何うしてあの人がそんなに御上を嫌ふのでせうね。御上はどんなに御立腹遊ばしたでせう。あんなに氣儘をする人はめつたにありませんもの」

「本當に私はその時ばかりは何うなることかと思つて、皇后様の所へ駈けつけて行つた位です」

「何うしてゞせうか、私共にはあの人の氣がしれない。もしかすれば自分も仕合せになるでせうにね」

「斯ういふ事から起つた間違ひは何うかすると飛んでもない事になりますからね。私共の生命は時として國王様がほんの一時の御氣まぐれにだつて消えてなくなるためしもあるのですもの」

皆は一寸暗らい顔をした。そしてそこには暫らく重い沈默が續いた。秋の夜の冷氣が身にしみ／＼として來ると傾きか

けた月の影から澄み切つた銀鈴の音が靜かに響いて來た。

「おや！　あの鈴の音は？」

「御上が入御のしらせの相圖ですね」

「ではもう明方近いのでせう」

宮女達の姿もやがて消え、宮殿のすべての窓から射してゐた光も、軒に釣された燈籠の灯かげも皆ほのじろく光を失ひ、東の空には白い海雲が横に棚引き少しづつ紅に彩られるのであつた。禁園の中はもう人のけはひもなく靜かに眠つて、たゞ宴はてゝ歸る卿相雲客の乘物の轢きのみが青龍門の方から幽に流れて來た。

□

それから幾日かの後であつた。嫋女は皇后の御側で御慰みの縫ひ繍りなど御相手をしながら、もう大分久しくお話を續けた處であつた。皇后は物しづかに、

「嫋や！　わたしの口からこんな事をいふのは妙に聞えるかもしれないけれどもね、此間の御上がお前への遊はしかた、その本當の御心をまん更御解かぬお前でもあるまいに、あの時のお前のしかたはまあ、何としたことか、もう少し何うかならぬものかえ？　わたしはもう幾度はら／＼したか知れやしなかつたのだよ」

「わたくしが何か御上へ不作法でも申上げたと仰せになるので御座いますか？　私はあれでよかつたと存じて居ますが。第一御方樣のいつも御惱みの種になる淑妃にだつて御上は見せつけがましい御意地惡い御戯れも遊ばしませんでした御樣子」

「それはお前のいふ通りぢや。まづ何よりも先にわたしはお前に御禮を云はなければならないのだよ。わたしの身にとつ

て先夜程幸福を感じた事はなかつたのだものね。あれからといふもの御上はわたしにそれは〱おやさしいのだよ」

皇后は急に聲を落して自分の膝の邊りを見ながらひとり言のやうに、

「そのわたしに急におやさしくなつたわけも私はちやんと知つてゐるが……」

と今度は彼女の顔を見ながら、

「まあ何にしても御機嫌のよいのは嬉しいに違ひない。これもみんなお前のおかげと思つてどんなに感謝してゐることか」

彼女はあはてゝ押し止めるように、

「私は御方様からそんな御禮の御言葉を頂くような事は何も致して居りませんので……たゞ私の心のまゝの振舞が時として御上に對して失禮に見えました事も御座いましたかは存じませんが」

「それはお前としてはさういふつもりであつたかもしれない。もしかすると御上へも却つてあゝゆう態度に出た方がよいのかもしれないけれどもね。現にあの晩きさはしの際でしかも御上の御目に付く所で、お前が如何にも親しさうに張易之部と話をして御側近くにちつとも寄りつかないものだから、御上はとう〱ぢれておしまい遊ばした。ほんにあの時は何うなることかとお側でどんなにはら〱したことか。早くお前に注意したいと思つてあの老女を見せにやつた時はもうおそかつた。御上の御怒りは一通りではなかつたと。後で老女が私の處へ蒼くなつて駈けつけて來ての注進、それでまたどんなお咎めがありはせぬかと、わたしもお前の爲めにそれが何よりの心配なのだよ。眞から一度お怒らせしたらもうとりかへしがつかないからねえ」

「それだからと申して御方様？私が御上の本當の思召を何う解きましたらよろしいので御座いませう。假令その御心はよく存じて居ましてもそれは……」

皇后は當惑していくらか云ひにくさうに、
「初めわたしが庵主の尼から、お前をたつて貰ひ受け度いと頼んだ時は、その心持ちも籠めていふたつもりであつたが……」
「それはもう庵主からも承はらぬでは御座いませんでしたが、たゞ御方樣の爲めに御心からの御慰めが出來さへ致しましたら、それで私の勤めはよいものと存じて居ました。御方樣の御辛らい淑妃殿さへ御上の御胸から御離し申す事が出來さへ致しましたならばと、斯樣存じまして」
「此間の事から考へて見ても、その後の御上の御樣子から察しても、成程お前ならその位のことも出來よう。けれどもいよ〳〵となつて、それに代るものなしに彼の女をお上が遠ざけられようか。わたしの兼ての願ひ通りにして頂くにつけて、淑妃に代るべきものなしにすむ御方であらうか」
「たとへおすみ遊ばさないでも、この私が淑妃殿の代りになりますことはいやで御座りまする御方樣！」
「お前はもしやわたしに妬みが出はせぬかと、それを案じ過してゐるのではないかえ？　それとも亦わたしへの遠慮なのかえ？　それならどちらも入らぬことなのだよ。いつもいふて聞かしてある通り、あのむしの好かぬ女さへ見ないですむ事ならわたしはもうたゞそれだけでも今のひどい不幸から幾分か逃れる事が出來るのだもの」
「いゝえ左樣では御座りませぬ。私の本當の心は、もし男といふものに身を任せねばなりませんのなら、恐入つた申分かは存じませぬが唐の國王の嬖幸となりますよりは、よしや下方の者なりと唯一人の思はれの妻となり度いと願つてゐるので御座います。その方が心の富は優つてをりは致しますまいか。私の昔からの思出が、長い間私に樣々な事を教へたり考へさせたり致しましたもので御座いますから」
「そんならお前は上つ方にしろ下々の者にしろ第一の妻といふ名に呼ばれなければ嫌やだといふのかへ？」

「御方様！　名は何と御座りませうとも……」

「それならばお前！　心配は少しも無いのだよ。今わたしの本心を打ち明したなら、お前も成程と合點してもくれやう。私の體はこゝに現在この位にこそはあれ、わたしの心に人妻なんぞと云ふことはもう疾うに失せてしまつてゐる」

「それは又何ういふ思召からで御座います？　御入内の始めから、何か御氣に染まぬことでも……」

「なんぼわたしだとて初めからそんなずねた心を排つてはゐなかつた。たけどもねえ娶や！　女は非常な事に出合ふと、肉體と魂とは離れ〴〵になつてしまふものだねえ。人としての幸と不幸とは、つまりこの魂と肉體とがしつくりと抱き合つてゐるかゐないかといふだけの事なのだからねえ。その外に何があらう。人爵の榮も黄金の富も、夫れ等に依つて本當の人間の世の禍福は定められるものではないのだよ」

「左樣で御座いませうとも。それでも私なら斯う申上げ度う御座います。如何な時にでも魂と肉體とは合體させなければならないものだと。そして人爵の榮の上には必らず魂の榮の冠を置き、黄金の前にはきつと多くの貧しいものを富ませると」

「それはわたしにしても願ふ所には違ひなかつたけれども、遂に或る人の爲めに私の魂は打ち碎かれてしまつたのだ」

「或る人とは淑妃殿のことで御座いますか？」

急に皇后は言葉も聲も荒々しくなつて、

「さうなのだよ、彼の女は私から見ても家來筋の者ではないか。それに御上はあらうことか、この私とあの女とを度衡の上にかけて置いて双方をおくらべなされたのぢや。そして無殘にもこのわたしを、あの女よりも輕いものになされた。それをわたしが何で怒らずに居られよう。わたしの血は憤怒に沸きかへつたのぢや。御上は其時斯う仰せられた。「わしの側に又そちの側らに、淑妃の存在を阻むものは、たとへ國民の上に君臨する皇后にもせよ、その位をはぎとるから

そう思へ」と、なう辱や！　解つたかへ？　夫が妻にこんな威嚇をなされたのぢや。他の女しかも召使ひ故にぢや、高い聲では云はれぬが元は嬪御の女房ぢや。それをあべこべにわたしにその機嫌をとらせようと遊ばすのぢや。思ひもせぬわたしの名に依つて進物せられることもある。二人の仲が不和と知るとわたしばかりを惡人のようにきつい御小言……。これがわたし一人ならまだしもわたしの里親共までにぢや、それにわたしの爲めといふたら、あの女はおろかその附人達にすらも、わたしへの勤めをよくせよとも親切にしてやつてくれいとも かつて一度も云はれた事がないのぢやもの。その片手落ちのなされ方があんまりぢや。わたしは女と生れて初めて眞からの怒りといふものを覺えたのぢや。女が一度生命を賭ける程の侮辱を受けて何うしてそれを忘れる事が出來よう。その時この廣い／＼天地の中に唯一人泣きぬれてゐる自分をしみ／＼と見たのぢや。その惱みの果てにわたしの魂は御上を離れてしまふたのぢや。御上を唐の國王としては崇めこそすれ、これが我が夫とは何うして思へよう、思ふさへ屈辱ぢやわ」

激しい言葉の下から皇后はさめ／＼と泣かれるのであつた。常にはあのようにおとなしい方から、何うして斯んな強い御言葉が聞かれるのかと彼女は驚ろいてしまつた。そして唯何とも云はずに默つて伺つてゐるより外しようが無かつた。

やがて少し落ち付いた皇后は、

「だから御上にはいはゞ妻はないようなものぢや。もしもお前が身も魂も御上に捧げたなら、誰はしらずともお前こそはこの唐の國王が妻、卽ち皇后なのぢや。わたしの虚名などはいつ投げ捨てゝも惜しみはせぬ」

「私が御方樣の御名を奪ふなどとは飛んでもない」

「奪うのではない、これは誰のものでもない。持つ人のものなのぢや。自分の爲めに備へられたと思つた光榮にも、それに身を寄せると忽ち崩れてしまふ。この華やかな地位と名望も手に摑まうとすれば煙のように消えて無くなる。これは儚ない幻ぢや。正しくありはありながら實のない形のない さながらの夢に抱かれてゐる此の身はまあ、何とした呪はれ

の人の子ぢややら」

さめ〴〵と泣き入つて皇后は絶句してしまふのであつた。そして肩もみぐしも小波のようにゆれてむせび入るその樣に嬰女は何うとも慰め兼ねて、自分も共にぽとり〳〵と涙を膝に落しながら聞いた居た。皇后がやがて、この長い間の惱みに父の憂さにも辛らさにもう馴れ切つてしまつたといふ風に顏を上げられた時、その涙のあとはきれいに拭はれてゐたそしてしんみりとした言葉で、彼女に云つて聞かすように、

「けれども朕や！　現代では人民の思はく世の中への憚り、それは無視するわけにはゆくまい。なれどこの事はお前の心の誇りと氣位とを傷けるものでないといふ事を話たまでのことなのだよ。わたしは自分のこの心をまだかつて誰にも話したことはなかつたのだからねえ。いゝかえお前！」

「はい御心の程はよくわかりまして御座います」

「それだからお前は御上の御心を解いて上げておくれとわたしからも賴むのぢや。さうしたらわたしも共日〳〵がどんなに送り好からう。同じ勤めの中でもやつぱり御上の御機嫌のよい方が嬉しいのだもの」

「それでは御方樣もさうなつた方が御仕合せだと思召ので御座いまするか？」

「あゝさうだとも女として餘りに不幸すぎるわたしは、せめて人としてもう少し仕合せであり度い」

涙を拭ふた皇后はやがて更け渡る夜風をいとふて自ら立つて窓の張りを下ろされると、折から燭火が忙がしくまたゝくのであつた。取り散らされたそこら邊りの小さい物など皇后が手づから片附けられるのに、それでも嬰女は考へ深く默つて身動き一つもしなかつた。彼女は男の爲めの女の災といふものを眼のあたりに見て空怖ろしくはあつたけれども、この唐の國のあらゆる女の最も高い位の上に唯一つ殘された空しい場所、そこにもしも自らが立つたならば、それに依つて爲し得べき樣々の事を考へて見た。いふまでもなく皇后のように異性の爲めに征服されつくしてしまうて、生きた屍としての

惨めな姿を今では自ら葬らねばならなくなつた憐れな身の上は、正しく恐怖に價するものであるに異ひない。併し僅ながらも底にまだ消え殘る愛の燭火があるならば、その炎の光りを通して尚ほ望み得る未來こそは彼女にとつての可なり大きな光明であらねばならぬ。不思議な女の力といふものはその僅かに殘された隙間からでも成長してくるものである。何物を犠牲にしても伸びようとするその力こそは未來といふ張りの中におぼろげに見える高楼であるかもしれない。けれども女を多く知りすぎて却つて女といふものを本當にしらぬ帝が、果して殘されたる眞の情けといふものをまだ持ち合はせてゐられるであらうか。彼女の胸の中にはなほこの疑問と不安とがあつた。皇后はさつきから深く思ひ入つてゐる彼女を呼び醒すかのように話かけるのであつた。

「蜀や！　お前は何をさう考へ込んでゐるのかえ？　若しかわたしがいふた事でお前の氣に障つた事でもあつたのかへ？」

「いゝえ何ういたしまして御方様。私で出來ます事なら御方様をもうすこしお仕合せにし度いものだと……」

「あゝその事を考へてゐてくれたのかへ、蜀や！　私はお前に何と御禮をいふてよいかわからない」

「あれ！　又お禮などと何うしてそんな事を仰せになるので御座いませう」

「ほんにねえこんな事に御禮をいふ女も世の中にたんとはあるまい。でもこれが此の身の辛さを少しでも輕くしてくれるのだつたなら喜びに違ひはあるまい。喜びならば感謝の言葉も自然ではなからうか。これでわたしの身に少しでも幸が向いてくるようにさへ思はれるのだもの」

皇后はふと何事か思ひ付いたように云ひつゞけた。

「おゝそうだ、わたしが自身でこれからお前を送り屆けて上げる」

「え！　どちらへで御座いますか？」

「御座所まで。もしかもうお退けであつたならその御寢所まで」

「えゝ、あのお方樣がこの私を！」

「さあわたしに從いてお出で、さうしてくれたならお上はきつとわたしを賞めて下さるに違ひない。それはもうどんなに賞めて下さるかしれない」

彼女は何うしてよいか餘りに突然のことで途方にくれてしまつた。しらず〳〵のうちに現れてくる自分の歩みの道、彼女にはそこを踏んでよいものか惡いものかさへ解らなかつた。しかしそんな事をゆつくり考へてゐる時間も暇も與へぬ程に皇后はせきたてゝ、もう自ら先に立れるのであつた。彼女は唯すなほに運命の波にのるかのやうにたゞ默つて御後に從ふより外はなかつた。

□

淑女を供につれた皇后が帝の御座所の前まで來ると、そこに詰めてゐた近侍の人々が御姿を見るなり平伏した。皇后はそれ等の人々に對つて、

「まだ御寢ではありませぬか？」

「はいまだ御目醒めで御座います」

「お側には誰か來てゐますかへ？」

「はい淑妃殿が居られます」

一寸の間何うしやうかと躊躇つた皇后は、それも却つて面白からうといふ風に淑女の力を顧みたけれども、彼女には何の表情もなかつた。そのまゝずつと奥に入ると帝は今しも淑妃を相手に酒宴もやがて終ろうとする處であつた。皇后は帝に敬ひの禮をして靜かに座に就きながら、淑妃を初め人々からの禮をうけて、

「先日から度々わたしのところに御成りを頂きまして誠に有難う存じました。今夜はその御禮に上りましたので御座います。そして其の度毎にいつも嬰の事を御尋ね頂きますから彼女を召連れて参りました」

今度は彼女の方を顧みて笑ひながら皇后が、

「御禮を申上なさい、御上はいつもわたしの所へ御出になる度お前のことを御尋ね遊ばすのだよ」

彼女は帝の方に恭々しく禮をしながら云つた。

「思召かけさせられまして有難う存じまする」

と、その間に皇后が淑妃の方を見られたが、例に依つて淑妃は無表情にとりすましてゐた。皇后は帝の前で殊更に淑妃の機嫌を損ずる事を憚つたかのやうに、嬰女にわざと少し強い言葉で、

「ではもうお前は退つてよろしい。わたしの歸りはこの誰かに送らせるから」

この間の事あつて以來、初めて勝利者の勇氣といふものを覺えた皇后は、今又この淑妃を前にして、その勝てる者の快感を存分に貪ろうとするかのやうに思はれた。帝はあはてゝ皇后の言葉を遮り、

「まあよいわさ、そう急いで歸さないでも」

帝は今皇后の爲めに自ら茶菓をすゝめ參らせてゐる淑妃に對つて、

「嬰にも何かもてなしをせぬか、この卓上にあるそれをとつてやれ」

卓上には色麗しい果物が銀の籠に盛られてあつた。それをこの新參の嬰女に手づから供さねばならぬはめになつた淑妃はそれでもおとなしく仰せの儘にそれをとつて手づから彼女の前に据えた。すると皇后は彼女を幼い娘でも勞はるやうに」

「嬰や！　折角の思召だからそこでお頂き」

帝が又淑妃に、

「その果物の皮を剝いでやれ！」
と命じた。淑妃はすなほに手づから皮を剝いだり切つたりして彼女にすゝめるのであつた。嬰女は恰も自分の侍女がする當然のものゝように何の會釋も淑妃に與へなかつた。淑妃は今皇后とさへ君の御情けを爭ひ、遂に君寵をその身一つにほしいまゝにしてゐる身分でありながら、この新參者の爲めに身をもつて勤めさせる。女にはこんな僅な感情も直ちに戰ひであり。生命の問題であるのだけれども、何につけ思ひやりといふ事をしらぬ帝は、こんなことを一向に斟酌しなかつた。そして皇后以上に寵愛してゐるその女の 魂 を勞はらうともしなかつた。帝の目には女とは 魂 のない一つの器に外ならぬものであつた。

皇后はこの樣子を目の邊りに見ては又してもいやが上に神經を嵩ぶらせ鋭くされるのみであつた。性質とはいへ淑妃が何の意地も張りもなく恥しめられても邪魔にされても無感覺な、それこそ器にも等しいこの女、その癖外見は如何にもおとなしそうに見えても根性の圖太くすはつた險なこの態度、自分の損德に係はる程の物なら猫の足の裏でも舐り付きもし兼ないこの人の貪欲限りない醜さは誰の眼にも憎らしいものであつた。と云つて今この憎しみを口に出す事は皇后にさへ許されないことである。もしかそれをしたならば帝は必らず正邪曲直をとはず淑妃の味方をして大勢の家來や誰彼の前をも用捨なく皇后を恥しめる。そしてそれを帝は此上もない樂しみのようにしてゐるいつもの習慣を皇后は良く知りぬいてゐた。やがて皇后はさりげなく身を起しながら、
「では私はこれでお暇を致します。御機嫌よう御寢になりませ。嬰や！　さあ、わたしもお暇するからお前も……」
と嬰女を促して立ちかけると帝が、
「まあよいではないか。今日は久しぶりでそちとこゝで斯う　てゐるの　はわしも滿足なのぢやから、そう急がないでもつとゆつくり話てゐてくれ」

「思召は有難う御座いますけれどももう大分夜も更けました様子、それに淑妃も居ますし、やがて御寢殿の間にも、ゞらせられませうから、私はこれで御遠慮いたしませう、ねえ嬰や！」

と皇后は彼女に相談でもするかのような眼をむけられる。と嬰女は默つてお暇の御辭儀をした。帝はますく〜當惑して、

「淑はもう退るのだ。な、そゝだらう？」

と場當りの都合のよい空事を淑妃に云はれる。今まできんく〜新參者のもてなしまでさせて置きながら、今帝がこんな體裁のいゝことをいはれたからとて淑妃は別段に口惜さうな様子もしない。寧ろその殘念さを空々しく押し隠した淑妃は相變らずねちく〜した小さい聲で、

「はい私は部屋に退りましてもよろしう御座いますが、折角御方様やお珍らしう見えました嬰殿の御相手をもつとさせて頂き度いと存じまして……」

と平氣な顔でいふ。この空々しさ圖々しさに皇后の心は戦へた。見えすいたお世辭を、眉根一つ動かさず落ち付き拂つて云つてのけるその圖太い態度に皇后の胸には何とも云ひようのない憎らしさと不思議な腹立しさがこみ上げてくるのであつた。淑妃の方が落ち付けば落ちつく程いらたゞしくなる皇后の眼は淑妃を烈しく鞭打つかのやうに輝き、斯う云つて罵つてゐるかのようであつた。「お前がいつも口癖にいふわたしを敬愛するといふのが本心なら、なにもわざとわたしの氣を惡くするようなことはせぬ筈だ。わたしはお前の顔を見るのも鬱陶しいから。まづ第一にその不愉快な顔から先に早くどこかへ片付けて貰い度いものだ」と。そして皇后の胸の中はたしかに嵐のやうに暴れ狂ふらしかつた。それがつい言葉となつて口を突いて出さうになるのを、ありだけの力でやうやうに壓へつけてゐるといふことはその時の皇后の顔色でも明かに讀み取ることが出來た。たとへ今は帝が如何に自分に機嫌がよくて、自らは勝利者の立場にあるが如くに見えてゐても、安心して帝の好意に縋るのは怖ろしい冒險であること、そしていつ反對にひつくりかへつて堪へ難い侮辱を與へ

ぬとも限らぬこと、またうかと帝の甘言に乗るのは丁度獵師のかけたかすみにかゝる小鳥の慘めさにも等しいこと、斯うふ樣々の苦難を永年嘗めつくして來た皇后は帝に對して少しの油斷も氣許も出來なかつた。かくして皇后の胸を閉してゐる厚い〳〵氷は永久に溶ける氣遣はなかつた。そしてそれを解かすべき暖かい日の光りといふものゝ惠みは幾十年待つても更に甲斐ないものと思はれた。恨みの度憎しみの都度口に出してしまへば後には影も形も殘らぬ程素直な心の持ち主も、胸に積り積るこの思ひ故に淑妃に心から打ちとけ得る日は到底來るよしもないのであつた。皇后は、

「嫋や！　さあ！」

と云つてせきたてた。と　帝はあはてゝ淑妃に、

「そちはあちらへ行つて……、休息を許す」

と云ひ放つた言葉はしどろに亂れてゐた。が淑妃は落ち付き拂つて、

「有難う存じまする。誠に勝手ばかり申上まして、折角御入來になりました御方樣や嫋殿ともう少し御話相手をさせて頂き度いので御座いますけど、折惡しく今日は私の都合も御座いますので殘念ながらこれで御免蒙りまする」

帝に邪魔にされてよいかげんなお座なりを云つてゐるその嘘の上に又嘘を重ねてなほ足らず、皇后の一番いやがる見え透いたお世辭のありたけを並べて、淑妃はおとなしく靜かに出て行つてしまつた。淑妃の後姿を見送りながら皇后はそのとりすました横顔を叩いてもやり度いほどにいらだつ憤りと憎らしさを無理に抑へて云つた。

「あの人に氣の毒では御座いませぬか、御上！」

帝は如何にも平靜に、何の煩ひも無いかのように、

「なに氣の毒なことがあるものか、あの女は極く氣のいゝ善良な人だから何とも思つてはしないのだ」

「御上は正直なひとはお嫌いで御座いますのね」

やつとこれだけが皇后にとつては云ひ度い言葉の萬分の一であつた。しかしこの位のいやみをいつてそれで氣のすむ筈もなかつた。さつきから陰氣くさい人の顔を見つけ、前々からのいやな感情のいきさつや、不快な思出が一々又新しく甦つて來て、身内も痛む程の思ひにもう堪へ兼ねて、皇后は少しも早くこの危險な帝の前を退かうとして、

「では私ももう退らせて頂きます。少し氣分もすぐれませんから、これでお許を願ひ上ます。御機嫌よう御寢になりませ もしも何で御座いましたら……」

と云ひかけて嬰女の顔を見ながら帝に、

「この人を御相手に置いて參りませうか？」

帝は自分の耳を疑ふように、それでも嬉しさに堪えぬと云ふ風に、

「エヽ、何？　おゝさうか。うんさうか。この女を殘して置くといふたのか？」

「はい」

「おゝさうか、うんそうか。そちは感心な者ぢや。いや淑よりも誰よりも賢婦人ぢや。さう〳〵思ひ出した。これからは奥向の女共の事に就いての一切の權限はすべてそちの手にゆだねようぞ、あはゝゝ。わしは何も干渉しまい。何でもそちの自由ぢや心まかせにするがいゝ。それがそちの兼ての希望であつたのだね」

とやたらに皇后の機嫌をとりながらしきりと賞めそやされる。皇后は強いてそれを聞き流して嬰女に、

「それでは頼むぞえ、よいかえ？」

と祈るように言ひ殘して立つて行かれた。近侍の童子二人は御送りの爲めとあつて、一人は燭をとつて先に進み、一人は御後に從ひまゐらせた。

後に帝はさも滿足さうに嬰女の手をとりながら、

「愛！お前よく來てくれた。が、なぜもつと早く來ない」
彼女は差し俯むき、手を帝の掌に委ねたまゝ答へるのであつた。
「いつ迄も上らぬつもりで居りました」
「それは又何でぢや？」
「上り度く御座いませんでした」
「何に？」
と帝は彼女の優しくはあるがどこかに劍を含んだ言葉を意外に感じて、それでもなほ彼女の心を引かうと努むるかのように笑顏を見せた。でも彼女は固く閉ぢた自分の心を容易に開かうとはしなかつた。
「それに御方樣が是非にと、此宵たつての御言葉、たゞ私は御供して參つたまでの事なので御座います」
「それは又餘りに心ない口のきゝやうといふものぢや。わしは疾からそちの來るのを待つてゐたのに。實は此頃折ふし皇后の居間を訪ねるのは、もしやそちの顏が見えはせぬかと思ふてぢや。それにそちはわしがゆくといふときはわざとのように隱れてとんとその顏を見せぬのは何うしたわけか。わしの思ひがまださとれぬのか？」
「その思召は私よりも御方　がよく御承知と見えまして……」
「うむ、それで皇后がそちにわしの處へ共に來いと云はれたいか？　あれは中々怜悧ものぢや、いや、實はわしは今迄あの女につひて考へ違ひを致して居つた。眞に手のつけようのない嫉妬やきの理屈つぽい女子ぢやとばかり思ふてゐたが案外粹もきく女ぢやわい。第一女の最も謹むべき嫉妬心を改めてくれたのは何よりぢや。斯うなつて見ると珍らしい賢婦人ぢやわい。このわしの心をよく讀みとつてくれる處の感心な者ぢや」
と我を忘れてたてつゞけに賞めそやされるのを、彼女はつまらなさうに聞きながら、

「御妬みを遊ばさぬのがそんなにお嬉しいので御座りまするか？」
「そうぢやとも、第一そちを私にとりもつなんぞとは大出來ぢやわい。誠にしほらしい可愛い女ではある」
「ほんに御方様はお優しいよいお方で御座りまする」
「さうぢやとも、そちも嬉しかろう。わざ〳〵自身にそちを連れて來てくれたのぢやもの喃う！」
「御方様は仰せになりました。斯うもしたなりや御上はきつとわたしをもつと仕合せにして下さるであらうからと」
「ふうむ、そういふてゐたか？　よし〳〵彼女の望む仕合せといふものが何であるか云つて見るがいゝ」
「御方様は仰せられました。その代りにあの淑妃を全く此の宮中から遠ざけられましたらどんなに嬉しかろうと」
「ふうむ、その代りとはそちを連れて來た代りにといふのか？　ふうむ、それぢやによつて淑妃を遠ざけてくれいと申すのか？　あは……彼女は淑が大の嫌ひのやうぢやが、しかし淑は彼女が邪魔にするほどそんなに悪い女ではないのに」
「御上！　私も淑妃殿は大嫌ひで御座りまする」
此の時彼女は帝の心を確りと掴み得てゐることを知つてゐて思ひ切り強く切り込んで行つた。帝はいさゝかたじろぎはしたものゝさりとて彼女の言葉を正面から拒むほどの勇氣は持たなかつた。
「ほう、そちも嫌ひか、なぜぢやろう。ついさいぜんも皇后には勿論、そちに對してさへ極めてへり下つた態度をもつてもてなしてゐたではないか。實はわしもその樣子を見てゐて珍らしい性質のよい女子ぢやと内心感心して見て居つたのぢや」
「御上は御自身のお目の前さへおとなしそうに致して居れば、それで心立のよい女子と思召ませうなれど、女同志は何うつくろひましてもすぐに心の底がしれまする。ほんに影日向のきつい實意といふものゝ少しもたいいやなお人ではある」

まあ〳〵そんな話はどうでもよいわさ。わしにはそちが一番氣に入つたのぢや」

彼女はいくらかすねたように、

「淑妃殿と比べましたらとてもこの私など、片時でも斯うしてお側に居りますのさへ身の程しらずと申もので御座りせう」

「何ぢや、そんないやみを申さないでも解つてゐるではないか」

「そう存じました故いつまでも〳〵お側には上るまいと………」

「あは……それはまた何をいふのぢやわしはそちが一番好きだと申てゐるではないか」

「あのまあ！　仰せられますこと！　おほゝゝゝあんなお心にもない空々しいことをほゝゝゝ」

帝の心はもうゆるんでゐた。しかし一向に打ちとけない彼女の態度にぢれた帝はむきになり、やゝ鋭い語氣で叱るように云つた。

「何が空々しい。何が心にもない事ぢや。わしは此の國の王ぢや。わしの言葉は直ちに力であり威であらねばならぬ」

「そんならその證據を」

「何が證據ぢや、たわけ奴！　帝王の言葉を何と心得て居る。實はその可愛いゝそちの生命も、もう疾くにこの兩の手の裡に握られてゐるのぢやわ」

と嬰女の首のあたりを締めつけるようにして抱かうとする。彼女は帝のされるまゝに任せてゐても言葉にはやはり劍を含んで、

「脆い女の生命の一つや二つ、それもお慰みで御座りませう。潰さうと毀さうと。息の根の通はぬ冷い亡き骸をそうしてお抱き遊ばしませ」

「ほう！　そちは怒つたのか。何でそちの生命を奪らう。わしの大事な〳〵思ひものぢや。そもいつからの思ひとしつてゐるか？　喃う！　そちの胸にも問ふて見てくれ。一年二年のことではないのぢや。こればかりは流石のわしにも儘ならぬものがあつた。今は斯うしてまのあたりにそちを置いて、おおさうぢや。斯うして今こそそちをこうして……」

と顔を彼女の美しい面に埋めようとされるのを、彼女は静かにその面をそむけながら、

「淑妃殿を遠ざけると。只今直ぐに御約束して頂きまする」

帝は彼女の頸に巻いたその手をほどいて、

「それは又ゑらい火急な話ぢや」

「御無理なれば強つてとは願ひませぬ。私は妬み深い女子で御座りまする」

「ほう！　厳しいことぢや」

「御上がこの私を誰にもましていとしいものと仰せになりましたのはみんなお偽りで御座りまする」

帝は怒つたように、

「帝王の言葉に偽りがあると思ふか？」

「そんなら淑妃殿は？」

「うん！」

「……」

やがて投げ出すように帝は

「そちに任かせるわ」

「私にお任せ下さいまするか？　淑妃の事については何事も？」

「うむ何事もぢや」
「それは本當で御座りまするか御上！」
「そちが　番いとしいのぢやもの」
「私はきつい妬み深い女子で御座りまする。それでもおよろしいので御座りまするか？」
「妬まれてもそちになら滿足に思ふぞ」
「この唐の國の女といふ女のすべてに代へてもで御座りまするか？　御上」
「うんそうぢやとも、例へこの唐の國の半分を失ふともそち一人には代へられまい」
「屹とで御座りまするか？」
「あゝ屹とぢや」
「何に賭けてお誓ひ遊ばしまするか？」
「しつこい奴ぢや。唐の國王が玉璽に賭けてぢや」
「おゝ御上！　その御誓ひを私はもう一生忘れは致しませぬ。よろしう御座いまするか！　御上！　この私を誰にもましていとしいものと仰せられました」
彼女は初めて微笑をうかべた、その微笑には云ひ知れぬ美しさと、強い意志の力とが認められた。
「おゝそちは嬉しいか？」
彼女は默つて頷づく。帝は嬉しさうに彼女の肩に手をかけて、
「な、よいか、そちはわしの第一のおもひものなのぢや。わしには優しうあらねばならぬ」
帝は彼女を抱へるようにして別室にと歩みを運ぶ時、近侍は謹んで錦の帳りを揭げる。帝と寵女と二つの姿はその中に

と辷り込むのであつた。

□

悪夢におそはれて息苦しく眠つてゐた皇后は、或物音にふと目を醒まされた。そこには誰か人の立つけはひがしたので、

「おゝ誰ぢや！　この深夜に、わたしの部屋の帳りを動かす者は？　誰ぢや！　上でさへもう久しくこれに手をふれることを忘れてゐられる。それに！」

半分身を起してその誰なるやをよく見定めると、それは思ひがけない淑妃の姿であつた。この夜更けに突然案内も乞はず、しかも許なしに皇后の御寝所に推参するとは誠に不審な振舞、それは有り得べからざる事柄であつたのだ。でもこの不自然にして不合理な出来事を皇后はまだ問ひ忘れてゐられるのであつた。

「おゝ、そなたは淑妃ではないか何しにここへ？」

皇后のこの言葉はいつもの淑妃に對するとはいくらか違つてゐたのみならず淑妃の力もまたいつもとはまるで異つて、顔は蒼ざめ萎れ切つた様子をしてゐた。その聲は如何にも力なく、

「御方様にお報らせ申上げる事の御座いまして……」

「何をわたしに知らせるといふのぢや？」

この時淑妃ははら〳〵と涙をこぼし潤み聲になつて、

「妾女は御上の御情けを身胎りまして御座ります」

「ほう！　それは初耳ぢや。がしかしそれが本當ならこのわたしにも悦びでなければならぬ。あの女はどんな事があつて

も、このわたしを決して不幸にさせる人ではないのだから」

「その御信頼の御夢はもうぢき破れるで御座りませう」

皇后はいくらか腹立しさうに。

「何ぢやと？ わたしが彼女を信頼してゐる。それが儚ない夢ぢやと？ 夢なら醒めるもよかろう。よしんば醒めたからとてこのわたしには失ふべき何物も持つてをらぬのぢやもの。わたしはもう疾くにそなた故に第一の致命傷を受けてしまふてゐるからぢや。そなたはわたしから何を盗み奪つたか知つておゐやるか？ 女が生れたとき與へられた女としての優しいしほらしい魂は、無慘な鐵槌で打ち砕かれてしまふたのぢや。おゝ思ふても身内が慄へるようぢや。御上が愛憎の重い悩みに泣き崩れたこの胸から扶ぐりとつてしまはれたあの女らしい仕合せな魂！ おゝ今はもうこの胸にはなんにも殘つては居らぬ。あるものは唯それを失つた恨らみばつかりぢや。だから今更嬰女が佋儀（女官の役の名）に召し出されて、どんな御寵愛をうけようと但しは懐胎しやうと、わたしが失ふものは何もないのぢやもの。おゝわかつた、そなたは今日自分が落ち目になつて來た故、このわたしに妬みを起させて置いて何事をか企らむ氣ぢやな」

「落ち目どころかもう斯うなつては……」

と云ひながら淑妃はきつと唇を噛んだ。夜目にははつきりと見えないけれども何うやら唇からは血が泌み出してゐるかと思はれた。いつもは餘りにはつきり物を云はない陰氣な淑妃が、今宵は一種凄味を帯びたはつきりとした態度で、

「御方様！ 御用心遊ばしませ。せめてまだ御方様に唯一つ殘されたその御位だけでもあの女から御奪られになりませぬように、注意して差上るので御座いますあは……」

反響のような空虚な聲が部屋中になりひゞいた。

「おゝ氣味がわるい。全身冷水を浴びたように冷い汗が流れる。もういやぢや〳〵とつとゝ此所を去つておくれ！

淑妃の聲はもう惡魔の聲となつて、

「あは――何と面白い氣の毒な、御上を始めこの宮殿中の悉くが騙されて、あはゝゝ」

皇后は怖ろしい惡感に身をわなゝかせ、手でその聲を拂らひのけるようにしながら、兩方の耳をふさいで、打ち伏してしまつた。するとその途端に電光のように皇后の胸の中に閃めいたものがあつた。そして思ひ浮んだその驚くべき事實に息絶えるばかりになつて、

「あつ！」

と云ひさま皇后は仮に倒れそうになつたのをやうやく踏みしめ、全身の勇氣を集めて靜止した。皇后は淑妃の姿に目も離さず、瞬きもせずに見つめながらそろ〱と寢臺を下り、猶も襲つてくる恐怖と戰ひながら少しづつ足を辷らした。それでもその時はもう淑妃に對する恨みと憎しみは遂にこの蒼ざめた戰慄に打ち克つてゐたのであつた。

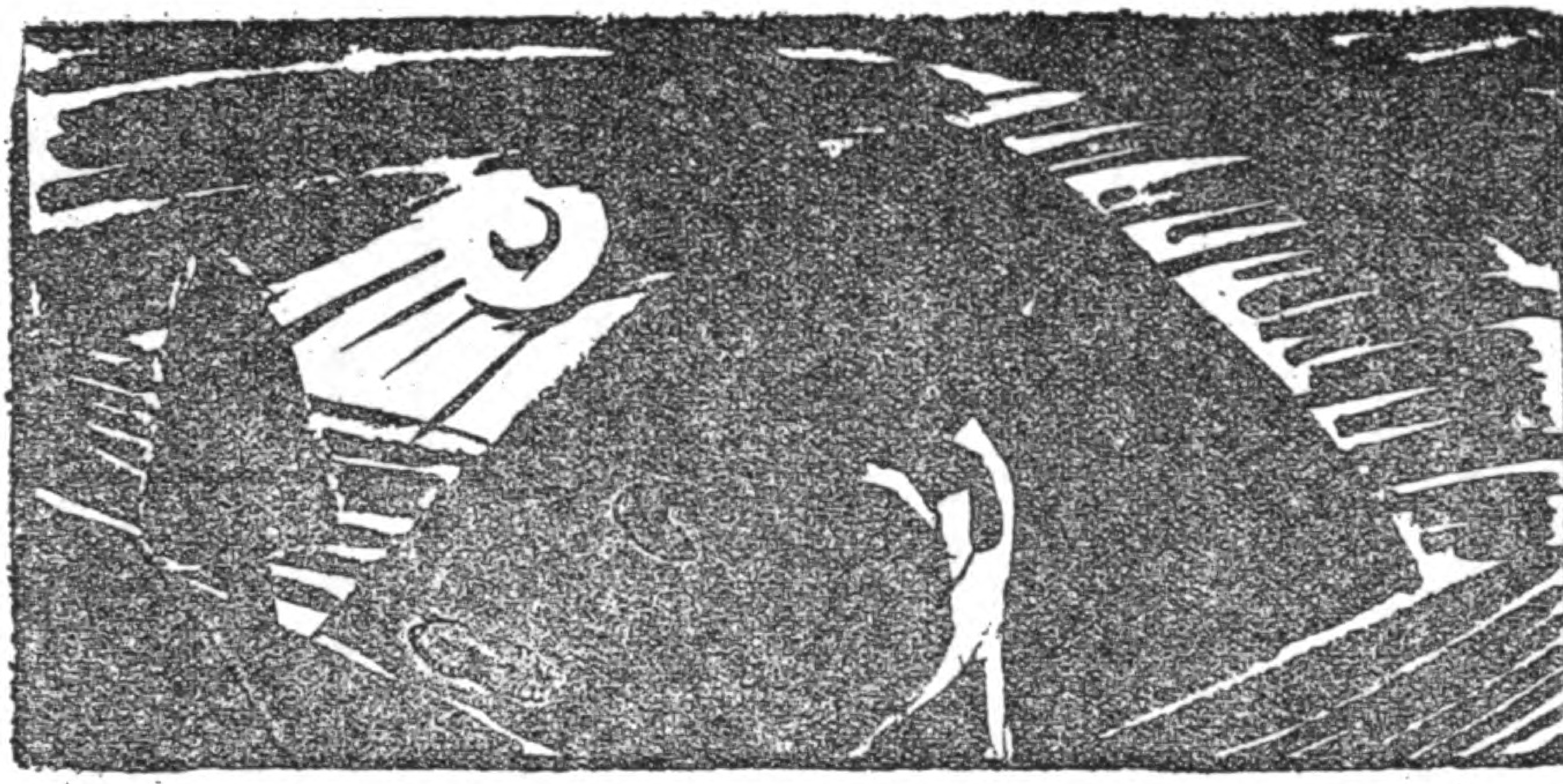
「さうぢやつた。今思ひ出した。昨日たしかに……。そうぢやつた。武侶俄（娶女）のはからひで初めて「仇を存分にうてとあつて御上から許を得て……。おゝさうぢや。やつぱり、やつぱりそうぢや。わたしが獄吏に命令て淑妃を殺させた筈ぢや。わたしの命令は首尾よく果しましたといふて、その證ぢやと先刻役人が持つて來たこれがそなたの血染の片袖！おゝわたしはそれを見てどんなに嬉しく、どんなに悦んだことか、この胸もすつきりとしたのぢや」

寢臺から下りて皇后はじり〱と幾疋か棚の方へすり寄つて、やうやく探ぐりあてた血に染まつた女の着物の片袖　それを相手に見せ付けるように片手でつまみ上げながら、

「これ！」

ひよつと淑妃を顧みた時、淑妃の姿はもう消え失せてゐた。そして皇后はそれなりそこによろめき倒れてしまつた。

（次號につゞく）



父親の氣持

鷹野つぎ

シーツと身を切るやうな、溜息とも忍び音ともわからぬ聲が、ふと深夜の靜けさの中に、順造の眼を搖りさました。

と、けたゝましい子供の啼き聲が耳をうつて來た。二聲、三聲それもほんの束の間、爆發するやうに立ち上つたと思つたが、間もなく弱々しく怯えたやうに顫えながら、ひつそりとなつてしまつた。

順造の顏はその時、愕ろいたといふよりは一時に蒼ざめたやうに見えた。彼れは傍らの寢床の方へどなつた。

『おい、どうしたんだ?』

忍び音ははたと止んだけれども、それに返事はなかつた。惠子は亂れた束髮の後ろを見せて、鷲が水に潜る時のやうに、背を丸くして夜具の中に、縮まり込んで居た。そして其の亂れた髪ごしに、子供の異常に白く見える額がのぞいてゐた。

順造は少しのり出すやうにして、子供の顏を覗いてみた。まだ生後まる一年半とは經たない龍一は、痩せて大きくなつた眼を開いて、まぢ／＼とそこらを見つめて居た。いかにも頼りない寂しさうな顏だつた。

順造はものも云はずに顎だけをしやくるやうにして、思ひきり龍一の方へ笑ひかけてみた。が、子供は笑はなかつた。それどころか厭はしさうにさへして父の笑顏から眼を反らし、更らにまた母の傍らの夜具の中からも、一層身をのり出すやうにして、矢張りまじまじとしてゐるのであつた。

さうした子供の孤獨な姿が、ぴつたりと順造の胸に捲き返して來たと思ふと、彼れは壓されるやうな胸苦しさを覺えた。

『おい惠子、龍坊が風邪をひくではないか、暖かにして眠らせてやれ。』

惠子　縮こまつた肩が動いて伸びたと思ふと、白い痩せた二の腕が突き出されて、龍一の肩にかゝつた。するとちよつと子供は衝動的に身をかはすやうに胸を反らしたと思つたが、忽ち母の胸の邊にすつぽりと、引き込まれてしまつた。

『いつたいどうしたんだ？』と、順造はそれを見ると聽ていくらか、聲を柔らげて云ひ出した。『また乳でも嚙んだといふのか？』

『えゝ』と惠子の返事がした。彼女は夜具のそとへ鼻から上だけ出して、その時には少し笑つてみせた。

『なんとかならないのか？』と、順造はまたじれ／＼した聲で云つた。

『だつて少しも出ないんですもの、それを此の兒が怒つてしまひには嚙むんですわ、此の頃はそれがそれは酷いんですの、今もわたし乳首がとれやしないかと思つたわ。』

惠子はさうして溜息をついた。

『ぢや牛乳があるだらう、何故それをやらないんだ？』

『だつて、それも嫌がるんですもの、まだ飲み慣れないんですわ、一月まへまではまだ私の乳だつてもよかつたんですも

の』

『ふん……』と順造は云つて、默り込んでしまつた。もう先刻から、といふよりは先刻變な物音で眼を覺ました時から、頭につき上げて居た。彼れの新らしい赤兒のことが、その時頭いつぱいに、隙間もなくのし擴がつて來たやうに思つた。だがその赤兒……赤兒といふのはいつたい何物のことであらう。可哀想に大事な乳を他のものに奪はれた、龍一自身のことではないか、いやさうではない……。順造は眼を瞑ぢた。

こんな場合斯うした考へごとのふり出しから始めるくせになつてゐる順造は、今もさうして憂鬱な顔をして考へ込んだ。するとまた眞暗になつた眼の前の暗の中に、半ば人間の形を成したといふばかりの、奇怪な肉塊の姿が見えてきた。彼れは嫌な氣がした。

が、軈てもつと心を靜めてみると、それがだん／＼子供の顔になつて來た。肥つた圓い手首が見えてきた。房々とした髪が見えてきた。ニツコリと笑ふ顔が見えてきた。そして其處には何時か龍一自身の、はつきりとした笑顔が浮んできて居た。

『あゝ、矢張りも一人の龍一が居るのだ』といふ考へが、此の時も最後に順造の頭にはつきりと照らし出された。

だが、さう思ふと同時に彼れは、何んだか眼の前がくらくらとしてきた。恵子が毎日――いや今夜にしてもさうだ。少しばかり子供が乳首を嚙んだからと云つて、めそ／＼するやうなそんな不健康な弱々しい様子をしてゐるのが、無暗と腹立しかつた。母親に突きはなされても、また父の笑顔を見ても、あばれやうとも笑はふともしないやうな、頼りなげな寂しげな龍一だつてもたまらないことだつた。況してあんなに元氣であつた恵子を、何時からともなくこんな不健康な様子にさしてしまつた、腹の兒を思ふにしても、堪へがたいものがあつた。

順造はそこで此の三つの命を前にして、自分までもちり／＼に引き千切られて行くやうな、ぢれつたさを感じた。それ

はしまひにはたゞ彼れのわけのわからぬ腹立ちとなつてくるばかりであつた。

龍一は母の胸に抱かれても、なか〳〵眠りつかふとはしなかつた。間を置いては絶えず氣弱く惠子の方へ訴へ出づる聲が、つゞいては消えた。

順造は思はず眉根を寄せて、ちつと息を詰めた。龍一を思ふ熱いぢりぢりしたものがいくら抑へても胸元へ込み上げてきた。しかしまた弱々しい疲れた聲で、子供を宥めたりすかしたりしてゐる惠子の忍び聲を耳にすると、それはそれでまた別の笞で打たれるやうな、いやな苦痛を感じた。

『困るなあ、牛乳はだめか?』と、順造は思はず足先で、床を蹴るやうにして惠子の方へ云つた。

『いゝえいゝんですの、私起きますわ』

惠子は斯う云つて、態て床の上に起きなほつた。子供は急にうれしさうな元氣な顔つきになつて、母親の手に抱かれた。

『戸外々々』と云つて、龍一は體をはねるやうにして呼びつゞけた。

『まあ、困るわね、こんな夜中にどうしませう』と、惠子は早くもまた泣き聲になりながら、

『ね、龍坊、もちつと我慢するのよ、今に明るくなるとお母ちやんおんぶして、よいよい行かうね。』

彼女は宥めたりすかしたりした。果てはおんぶして灯のほの暗い、寢部屋の中をうろ〳〵しだした。

『うるさいなあ』と、順造は叫んだ。『そんな枕元を歩かないで、彼方へ行け、彼方を歩け。』

惠子は足音を忍ぶやうにして、狹い廊下の方へ出て行つた。

コト〳〵、コト〳〵といふ足音が、忍べば忍ぶほど順造の耳にしつこく、つきまとつて來た。それは一足ごとに、まるで順造の横つてゐる肉體までも、ぐひ〳〵と平たく壓しつけるかと思はれるほど、異樣な力强いものに聞かれさへした。

こんな思ひをしようとは！、と順造は思つた。しかし思ひ返してみると、彼れにとつてこれが全く新らしい出來ごとと

いふ氣はしなかつた。さうだ、龍一が生れた時、彼れは彼れと惠子との單純な生活の前に、ある威嚇を感じてはゐなかつたか？。しかしそれも古い過去となつた。龍一を得てからの此の一年半は、彼等にとつては寧ろ良い思出とさへなつた。親兒揃つて曾て思はなかつた、愉快な散歩もした。樂しい團欒もした。軈て子供は彼等自身の生命となつた。

しかし順造がこんな氣休を思へば思ふほど、今夜の慘めな氣持ちは救はれさうもなかつた。彼れは今や彼れ自身の命も惠子の命も、龍一のかよはい命も、更らにやがて生れ出ようとする赤兒の命も、再び一時にめい〳〵が行き場のないやうな、悲痛なばら〳〵な苦しみの中にあるやうな氣がした。

惠子のあたりを憚るやうな足音が、突然叩きつるけやうに郞下に響いたと思ふと、順造の枕元に彼女のねんねこ姿が現はれた。

『まあなんて夜が長いんでせう。私疲れてしまひましたわ』と、惠子はぐつたりした聲で云つた。

『どうした、龍坊は眠つてくれたか。』

『いゝえ、此の通り』と云つて、惠子は背中の子供を揺り上げるやうにして、順造の方へその顏をのぞかせた。龍一は矢張り窶れた顏の中に、眼ばかり光らして居た。

『困るなあ、僕が今度は代らうか。』

『いゝえ駄目ですわ、今氣むづかしいんですもの』と云つて、彼女は頻りに體を揺りはじめた。

『さあ、ねんねするのよ、ねんねするのよ、好い兒ね、好い兒ね。』

惠子は再びそして狹い郞下の方へ出て行つた。相變らずコト〳〵コト〳〵と、忍び音の足音がつゞけられる。

順造はひとりになると、首をのばして懷中時計の垂れてゐる傍らの柱をのぞいた。まだ一時を過ぎたばかり、夜明けには冬の事であるから、少なくても今五時間は辛棒しなければならない。が軈て龍一は眠つてくれるであらう。

彼れは思はずウトくとしはじめた。と、ものの三十分も經つた頃であつたらうか。彼れは何に怯えたともなく ひくりとして眼を覺ました。しいんとして居る。いかにもあたりはひつそりとして居るのである。

惠子は？ 龍一は？ と閃めくやうに彼れは思つた。突然彼れははね起きて、うすい寢衣のまゝで暗い廊下の方へ出て行つた。

そこは突き當りが厠になつて居た、そこの廊下をはさんで、使ひ道のないやうな四疊の細長い部屋があつた。晝間もやつと西日の射す暗い部屋で、僅か二枚の半障子のたてた窓はあるが、それを開けると何よりも垣根の破れごしに、荒れ汚れた空地の見えるのが缺點であつた。惠子はそれを何時も順造に云つた。廣くもない家の事であるし、も少し何とか窓のそとがよかつたら、少しぐらゐ暗くたつて寒くたつていゝのであるが、あれでは部屋を開けたら最後、一層慘めなものになる……。それで狹いのを我慢して此の部屋は、當坐の洗ひものでも溜めて置く、物置同樣になつてしまつて居た。

順造は先刻足音のあつたのを辿つて、そちらへ駈け込んで行つた。無論廊下には影もないし、あちらの座敷つゞきには居なかつたのであるしと思つて、彼れは足を當然その寒い、呼吸ごもつたやうな部屋の中へ向けられて行つた。

ちよつとすかして見たぐらゐでは、そこに人の影がありさうもなかつた。彼れは突嗟に立ち悚むやうな戰慄を感じながら、ぢつとくら闇の中に瞳をこらした。

だんくそこらが明るくなつて來たやうに思はれた。見ると惠子は居る。古ぼけた行李の二づばかり重ねた上に片肱を凭せて、横坐りになつたまゝ、うたゝねをして居るのであつた。

順造は急いで、これも滅多につけた事のない、電燈のスヰツチをひねつた。乏しい灯がぼんやりと惠子母兒を照らし出した。見ると龍一もすつかり、母の投げ出した頸すぢの上に小さな頭を乘せて、眠りこけてゐる。それは餘りにかよはくて、今にも千切れさうに細く伸びて見える。

順造は思はず龍一の頭に輕く手をかけて、彼女の眠つた顏をのぞき込んだ。どうしたのであるのか、涙のあとでもあるのか、彼女の眠つた瞼と瞼との間に、一線の濡れた筋が見える。

『惠子!』と、それを見ると順造はふとむか〱としてきて、足で一つ疊を叩きつけながら激しく、と云つても龍一を愕かさない程度で、二三度彼女の肩の邊を搖り動かした。

『こんなところで眠つたりして、どうしたんだ。』

惠子はふとびつくりして眼を覺ました。彼女はそしてしばらく何物かを、探し求めるやうにおちつかない眼つきをしてあたりを見廻してゐた。

と、順造はそれを見ると一層もどかしさうに、ぢり〱して云つた。

『どうしたんだ、まだ眼が覺めないのか。』

『え?……いゝえ』と云つて、惠子ははじめて我れにかへつたやうに、瞳を順造の顏に据ゑた。

『私今嫌な夢を見て居て……、龍坊はどうして? まあ眠つて? あゝ重たかつた!。』

『何を云つて居るんだ、さ、あちらで子供をみなければ仕樣がないぢやないか。』

惠子はそれを聞きながら、あとは無言でねんねこの帶を解きはじめた。眠つた子供は今度はおとなしく、彼女の膝の上に抱き替えられた。

『さあ、彼方へ行くんだ。』

『だつて立てないのよ、しびれがきれちやつて』と惠子は笑ひながら、そろ〱と足を伸して、しつかりと龍一を抱へなほした。

『あゝ龍坊、今お母ちやんと一緒に水の中へ落つこちたりして、お前苦しんだのね、でもまあ夢でよかつたこと』と、彼

女はさうして居る間に、半ば呟くやうにこんな事を云ひ出した。そして彼女は順造の方へも話しを向けながら、

『ね、あなた、私ほんとに泳がうにも何んにも、手や足が石のやうに固くなつて、動けなかつたと思ひましたのよ、そしたら矢張りしびれをきらしてゐたんだわ。』彼女は斯う云つて寂しさうに笑つた。

『不健全な話は止せ』と、順造はいきなりどなつた。『水の中へ落つこちたのか、自分から轉げ込んだのか知らないけれども、そんな下らない夢の話なんか僕はきらひだ。僕はだいたいお前がそんな馬鹿げきつた、夢を見るといふことからして氣に入らない。』

『まあ、あんなことを云つて！　たゞ見たんだから仕樣がないぢやありませんの、きつとこんな處に居て冷えたからうですわ、……私ほんとにこんなに體を冷やしちや、よくなかつた』

『うん、さうして勝手に不養生して、產の時に死んで見せたいんだらう』と、順造はまたじれ〳〵して云つた。彼れは斯うした惠子の失策に對しては、いくら毒口を叩いてみせても、胸が透かないやうに思つた。

惠子は何を云はれても、珍らしく氣弱い微笑を見せて居た。近頃體の調子からむら氣になつて居た彼女が、こんなにおとなしいと云ふのも、順造にとつては一つの腹立ちであつた。どうせ碌なことは考へて居やしないんだ、さういふ氣がした。けれども懸て惠子が重たい子供を抱へながら、疲れた足どりで床の方へかへつて行く姿を見ると、彼れは見てならないものを見たやうな、深い胸の痛みを感じた。むしろ彼女の前に低く頭を垂げてもみたいやうな、自責に似た心苦しさを思つた。

順造はあとから飛んで行つて、子供のために體の自由を奪はれてゐる惠子のために、床の世話をしてやつた。けれども彼れは惠子が自分の體を粗末にしたこと、子供に對して無責任であつたことについては、云つても〳〵盡きない憤りがあつた。

『僕の氣持ちを投げやりにならせたり、不快がらせたりするのは、何んのためだと思ふ。』順造は斯う罵りながら、惠子の冷えきつた足先を毛布でくるんで置いて、叩きつけた。

『子供もいらない妻もいらない、何もかも要らないと思はせるやうな時は、僕の一番不幸な時だと思へ　それは一體誰れがさせることなんだ。』

『………。』

『僕はお前が弱い、また體の工合が普通ぢやない、といふことを云つてるんぢやないんだ、お前の張り合ひのない、いぢけた日頃の考へ方がいやだといふんだ。』

『………。』

『元氣を出せ！　たつた一すぢの違ひぢやないか、乳首を嚙まれたと云つて泣くかはりに、子供の元氣な失敗をなぜ笑つてやらないんだ。』

順造は惠子の襟元の夜具を押へつけ、龍一の枕を正しく當てがつてやつた。がつかりと疲れ果てたやうに横つて居た惠子の瞼からは、柔らかな秘かな微笑と共に、涙が流れた。

『これだけ云はれて口惜しいと思つたら、僕をいくらでも罵つてみるがいゝ、さうでもなければいつそ大膽にお前を苦しめる、すべての原因と思ふものを根絶やしにしてみるがいゝ。だが若しそれ以上に元氣が出たら、お前の龍一に笑つてやることなんか實に些細なことになつてくるんだ。』

惠子母兒の床は、順造の手に完全に敷き重ねられて了ふと、まるで從順な人形をでも横たへたやうに、ひつそりと靜まり返つて居た。彼れはたゞの一言も彼女から、返事がむくいられなかつたあとでは、何かとり落したやうな空虚を感じた。彼れのあらゆる口小言も此の本處の前では、力ない氣恥かしいものに思はれた。

彼女は何よりもたゞ疲れてゐるのではないか。と順造はこの氣恥しさの中で思つた。同時に乳を奪はれて、窶れはてた龍一の、まじ〳〵とした眼を思ひうかべた　同時にまた疲れた母體の中に辿々しい生を營んでゐる、新らしい赤兒の事を

思つた。

どうすればいゝのだ？。彼れは最後にさう思つて何ものに罵りを感じてゐた自分であつたか、解らなくなつてしまつた。たゞあらゆる彼れの係累への氣遣はしさいとしさが、彼れを泣かせた。

軈て彼れは足音を忍ばせて、惠子たちの床のそばを離れた。彼れの顔つきはその時、何ものかに叱り飛ばされでもしたあとのやうに、氣まりのわるいそしていかにも、しほ〳〵とした様子をして見えた。

彼れは茶の室の火鉢によつて、火を熾しはじめた。と忽ち鐵瓶の湯氣はあたりに暖かく漲りはじめた。軈てミルクの瓶が彼れの手によつて、湧かされるばかりにそこへ持ち運ばれた。

まだあたりは深い夜であつた。惠子たちの床は　かにも温かげに、幸福さうにみえた。あの今の瞬間までは、あらゆる禍ひの巣のやうに見えた床、それが今は順造の眼にあるべき當然の有様にかへつたやうに思はれた。

順造の顔は何時か、細々した起居のうちに、晴々しい血色をとり戻してきた。彼れは煮えたぎる湯の前に坐りながら、再び眼を覺まして泣くであらう龍一を待ちかまへた。けれども惠子が先刻枕元へ來て、『早く夜が明ければいゝ』と歎じた氣持ちは、彼れにはなかつた。實際そんな贅澤な考へなどは、彼れには起きて來さうもなかつた。彼れはたゞこんな不幸な一夜でも、斯うした　瞬間の平和が惠まれたといふことが、それだけでもどれほど貴くうれしいものに思はれたかしれない。

順造はゆつくりと煙草を吸ひはじめた。そこで彼れはさうしてゐるうちに何時の間にか、惠子が身二つになる日の事を考へてゐた。龍一が食物に慣れて丸々と肥つて行く日の事を考へて居た。以前の惠子の元氣な顔と並べて、豐かな乳に惠まれた新らしい赤兒の顔を見る日の事を考へて居た。

同時に彼れは最後に、その日の彼れ自身の晴々とした日の事を考へて、どんなに氣輕く思はれて來たかしれない。

順造は思はずそつと床の方をかへりみた。たが、その瞬間彼れは思はずどきりとしてしまつた。もう樂しい彼れの豫想も何もなかつた。そこにはいかにも不安さうな恵子の眼がまるで威嚇するやうに大きく見開いて、こちらに向けられて居たからであつた。

『どうして眠らないんだ』と、順造は思はずにつとして叱りつけた。『今のうちに眠つて置かなければ龍坊が眼を覺してからでは、追つつかないではないか。』

『でも、龍坊だつて眠つてはゐませんもの、』と恵子は思ひがけなくきつぱりとして云つた。その聲はどこか力強く冴えてゐて彼女の以前の疲れ果てた響きとはちがつてゐた。

『どうしたのだ』と順造は思はず急き込んで云つて彼女の床の方に起つて行つた。『どうしたのだ、どうかしたのか。』

『えゝ何んだか此の兒は工合がわるさうですわ。乳のせいばかりではないやうですわ、先刻から、靜かにはしてゐますが、でもほんとうは苦しさうにして居て眠つてはゐませんもの。』

順造が龍一の額に手を當ててみると、それは平常よりは少し熱いかと思はれるくらゐのものだつた。けれども子供はいかにも物憂げに胸元で呼吸をしてゐる。彼れは忽ちそこに居竦くむでしまつた。

彼れの顏にはそのとき最早以前の腹立ちは、見ることができなかつた。同情や憐憫の影すらも見ることはできなかつた。そこにははたの眼からしたらば、恐らく此の喚き訴へられる者……順造の、此の一家にとつても一番悲痛な憐れなかげが讀まれたにちがひない。

『さう云へばもう四五日前から、少しお通じが變つてゐましたの。』と恵子が云つた。順造はもう澤山だといふやうに、はげしく顏を顰めた。しかもこんな場合ものの云へる恵子を、彼れは煩はしく思つた。

彼れは思はず驅け寄つて行つて、柱に垂れて居た、懷中時計の面を覗き込んだ。午前四時……、その髮の毛のやうに細い短針は、彼れの熱意のこもつた眼に、辛うじて斯う讀まれた。

だが遲々として夜は、まだ容易に明けさうもなかつた、



橋の上と下

有島生馬

「旦那様お給でございますか。」

橋の上から聲をかけたのはお神さんだつた。その聲で直ぐさう分つた。私は橋の下にゐた。橋の袂から細い崖道を突落されるやうに中途まで下りると、そこに僅か許りの平地がある。私はその岩の上で海に向つて畫架を据ゑてゐた。例の小川が汀の直ぐ間際になつて突然二丈許りの崖を下るので、そこに小さな瀧と瀧壺とが出來、池のやうに圓い形の水溜りになつてゐる。片方に海を見、片方に瀧を見、橋は松林から松林の中へその瀧壺の上高く渡されてゐる。一度淀んで淵になつた小川は再び淺い砂川となつて流れ、多くの川口のやうに東向になつて海へ這入つて終つてゐる。

お神さんはさう云つてから變に押しつぶされたやうな聲で笑つた。この元氣のいゝ女はいつも口をきゝさへすればきつとおほゝゝと聲を出して笑ふのが癖なのである。

やあ今日は。

さう返事はしたが、一寸待つてくれ今手が放されないと思ひながら筆を動かしてゐた。

今日はいゝお天氣ですからよろしふございますね。

又さういつたので、パレットを持變へながらやつと橋の上を見上げた。お神さんは欄干に兩肘を突いて半身を乘り出しながら、下を覗き込んでゐた。それを下から見上げると大きな青空にお神さんの日にやけた血色のいゝ顏と潮風に赤くなつて縮つてゐる髮の毛が秋の朗らかな空の中に浮んで奇體な感に見えた。

さうだね、めづらしいいゝ天氣だね。こんないゝ天氣は一年に數へるほどしかないんだから、少し稼いでるのさ。

私はさう云ひながら波のない、さうして夏のやうに人の群ることのない海の方を見やつた。海は丸い陶器の壺のやうに滑かで且つ光つてゐた。神さんは默つてゐた。

どうしたい、いやに默つてゐるね。

暫らくして私は立上つたまゝ畫架に向ひながら云つた。

なんですかどうもいやな氣分で。

病氣かい。

いゝえ、あんまりむしや〱するもんですからつひぶら〱出て來たんでございます。

散歩かい、珍しいな。

彼女は私の嘗つて借りてゐた別莊の大井といふ留守番人の神さんだつた。亭主は永らく郵便脚夫をしてゐたが近頃では銀行の小使になつて二三十圓貰つてゐる。それと主人の方から貰ふ僅かな手當とで、十三を頭に五人の子供を養つてゐる。その上姙娠中で、來春は第六番目の子供を生むといふのだからどうして喰つて行けるのか譯が分らなかつた。然しその仕

んでる小屋といふのが六疊一間きりで、その中に夫婦と五人の子がすし漬けになつて寢てゐる。唯祠さんが非常な元氣者で亭主のぐづを勵ましながら、不平がましいこと一つ云はず、朝から晩までまめ〳〵しく立働き、夜は又夜で夜なべしてまで、子供達にさまで醜くないなりをさせて置くといふ風なのである。だから吾々がその祠さんの噂をする時にはいつも殆ど尊敬に近いものを感じないことのない位、利口で感心な女だつたのである。

散歩つてこともございませんけれど、今朝大井が常坊を田舍に連れて行きましたから。

あゝさうかいよ〳〵連れて行つたの。

へえ、今朝一番で立つて參りました。

さうか、それはね。

私はそれで先頃から話のあつた末の男の子を愈大井が弟の家へ養子にやるため連れて行つたことを知つた。

いゝやね、また直ぐあとから生れるんだから。内みたいに一人も子のない人のことを思へば贅澤だよ。

おほゝゝ

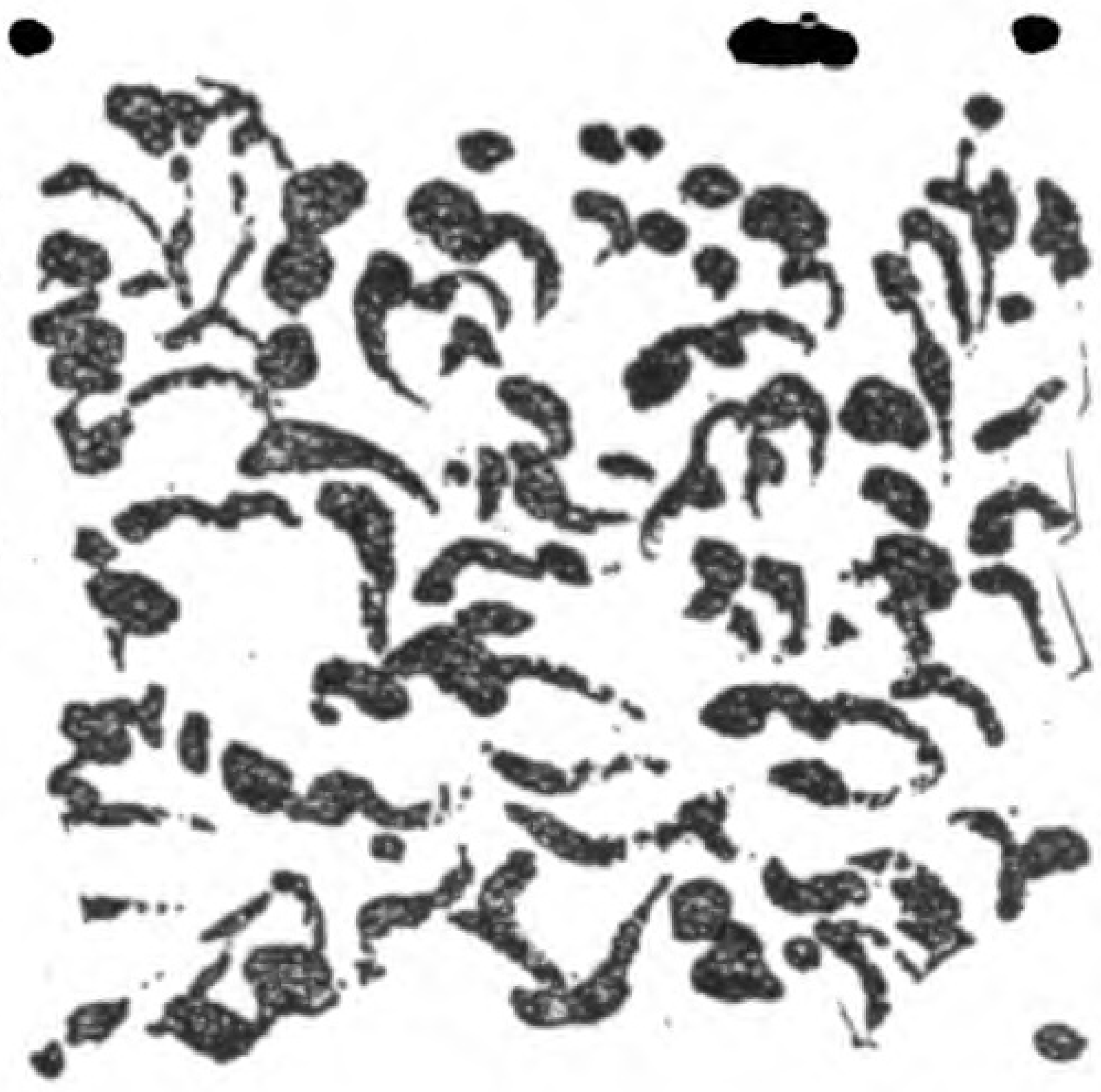
と彼女は笑ひかけて、

でも幾人あつてもやつぱりいけません。なんだか今日はもう………。

さう云ふかと思ふと急に欄干に顏を押しあてたまゝ泣き出して終つた。

私は橋の上を見上げることが出來なくなつて終つた。薔薇の上の花はいかにも死物といふ氣しかしなくなつた。

秋の海は午後四時の日を受けて、やがて靜かな夕暮れに近づいて行くのを思はせてゐた。幽かな波の音をじつと二人は一つ心持で聞いてゐたが、やがては魂が離れ〴〵に別れて行つた。（海村雜記のうち）



青空の下

福田正夫

彼は郵便局に行つたのです。いそいそと身を慄はせて、爲替劵を一枚ふところに忍ばせて、それを上から押へながら……………。

秋でした。

大地震の燒跡には小さいバラシクが立ち並んで、風に搖れてゐました。小さい海邊の町の午後、しづかな、寂しい町通りを、見知らぬ旅の人達がうなだれて通つてゐました。彼はそれらの話聲も聞きませんでした。

それらの人達が話してゐなかつたからか、彼がなにかに有頂天になつてゐたからか、どちらにしろ彼はちらつと物うく浮いてゐる街の埃と、くの字に曲がつていつ復舊されるかも解らない電車線路と、その人達を見たばかりでした。彼はふところに爲替劵があるといふことがわびしい氣がしました。彼はほんの少しのその受取れる金が、すぐ霧のやうに消えて行く、だらうと思つたのでした。けれどもこれは無くつてはならない金だ、と彼はまた思ひました。

バラツクの中でだんだんやつて來る寒さに、着物もなしで慄えてゐる子供達の顏が、素早くうつつて消えました。ふふと彼は馬鹿笑ひをしました、うつすらと曇つたやうに涙が眼をかすませたのでしたが。

――彼は羨ましさうに郵便局の新しい立派な（彼にはさう思へたのですよ）バラツクを眺めました。それから戸を押し

て中に這入りました。おづおづとふところを探ぐつて爲替券を取り出すと、五圓と書いてある金高を確かめてから顔の青い女事務員をちらつと見てそれを差し出しました。

——印を、と彼が顔をあげた時女事務員が言ひました。

彼はおどおどした眼を落して器械的にふところをさぐつてはつと青ざめました。家や着物や蟇口のすべてのものと一所に燒けてしまつた水牛の印の影が鮮かに大きくうつつて小さくぼんやりと消えて行きました。

——あの、印は燒けちやつてないんですが。

彼の聲はかはいた溝の底から出るやうに唇に引つかゝつてるぶるぶると慄えました。

——では名刺をお持ちですか、本人だといふ證明がないと上げられないのですが、此際でも……………。

彼はほつとして大きなびつくりしたやうな眼で局の内部の人達をかき探しました。名刺だつてある筈がない彼は、局の中の知つた顔に證明して貰はうと思つたのでした。

——ああ、あの人が私を××だと言ふことを知つてゐます、と彼は自分でもびつくりしたやうな聲で叫びました。澤山の眼が彼に集りました。彼は絶望したやうに女事務員を見つめました。

——お氣の毒ですが、物的證明がないと上げられません、とその紫色のうすい唇から出た言葉は聞かれました。

——でも、と彼は必死の努力で唇を慄せながら、もがくやうに青い頰を引きつつて叫びましたけれど。

——あなたがあなただといふ物的證明をお持ち下さい、と女事務員は堅い石のやうな聲を出して爲替券をさしつけました。彼は恥づかしくして慄えました。物的證明といふ言葉が針のやうに胸にさしとほつてしめつけるやうな痛みを感じさせました。

ああ、と彼は呻いてまつくわに燃え上りました、この女だつて自分を知つてる筈だ、燒けない前から郵便局にゐたのに…

……と思ひながら慄へる手で爲替券を受取りました。よろよろと扉に突きあたつて戸外に出ると、彼の熱い頭がさつと氷のやうに冷たくなりました。彼は青ざめて輕いめまひを感じながらよろよろと歩きました。

——不合理だ、ひどい、お役所流儀だ、と彼は呟きました。

すぐに彼に恐ろしい、苦しい　烈しい感情が起りました。

——自分は果たして××××かしら、と彼は自分の名を呼んで見て大きく眼を見はりました。自分は自分かしら自分は、ああ。自分が××××でないのかも知れない、またあるのかも知れない、いつたい自分は誰れだ。

彼は最後の一句を自分で呟いてぴくつとして飛び上りました。

——自分は誰れだ、自分は誰れだ、と彼はまた呟きました。自分はゐないんだ、自分ぢやないんだ………彼は胸の中に烈しい痛みを感じて、死ぬんぢやないかしら、と考へました。死ぬんだ、死んだ方がいい。

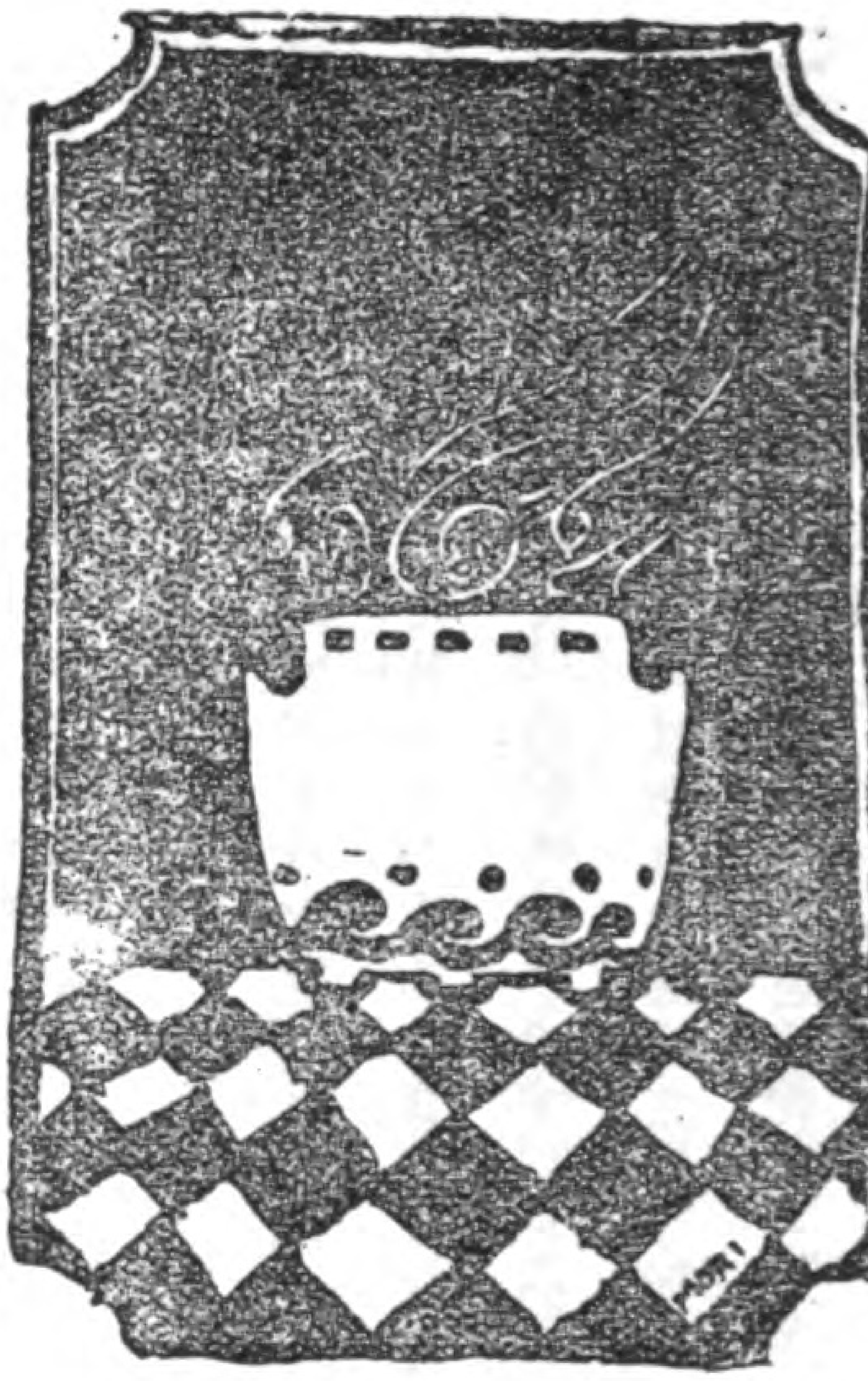
彼のこの考へは致命的なものでした。

彼はちらつと見廻しました。枯れかけた草原に、しづかな虫がリイリイと鳴いてゐるのを聞きました。そこは林の陰になつた靜かなところでした。

彼は草の上に腰を下してうなだれてゐました。

それから無心に立ち上つて帶をほどきはじめました。五六歩よろよろと進んで木の枝を見上げてその帶の端をぴよいと投げかけました。それを結んで木の根許の石の上に立つて首を入れる。それから直ぐに彼の身體はぶらんと吊り下がつて二三度搖れました。

死ぬんだ、と思ふと彼はふつと可愛いい子供達の顏を思ひ出しました。助けてくれ、と呼ばうとして苦しくなつてもがきましたが、すぐ彼は凡てが決定したことを考へてしづかになりました。彼は殘して行く子供達のことを思つて、死んで行きながら、悲しい涙を流しはじめました。彼の手にはあの爲替券が、つかりと握られてゐました、それが子孫に殘す大切な財寶であるかのやうに。——林の上には悠久の青空が無心に輝いてゐました。天地は一瞬間しづかでした。



茶をつぐ女 (John Cournos)

松村みね子

（心理描寫なしのロシヤ風の短篇）

イワン・ペトロツフは、鰥夫となつてからの習慣として、毎日きつかり四時になると　自分有の材木置場を出て自宅に歸るのであつた。自宅では彼にも負けずキチンとその時刻に熱いサモワールが彼を待つてゐた。サモワールといふ物はどんなロシヤ人でも知つてゐる通り、慰安ではあつても、妻と同じものではなかつた。それは妻と同じやうに熱くなつたり冷たくなつたりもするし、小聲で唄をうたつたり無言になつたりもするし、祭日には——歡ばしさを反射して——晴やかに輝いたりもするし、又ほかの日には、鈍くて何の反應もなかつたりもするが。しかし、ペトロツフは——あるひはみんなが親しく呼ぶ名のイワン・ステパニツチは——仲人たちの押しつけの世話を斷つてゐた　それは今持つてゐるサモワールの代りに又べつのサモワールを買へといふのと同じことだつた。ペトロツフはたいそう念入りにそのサモワールを選んだのだつた。ちやうど彼の亡くなつた妻を念入りに選んだのと同じやうに。彼はそれをある店の窓で見つけた——もちろん、サモワールを。もう一つは、妻は、店の帳場のうしろに見つけた。それは、そのどちらも決して不思議な事ではなかつた。彼は

何度となくその窓を通りすぎてサモワールを眺めるために立ち止まつた。それには何かしら彼の心をひくものがあつたちやうど後日かれの妻とした女が彼の心を引いたのと同じやうに。それはほかのサモワールとは少し違つた恰好をしてゐた。言ひかへれば この特別のサモワールはある形を持つてゐたが、ほかのサモワールには形がなかつた。ほかのはまつ直ぐに上から下へといふ風で、見る眼に面白いしやれた感じを與へるやうな胴のまがりも歪みもなかつた。これは、ギリシヤの壺のやうに、美しい形の女の腰つきのやうに丸みがあつた。ペトロツフは貴族の生れではなかつたが、どうしてかこんな物を見る眼を持つてゐた。 彼の祖父といふのが近い土地の貴族のおとしだねだつたといふ噂も事實かも知れないことだつた。

ある日彼は そのサモワールを長いこと欲してゐた後に、 どうしても手に入れたいと思ふ心を押へ切れなくなつて、その店に歩み入つた。帳場のうしろにゐた若い女は彼の求めるとほり窓に行つて、 彼の欲求の品を兩手で持ちあげて――その動作がその若い女の恰好のいい姿をひき立てて見せた――帳場の臺の上にやさしく置いた。 それは、女が腕に抱いてゐる赤ん坊を持上げるやうな動作だつた、 すくなくともイワン・ペトロツフにはさう見えた。 彼女は微笑しながらサモワールを見おろしてペトロツフが何か言ふのを待つてゐた。

「いくらです?」ペトロツフが訊いた。

若い女が値をいつた。

「すこし高いやうだね」ペトロツフが言つた。

「この半分のお値段で買へるのもありますけれど」若い女はまだ微笑しながら答へた。

「それはどうしたつて、 品がちがひます. この形を御らんなさいまし…………光澤もよろしうございます!たくさんの中でこんなのはめつたにはありません………」

「さうだね…………ほんとに、 さうだ…………」ペトロツフはさう言つたが、 サモワールの方はちつとも見てゐなか

つた。實のところ　彼は少しまぶしい氣持で、サモワールの背景を見てゐたのであつた。彼はこの時になつて、まだはつきりとではなかつたが、しつくりとした黒い眼のこの女に依つてサモワールが完全にされてゐるといふことに氣がついたのだつた。彼等がひと組の中の二つの部分であるといふ考へが彼を驚かした。さうだ、たくさんの中にも、めつたにないものだ！

「買ふことにしよう」彼はぐづぐづしながらさう言つて、ゆつくりと金入れを引き出した。

「お名前とおところを、どうぞ」

「さう…………イワン…………」

「イワン………」若い女は彼のとほりに繰りかへして同時にそれを書いた。

「おどろいたなあ！　なんて美しく俺の名を言ふんだらう！」とペトロツフは考へてゐたが、そのあひだも女は、鉛筆を手に持つて、辛抱よく待つてゐた。

「イワン………」彼女は繰り返した、彼のぼんやりした顔つきに氣がついたので　彼に手がかりを與へるために。

「さうです」彼は言つた「イワン………イワン・ステパニツチ………ステパノウイツチです………」

「イワン・ステパノウイツチ」彼女はくり返して又待つてゐた。

「ペトロツフ………」

「イワン・ステパノウイツチ・ペトロツフ…………」彼女の名のきれぎれを寄せあつめて言ひながら、又訊いた、

「おところは？」

「いいよ、」彼は急にさう言つた「私が自分で取りに來るから、ただ受取をもらつとかう」

そとに出るとペトロツフは直ぐ受取を出して讀んで見た、店の名の下に、扱ひ人アンナ・スヴエツトロフとあつた。受

取が欲しかつたのはこのためだつた、彼女が自分の名の首字だけしか書かないかも知れないと、それを心配してゐたのだが。

どんな物にしろ、氣に入るといふことは、けつきよく、それが欲しくなるといふ、困つたことになるのだ。ペトロツフは今サモワールを手に入れた。さて彼が何の氣もなくその店に踏み入つた時、自分の小さい罪もない心がもつとずうつと大きな、そして充すのにずうつと骨の折れる欲求を持ち始めやうとは思ひもかけなかつた。一人の人をいとしみ眺めるといふことは、店の窓のところに立つてるだけでは駄目なのだ、どうしても店にはいらなければならない、つまり何か買はなければならない。ペトロツフは何かしら買ふ物を考へ出してたびたびその店に買ひに行つた。二度目にいつた時は捕鼠器を買つた、實のところ彼の物置のがらくた道具の中には捕鼠器が三つもころがつてゐたのだけれど。三度目に彼は釣竿を買つた。どんな魚を釣るつもりだつたか、それは誰にも分らないことだつた、彼が一生のうちに釣をやつたのはただ夢に見たことがあるぐらゐのものだつた。そのつぎの買物は鑵切だつた。そんなやうな品物をだんだんに買ひながら、その無駄買ひのおかげで彼は女をアンナ・パヴロヴナと新しく呼ぶやうになつた。

ある日のこと、ペトロツフは强い衝動に驅られてアンナ・パヴロヴナの許に行つた。それは彼が曾てあのサモワールを愈々自分の手に入れようと決心した時と同じやうな、ただそれよりも何千倍か分らないほど强い衝動を感じたのだつた。もしもこれが利巧な巧者なフランス人がさういふ戀をしたのだつたら、その男は自分の愛するものを散歩に誘ひ出して、それから、流行の呉服店にでも器用に足を向けさして、そこで窓に飾つてある美しい女ものに彼女の眼がとまるやうに仕向けて、やがて女の口からよだれが出さうになつたところで、ねえ君、婚禮の衣裳をあつらへに這入らうよ、といふかも知れない。それがスペインの男だつたら、同じ問題を負けずに上手に運ぶだらう、あなたと私の着物をひとつトランクにつめて、一緒に長い旅行をやらうぢやありませんか?かなしいことに、わがイワン・ペトロツフはさういふ利巧なフランス

人やスペイン人の技巧を持たなかつた、彼はただ單純なロシヤ人で、正直な、時には粗野な眞似さへするやうな男だつた、ただ前にも言つたとほり、すこしは趣味を解する眼を持つてゐるだけだつた。

彼は決して忘れなかつた、彼女があのサモワールの後にゐてどんなに美しく見えたか、ちやうど一方が他の一方を引立てて、まるで一組のなかの一對のやうに見えたといふことを。彼女といふ女を考へると、さういふ畫が描き出された、その畫は月日の經つままに非常に緊張した光明あるものになつて、彼の心の額緣のなかにとてもはいり切れないほど大きな物になつてしまつて、その額緣がはち切れさうになつた。で、どうしても彼女に言はうと決心して、こんな風に言ひ出した。

「アンナ・パヴロヴナ、わたしが以前にあなたから買つたサモワールを覺えてゐるかい？」

「覺えてゐますとも、あれは大へん立派なのでしたからね。わたしはあれに別れるのが惜しいやうに思ひましたわ」

「その話で、相談に來たんだよ。あなたはあのサモワールに別れないでもいい。實はあなたに賴みに來たのだが、わたしの家に來てあのサモワールからお茶を注いでくれないだらうか？……………つまり、永久に、注いでくれないだらうか？」

彼女は默つてゐた。もしや彼女がだれかほかの男にお茶を注いでやる約束をしたのではあるまいかとペトロッフはひどく心配した。彼女はしばらく眞面目な顔をしてゐたが、いきなり笑ひ出した。

「まあ、イワン・ステパニッチ、なんてしやれた言ひ方をなさるの？　それぢや誰にだつて、とても斷り切れないわ。もちろん、あなたのとこへ行つてお茶をついで上げますわ。だけど、イワン・ステパニッチ、なぜあなたは捕鼠器を買つたの……それから釣竿だの…………鳥籠だの……………螺廻しだの、鐵切だの………それから、いろんな物………………あんな物が入用ぢやなかつたんでせう？」

ペトロッフはほゞかしさうに微笑してうなづいた。

「あなたが烏籠を買つた日を覺えていらつしやる？」アンナ・パヴロヴナは訊いた、彼がうなづくと彼女は言ひ續けた。「あの日あなたは何かおつしやる積りでしたらう？」また彼がうなづく、彼女が言ひ續ける「あたしは氣がついてゐましたよイワン・ステパニッチ。あなたが烏籠のすき間から見ていらつしやるとこを、ちやあんと見てゐましたわ。あなたはあたしを見ていらしつたのね。その時は何もおつしやらなかつたけど、でも、あなたの眼がちやあんと物を言つてましたわ……

……あなたの眼は好い眼ねえ、イワン・ステパニッチ……もつと側にいらつしやいよ、イワン・スパニッチ……」

そこでイワン・ステパニッチがもつと側に寄つていくと、彼女は兩手を伸して彼の頭を抑へて熱情を以て彼の眼に接吻した。そして笑ひながら彼女が言つた「さういふ眼つきの人は、とても女に嘘は言へないのよ。もちろん、あなたのとこへ行つてお茶を注いであげますわ！」

そんなわけで、イワン・ステパニッチは彼女を家に連れて行つてお茶を注いでもらふことにした。

まる一年のあひだアンナ・パヴロヴナはイワンのために茶をついでゐた。やがて、ある日彼女は病氣になつて、熱のため、數日間夢中でゐた、すこし落ついてる時もあつたが、ある日看護婦が、まつしろな服を着て、病人のために一杯の茶を注いだ。例のサモワールは、この時は病人の爲に不斷の用があるので、病室に置いてあつた。アンナ・パヴロヴナは看護婦が茶をつぐのを見て、その白いすがたを「死」だと思つた。

「いけない、いけない！」彼女は白い姿が茶碗を持つて近づいて來るのを見て叫んだ。「持つていつて下さい！ 飲ませないで下さい！ あたしは死ぬのはいやです……まだ、まだ死ぬのは、いやです！」

二

イワン・ペトロツフが鰥夫となつてからの習慣として――讀者も記憶してをられるとほり、この話はそこから始まる――毎日きつかり四時になると、自分所有の材木置場を出て自宅へ歸るのであつた、自宅では熱いサモワールが彼を待つてゐた。近所の人たちはペトロツフの通るのを見て時計の時間を直した（といふ話もある）ほどに彼の行動は規則正しかつた。ロシヤ人が規則正しいといふのはをかしいが、しかしペトロツフは規則正しかつた。だから、ペトロツフは變りものとされてゐた。彼が實務家だといふのではない。その方とは縁が遠い。ただ彼の規則ただしいのは沈鬱の結果から機械的になつたのに過ぎなかつた。妻が死んでから、彼はさうなつてしまつた。妻が死んだのは一年前のことだつた。

サモワールはロシヤ人の生活には大きな部分を占めてゐる。もしサモワールがなかつたら、ロシヤの小說は一つもなかつたかも知れないのだ。ことにこの特別のサモワールはペトロツフの生命にはたいした力を持つてゐた。ペトロツフが初めてそのサモワールに背いた日に彼の第二の冒險が始まつたのである。

その日、材木置場を出ると、イワン・ペトロツフは例のとほり教會のところまで歩いて來た、そこで路が二つに分れる。いつもの通りペトロツフはそこで帽子を脫いで十字を切つた。それから彼はいつもの通りでない事をやつた。一年も續けて來た習慣どほり右の方の路に曲がる代りに、彼は左に曲がつた。

一瞬間前には彼は左に曲がらうと思つてもゐなかつた。どうして左に曲がつたかといふことは彼自身に分らなかつた。今まで彼を右に引いてゐた磁石が路で左の方に位置を換へたかのやうであつた。ペトロツフ自身も自分のした事に氣がついたのは、脊中を叩かれて聞きなれた聲をきいた後だつた。

「どうして此方の方へ來ました、イワン・ステパニッチ？」

イワン・ステパニッチは困つたやうに質問者を見て、どもりながら言つた。

「……私ですか？……私は、私は散歩に來たんです………」

ペトロッフは赤面した。彼は上手に嘘が言へなかつた。しかし、本當をいひたかつたところで、どういふ譯で向うの路へ曲がらずに此方の路をやつて來たか、それは自分にだつて言へないことだつた。ただ彼は自分の不實な心をはつきり感じてゐた、一年のあひだ毎日彼のために茶を注いでくれた愛する者をいつも思ひ出させずにはゐなかつたその大事なサモワールから逃げたいやうな氣持をはつきり感じてゐたのだ。

そのつぎの角を曲がると宿屋があつた。その家に彼は罪ふかい氣持で歩いて行つた、むかしアンナ・パヴロヴナと一緒にならなかつた前のやうに。

ペトロッフはその家の入口にあつた橇と、その橇の中から下りかけた毛皮に包まれた婦人とを氣にも止めなかつた。

「さてさて、ずゐぶんお久しぶりですね」と主人は以前のなじみ客を心から歡迎した。

「小さいサモワールを」ペトロッフはきまり惡るさうに言つた「變りはありませんか、パアヴェル・テモフエヴイッチ？」

小さいサモワールが出された、たつた十五のコップがついて。それはロシヤ人には何でもないことだつた　イワン・ペトロッフは毛の外套と毛皮の脊高い帽子を脱いで、下着のボタンをはづしながら、茶器の前に腰かけた。茶をつぐ前に彼は食慾を進めるための一杯の酒を飲んだ。

彼はロシヤ人の常として砂糖の小さい塊を口にふくんで、それを味ひながら茶を飲んだ。三杯目を飲んでゐる時、彼がはいりがけに何心なく見た婦人が店にはいつて來た。婦人は部屋を見廻したが、ちよつとの間ペトロッフに眼を注いで、それから向う側の卓に行つて彼と向ひ合つて着席した。たぶんこの家に泊つてゐる客だらう、毛皮をそこに持つて來てゐなかつたから。この婦人も小さいサモワールを頼んだ。

不意にペトロッフはこの婦人の存在を強く意識し出した、眼をあげると婦人の眼が自分を見つめてゐた。その時彼はその眼の底しれぬ力に引かれて自分の體から魂がむりやりに引きちぎられてゆくやうに頼りなく感じた。やがて婦人は自

分の物となつた彼の魂を放して彼に返らせてくれた。

ペトロツフはその人を初めて見た時、彼の亡妻を想ひ出させる何かがあると思つた。顔かたちにも似てゐるところがあつた、しかしこの婦人の眼は妻のよりも大きく、目と目のあひだが離れてゐて、妻の眼が持つてゐなかつた知識と俗人らしい光を持つてゐた、それがなほ興味を深めた。とにかく表面だけも似てゐるといふ事がペトロツフの心にときめきを、ときめき以上の何かを起した、それで、彼の眼は知らず識らずに婦人の方ばかり見た、すると、彼女の眼はいつも親しさうに不思議さうに彼を見てゐて、どこかでお目にかかつたやうですね？　でも、お目にかかつたつてかからなかつたつて、どつちでも構はない、私はあなたを知つてますよ！　と言ひたさうに見えた。

つまり、その眼は何でも分る眼だつた、ペトロツフはその眼が彼の心のしんそこまで探つてゐるのを感じた。その眼つきは熱心ではあつたが、凝視してゐるのではなかつた。すこしも硬い感じはなかつたから。その眼つきは譯もなしに人の心に忍び入る柔かいヴアイオリンの音のやうに震へる抑揚を持つてゐた。彼は身うちに流れる温かみを感じた、それは初めてアンナを戀した時以來まだ一度も覺えなかつたことで、たしかに、茶を飲んだせゐではなかつた。その温かみは彼の濕つた眼から發散して光あるもやもやの雲となつて彼と婦人との中にたなびき渡り、うすい霧をすかして彼女を見てゐるやうな氣がした。女といふものはこんなにも男のたましひのぶち毀しをやらかすものか！

もつと不思議な事には、婦人もそれと同じやうな感じを經驗してゐないでもないやうにペトロツフには感じられた。一度ならず、彼は説明しがたい氣持で、立つて行つて彼女を自分の茶の席に招待しようかと思ひはしたが、しかしペトロツフはひどくはにかみやで、ただひと目見ただけでそんなにもなつかしいものに思つた未知の婦人に對して、かなりの失禮であるかも知れない眞似をするだけの勇氣を持たなかつた。

二時間ほど經つて、あはれなペトロツフはウエータアに勘定をやつていやいやながら店を出た。彼が戸口を出てしまふ

まで女の眼が後を追つて來るやうに感じられたので、出ると直ぐ彼は決心した。

「おれは明日も同じ時刻にここに來よう……………馬鹿だな、おれは、なぜあの人に口をきかなかつたものか！」

どうしてペトロッフがこの突然の決心をしたかと訊くのは、最初に何が彼をこの家にひつぱつたかと訊くのと同じ事だつた。ペトロッフはかういふ人間で、そのペトロッフにかういふ事が起つただけのことだ。もつと深く研究するものはない。

それはさうとして、家に歸ると、先刻から不思議がつてゐた女中のマルーシャに、明日はサモワールの支度をしないでもいいと言つて、彼女をなほのこと不思議がらせた。氣の毒なマルーシャは十字を切つてひとり言をいつた。

「旦那はどうしたのだらう？　惡いことでなければよいが。聖徒さま方お護り下さいまし！」

ペトロッフはその夜ひとばん目をあいてゐた。そして日光のあたらない海のやうに灰色をした女の眼が、長い睫毛をまたたきながら、暗黒の中から彼の方を見て招くやうだつた、天國へだか、それとも、地獄へだか。

ペトロッフは、素直に、それでも、仕方なしに、翌日同時刻に宿の方へ足を向けた。屹度、あの女があそこにゐると感じた。が、又ゐないかも知れないとも思つた。室内には誰もゐなかつた。彼は前日と同じ席に腰かけて、サモワールを注文し、さて待つた、待つた……やがて女の聲がした、それはあの女の聲だつた。動悸が胸のなかで鐵鎚の音のやうになつて來た。實際、あの聲は、まだ聞かなかつたが、あの眼によくつり合つてゐた。婦人はサモワールをいひつけてゐた。彼女は猫族のやうなこなしで室にはいつて來た、長い外套の茶いろの毛皮が體のリズムに波うつて彼女の全き一部分とも見えた。彼女も前日と同じ席に腰かけた。ペトロッフは魅せられた蛇みたやうにじいつと固くなつて腰かけてゐた。ちやうど昨日とすこしも違はず、彼はとても立つて行つて口をきく勇氣がなかつた。けふは、時計を見て、彼女の方が先きに食卓から立つて出ていつた。殘されたペトロッフはひどく激しい感情が胸いつぱいになつた。

三日といふものこの小さい喜劇は續けられた、四日にペトロッフは、結果はどうならうと、思ひ切つて口をきかうと決心した。その日、その人まよはせの不思議な女は來なかつた。

「たうとう期を失してしまつた、くそつ！」

彼は心で思つた「馬鹿ものがぐずぐずしてゐれば、かうなるものだ」

六時になつて彼は立ちあがり、しよげ切つた恰好で部屋を出た、鞭うたれてひもじい犬が兩脚のあひだにしつぽを垂れて行く感じで。

「ひよつと、明日……！」彼はまだすこし希望のあるやうにつぶやいた。落ちつかない氣持で自分の家の入口まで戻つて來て、帽子と外套をそとの部屋におくと、彼は食堂にはいつた。食堂は明るく灯がついて食卓の支度が出來てゐた。彼はソフアに身を投げかけて食卓の方をながめた。はじめ氣がつかなかつた事だが、まつたく不意に不思議なことを見つけ出した。彼は頭を抑へてふしぎがつた。食卓は二人分の支度がしてあつた！ 彼は起き上がつた。もう一遍見なほした。まちがひではない、二人分の支度がしてある！ 彼は、どうしても、誰も食事に呼んだ覺えはなかつた。まつたくのこと、妻が死んでから彼は一度も人を食事に招いたことはなかつたのだ。

どうしたわけかしら？ ペトロッフは起き上がつて目をこすつた。ばかされたやうな氣分で彼はマルーシヤも呼ばなかつた。もしこれが幻覺ならば、その幻覺の原因を自分だけで發見したいやうな氣持があつた。一つの考へが徐々に彼の單純な頭にはいつて來た、ばかばかしい、荒つぽい考へであつたが。……だが、そんな事はある筈がない……まつたく、ある筈がない。そんな事を考へるとは、馬鹿だ、間抜だ。……血が血管のなかを熱くなつて馳け歩いた、やがて、頭から足まで、彼はぶるぶるした。病氣かしら？ 熱病かな？ それとも、あの女が悪い呪文でもかけたものか？ 彼は三日眠らなかつたことを思ひ出した。マルーシヤに醫者を頼ませよう。だが、醫者が何になる？ 女の眼に對する藥はありはしな

い。その時、やつぱり、その眼がそこに見えた、戸口の眞中から分れた垂布のあひだに、彼の魂の底までも見透すやうに、彼を見てゐる眼が。

彼女はまるで生きてるやうだつた、そして彼は、金色に波うつ髪の毛をたつぷり見せて帽子なしでゐる女を今初めて見た。女はその髪を頭のまはりに大きく圓く蛇のやうに卷きつけて、幅びろの弓なりの眉の下には睫毛の長い眞面目な眼が微笑に溶けかけてゐた。ちやうど彼女は見えない手で垂布を抑へてゐるやうな姿で、頭だけが布のあき間から見えてゐた。

ペトロッフは突き刺されたやうに坐して、動くことも物いふことも出來なかつた。もし動いたら、そのまぼろしが消える恐れがあつた。

垂布のあひだの微笑が次第にはつきりして來た、見えない手が垂布を押しひらいて、一つの姿が駈け出して來て、ペトロッフの前に膝をついた。

「來ましたわ、イワン・ステパニッチ。あたしに會ひたいと思つていらつしつたんでせう？　だから、來ましたわ！」

ペトロッフはなんにも言はなかつた。彼は驚き切つて、呪文をかけられたやうになつてしまつた。

「會ひたいとお思ひなすつたでせう、さうぢやないの？」女はなほ言ひ續けて、手で男の膝を撫でてゐたが、やがてそこに手を載せつぱなしにした。

「ええ…………」ペトロッフはその手の接觸でやつとこさ生き返つて口をきいた。だが、どうして私の名を知つてゐます？　いつたい、どなたです、そして、どこから來ました？」

「質問はしないで頂戴ね、イワン・ステパニッチ。でも、どうして知つたかと仰つしやるのなら、小さい鳥が來て敎へてくれましたよ。あたしの名は、マリヤ・フエドロヴナとして置いてちやうだい。あたしが來てあげたのを悦んで下さらな

い？」ペトロッフはきまり悪るさうに彼の女の肩に兩手をかけた。
「あたしは大丈夫生きてますよ」マリヤ・フエドロヴナが笑つた。
「夢ぢやないかしら？………」
「目が醒めたらキスしてもいいわ………それから二人で御飯にしませうね。あたし、ひどくおなかがすいてるのよ。マルーシヤに特別おいしいお料理を拵へてくれつて頼んどきましたわ」
「あたたのおかげで、私は、三晩ねむられなかつた」ペトロッフは彼女の髪を撫でながら言つた。
「そして四晩目の今夜も眠らないのよ」マリヤ・フエドロヴナが又笑つた「かわいさうなイワン！」
「私を捨てゝいく積りぢやないでせう」ペトロフは心配さうな聲で訊いた。
「いゝえもちろん、そんな積りぢやないわ、ばかね！あたしはここに落ちつく積りよ。あたしがゐた方がいいでせう？」
その返事に、彼は女の手をとつて接吻をあびせかけた。

三

女は何者だらう？どこから來たのだらう？女の過去は？イワンは何も知らなかつた。愛撫のあひだにそれを訊かうとすると、彼女はいつも簡單に笑つて答へた。
「そんな事はどうでもいいでせう？あなたは幸福ぢやないの？幸福な人間は質問はしつこなし。あたしが天から降つて、幸福になつていらつしやいね。あたしがあなたに初めて會つた時、何かあなたに訊いて？あたしは、來ても好いか惡いかさへ訊かずに來ましたわ。ひと目であなたが好きになつたのよ、そしてあなたもあたしが好きだつてことが分りましたわ、それだけで充分ですもの、あたし、すぐ來てしまつたのよ………」

しかし、女の過去に嫉妬を感じてゐるペトロツフの男ごころは滿足しなかつた、彼はしつこく訊いた。

「だけど君は………君は、後家なのかい？………それとも………」

彼女はいつもその質問を接吻と反對とで打ち切つた。

「質問はしつこなしね。質問の結果は不幸ですわ………質問はいつでも不幸のはじめよ」

三月のあひだ二人は夫や妻のやうに過して互に幸福だつた。彼は結婚してくれと言つて幾度も頼んだが、女は耳に入れなかつた。彼女はさういふ相談はすべて不要な質問と同じ部類に入れてしまつた。

「ほら、また質問が始まるのでせう！　この儘であたしたちは幸福ぢやないの？　どういふわけであなたは結婚がなさりたいの？　それに………」

彼女はいつもそこまで來て止めにした、今こそ彼女の不思議を解きひらく鍵を與へるかも知れない何かの告白にありつけると思つてゐると、彼女は「それに………」と言つて愛人の熱心なもの問ひたげな顔を熟視して、しばらく間をおいて、じらすやうに笑ひ出すのであつた。

「それでいいわね、イワンあたしたちは幸福でさへあれば、どうでもいいでせう………ほんとに、どうだつて構はないわね」

彼女に抱擁されるとペトロツフは何もかも忘れるが、又ぢきにその不吉な「それに……」に熱心に引つ返すのであつた。その謎の言葉のうしろに何かがあると思ふと、彼の心はなやましかつた。良人から逃げたのかしら？　自由に結婚できない身なのか？　彼は激しくこのマリヤ・フエドロヴナを愛した、彼女が結婚を承知さへしてくれれば、永久に彼女は自分の物になるのだと思つた。そこへ、いつでも、例の「それに………」が出て來た！

ある夕方、變な事が起つた。冬のことであつた。地面には雪があつたが、霜は降らないので、窓はすこしも曇つてゐな

かつた。マリヤ・フエドロヴナは窓掛をおろさなかつた。彼女とイワンはサモワールの前に腰かけて、彼女は茶をついでゐた。赤い笠のランプの光がサモワールの古びた形の銅壺にはなやかに映て、マリヤ・フエドロヴナの今は赤くなつた顔の上にも照りかへした。

彼女は何か考へごとがあるやうにして腰かけて、眼には不思議な不安の色が充ちてゐた、それはイワンにも分つた。茶碗を渡す時、彼女の手が震へてゐるのに彼は氣がついた。時々、彼女は不思議な豫感を持つてゐて、それが何時もあやしいほどよく當るのを彼は知つてゐた。だが今日までこんなに一生懸命に興奮を抑へつけようとしてゐる樣子は見たことがなかつた。

その時、恐ろしい事が起つた。それは實にすばやく、實にふしぎに、實に突拍子もなく起つたことだつた。初めに拳銃の音がした、窓のガラスががちやんと割れた、何か固い鋭い物がサモワールにぶつかつた、すると、傷ついた器から水と湯氣が細く噴出し始めた。マリヤ・フエドロヴナは聲をあげて叫んだ。イワンはしつかり落ついて、ランプを吹き消してマリヤを床に伏せた。彼は暗黒の中を手さぐりで戸棚に行き自分の銃を引き出した、いつ何事が突發しても困らないやうに、それには彈丸がこめてあつた。彼が戸口から飛び出すと、今うごいて行く人影が雪の上にぼんやり見えた、その逃げてゆく人の忍び足の下にも雪が碎けた。

ペトロツフは撃つた。人影は驅けはじめた。一二度その影は銃のねらひを定めるやうに立ち止まつた。うす暗い中で二人はうち合つた。一度その男は苦痛からか、何か怒鳴つた、それから門の方へ駈け出した。イワンは追ふのを止めて戻つて來た。

彼は家へはいる前に窓の扉をすつかり閉めた。ランプをつけて見ると、マリヤ・フエドロヴナは彼が出て行つた時の通りに床に座してゐた。彼女の顔は灰のやうに蒼ざめて、眼からまだ恐怖の色が去らなかつた。

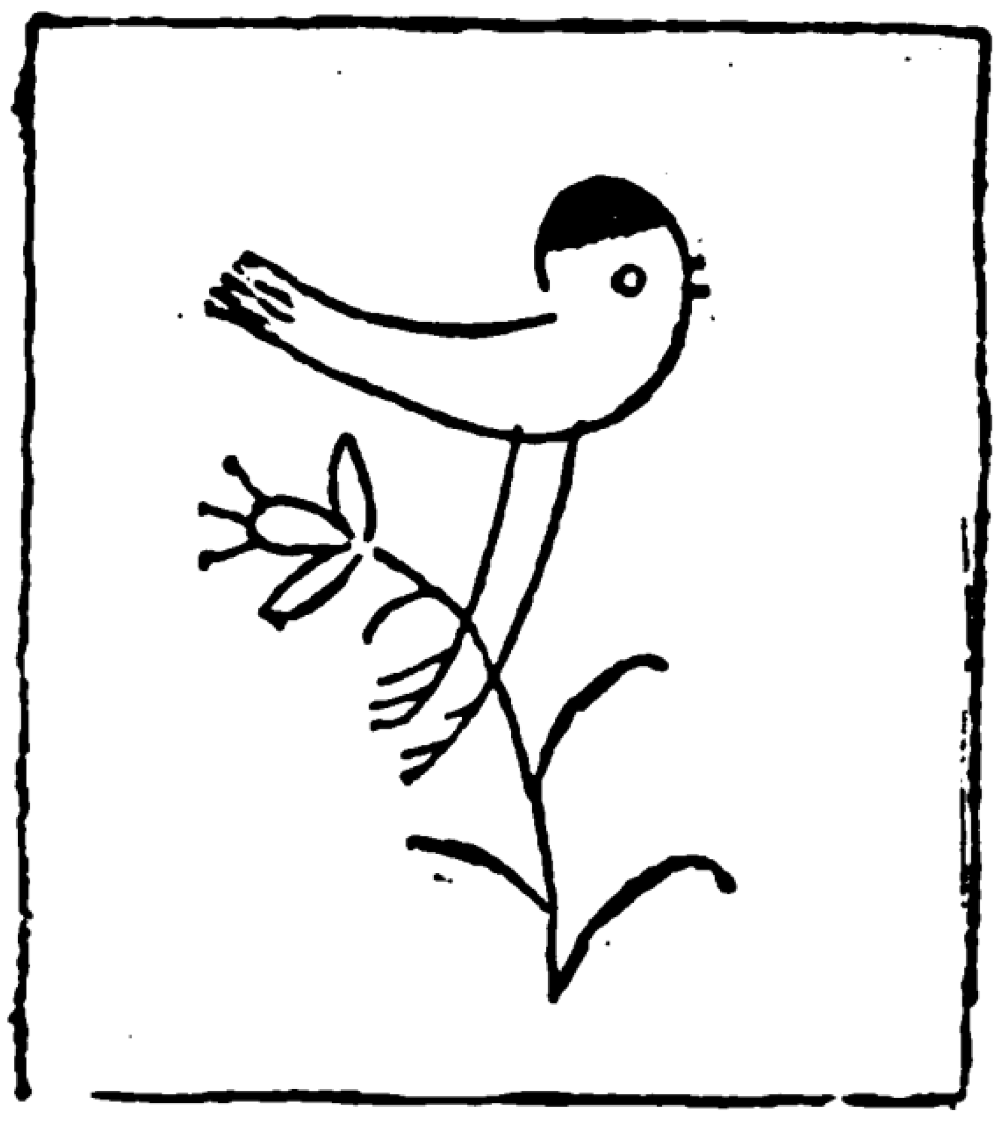
ペトロッフは今あつた事を彼女にきかした。彼女は忽ち落ちつきを回復して、イワンの心まで落ちつかせてくれた。その夜彼女は何時よりも熱い愛を以てイワンを愛した。

翌朝、彼女の姿が見えなかつた。枕の上に不思議な紙切があつて、それには、二人の愛が習慣的の抱擁や灰色の家庭生活に堕してゆくのを待つよりは、いま戀の最高潮のままで別れた方が幸福だと書いてあつた。彼があれほどまでに愛したものを、どうして彼女にそんな事が言へるだらう！

雪に被はれた庭に血の跡が見えた、それは門の方まで行つて、門外につづいた。前夜の騒ぎのあの男の血の跡だつた。

その日午後になつて、村人の噂では、見なれない男が怪我をして血だらけになつて土地の病院に來て死んだといふ話だつた。その男は死ぬ前に、すこしのあひだ自分を愛して又捨てて行つた女のことを譫語に言つてゐたといふ話だつた。

ペトロッフはその噂をきいて、何も言はなかつた。彼は家に歸つて、戸を鎖し、行囊を持つて家を出た。下着の内かくしには短銃を入れてゐた。（をはり）



戀の歌

與謝野晶子

故ありて苦しき人と故ありて樂しき人となりにけるかな

紅玉の重き沓をば穿ちたり猶は得がたき宿命と知り

西方の淨土を知らずいつとなく男の胸に天堂を置く

唯一の獅子に乘りたる獅王をば俘囚としたるその後のこと

人の世を浮べる雲と云ひなすはなまめかしかる敎へなるかな

黄金の戀の心が流すなる紅き涙よつきずあれかし

愛欲をいまだ忘れぬ月ならん光ほのかに身にも沁むかな

刺しつればまがつみの矢と思ひつれ傷の口より薔薇流れ出づ

人はいさわれは心の曲線の美しさをば悟ると云はん

心をも綾の衣がやはらかに包むを知りぬ女人と生れ

鉢の花壺の花みな息づきぬ思ふことをば休めて見れば

煙草よりうすものの如ひるがへる煙の立ちて愁はしきかな

胸の音絶えてせぬまで靜まるも亂れ心の或時の相

或時ははかなきことを何一つ知らぬになしてものを云へども

わが泣けば山河草木靡けども數の外なるかの瞳かな

宿命の人に優らず戀しては氷の息す火の涙する

かくもわれ低き机に倚りながら戀をしながら死にて行かまし

胡蝶こそ戀に似たるがめでたけれ舞へる形も死ぬる形も

曉も夕もあらず我こころ臙脂の波をたたへたるかな

唯ごとを人と云ひつつ物思ふことのみすればあてに瘦せ行く

頭をばわれ回らせどいにしへは見えず匂ひの立ち昇るのみ

消息に墨の雫の散るものかささやかなれど魔の形して

一本に思ひ餘れる紅き花あまたつけたるアマリリスかな

戀すればわれも五彩の圓光を負へる佛のここちこそすれ

春の夜の紫玉の中にやすらひて白鷺の如戀は息つく

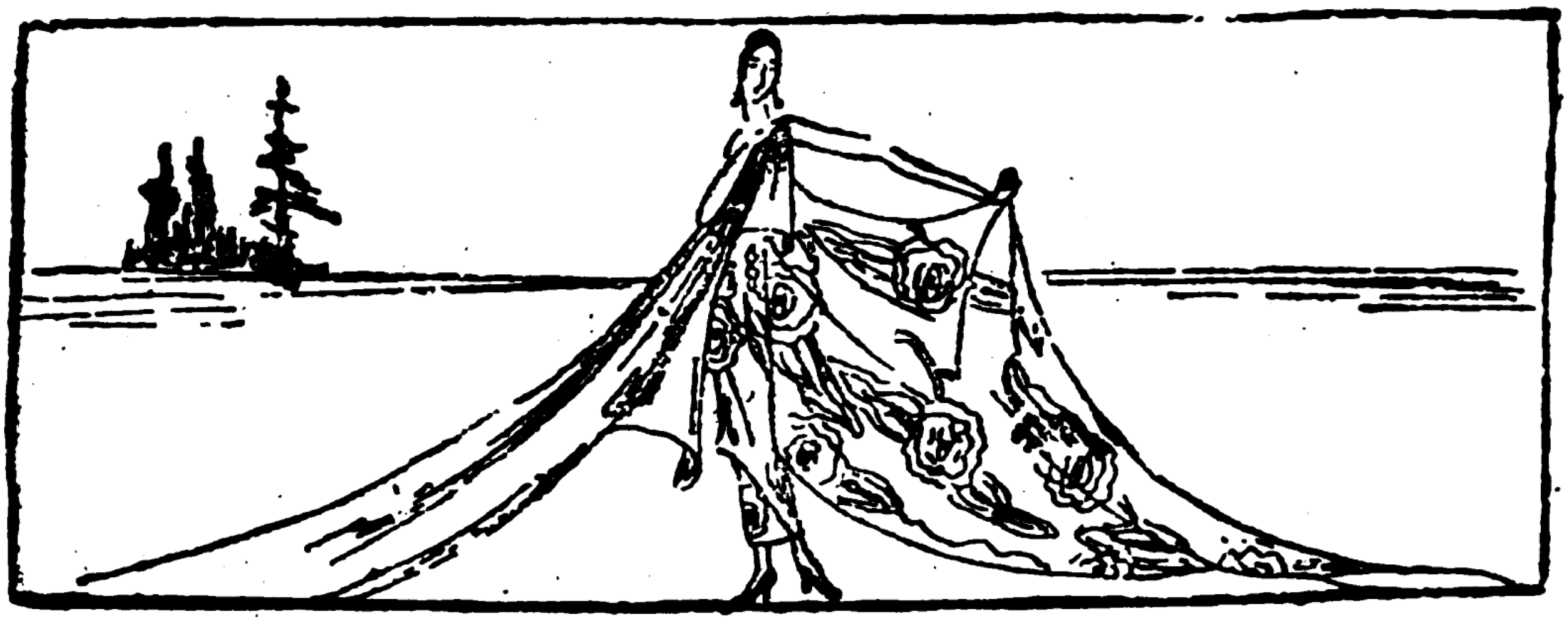
戀しきはそのかみの夢忘れんと涙流すもそのほどのこと

燃え立つも消えゆくことも目に見えずあてなる戀の焔なるかな

愁ひつつめでたきことを思ひつれその世な今になすよしもがな

昨日の榮華の屑の身なりとも思ひなさまし淋しきに過ぐ

海のごと花を落せどなほ紅し戀の心と大樹の梢



黒い部屋

(或女の話)

中西伊之助

一

わたしがふと眼をさましますと、どこからは入つて來たのか、王さんがわたしのベツトの前に坐つてゐました。

『あら、王さん……………』

わたしは、電燈の眩しさに、瞼をしばたゝきました。

『貢ちやん、今晩は………』

にたにたとほゝ笑んでゐる王さんは、すぐそこの紫檀の椅子に腰をかけるのです。

貢ちやんと云ふのは、わたしの名前になつてゐます。こゝには、わたしのやうな日本の少女が百人あまりもゐますけれど、たれも親からつけられた名前を呼ぶものはなかつたのです。そして『千字文』の中の一字をとつて、それを一人づつの名前にしてゐました。わたしはその時、丁度十六になつたばかりでした。

色のくつきりと白い、二重瞼の涼しい大きい體の王さんは、ちよつと見ると人形のやうな感じのする顔をもつてゐます。きらきらと輝く愛くるしい瞳で、ちいつとわたしを見つめながら、王さんはわたしに、突然かう云ふのです。

『黄ちやん、お前、日本へ歸りたくはないかい？………』

王さん吸ふ葉卷煙草の薄靑い煙が、ゆるく虛空に棚曳て、この部屋の夜の靜寂さを語つてゐます。その煙草の尖端には灰白くなつた灰がたまつてゐました。わたしは今の王さんの言葉に氣がつきますと、すつかり忘れてゐた郷愁が、夢心地の中から浮んで來るのでした。が、わたしはまだなんにも答へずに、ぼんやりと相手の姿を見守つてゐました。

『お前、日本へ歸りたけりあ、俺きつと歸してやるよ………』

王さんの唇が、茶黝い葉卷の端から離れると、わたしはまた王さんのゆつたりとした言葉をききました。

『そんなこと嘘でせう、王さん？……』

わたしはそれでも、半ばベッドから體を起しました。

『嘘ぢやあるもんかい。俺は嘘なんかつかないよ』

『でも、なんだか嘘のやうだわ。……王さん、あたいをからかふんでせう？』

『こんな夜中にお前、人をからかひなんぞに來る奴はないよ』

わたしは王さんの言葉にふと心づいて、そこの紫檀の卓子の上にある置時計をながめますと、丁度午前一時を少し廻つたところでした。そしてあたりはもの凄いほど森としてゐます。わたしは王さんの言葉に微かな希望をもちながら、その男の姿を薄氣味惡くも感じたのです。

『ほんとうに歸してくれるの、王さん？』

『ほんとうだとも、お前がその氣になればね。……………』

『あたい、歸りたいわ。…………』

『さうだらう。そんなら今すぐからでも歸してやるよ』

『さう、今すぐからでも歸してくれるの、王さん？』

『あゝ。…………』

『だつてこんなに遲いのに？』

『遲いからいゝんだよ』

『さう、ではあたい、すぐ用意するわ…………』

他愛のないわたしは、すぐベッドから飛び降りると、急いでナイトガウンを脫いで、着物に着替へやうとしました。

と、ぽいと葉巻を床の上へすてた王さんは、いきなり椅子から起ちあがつて、つかつかとわたしのそばへ近づくなり、ぐつとわたしの體を擁き緊めるのです。

『あつ、いやよ！ いやよ！ 王さん！』

わたしはびつくりして、體を振り拂ひながら、聲をあげて叫びました。

『…………大きい聲を立てちやいけねえよ、黃ちやん…………』

王さんは、叱りつけるやうに云つて、すぐわたしの體から手を放しました。が、わたしは、ぶるぶると慄へながら、ベツトの椽を摑んで佇つてゐるのです。

『黃ちやん、お前、俺の云ふことを肯かないね。いや肯かなくてもいゝよ、、今に嫌でも應でも肯かなくちやならねえやうになつて來るからな。は、は、は、は、』

王さんはわたし顏を見ながら、嘲るやうに笑ふのです。

『お前はまだこの邸がどんなことをするところか知らないのだからね』

から低い聲で呟きながら再び椅子に腰を下しました。

『まあいゝや、黄ちやん、お前そんなにびつくりせずにその寢間着でも着たらどうだい、日本に歸るのがいやならその寢間着を着てそのベッドの上で寢てゐるがいゝや。』

そしてポケットから寶石細工をちりばめた呟ゆい銀の莨入をとり出して、また葉卷の黝々と太いのを一本拔きました。靴の踵で、シュット燐マッチをすつて、それに火をつけます。

『お前はかうして廣々としたこの立派な部屋の中で、のうのうと寢てゐれあ申分はねえや、その上、音樂會だ、舞踏會だと云つて、毎日毎日面白をかしく暮してゐれあ、だれだつて有頂天になつてしまふよ。だがな黄ちやん、この世の中にや、とてもお前たちに分らねえ恐ろしいものがあるんだぜ、――』

王さんはあたりを見廻しながら、ひとりで呟いてゐます。わたしは王さんがなにを云つてゐるのか、皆目わかりませんでした。しかしそう云ふ王さんの顏には、なんとなく陰慘な氣が走つてゐるのに、わたしは感附かないことはなかつたのです。

二

『お前そんなにしてゐても、やつぱり日本へは歸りたいのだらうな？』

前と同じやうな調子で、王さんはまたききます。ナイトガウンをも一度着てしまつたわたしは、それでもすぐうなづいて見せました。

『そうだらう。それがあたり前だ。いくら贅澤な暮しをしてゐても、生れ故郷はだれだつて戀しいもんだ。だから俺がつ

れて歸つてやらうと云ふのぢやないか』
と、相手はわたしをなぢるやうに云ふのです。
『だがな黄ちやん、お前ここの邸をなんでもなく歸して貰えるものと思つてゐたら大違ひだぜ、お前それをよく呑みこんで置かなきあ、俺だつて生命がけでお前をつれて逃げる甲斐がねえ、——お前は知らねえだらうがな、ここはお前、Y河と云ふすばらしく大きい河のまん中に建つてゐる家だ。』
『…………』
わたしは、自分の耳を疑ふやうに、默つて相手の方へ顏を向けました。
『しかしそんなことはまあどうでもいいとして』
王さんはそれどころではないと云ふやうな容子を見せながら、
『黄ちやん、お前の顏はほんたうにすばらしい色艷をしてゐるね………』
と、わたしの顏を見守つて、つかぬことに感歎します。
王さん、ここのお邸、ほんたうに河のまん中にあるの？』
わたしは、先刻のこわかつたことも忘れて、王さんのそばへ寄つたのです。
『そうさこの邸は大きい河のまん中にあるのだよ、だが、いくら河のまん中でもそれはいいさ、こんな邸ぐらゐは俺がなんでもなくつれて逃げてやるからな。それより黄ちやん、お前は最初ここへ來た時より、まるで見違へるほど太つたぜ、もうあれから五年近くもなるからね、なんしろ早いものさ』
そして相手はまたつくづくとわたしをながめるのです。
『大きい河のまん中つて、王さん、河なんかどこにも見えないぢやないの…………』

わたしは、王さんの云ふことが、不思議でたまらないので、かうくり返してきくのです。

『うん、それあ見えつこはねえよ、見えるやうな下手な眞似はしてゐねえ――だが黄ちやん、もうこれでお前の體はたいしたものさ、この太つた腕を見ねえな、この中にある血の一滴がもう幾兩つてすばらしい値になつてゐるんだぜ。……』

王さんはそう云ひながら、そつとわたしの腕にさわらうとします。わたしはまたはつとしてとび退きました。すると相手はにつこりしながら、

『お前、まだ俺がおつかねえかい？　なあに俺をそんなにおつかながるにあああたらねえよ。この邸にやな、まだまだおつかねえものがあるんだぜ。』

と、からかふやうに云ひます。

『まだまだおつかないものつて、王さんなによ…………？』

わたしは輕い氣持で遠くからききました。

『さあ、そのおつかねえものを、少しばかりお前に見せてやらうよ、そしたらこんな邸にあ一刻だつてゐられなくならあな、王さん早くあたいをつれて逃げてくれつてね……』

『どこにそんなものがあるのよ、王さん…………』

わたしは、相手の言葉にむしろ少女らしい好奇心を呼び起したのでした。

『それあこの邸にだよ。』

『この邸にそんなものがあるの王さん？』

『さうよ、すぐそこにあらあな』

『どこに？』

『そこに………』

王さんは、顎でベッドの方を指し示します。

『噓！』

わたしは、やつぱりからかはれてゐるのだらうと思つて叫びました。

『は、は、は、………』

王さんは妙に無氣味な小聲で笑つて、消えた葉卷に火をつけました。

『お前たちやあ罪のねえもんさ。だが考へて見れあ無理もねえな、お前たちやあまるで國王のお姬さまみたいな暮しをしてゐるんだから――かうなると會社はどう見ても世界一の腕さ、洋鬼だつてこいつにあ敵はねえつてからな………』

艶々と太つた王さんの大きい顏から、幅の廣いほゝ笑みが、にやにやとわたしの體にからみついて來ます。わたしはそのほほ笑みを全身に感じた時、王さんは日本人でないと思はれました。

『黃ちやん、お前その上へちよつとあがつてみな………』

王さんは、なにか氣づいたやうに、椅子から起ちあがります。わたしはまたびつくりとしました。

『は、は、は、お前をどうもするんぢやねえよ。俺、お前に面白いことをして見せてやらうてえのさ――さあ、お前そのベッドに寢てみなよ』

と相手はにこにこしながら自分は入口の扉の際に立つのでした。

『なにをするのよ、王さん？』

『まあなんでもいゝさ、それあ面白くてたまらねえことだよ』

『いやよ、』

「いやだ——なぜいやだい？」
「だつてまたあたいの手なんか握るから………」
「は、は、は、もうお前の手なんか握らねえさ、——だからそのベッドの上にあがつてみな」——
「あがつてどうするのさ、」
「唯あがつてゐれあいゝだよ。そしたら俺お前に面白いものを見せてやる」
「面白いものつて、なによ王さん？」
「まあなんでもいゝさ、それあ面白くてたまらねえことだよ」
「きつと面白いこと？」
「きつとだよ——」
「ベッドの上で寝てゐれあいゝの？」
「あゝ、その上でぢいつとしてゐれあいゝんだ。いゝかい？　寅ちやん………」
「…………………」
その時、王さんは、もう部屋にはゐませんでした。

三

部屋は、またもとの靜かさにかへつてしまひました。
わたしは、べつに大きい好奇心も感じずに、王さんの云ふ通り、そこにあつたベッドに再び横たわつたのです、そして、ただ相手が、いやらしい悪戯をするのではないかと云ふことばかり氣づかつてゐたのです。

一分、二分、三分―あたりは、またなにごともありません。椅子の上の置時計は、その夜の靜謐をきざんで行きます。わたしは、案の條王さんにからかはれるのだらうと思つてみました。が、それでもぢつと息を殺しながら白いカバアに包まれた毛布に抱きついてゐたのです。

と、いつの間にか、わたしは妙な錯覺が感ぜられて來るのでした。たしかに、それはわたしの錯覺であらうと考へたのです。――と云ふのは、この部屋が、しだいに一方へ傾いて行くやうに思はれるのです。寢てゐるわたしの體が、音もなく、足もとからスウーッと逆さ立ちになつて行くやうに思はれるのです。足の方が天井の方へあがつて、頭が地底にめりこんで行くやうな氣がされて來るのです。それに伴つて、急にふらふらと眩暈が感じられて來ます。そしてそれが刻々に角度を增して行くのです。と、もうわたしの體がかなりな角度を作つて、頭を下方にしながら仰臥してゐるのだと云ふことを、はつきりと意識しました。――不思議にもわたしの體がずるずる前方に辷りこんで行くではありませんか！　わたしは驚いて跳ね起きました。そして聲を立てようとしました瞬間、ぴたりと、再びベッドはもとの水平にかへつてしまひました。

『まあ！　ほ、ほ、ほ、ほ、………』

わたしは、思はず笑つたのです。すると、すぐそこへ王さんが、そつとは入つて來ました。

『おい黃ちやん、あんまり大きい聲で笑つちやいけないよ………』

王さんは、今自分のは入つて來た扉の方を見返つて云ひました。

『面白いわね、王さん』

『お前面白いかい、え、黃ちやん？』

『えゝ、面白いわ、まるでこのベッド、お船のやうになつてゐるわね』

『うむ、船のやうだね』

『なぜこんなにお船のやうになつてゐるんでせう王さん？　やつぱりこれも運動するやうにできてゐるのかしら――あたいちつとも知らなかつたわ』

『さあ、そのわけがお前にすつかり解つてしまへば俺と一緒に逃げられんだがね――しかし黄ちやんそんなにこの部屋が面白ければ、俺もつと面白い部屋を見せてやらうか？』

『えゝ見せて頂戴。ほんとうにあたい面白いわ……』

『う、ふ、ふ、ふ、ふ、こいつは全く罪がねえ、ぢやあ一つも、つと面白いところへつれて行つてやらうよ……』

『えゝ、行くわ、あたい。さあ早くつれて行つて頂戴よ、王さん……』

わたしはベッドから離れて、椅子にかけてゐる王さんの膝を押へました。王さんの呟いたやうに、其の頃のわたしはなんて罪のない少女でしたらう。しかし、そんなにわたしを罪もなく疑ひない。小鳥のやうな氣分にしてゐたのはその五年間のわたしの生活でした。わたしはそれをかいつまんでお話しいたします。

四

わたしは、この五ケ年をまるで美しく眩ぐるしい幻のやうに暮して來ました。十一の時、今の王さんが、わたしの故郷のある港町の丸頭近くに現はれて、何氣なく貰つた一つの菓子を、その場でたべてから、わたしはもうそこの人ではありませんでした。そしてわたしがはつきりとした意識を呼び起した頃には、わたしはこゝの邸の、ある奇麗な部屋の寢臺の上に眠つてゐたのでした。

わたしはこゝがどこの國であるかもわかりません。また、この邸がなにをするところかも判らう筈はありません。ただ

わたしの周圍にゐる人々が、みんな××人であることが、その言葉や服裝でわかるばかりでした。

わたしは最初のうちこそ、ホームシックを起して、ただ泣いてばかりゐました。が、月日のたつに從つて、それもいつしか忘れてしまひました。それは忘れる筈なのです。忘れなければならないやうに、わたしたちは周圍の生活から仕向けられてきたのでした。わたしの生れた家は、どちらかと云へば貧しく暮してゐたのです。そして夢の中にこの邸へつれられて來たわたしは、もう以前とはにてもつかぬ贅澤な生活をすることが出來るやうになつてゐたのです。

邸は、たしかに一萬坪近くの敷地をもつてゐる大きいものでした。そこには、百人あまりの少女たちが養はれてゐます。たいていは七つ八つから、十六七くらゐの　いたいけさかりのものばかりでした。そして彼女たちの幼いものには、一人一人の部屋を與へられて、五人に一人づつの保姆がついてゐました。

常盤樹がいつも綠を滴らしてゐる庭園には、始終見飽きないやうにいろいろと取り替へられる動物が、いつもあたりに遊んでゐます。築山の陰には小川が流れて、少女たちの遊び相手になる小魚も泳いでゐます。そして花畑には、四季に美しい花が咲きみだれてゐるのです。廣い運動場には、終日遊びくらしても興のつきないほど、種々な機械が備へつけられてありました。が、邸のまはりには、蒼々とした深い濠がとりめぐつて、その向ふは、もう目を遮るほど高い石崖になつてゐます。だからたれ一人として、この邸より外に、この世の中を知らないのでした。いえ、たれ一人として、それを知りたがるものはないと云つてもいゝくらゐでした。それほど、わたしたちの生活には、興味もあれば、變化もあつたのです。

晴々とした日が、幾日もつづきます。わたしたちは、その廣い庭園や運動場に出まして、それからそれと、面白い遊戯に耽けるのです。日本のやうに、雨がだらだらと續いては、暗い、欝陶しい天氣なぞはありません。がもし、雨天の日などになりますと、それこそ百人あまりの少女たちは、各々の寮に開かれる家庭會で、さんざ振舞はれる御馳走に舌鼓を打つ

のでした。で、彼女たちは、いつも空をみあげて、家庭會の開かれることを、どんなに待ち望んでゐたことでせう？そして、ともすると雨の日などに發作するホームシックは、そのために却つて癒やされるくらゐだつたのでした。

夕暮は、わたしたちにとつて、ホームシックの容器だと云つてもいゝのです。が、その夕暮こそ、一日のうちで、わたしたちには最もたのしくなければならないやうに拵へられてありました。そのたのしみの一つは、晩餐であります。その二つは、晩餐後に開かれる『夜の會』でした。わたしたちは、その晩餐を、どのくらゐ待ち望んでゐたでせう？ そしてそれから開かれる『夜の會』に、どのくらゐあこがれわたつてゐたことでせう？

わたしたちの朝のテーブルは、輕いオートミイルに、牛乳や鷄卵などがついてゐました。晝も、少量の洋食を與へられます。が、晩餐は、多くは日本食で、一日のうちでは、一番テーブルの賑やかな時なのです。食後には、水々しい果物や、甘いお菓子などが渡ります。終日、快活な運動に遊び暮らした少女たちが、その晩餐を待ちこがれるのは、鹿が谷間の水を慕ふやうなものでありました。

午後四時になると、湖のやうな大理石の浴槽には、温い湯が湛へられてゐます。汗ばんだ少女の肌は、その湯に浸されると活々した明るい血が躍つて來ます。少女たちは、林檎のやうになつた體に、フランネルのガウンをまとひます。そして、赤々と輝いた電燈の下で、全身が食慾そのもののやうになつた少女たちは、たのしい晩餐の箸をとるのでした。

晩餐は六時までに終ることになつてゐます。そしてそこへ『夜の會』がやつてくるのです。

六時から八時の就寢時間までは、音樂會や、舞踊會や、歌劇會や、活動寫眞會などが、次々と、交る交るに催されます。少女たちの魂は、そうした美しい藝術の世界にたゞ他愛もなくあこがれておどつてゐるのでした。こんな日課を毎日くり返してゐる少女たちは夜の床につきますと、まるで媚藥でも嗅いだやうに、甘い甘い睡に落ちて了ふのです。

わたしたちの生活は、生きながらのパラダイスでした。たれ一人として、過去を考へようとはしませんでした。將來を

思はうとはしませんでした。彼女たちの過去の追憶は、むしろ今の生活に對する美しい陶醉を打ち消す隙間風です。現在に魅惑されてゐるものに、どうして將來を考へる餘裕がありませう。まして、この生活が、なんのための生活であらうなどゝは、たれが思ひ及びませう？

五

わたしたちに與へられてある部屋は、きらびやかなものでした。それは洋漢折衷とでも申しませうか部屋の廣さは六疊あまり。あります。そこには、厚い、彩りの鮮かな絨壇が敷きつめてあります。紫檀の机と椅子が、いつも埃つかずに輝いてゐます。椅子には、緞子の蒲團が敷いてゐました。明るい窓には、絳紗の帷が垂れて、夜は、羊革を敷いた机の上に、緑の置電燈が光ります。

が、これらのものは、楊貴姫や西施を描いた畫のある壁際に並べられて、部屋のまん中には、一間もあらうと思はれる青く塗つた鐵製の寢臺が、床にしつかりと取りつけてありました。ですから、この部屋は、部屋と云ふよりも、寢室であると云つた方が適當なのです。云ふまでもなく、寢臺には、深々と分厚い駱駝の毛布が備へつけてありました。

その部屋には、たいてい幾年も同じところにゐるものはありません。六ケ月に一度とか、一年に一度は、きつと變ることになつてゐます。そして十五六年になりますと、寢臺の形も少しく變つたものを與へられます。それはなんの必要からであるかは、たれも知りませんでした。この邸にゐるものは、たれ一人として健康でないものはありませんでした。が、十五六にもなりますと、いつのまにか、自然に身體が衰弱して來るのであります。血の氣の多い頬は次第に青ざめて、時々強い腦貧血などを起します。そしてしばらくの中には、見違へるほど憔悴した姿になるのです。すると、この邸の一隅にある病院では、醫者が診察をしてくれます。そして入院させることもありますが、また、轉地をさせるのだと云つて、それ

つきり姿が見えなくなることもあります。それをわたしたちが保姆などにききますと、彼女たちはみんな體が全快して、お嫁入りをしたのだと云つてきかせてくれるのでした。『十五六になると、あんたたちは、お嫁入りがしたいから、それできつと病氣になるのですよ』

保姆はにつこりとして、わたしたちに云ひきかせるのが例になつてゐました。わたしたちは、その言葉を少しも疑ひませんでした。そして自分たちも、お嫁に行きたくなると、そんな病氣になるものであらうと考へてゐるのでした。

『あなたも、病氣になれば、きつとお嫁入りができますよ………』

それでわたしたちの口には そんな病氣になることを 心から願つてゐる少女もあつたのです。

疑ひや恐怖と云ふものを知らない ただ美しい夢の國に、わたしたちは生きてゐたのです。

六

王さんに伴はれて來たわたしは、一つの部屋の中には入りました。

部屋はどこからともなく、薄明りがさしてゐます。しかしその光線は、天井と四壁に弱々しく吸收されて、中に佇つてゐる王さんの體や、わたしのナイトガウンの上へ、眠たそうに息づいてゐます。天井や、四方の壁は、眞黑い章魚墨色で塗りこめられて、わたしの瞳孔も 自然と收縮されさうな氣がします。微茫とした幽靜が、この部屋の支配調となつてゐるのです。

部屋の温度は、人間の肌に感ぜられるやうな、デリカシイな味をもつてゐました。それが自分の體温と飽和して、わたしの全身の肉が、この部屋の中へとろとろと溶けこんで行くのでした。漂緲とした、蠱惑的な官覺が、自然とわたしの魂を捕へてきます。そしてわたしの魂は、しだい〱に現實から遠ざかつて、今まで、好奇心に粘つてゐた心が、不知下識

のうちに、靜かな落つきを與へられてくるのです。わたしは、もう咳ばらひ一つするのさへ、なんだか惜しいやうな氣にもなります。――この部屋の氣分は、わたしたち人間に、なにか一つの作用をする役目をもつてゐるらしいのです。日常の生活に受けてゐる慌しい刺戟を、この部屋が悉く掃除して そこから起る人間のあらゆる意識と感情を、みんな中和させてしまふ、それは魂の浴室だつたのかも知れません……。

しばらくのあひだに、わたしは眞空のやうな人間になつてゐたのでした。

王さんは、默々としてゐます。そして二人の姿は、まだこの黒い部屋の中に、虚然として佇つてゐるのです。わたしの官能は、全く痲痺したのでせうか、それともまた、その悉くが拘整されて 虚無の境には入つたのでせうか？ 白痴になつたのでせうか？ わたしはもうこの地上に 喜怒哀樂を感ずる人間のたぐひではなくなつたのです。

『…………』

王さんは、なにかしらつぶやきました。しかしわたしは、その言葉の意味がまるでわかりませんでした。

『…………』

わたしは、默つて王さんの顔を見あげました。

相手は、片足を高くあげて、自分の足に手をふれました。そしてそこから、なにかを取り出しました。わたしは、虚脱患者のやうな顔をして、その容子をながめてゐるのです。

王さんは、手になにか握つてゐます。そしてそれを、すぐそこの部屋の隅のところにあてたやうでした。と 前の黒い壁が カアテンのやうにするすると 天井へあがつてしまひました。そしてわたしたちの前には、黒紗に掩はれた、一幅の異様な白堊畫のやうなものが現はれたのです。

王さんは もう全く口を利きませんでした。わたしは、黒紗を透して、夢のやうにその畫面を凝視するのです。が、わ

たしは　まだその畫面が　なんであるかは、解らないのでした。王さんは、靜かに、黒紗のヴエルを卷きあげました。わたしは、やや確かに　その畫面をながめることができたのです。

わたしが畫面だと思つたのが、わたしの視官の錯覺でした。そしてそれは、わたしたちの日常使ひ慣れてゐるベッドが、その壁に並行して、逆さまに懸垂されてゐるのでした。カバアに包まれた分厚い毛布なども　そつくりそれなりで　ぴつたりとベッドに釘着けのやうになつてゐます。四圍の黑い壁の中で、ベッドだけが　くつきりと白く浮塑りになつて、そこばかりが粉粉で描いた畫のやうに見えてゐるのです。

ベッドは、丁度わたしぐらゐの體軀の人が寢てゐるやうに、まん中がふくらんでゐました。が、床から二三尺ばかりも上にある、その枕許は、白い布が垂れて、それが床を粥めてゐます。王さんは、その白い布の前へ、わたしをつれて行きました。わたしの瞳孔は、ただその前にある物象を映す玻璃玉に過ぎませんでした。

王さんは、默々として、白い布をまくりあげるのです……　……。

懸垂してゐるベッドの上には、たしかに人間がゐたのです。そしてその怪奇な考案が眼に映つても、もうわたしにはそれを考へる意識能力をもつてはゐませんでした。まして、この地上の人間が、かうしてさへもなほ『利益』と云ふものを得たいのだと云ふ、その神秘的にまで達してゐる心持が、その時わたしに、どうして知ることができませう？……　……。

七

わたしは、王さんにつれられて、再びわたしの部屋に歸つて來たのです。

三十分ばかり後になりました。

わたしは、まるで魔睡藥から醒めたやうに、わたしの横たはつてゐたベッドからころび落ちました。その時、わたしは

はつきりと、先刻見たものにたいする、わたしの意識と感情が、生々しく回復して來るのでした。

『王さん、早く、早くさ、王さん、あたいをつれて逃げて下さいよう！』

わたしは、王さんの體へとびかかりながら叫びました。

『黄ちやん、お前、やつとわかつたかい？』

相手の聲には、得意の調子が湧きあがつてゐます。

『あたい、……あたい、……』

わたしは、恐怖のために、言葉が自由にならなかつたのです。

『それでお前もまあ生命拾ひをしたと云ふもんだ。だがね黄ちやん、世の中にあ、どこへ行つたつてちやんとあんな黒い部屋があるんだぜ。――ここのは眼の前でかうして見せて貰へるから造作はねえやうなもんだがな』

『王さん、早く……』

『うむ、早くつれて逃げてくれと云ふんだらう。わかつたよ、今俺がつれて逃げてやらうよ……』

王さんは、かう云ひながら、また不意に兩腕に強い力をこめて、わたしの體をベッドの上へ無理に押しつけようとするのです。わたしは再び驚きに跳びあがりました。

『いやよ！　いやよ！　王さあん、あたいこのベッド！』

『あ、は、は、は、黄ちやん、心配要らねえ、俺はお前をあの黒い部屋に落しはしねえからな――お前は、丁度あしたの晩さ、今晩見せてやつたのは、あれあすぐ隣室の女の奴さ』

氣の遠くなつてゐるわたしの耳に、そんな聲が聞えるのでした。



出世五人男

宇野浩二

赤木阿珂丸が工藤久太郎と知合ひになつて間もない或日のこと。

「赤木さん、赤木さん！」と工藤が調子づいた聲で呼んだ。「赤木さん、ちよつと來ませんか、私の部屋へ。珍客が來てゐるんです、あなたのよく御存じの人なんです。」

「えゝ、伺ひませう、すぐに、」と阿珂丸は例に依つて、押入の中から寢たままで答へた。その時彼は珍しく物思ひに耽つてゐたのであつた、それは思ひがけない人間のためであつた。思ひがけない人間――それは田川の家で見かけた入井花子に似た女の事である。似た女――さうだ、さう云ふより外ないからである。何故といつて、彼女が花子であることは阿珂丸が阿珂丸であるやうに疑ひないと思へるのに、先方では自分は花子ぢやない、光子といふものだ、入井なんて家の名前は知らないといつて取合はないからである。が、それは唯言葉の上だけのことで、初めて阿珂丸と顔を見合はした瞬間の、彼が驚いたと同じやうに彼女の方でも驚いた樣子と、

それから、それから……田川がステッキを取りに行つてゐる一分間の間に、あの叩くやうな早さで飛びついた接吻と、近いうちに一度ちかぢかといつた言葉の意味と――それ等は、今は默つて、默つて……ね、いづれ二人でお目にかゝつた時、いろ／＼詳しい話をしませう、といふ心ではなかつただらうか。それにしても、あれからもう一週間……二週間近くも經つのに、阿珂丸がそんなに首を長くして待つてゐる蓬萊館にまで、ふつつりとして彼女の消息はないのである。では、あれは一時の間に合せに、彼女が自分を瞞したんだらうか、あのまゝ逃げたんだらうか、自分からも、それから田川からも、あれ切り姿を晦ましたんぢやないだらうか。――と思ふと、彼は何事をおいても早速中澁谷の田川のところへ、樣子をうかゞひに出かけようと、幾度押入の中から飛び出したか知れなかつた。が、思ひなほすと、彼は三十分でも留守にしてもしやその間に花子――でない光子が訪問して來て、彼女と會ふ機會を逸することを恐れた。どういふつもりで彼女は田川の姿がちよつと見えなかつた間に、飛びついて接吻したんだらう？……それから彼はその時の接吻について、出來るだけはつきり思ひ出さうと骨折つた、あの時彼女の唇が觸つたかと思はれる、自分と自分の口の左の端の邊がむづ／＼して來るのを感じた程。……そして、その時、廊下の外から工藤の呼ぶ聲が起つたのであつた。

「御免なさい、」と阿珂丸が何氣なく工藤の部屋に這入つて行くと、

「やあ、暫く」といふ別な人間の聲に驚かされた。それはもう半年以上も會はなかつた反子半四郎であつた。半四郎はしばらく見なかつたうちに、色もめつきり白くなり、耳たぶの邊も透きとほるやうに桃色に見えて、如何にも役者らしい風采になつてゐた。

「しばらくだね、」と阿珂丸は半四郎の方に向つていつてから、そこへ便所にでも行つてゐたと見えて、部屋の中へ這入つて來た工藤の顏と見比べるやうにして、「どうして、君たちは知つてるの？」

「だつて、」と半四郎が目につく眞白な齒をあらはしながら、「學校で一緒なんだもの」といつた。

「なアんだ、」と阿珂丸は工藤の方を見て、「君は變な人だな、演劇協會に這入つてたんですか、それをちつともいはなかつたぢやありませんか？」

「えへゝゝ」と工藤は持前のおどけたやうな笑ひ方で答へたゞけであつた。

反子牛四郎は風采が變つたやうに、いふことにも、態度にも以前から思ふと可成の變化があるやうに見られた。現に、以前彼が阿珂丸に對した態度は誰が見てもひどく下手であつたが、今は對等どころか、多少の優越感さへ持つてゐるやうに見えた。それも無理のないところがあつた。何故といつて、三年前、彼が阿珂丸を見た時は、それは凡庸な數多の學生の中で阿珂丸だけが一人離れて、巖のやうに豪さうに見えた。彼は外の學生たちが毎日同じ時間に教室に顏を出して、幼稚園の子供たちのやうに喋つてゐる仲間入をしないで、稀に彗星のやうに現はれるだけで、そして現はれると、いつも人々から離れて、天才のやうに窓の外の景色を瞑想するやうな目付で睨んでゐた。實際は、そんな風にしてゐる彼が、どのやうに豪いのであるか、それは誰にも分らなかつたが、見たところ、文學といふやうな神秘な學問の冠は、落ちるとすれば外の者ではなく彼の頭の上に落ちさうに思はれた。さう思つたのは牛四郎だけではなかつた。自分たちはあやふやな夢に乘せられて文學者になるつもりで來たのではあるが、――おゝ、あの男を見よ、文學はあゝいふ男でなければその鍵を握ることが出來ないのだらう、だが凡庸な自分たちは――外の何十人かの學生たちは總てこんな風に考へて前途の不安に襲はれない譯には行かなかつた。そして、實をいふと、反子牛四郎もさういふ不安から、自分はせめて文學に關係のある演劇で身を立てやうと考へることに傾いたのであつた。彼は三年前の學校の青葉の窓で、赤木に話しかけて「H――博士の演藝學校へ這入りたいと思ふんだが……」といつた時、「這入つたらいゝぢやないか、こんな腐り文科にゐるよりか。文科なんて、君、中々大變なものだよ。それに君は芝居の方がうまいぢやないか。よし給へ、よし給へ、こんな學校」と相手の阿珂丸が低い、然し如何にも權威ある口調でいつた言葉を長い間忘れることが出來なかつた。そして、その時、彼は決心し

たのであつた。

だが、彼は演藝學校に這入ると共に、今迄の學校の方も止めなかつた、少なくとも午前の時間は缺かさず今迄の學校に顔を出し、そして、午後から演藝學校の方に出るやうにしてゐた。文科の學校と違つて、演藝學校の方では學生は少なかつたし、習ふことは、朗讀とか、演出とか、すべて張合のある科目が多かつたし、而も半四郎は忽ち教師からも、同級生からも有望な役者であると認められた。さういはれて見ると、文學科と違つて、彼にも非常に自信があつた、自然熱心にもなつた。數回、彼はその演藝學校の中にある試演用の舞臺に上つたことがあつたが、その度に彼が最も好成績であつた。考へて見ると、俳優としての必要條件であるところの、容貌といひ、恰服どいひ、音聲といひ、すべての點で彼は合格してゐた。

ところが、赤木阿珂丸はどうだつたらう。彼は半四郎に「よし給へ、よし給へ、こんな學校、」といつて輕蔑してゐるだけあつて、二つの學校を掛持してゐる半四郎よりも、更に比べ物にならぬ位に學校に顔を出さなかつたのはいゝが、といつて、一向その外のことでも頭角を現さうとする模樣がなかつた。現に、その幼稚園の子供のやうに毎日教室に出て來て、賑かにお喋りしてゐる學生たちの中に、却つて時々雜誌などに詩を發表したり、六號活字で組まれるものではあるが、論文のやうなものを出したり、稀には小說を發表したりするものさへある中に、赤木阿珂丸はどこにもその名前を見せなかつた。「どうして君は何にも書かないの、君なんか屹度いゝものが書けるだらうと思ふが……」と或時久しぶりで反子が赤木と顔を合はした時いつた。「ふん、」と赤木は鼻で答へた。「つまらないよ。……文學なんか。」

その時も、反子は未だこの男はやつぱり何處かえたいの知れないところがある、と心で感心してゐた、――この、頭ごなしに、人を輕蔑してかゝる氣合ひが。しかし、その後又月日が經つて、考へて見ると、この男が世間を輕蔑してゐるやうに、世間でも次第にこの男を輕蔑し出してゐるのを、反子は知ると共に、彼自身はたとへ仲間うちでとはいひながら、

然し演藝學校の試演會の時などは、隨分色んな人たちが招待されて見に來てゐるのだ、さういふ中で、次第に認められつつあることを感じると、彼もいつとなく赤木を輕蔑し始めたのであつた。初めのうちは、然し、それは無意識であつた、それが誰から傳るはとなしに、赤木が此頃文學が厭になつて、畫の稽古を始めてゐるといふことを聞いた時から、反子ははつきりと赤木を輕蔑する氣になつたのであつた。

「君は相變らず學校の方は顏を出してゐるかい？」と阿珂丸は昔からの反子に對すると同じ、一段上から物をいふ調子でいつた。

「行つてるよ、時々、」と反子は然し昔と變つて、彼も亦相手を見下げるやうな調子で答へた。「君は相變らずちつとも出てないのかい？　いつその事、君のやうに出ないんだつたら、やめてしまつた方がいゝぢやないか？」

この逆襲には赤木も稍々たぢろいたやうに見えたが、負けてはならぬと思つたので、

「うん、やめてしまはうと思つてるんだが、」といつた。

「もつとも、君なんか學校の方は出來るんだらうから、試驗さへ受けりやいゝんだから、」と反子は多少皮肉の意味をこめていつた。

「さういへば、もうぼつ〳〵試驗の時期だね、」と赤木は受太刀になつた形で、「君は論文なんかどうするんだ？」と聞いて見た。

「そんなものは誰かに書いてもらふさ。それとも何か芝居のことに就いてゞも書くよ、」と反子は極めて何でもなささうに答へた、「芝居のことを書いたら、遠山先生が見るだらうから、演藝學校の關係でまさか落第點はつけはしないよ。それに、僕は兎に角君なんかと違つて、學校にだつて顏だけはどうにか出してゐるからね、出席點といふやつがあるから大丈夫だよ。」

「出席點かね、」と赤木は嘆息して、「妙な學校だよ、あんな大人の學校でゐて、（小學校だつてそんな馬鹿なことはしないよ。）出席するといふことが點になるんだからね……」といひながら、さすがに彼も何といふことなく心細い氣になつた。

その時傍から工藤が口を出して、

「驚きましたよ、赤木さん、」と彼は全く驚いたかのやうな、大袈裟な表情をしながら、「この間學校で何だつたかの話の時にあなたの名前が出ると、半子君が同級で、知つてるといふんでせう。私は驚きましたよ。私はあなたを畫かきだとばかり思つてゐたんですからね。學生だとすると、赤木さん、あなたは全く怠け者ですな。」

「さうさう、君はこの頃畫をやつてるんだつてね、」とその時又反子が見下げたやうにいつた。「もう文學は斷念したのかい？」

「文學なんてつまらないからね、此方から愛想をつかしたんだよ、」と赤木も反抗的な口調でいつた。が、つゞいて、心の中で「ところが、その次の畫にも近頃ぼつ〳〵飽きが來て、今では役者の眞似を…………」と思つた時、彼は忽ち口の中で苦いものを嚙み當てたやうな思に襲はれた。「俺は近頃工藤におだてられて、いゝ氣になつて役者の眞似などしてゐるが、その工藤は反子の同僚だつたんだな。して見ると、俺も反子も同じ水平線に立つてゐるばかりか、彼は本氣になつてやつてゐるんだし、俺は半分冗談でやつてゐるんだから、俺の方が遙かに及ばないかも知れないぞ！」

斯う思つて、反子の方を横目で睨むと、彼はいつの間にこんな落着きを得て來たものだらう、最早や誰が見ても、如何にも一人前の俳優がそこに坐つてゐると思へるやうに坐つてゐるのである。そして、その傍に坐つてゐる赤木を、誰が俳優とも、畫家とも、無論文學者とも、さうだ無の外の何者とも見るだらう！　そこで、先程からの反子との問答を一一思出して見ると悉く赤木の方が受け太刀で、負かされてゐることが否めなかつた。赤木阿珂丸は甚だ不機嫌になつて來た。

が、彼の不機嫌の反對に、反子は傍にゐる赤木の存在を忘れてしまつたやうな形で、

「兎に角、ね、君、」と彼は工藤に向つて先からの話のつゞきらしく、いふには、「今はもう時期の問題なんだから、賴むよ。その上は君の骨折を賴むよ。何しろさうなると、事務の上からいつて、君が柱なんだからね。」

「安心し給へ、」と工藤は應じた。そして如何にも俳優らしい仕草で、どんと胸を叩いて見せて、「萬事は僕の胸にあるよ、」と昂然としていつた。

それから未だしばらく演藝學校に關した話を交した後で、「ぢやあ、失敬するよ、」と反子はいつて立上つた。そこでやつと赤木の存在に氣がついたやうに、「赤木君、さよなら、」といつて、何か天鵞絨のやうなてか〳〵光つた中折帽を輕く頭の上に載せるやうに被つて、部屋を出て行つた。工藤は、——彼は滅多に來客を玄關まで送つて行つたことのない男だが、珍しく反子を玄關に見送つて、やがて自分の部屋に、そこに氣を拔かれたやうに元の姿勢のままでぼんやり坐つてゐる赤木の傍に歸つて來た時も、何かなしに上機嫌であつた。

「反子半四郎……か。あれや確に名優になりますよ、」と彼はそこで獨言のやうに喋り出した。「確に有望な俳優です。それに人間もしつかりしてゐる。まつたく、人間も出來てゐる。ねえ、赤木さん、あなたはさうは思ひませんか。」

「さうですね……」つまり、どうですか、といふやうな答をした。

が、工藤はこの際傍にゐるものが赤木でなくても、誰でもよかつた。又彼の言葉に對する答が、白といはれても、又その反對の黑と應じられても、そんな事を頓着してゐない位、何事かの思に有頂天になつてゐるやうに見えた。「赤木さん、あなたもしつかりやつて下さい、今に我々は花々しく旗を上げることになりますから。その時はあなたも屹度連名に加へますから、ね、しつかりやつて下さい。あなたは俳優として參加しますか、それとも背景畫家として働いてくれますか。」

「どうしたんです、一體、學校の方は？　ストライキでも起さうといふんですか。」

「ストライキ? いや、そんな職工のやうな不體裁なものぢやありません、」と工藤は見えを切つていつた。「今、私たちの學校では新人と舊人との戰が起りかかつてゐるのです。」

「それで、君は新人組ですか、舊人組ですか?」と阿珂丸は持前の眞面目とも冗談ともつかない質問を放ち出した。

「無論、新人側です、反子もさうです、」と工藤は答へた。

「赤木さん、どちら?」とその時廊下に女中の聲が起つた。「赤木さん、お客樣よ。」

「誰だい、僕んとこかい」と赤木は入口の方を振り向いて、不審さうに聞返した。

「名前をおつしやらないの、奇麗な女の方よ、」といひ捨てて、女中は行つてしまつた。

「何をいつてやがるんだい、」と赤木は今はもう全然本氣にしないで、しかし誰だらう、俺をたづねて來るなんて、まさか借金取ぢやあるまいな、などと思ひながら、工藤の部屋に別れを告げて、例の『運動場』の床を半分滑走戲で馳けながら、玄關への階段を下りて行つた

豈はからんや、玄關の土間に立つてゐたのは、入井の花子であつた。赤木は何といふことなしに、有頂天な氣持になつて、

「おゝ、花子さんでしたか、」といふと、

「いえ、わたし、光子です、」と相手はきつとした顏になつていつた。

「あ、光子さんでしたか、」と阿珂丸は出鼻を叩かれたやうに、一瞬間たぢろいた形になつたが、「まあ、お上りなさい。まあ、どうぞ、」といそ〳〵と客の前に立つて、階段を上つて行つた。女中が一人と、何番かの客が一人と、不思議さうな目附で自分たちを見てゐるのも、彼には少しも厭な氣がしなかつたばかりか、どうだい、俺にもこんな美人の客があるんだぞ、といふ得意さで一ぱいだつた。

さうして、光子を部屋の中に通して、さし向ひに坐つてからも、阿珂丸は思ひがけなさと、嬉しさとに度を失つてしまつた。相手の顔が何か眩しいものゝやうに、正視することが出來ないやうな思であつた。といつて、一分間も默つてゐることは一層堪えられなかつたので、彼は口から出任せに、少しの間もおかないで話しつゞけるやうにした。

「をかしいな、さうですかね、冗談ぢやないでせうな、雜司ヶ谷の裏通りの、入井といふ奇麗なお上さんのゐる素人下宿を知りませんかね。そこにお上さんの好に當る人でね、やつぱりあなたのやうな奇麗な娘さんなんですよ、あなたにそつくりなんです、そつくりといつたつて、そつくりもそつくりでないも、どうも、おなじ人のやうな氣がするんですがね……」

「花子さん、花子さんとあなたがよく仰やるのは、その方のことなの？」と相手は冷淡な、然し馴々しい口調でいつた。「しかし、わたし知りませんよ、第一、わたしには叔母なんてなくつてよ。さうさう一人あるけど、それは朝鮮にゐますわ、もう十年以上も前から行つてるのよ。」

「その、聲から、口の動かし方から……をかしいな、花子さんそつくりだがな。やつぱり花子さんだが、違ひますかね、どうも狐につまされたやうな氣がするな。言やしませんから、ね、本當のことをいつて下さい、ね、花子さん。」

「また花子さんだなんて……」と相手は少し不機嫌な顔色になつて來て、「わたし、氣味が惡いわ。わたし、もうそんなことばつかり仰しやるんだつたら、歸るわ。あなた、その人、あなたの好きな人だつたの、さうでせう、それでそんな變なことをいふんでせう。わたしもう氣味が惡いから、いやだわ。」

「御免なさい、御免なさい、もういひませんから、」と赤木はいつた。が、そのまゝ默りこんでしまふのは苦しいので、

「どうして、あなたは田川君を御存じなんです。田川君はあなたのことを天才だといつてますよ。あなたは何をおやりになるんです、音樂ですか、繪ですか、それとも文學ですか。あなたも田川君が好きなんですか？」

「まあ、驚いた！」と光子はまつたく驚いたやうに叫んだ。「隨分おしやべりね。それにお廻りさんのやうだわ。

「どうしてどす？

「だつて、いろんなことをお聞きになるんですもの、」と光子はその大きな目に一ぱいの媚を含まして、「わたし、そんな色んなこと聞く方きらひ！　何にも知らない同志だつてお附合ひ出來るぢやありませんか？」

その時分からぽつ〳〵平靜な氣持にかへつて來た阿珂丸は、もしこの女が花子でなかつたら、「實はわたしは入井の花子だが、此間田川の家では少し差支へがあつたから空とぼけたのだが、それにこれからも譯があつて隱しておきたいから、その事を含んでゐてくれ、」と頼みにでも來る外に、どんな用事があつて自分を尋ねて來たのだらう、などと思ひながら、ちら〳〵と相手の顔に目をやると、彼女は相變らず落着き切つたやうに、ぺつちやんことした恰好に坐つてゐた。入井の花子にもそんな所が見えないではなかつたが、今目の前に坐つてゐる女は、一層何ともいへぬ色つぽい樣子をしてゐるのが、ふとこの間久しぶりで田川の家で逢つた時に、この女が突然鬼のやうに飛びついて來て、彼の唇の端に接吻したことを思ひ出された。「俺に惚れてるのかな？」と阿珂丸は考へて、その自惚れた考に密かに赤くなつた。そして、「まさか……」とその考へを打消すと共に、自分がこの間うちからそんなにもこの女の來るのを待ちこがれたことや、待ちながらこの女はどうして田川と知るやうになつたのだらうと考へたことや、さて田川とこの女とはどんな關係に——勿論、たゞの關係ではないだらう、と今も改めて考へると、彼は何が何やら見當がつかなくなつて來た。しかし、その間にも、

「田川君はどうしてます？」

「二三日會はないから知りませんわ。」

「二三日會はなかつたんですか。ぢやお不斷は始終ですか？」

「そら、又お廻りさんが始まつたわ。」

といつた風に、阿珂丸は一刻も會話を途切らさないやうにした。

「だけど、本當に、不斷は何をしてらつしやるんです？」と阿珂丸は一頻り笑つた後で、ちよつと眞顔になつて尋ねた。

「ぢやあなたは何してゐらつしやるの？」と光子は聞きかへした。

「僕ですか……僕はそれや遊んでますよ。」

「ぢやあ、わたしも遊んでるわ。」

「お家は田川君の近所なんですか。お父さんやお母さんと御一緒？」

「もう、わたし　いやだわ。」と光子はいつた。「わたし、それよりあなたにお願ひ……といふ程ぢやないんだけど、ちよつと相談があつて來ましたの。」

「僕に相談つて、可笑しいな。田川君は？……だけど、無論、僕は光榮ですよ、斯うして毎日退屈で困つてゐるから、出來ることなら何でもしますよ。」

「田川さん、わたし嫌ひなの」と光子は云つた。「だけどわたし外に誰も知らないんですもの。わたしね、赤木さん、女優になりたいと思ふの。それで、あなたの知つてるいゝ傳手があつたら紹介してほしいと思つて伺ひましたの。」

「それやいゝ！」と阿珂丸は嬉しさうな聲で叫んだ。

「だけど」と光子はあわてゝ抑へるやうに「だけど、このこと、田川さんに内所よ、わたしがあなたのとこへ來たことも……」

「いや、それや分つてますよ、分つてますよ。」と彼は二つ返事で答へた。「なアる程、さうですか、田川の、つまりあなたの天才といふのは女優ですか。女優はいゝですよ。あなたなら屹度いゝよ。で、女優ならどこが望みなんです？」と彼はいつの間にかその方のことなら何處でも顔きゝだぞといふやうな調子になつて、「然し、今のところで、あなたのやうな、

新しく女優にならうといふ人に最も適當なところといへば　H――博士の演藝協會學校の外にはないでせうな。」

「だつて、わたしのやうなものが這入れますか知ら？」とさすがに彼女も幾分ためらふやうな調子でいつた。

「いや　大丈夫です。さうなると、田川ぢや間に合はないが、僕が口をきけや大丈夫ですよ。」

その時、入口の扉の外でコツ〳〵と叩する音がして、「赤木さん、赤木さん！」と呼ぶ工藤の聲が起つた。阿珂丸は眞赤になつた。

彼が赤くなつたのも無理はなかつた。もつとも光子との話に夢中になつてゐたので、阿珂丸自身もそこ迄は氣がつかなかつたが、工藤は先程から彼の部屋の外で立聞きして居たのである。彼は初のうちは阿珂丸の部屋に珍しく親しさうな女客の聲がするので、物好きと燒餅とからそつと立聞きして見たところが、話が彼に最も關係の深い芝居のことになつたので、一層熱心に扉の口に耳を當てた譯であつた。而もそれが自分たちの演藝協會學校の話にまで移つて行つたので、彼は我を忘れて、今迄耳をつけてゐたその阿珂丸の扉を叩いたのである。

阿珂丸は今の話を工藤に聞かれたかと思つて、赤くなつた次の瞬間には、女客のあるのを知りながら、いつになく改めて叩などをして訪問して來た工藤に腹が立つた。が、更に次の瞬間には、この際工藤の機嫌を惡くしてはならぬと氣がついたので、

「お這入り。」と答へて、そこへ現れた工藤を迎へながら、「丁度いゝ所へ來られた、今、事によつたら君を呼びに行かうかと思つてたところなんです。」といつた。

「それはどういふ譯なんです？」と工藤は自分が立聞きした話を表面上無視しながら、坐り際に、「や御免なさい。」と光子の方に向つて、彼一流の役者くさい挨拶をした。「私は又あんまり靜かなので、もうお客様はお歸りになつたんだと思つて……それで、いつもの又稽古をしようかと思ひましてね。」

「この方はね、」とそこで阿珂丸は光子を指さしながら、工藤に向つて紹介して、「僕の友達の友達で……」といつたが、名字が分らないので「入井花……入井光子さん……」

と、傍から光子が、「入井ぢやなくつてよ、大江よ、」といつた。

「は、お好きになつたんですか、」と工藤が早合點して合槌をうつた。

「さうぢやないんですよ、」と光子は呆れた顔をして、工藤の方を見ながらいつた。

「それでね、」と阿珂丸が引取つて、「今度女優になりたいといつて、僕んとこへ相談に……」

「はゝあ、成る程、」と工藤は例のわざとらしい書生放れのした言葉で、忽ち阿珂丸を無視して光子の方に向ひながら、「今までその方の何か經驗――いや、芝居でなくても、音樂とか、踊とか、さういふものをおやりになつたことがありますか？……ない。はゝあ。お幾つです？……いや、さう笑はないで、眞面目なお話で……はゝあ、二十一、成る程。それで、お父さんやお母さんの御承諾は……？」

「わたし……もう、いや！」と光子は大袈裟に身體を振つて、袂を半分顔に當てゝ叫んだ。

「ほゝお！　その表情はいゝな、」と工藤は眞面目な顔附でいつた。「いや、あなたは少し勉強したら、確にいゝ女優さんになれますよ。……ところで、お家はどちらです？――ほお、さういふことを尋ねてもいけませんか。まあ、いゝ。ところで、演藝協會學校ですね、それや、私の手から何したら明日からでもすぐに這入れますが、今、ちよつとお待ちなさい、その學校で二週間としないうちに一騷動が起るのです。そのことは先程ちよつと赤木さんにお話したんですが、さうすると、新人と舊人とが分裂して、といふよりも舊い人たちを振り落して、我々新人が遠山さん――御存知でせう、遠山孤雪さんです、あの人はもう近いうちに博士になる人ですからね、あの人を頭に戴いて、今日本一だといはれてゐる明石喜代子を中心にして、旗を擧げることになつてゐるのです。もう内々はその劇團の名前まで實は定まつてゐるんです

がね、顧問とか、賛助員とか、幹事とかはもう選定されてゐるんです。無論今の文壇劇壇のちやき〳〵ばかりです。それがもう長いことはない、二週間か十日のうちに發表されますからそしたら、その方へお世話しませう。實は赤木さんも――赤木さんは實に有望な役者なんですよ、私は實はお世話するつもりでゐるんです。』

いふ迄もなく、これは當の赤木自身にも初耳のことなので、少なからず驚かされた。が、それに就いて、彼が口を挾む餘裕さへ與へられなかつた。

「ねえ、赤木さん」と工藤はちよつと赤木の方に向つて、それから光子と二人に等分に話しかけるやうにしながら「毎日私たちは個人的にこゝの物干臺を稽古場にして、稽古をしてゐるんですよ。赤木さんはこれで頑固なところがあるからなア。中々自分で斯うと思つたら、我々がいくら忠告したつて、我流でどん〳〵やる人ですよ。しかしまつたく巧いもんだ。どうです、赤木さん、ぼつ〳〵始めませうか。そして早速みね……子さんでしたか、あゝ、みつ子さん、……光子さんにも稽古かた〴〵、幸ひテクラの役を持つてもらつて、今日は少し先の方をやつて見ようぢやありませんか？」

赤木はそれにも抵抗することが出來なかつた。實際は、彼は反子が工藤の同僚で、やがてはその反子などと一緒になつて、無論、さうなつたら反子より彼の方へいゝ役がつく譯はないのであるから、愈々本場の舞臺に立つなどといふことは、夢にも思つてゐなかつたし、又よし舞臺に立つことはあつても、反子と一緒にすることは、彼と彼とのこれ迄のいきさつからの彼の自尊心が許さなかつた。而も今日初めて反子と工藤との關係を聞いた時から、彼は實は此頃少しづつ興味を持ちかけてゐたことなのではあるが、もう工藤とそんな稽古をするのは止さうと思つてさへゐたのである。彼は彼の折角斯うして思ひがけなく得たところの、玉であるやうな氣がする光子を、工藤に紹介したことさへ後悔する氣持になつてゐた。それにも拘らず、彼はいつもながらの、工藤の調子に釣り込まれねばならなかつた。

「光子さん、あなたはまあ見てるだけのとでもいゝから、入らつしやい、」と彼は彼女に幾分遠慮するやうな口調でいつた。

「えゝ、拜見するわ。」と然し彼女は一向開口しない樣子であつた。

前にも述べたことがある通り、蓬萊館の二階の屋根に取附けられてある物干臺といふのは、洗濯を職業にしてゐる家の屋根にだけしか見られないやうな、大きなものであつた。多分それを造つた當時の主人の考では、それを物干臺としてよりも、納凉臺としてより多く計畫したものに違ひなかつた、それにも拘らず形式は徹頭徹尾物干臺であつた。が、何にしても今の主人の代になつてからは、その何れにも殆ど使用されたことがないといつてよかつた、そして今工藤久太郎が誰もが思ひがけない、風變りな用途に當てゝゐる次第である。

今、いつの時でもさうするやうに、工藤の部屋にある粗末な卓子を一脚と、椅子を一脚と、それから阿珂丸所有の寫生に使ふ三脚とを、一階の屋根から二階の屋根の、その物干臺に通じてゐる丈夫な、だが船の中にあるやうな窮屈な鐵梯子に依つて運んでから、久太郎、阿珂丸、最後に光子といふ順で、大屋根の上に上つて行つた。そこからは、東を望むと、神田區の半分の屋根の海が心地よく目の下に見渡された代りに、家そのものが阪道の中途に位置してゐた關係から、西の方の眺望は甚だ不都合であつた。何故といつて、蓬萊館以西の同じ通に面してゐる家々の二階の窓から、次第上りに順々の高さで、恰も雛段的の棧敷からのやうに見下ろされるのと、往來の阪道の或位置からすると、同じ高さに於いて見せ物のやうに眺められることとであつた。

「これや困つたな。」と初めての日阿珂丸は久四郎に誘はれて、なアに俺だつて彼等がやることだ、役者の眞似くらゐ出來ないことはあるまい、と思ひながら、この物干臺に上つた時、この光景に接して、思はず嘆息して叫んだことがある。

「これでいゝんですよ。」とその時久四郎がいつた。「我々中途から役者になつた者に一番必要なのは度胸といふものなんですよ、それが斯ういふ稽古場で馴れておくと、いつの間にか、自然に出來ますから。」

もつとも、舊芝居のやうに、そんなに飛んだり跳ねたりする身振がなかつたから、未だ幾分か目立つことから免れた

が、然し物干臺そのものが人目を引く上に、そこに卓子を持ち出して芝居の會話をするのであるから、往來では初め子供たちが見つけて立ち止り、やがて自轉車を片手に持つた小僧が立ち、學生が足を止め、そしていつの間にか一かたまりの群集になつた。さては又雛段的の棧敷を形造つてゐる家々の二階の窓からは、近い家は窓を細目に開け、遠い所はおほつぴらに開け、そこに幾つもの人間の目が悉くこちらに向つてそゝがれるのである。が、大體に於いて彼等は勇敢であつた。

工藤は熱心に光子に今彼等が選定して稽古してゐる脚本の筋を説明して、「つまりこの芝居は男二人と女一人とだけしか出て來ない芝居なんです、だから丁度あなたが來てくれてもつて來いなんです。一幕物の癖に長い芝居なんです、初の男二人の會話だけで、一時間以上かゝるんですからね。あなた、この本を持つてゝ、讀みながらやつて下さい、今日からもう女優になつたといふ心持でね。それぢやあ、あなたのテクラといふ役は、赤木さんの役のアドルフの細君なんですよ。さあ、赤木さん、あなたは細君の寫眞を引裂いて、卓子の下に捨てゝから、椅子に腰を下して、ネクタイをいぢつたり、髪の毛を撫でたり、カフスを直したりして待つてゐるんです。……さう……どうも、あなたの藝は少し輕過ぎるな、實際はそれでいゝんですよ、だけどどうも芝居味がない。あなたはそれでいゝといふけれど、……まあいゝや。ぢやあ、もう一ぺんやつて下さい。さあ、そこで光子さん、あなたは他所から歸つて來たところで、赤木さんの傍へ行つて、少しわざとらしく御機嫌をとるやうにするんですよ、そして接吻するんです、本當にしちやいけませんよ。あッ、うまい、あなたは接吻し馴れてますね……」

「まあ、いや！」と光子は叫んだ。「それから、どうするんですのよ？」

「あゝ、それからですか、それから矢張り出來るだけ快活な、御機嫌をとるやうな聲で、――ちよつと本を見て下さい、――『歸つて來てよ、にいさま、どうして？』と甘へるやうにいふんです。」

「歸つて來てよ、にいさま、どうして？」と光子はもうすつかり俳優の調子でいつた。

「あの……」と肝腎の赤木はどもつてしまつた、何故といつて、彼は今の接吻の場で、忽ちまたいつかの田川の家で、彼女に接吻された時のことを思ひ出したから。そして工藤が、「光子さん、あなたは接吻し馴れてますね、」といつた言葉が當つてゐるやうに思へたので、譯もなく嫉妬に似た氣持に搔き亂されてゐたのだつた。

「あの……ちやありませんよ、赤木さん、」と工藤が注意した。「あなたは細君の仕方に半分氣を呑まれた形で、然し強いて反抗する氣持で、冗談のやうに――さあ、そこから白です。」

「ふん、何か惡い事をして來たので、てれ隱しに接吻なぞするんだらう、」とそこで阿珂丸も臺本の方を見ながら、白をいつた。

「うまい、うまい！」と工藤は手を打つて叫んだ。「ちやあ、初めからもう一ぺんやつて下さい！」

そこで、改めて赤木だけが卓子の前に腰かけて、ネクタイを直したり、髪の毛を撫でたりしてゐるところへ、光子が傍に行つて、接吻しようとして抱きついた瞬間、

「おーい！」と思ひがけなく、往來の阪道の群集の中から、一人の男の叫ぶ聲が起つた。で、こちらの三人がびつくりしてその方に目をやると、群集の中で一と際目立つ大男で、殊に頭の毛を長くしてゐるので、それが田川大次郎だ、と赤木と光子には直ぐに分つたところの、一人の男が立つてゐた。

「おーい、光子さーん！」と大次郎は群集の注意の目などには少しも頓着しないで、彼等の中から三四歩前に進んで出て、兩手をひろげながら叫んだ。

「わたし、困るわ、わたし、困るわ、」とそれを見て、光子は物干臺の上で、工藤と赤木の間に隱れるやうに身をすくめた。

（つゞく）

編輯局より皆さんへ

□吹きすさぶ風も影をひそめ、三春の行楽を野に、山にいつぱい浴びるシイズンが到來しました。冬は緊襟の感を人に迫り、春は偸安の懐をわれ〳〵に開き始めます。人生の歓喜、憂悶、希望悉くこの新芽のきざす春が象徴するとせば戒むべき季です。

□しかし人生の飛躍、生命の飛躍を感ずるのは夏でもなく、冬でもなくそれは奈く彼岸過ぎの花咲く頃、私どもが陽光に春伸びしつつある時です。

□「女性改造」はいよ〳〵躍進の新装成り、グン〳〵と押しに押して行けるやうになりました。三月號は賣切れの好景氣を呈し、五月號以降に於いては、取材の鮮味、内容の充實において一頭地を抽んづるものがあることを豫め御誓ひいたします。

□白鳥氏は「鳳凰天に搏つ」の續稿に全努力を傾到しておられます。一回は一回と氏の苦心のあとが看取されることと思ひます。

□昨年五月開催の本誌文藝講演會は、曾つて我國に前例ない盛況を見たことは讀者諸姉の未だお記憶に新たなことと思ひます。第二回は昨秋擧行するつもりでしたが、あの震災のために延引しましたが、いよ〳〵第二回を四月二十日(日曜)の慶應義塾大ホールで擧行する事になりました。今回は滿員にならぬ前に豫め御申込下さることをお願ひします。

□應募原稿は論文でも、隨筆でも創作でも差支へありません。しかし成るべく二十枚以下のものであつて欲しい。ただ或る特別の記錄のやうなものである場合には紙數には決して制限を附しません。五月號より讀者欄を擴張いたしますからドシドシ御投稿下さい。

□そして本誌の計畫、希望に對しても遠慮のないところを註文若くは批評して下さることは望ましいことです。

□西條八十さんが渡佛されます。彼地からいろいろ面白い消息が戴けることになつています。

□「改造社大正大震火災誌」は印刷の不備でその發行が四月末日になつたことをお詫びしておきます。

□帝都は既に梅謝して、桃花が見頃です。編輯局も今日は暖かで微かな眠魔さへ訪づれて來ます。バラックの災民もこのあたたかさを喜んでいます。

女性改造定價表

冊數	價定	郵稅
壹冊	五十錢	郵稅五厘
六冊	參圓	郵稅共
十二冊	六圓	郵稅共

註文の注意

◇特大號其他定價變更に依る前金拂込み不足に不足金の拂込みを待つて發送す
◇註文は凡て前金とす
◇前金切れの際は發送を停止す
◇外國發送の註文は一部郵稅貳拾錢を申受く(但し支那を除く)
◇凡ては依託せず
◇郵便切手代用は一割増のこと
◇拂込みは振替によらるるが最も便利なり

本誌廣告料 一頁 一等 百圓 二等 七拾圓

◎本社廣告取次所 博報堂 弘盛舍 日本電報通信社

大正十三年三月十三日印刷納本
大正十三年四月一日發行
(四月號特價七十錢)

編輯兼發行兼印刷者 東京市芝區愛宕下町一ノ一 平田貫一郎

印刷所 東京市牛込區加賀町一ノ一 株式會社 秀英舍

發行所 東京市芝區愛宕下町一ノ一 改造社
電話高輪四九九三
振替東京八四〇二

文學博士 桑田芳藏著

ヴントの民族心理學

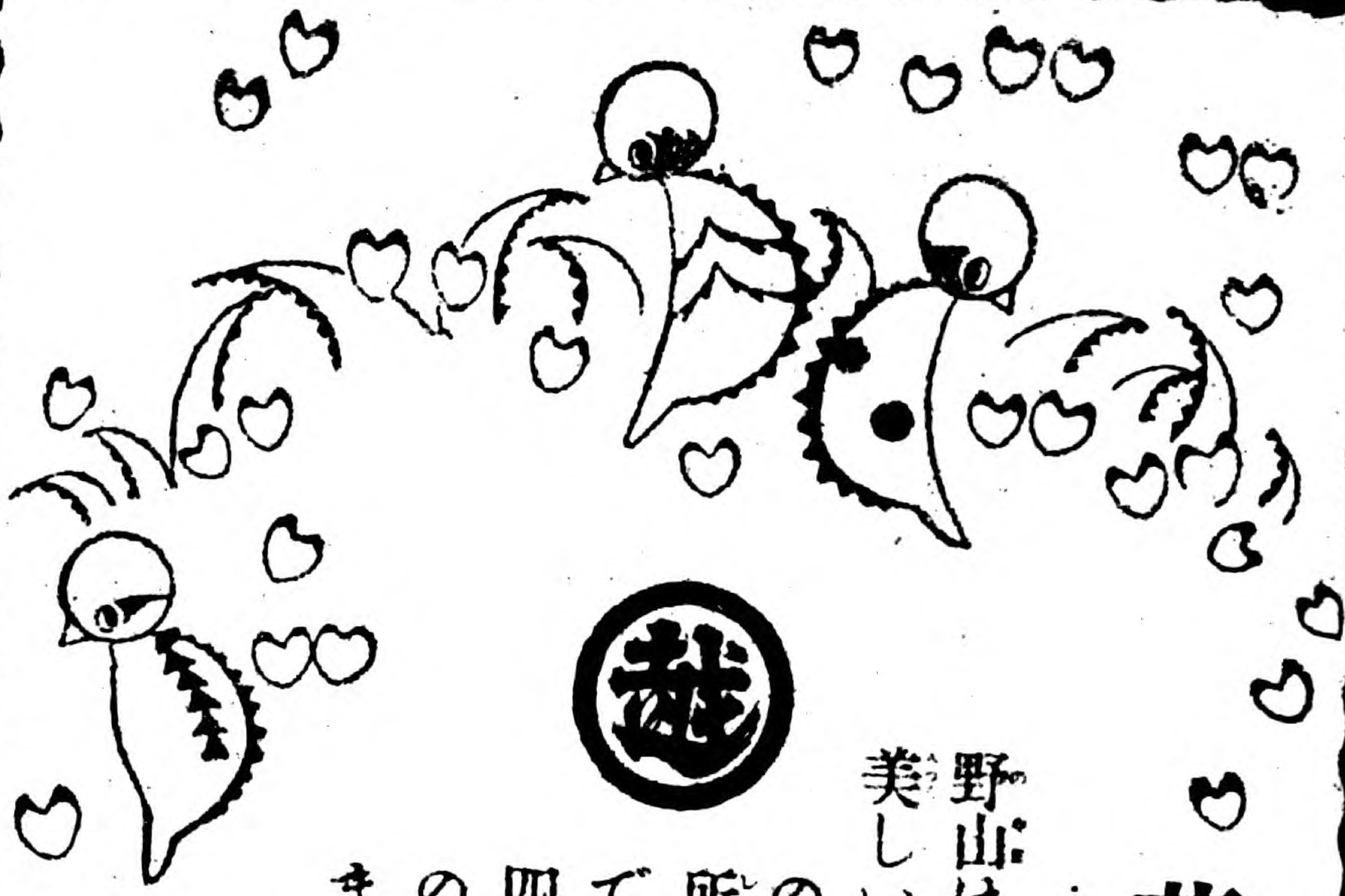
定價參圓五十錢
送料廿一錢

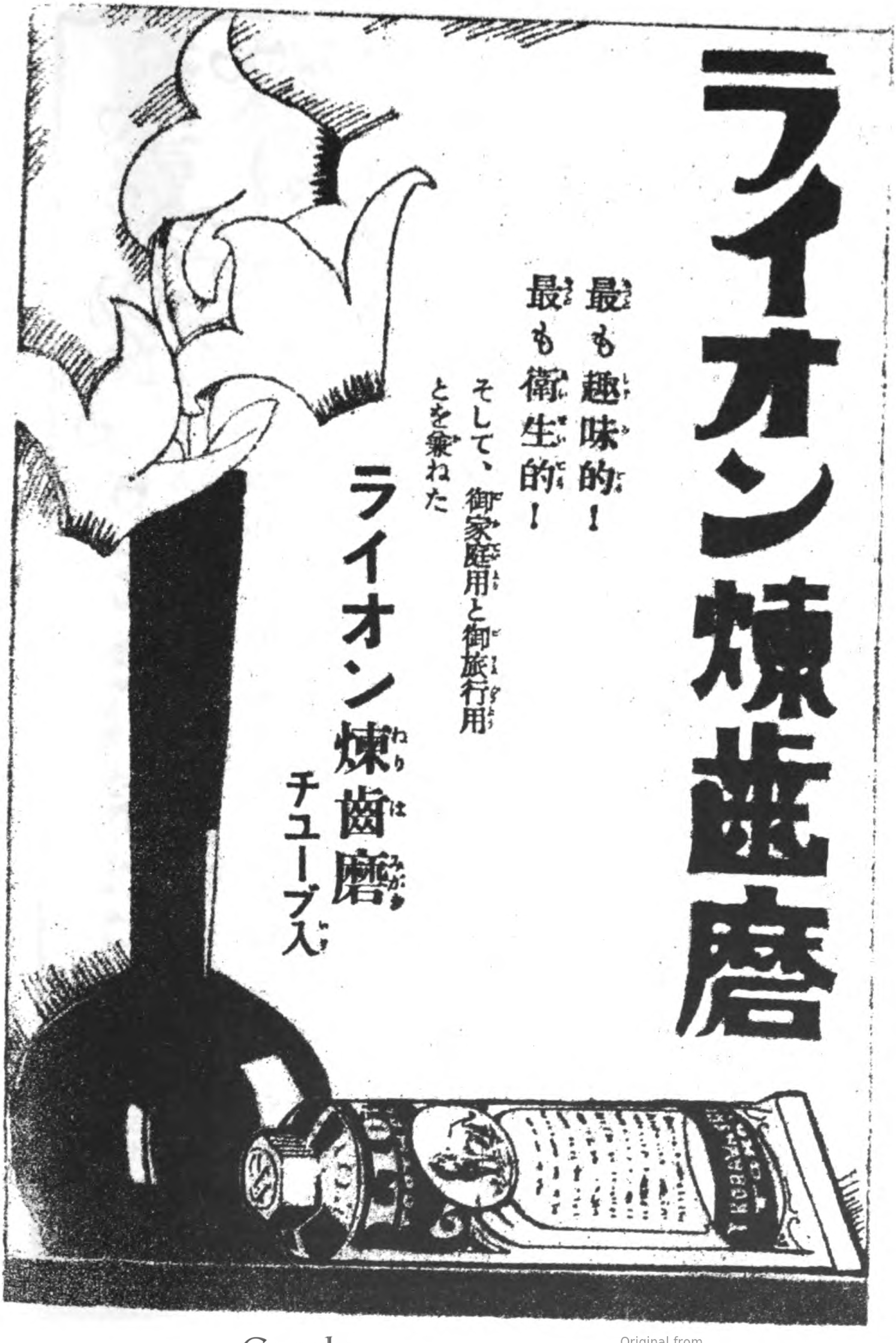
新刊發賣

心理學の使命は、個人心理や、實驗心理に限定さるるものでなく、夫は實に社會及文化の心理解剖が尤も重要とさるべきだ。實驗心理の鼻祖にして又、其大成者たるヴントは遂に民族心理に到達したが、而も彼の民族心理學は、坊間の非科學的のものでなく、科學的心理學の體系に於て尤も重要なる一部門をなして居る。これ彼の該博無比なる哲學的、心理的智識の最後の總束であり、又結晶でもある。

著者は、ヴントに親しく師事した新鋭の心理學者である。彼が浩瀚なる十數卷は讀むに困難である、此一書を通讀して彼の蘊奥なる文化や社會の心理の科學的説明を聞け。

東京 改造社 振替東京八四〇二




ライオン煉歯磨
最も趣味的！
最も衛生的！
そして、御家庭用と御旅行用
とを兼ねた
ライオン煉歯磨
チューブ入